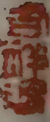
(22)

新井石禪全集


LIBRARY
JAN 4 1968
UNIVERSITY OF TORONTO



能信則修證圓融

能行則智源具足

總持石禪書





禪學講話篇第二

目次

修養の極致と無我

禪的生活の五大標準

禪學講話篇　第二

信仰三昧

信仰心發得の要素

信仰は宗教の生命である。故に、信仰なき者は宗教を知ると雖も、宗教に入ることは出來ぬ。譬へば、良師に逢ふと雖も、信ずる處が無ければ其の人格の感化に浴することは能はざるが如し。

宗教は學術ではない、又、藝術とも違ふ、信ずる人の心と信ぜられる佛とが鎔け合うて、心佛一如となるのであるから、深く信じ篤く歸仰せざれば、宗教としての功德に與かることは出來ぬ。此の信仰心は、決して感情一方のものではないが、有り難いと信じ、嬉しいと感ずる感情が主要部分になつてゐるから、動もすれば淺薄に流れたり、迷信に陷つたりする恐れがある。故によく〳〵精練を施すことが必要である。先づ信仰心發動の要素をいへば、凡そ六通りある。

『自己の弱點を自覺すること』はその根本である。佛教に依れば、吾々には概して三種の弱點がある。此の弱點が、吾々をして煩悶せしめ、惱亂せしめ、若くは墮落せしむるのである。此の弱點が、死生の苦を

招き、菩提の道を妨ぐるに依つて、是を三障とも名ける。

その第一は煩惱の障りであるが、如何なる人も、凡夫の常として、心中には種々の妄念邪想を抱いて居る。貪婪の念もあり、瞋恚の情もあり、愚痴の病もある。深く自ら反省すれば、愧しき心根の存することを否定する譯にはゆかぬ。それを愧ぢずして、當り前だと思うてゐるから、眞の修養に勵むことが出來ないのである。

次は業の障り、卽ち行爲の障りである。是れは說明するまでもなく、吾々日常の行爲を點檢して見たならば耻づべき事が多い。義務は怠り易く、禮節は亂れ易く、紀律は犯し易く、勉强は弛み易い。言語動作の上に於て、義務的・道德的に一點の缺目も無いといふ事は、聖人も猶ほ難しとする所である。

第三は果報の障りである。善因善果、惡因惡果は天地自然の大法であるが、世には往々之に反する現象を見る事が有る。善行を修めつゝ常に慘苦に襲はるゝあり、勤勉家にして貧窮に惱むあり、慈善家にして短命なるあり、陰德家にして災害に苦むあり、人をして、思はず、「天道は是か非か」といふ樣な嘆聲を發せしめる場合が多いのである。是の如きは、夙業、卽ち前生以來の罪惡の報である。

世に仁人君子と稱せらるゝ人でも、己が精神と言行とを、佛敎の鏡に照して見たならば、甚だ耻づべきことの多いのに驚かれる。此の事に氣がつくのが自覺の本である。斯く弱點多き身を以て、何等改悛する所もなく、修練する所もなく、只ウカ〳〵と此の一生を放過し去らば、因果の大法に引き連られて、未來

永劫、冥きより冥きに沈むことを免がれぬ。實に畏るべきは因果の大法である。三世因果の大法を畏れざる者は宗教的信仰心を發起することが出來ぬ。是れ甚だ陳腐なる思想と思はれるかも知れぬが、眞理には決して古今の別は無い。

内、自己の弱點を愧ぢ、外、因果の大法を明らめなば、自ら此の弱點より離脫して、未來永劫を期する理想的大安樂境に到達せんとの希望を抱かずにはをられない。

是の如き大自覺を發し、解脫を求むるの志念が切實になれば、何物か偉大なる力に歸命せんとするの願念が自然に湧いて來る。此の大願心が益々強烈を加ふれば、大智・大勇・大慈悲の圓滿なる佛陀の實在が認められて、佛陀の大智慧に導かれ、佛陀の大勇氣に勵まされ、佛陀の大慈悲に救はれることを感得するものである。

大智慧に導かれるに依て、信仰が益々合理的となり、一切の迷想邪念を洗ひ淨められる。大勇氣に勵まさるゝに依つて、退ては自己の妄想を征服し、進んでは善を修め德を養ひ、『煩惱は無盡なるも誓て之を斷ぜん、法門は無量なるも誓て之を學ばん、衆生は無邊なるも誓て之を度せん』との大誓願力をも發起し得られる。大慈悲に救はれるに依て、恰も幼兒が慈母の懷に抱かれたるが如く、此の全身心を佛の慈懷に投げ入れて、親船に乘りし樣に浮世の荒波にも怖れず、人世無常の烈風をも打忘れて大安心を獲得することが出來る。

然れば、信仰心發得の要素は（一）自己を反省して大慚愧心を生ずること、（二）三世因果の大法を諦信すること、（三）永久の解脱を欲求すること、（四）堅實なる未來觀を起すこと、（五）佛陀の威德と實在とを認識すること、（六）絶對的救濟を欲求すること等である。

四種の信仰

信仰心發得に關しては、信ずる者の心、即ち能信の心と、信ぜられる對象、即ち所信の境とをよく〳〵吟味せねばならぬ。是れには概して四通りの別がある。

一には、心正しうして境の邪なるもの――信ずる者の動機は正直で眞面目で合理的であつても、信ぜらるる御本尊が不完全なのがある。例せば、動物を本尊とするが如き、無意味なる山神・鬼神等を祠るが如き、甚だしきは義賊などを祭るの類である。

二には、心邪にして境の正なるもの――本尊は神聖であるが、信ずる者の心が、不正なるをいふ。例せば、不義の利を得んが爲めに不動尊を祈るとか、醫藥を廢し攝生を無視して、不老長生を藥師如來に祈るとか、惡事を爲しながら發覺せざらんことを觀音大師に祈願するの類。

三には、心境共に邪なるもの――不正なる動機より無意味なる對象物に歸依するの類。

四には、心境共に正なるもの――倫理を重んじ因果を畏れ、眞純なる信念を以て、大智大勇大悲圓滿の

佛陀、智德莊嚴の功德聚なる菩薩に歸命するの類である。
此の中、前の三者は妄信邪信にして、後の一つが眞正の信仰である。
此に斷つて置くことは、我が佛教に於て、色々の本尊を祭ることがあるが、決して狐を崇拜するのでもなく、大蛇を信賴するのでも無い。皆な佛心佛德の權化、又は象徵として歸依するものであるから、つまりは一佛一體の根本見地より出發して居るといふ事を心得ねばならぬ。

大歡喜心の獲得

眞正なる信仰の最高目的は、成佛であり、金剛不動の安心である。人世を淨化し、純化し、善化し、美化し、未來永劫不退轉の最大幸福を得るにあるのである。が、信仰の端的に於ける所得は、大歡喜心の獲得である。
煩惱と罪惡とに穢れたる此の身が、佛陀の大智慧に照され大慈悲に救はるゝことを感得すれば、そこで五臟六腑にまでも沁みわたるほどの感激が起るのである。凡そ佛の御姿を拜し、又は佛の御法を聽聞する時に當り、有り難さ忝なさが身に沁みて、覺えず感淚を絞り、思はず汗を流すほどの感じのあるのが信仰心發得の證據である。
「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに淚こぼるゝ」

此の時、油然として、嬉しや喜ばしやといふ恰も貧乏人の寶を得たらんが如き、病者の良藥を服したらんが如き、暗夜に燈火を得たらんが如き大歡喜心が生ずるものである。此の大歡喜心と同時に、重荷を卸せし如き、又、多年の借錢を拂ひ了りし如き、嶮岨なる山を踰えて平坦なる花園に出でし如き安心が得られ、同時に、其の心操も質直になり柔和くなりて、從前の如き、無理な慾望や、我儘な忿怒の念や、謂れなき愚痴などの穢れも一掃され、我見の角も折れ、執着の結晶も鎔け、偏狂の念も消え、自然に惡に遠ざかり善に親み、迷ひを離れ道を樂しむの念が生じ、こゝに道德性が涵養せられて、事々物々の上に道德の光りが輝を發すやうになり、更に草の葉の露の如き身命にのみ囚はれず、妄想の固まりのやうな小我にも制せられず、夢幻の如き人生にも縛られず、遠く未來永劫に亘れる大誓願を發し、生々世々の大活動を期するやうになるから、自づと心も寛くなり、志操も高尙になり、考も深くなり、克己心も強くなり、環境に對する自主獨立の精神も堅固になり、朝な夕な、有り難く、嬉しく、快活に、自己の本分を盡し自己の天職に勵み、眞理を愛好して天命を樂むやうになるものである。

感應道交

以上は、佛敎に於ける一般的信仰狀態であるが、禪門の信仰とても、決して別なものでは無い。が、禪はお悟りの宗旨で、見地が高いから、動もすれば見知に偏して信仰を忽にする恐れがある。併し、古今、

禪門の高僧及び信者にして信仰なき者はない。その信仰も極めて熱烈なものであつた。

抑も、禪門に於ては信念を大別して二通りに示されてゐる。即ち對內的と對外的とである。對內的とは自信、即ち自己を信ずるのである。承陽大師は『佛法を信ずる者は先づ須らく自己を信ずべし』と仰せられた。是れ即心是佛の確信である。『一切衆生皆佛性あり』とは如來の金言にして佛教の樞軸である。故に吾人も亦佛性あり、孟子も『萬物皆備はる』というたが、如來の智慧德相悉く自己に具有してゐる。我が心は是れ佛心にして我が身は即ち佛身である。

既に佛身心とすれば、何が故に三界六道の巷に迷ひ、三毒五欲の塵に穢れて居るのであらう、是れ恰も清澄なる水が泥土の爲めに濁れるやうなもので、泥土を排泄すれは水性は本來清淨である。泥土の排泄は修行の力に依る。修行力現前せば心水常に淨潔である。『雲はれて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月』此の理を深く信ずればこそ、成佛を期し悟道を期すのである。

佛教に於ける信仰の源は即心是佛より出發せねばならぬ。是れ決して禪門にのみ限れる信念では無い。楞嚴經に『常住の理を信ずるを名けて信心と曰ふ』と說き、涅槃經に『大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は是れ如來なり』と仰せられたのも此の理を示したまうたのである。

既に即心是佛と信ずれば、自然と、そこに『佛とは何ぞや』といふ問題が起つて來る。佛には、法身・報身・應身の三身を說いてある。法身は佛の心、報身は佛の德、應身は佛の妙用である。佛の心は、常住

不變の一大眞理である。眞理には生滅は無い、故に佛は生死の二邊を超越して居られる。眞理は絶對にして法界に彌綸す、故に佛も絶對なる法界に充滿し給ふ。是の如き眞理の人格化せられたのが佛である。吾々は自己を信ずると與に、佛の大人格に歸依し奉るべきで、是れが對他的信仰である。佛の大人格に歸依するのが眞理に歸順するので、事理一如である。吾々の小德・小智を擧げて佛の大德・大智の中に投げ入れるのである。吾々の我見・妄想を打捨て、佛の大慈悲・大功德海に銷しこむのである。此の時、前に述べたるが如き大歡喜心が現はれる。

此の場合、自力などといふ名稱は付けられぬ。此の信仰の端的には、我が身といふものも我が心といふものも無い。身心脱落である。或る人が『禪の信仰は自力で、淨土眞宗の信仰は他力である』などというた。兩宗を比較すれば、一應はそういふ解釋が出來るかも知れぬが、純なる信仰に入りたる時は、自力などといふものはあらうはずがない。自己を忘れてこそ信仰の人となることが出來る。故に承陽大師は

厭ふことなく慕ふこと無き（生死などといふことは問題にせぬといふ意）此の時始めて佛の心に入る。但し心をもて測ること勿れ、言葉をもて道ふこと勿れ。唯だ我身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛のかたより行はれて、これに從がひもてゆくとき、力をも入れず心をも費やさずして生死を離れて佛となる。

と仰せられた。此の時は自力も他力も無い、法界を擧げて一大佛光明となつて了ふ。是を感應道交難思

議といふのである。佛を信じておすがり申すのが感で、佛の慈悲光明が吾等の全身心に輝き渡るのが應で、自己の信仰心と佛の慈悲力とが合體したのが道交であるから、禪の信仰では自力とも言はれず、他力とも言はれず、自他冥合、感應道交である。此の場合には罪惡などといふものも忘れ、御救ひを願ひたいといふ心すらも無くなつて了ふ。一遍上人が

『唱ふれば佛も我れも無かりけり南無阿彌陀佛の聲ばかりして』

と詠じた狀態になる。即ち無所得の信仰、無條件の信念となる。幼兒は眠りより覺めてさみしさを感じ、泣聲を揚げて母を呼ぶが、いよ〳〵母の懷ろに抱かれて安心した時は、最早、母に訴ふる考も無く、無我無慾の安心を得て居る。

信仰的修養が圓熟すれば、日常の生活も佛德の顯現となり、佛光明の發揚となるに依つて、喫茶喫飯も佛の御機き、運水搬柴も佛の御姿、是を『不疑の地に至る』ともいふのである。常濟大師は『汝疑に依つて外に向て求む、若し一たび信得せば疑何に依つてか起らん』と仰せられた。

故に、正信心は佛を信じて疑はず、道に歸して疑はず、自己を覺了して疑はず、徹頭徹尾、大安心の解脫三昧に安住するのである。廣き意味からいへば、坐禪も亦一大信仰三昧である。信仰と坐禪とは別々に見ゆるも結局は一致すべきものである。信仰を單に道に入るの門戶と見てはならぬ。信仰は入道の門戶であると同時に佛法の堂奧である。信仰は佛法を生活上に圓通無礙ならしむる最大要機である事を知らねばならぬ。

參禪の三要

禪家龜鑑の語

『參禪は須く三要を具すべし。一に大信根あり、二に大憤志あり、三に大疑情あり、苟も其の一を闕けば、折足の鼎の如く、終に敗器と成る』

とは『禪家龜鑑』にいふ所である。此の書は曹溪退隱老漢の編する所であつて、其の家風は必ずしも禪の正風とは申されませんが、しかし大信根と大憤志と大疑情とを以て三要と爲すものは、實に參禪者の龜鑑と稱すべし。

大信根

苟も禪に志す者は、先づ以て大信根を發せざるべからず。信に二あり、內信と外信となり、內信とは

自己是れ本來佛なることを信ずるのである。承陽大師は

『佛道を信ずる者は、須く自己本と道中に在りて、迷惑せず、妄想せず、顚倒せず、增減なく誤謬なきことを信ずべし』

と御示し下されてある。徹底、我は是れ佛なりとの確信を發し、寸毫の疑念なき時は、自然に人格が向上するものである。外信とは諸佛の聖敎と其の行履とを信じ、常に其の敎訓に遵ひ、其の行履に倣ひ參らすることである。承陽大師が、

『たゞ佛祖の行履、菩薩の慈悲を學して、諸天善神の冥に照す所を慚愧して、佛制に任せて行じもてゆかば、一切苦しかるまじきなり。』

と仰せられたのがそれである。

抑も、信は一心の基礎、萬行の中心となるものである。縱ひ多少の信念ありとも、其の信念が薄弱なる時は、決して一心の基礎を造ることは出來ぬ。況や萬行の中心たるをやである。故に堅固なる信念あるものは、自己の身心をも打忘れて、能信の念と所信の境と融合一致するものである。

天下に多くの禪客ありと雖も、果して能く是の如き信念を有する人ありや否や、些々たる功名富貴の爲めにグラつく樣な信念では、決して一心の基礎とするに堪へぬ。古人必ずしも賢者ならずと雖も、苟も禪門の高士と謂はれる程の宗師には、必ず金剛不動の大信根ありしことは、其の行履に於て證明せらるゝ樣

に思ふのである。信根發し了らば、大憤志なかるべからず。

大憤志

大憤志とは、自己の信念を行持の上に實現するの勇氣である。自己是れ佛なることを信ぜば、須く其の佛智佛德を顯現すべきである。佛祖の行履を信仰せば、須く己れを空うして、佛祖の行履に隨順すべきである。此の場合に於ては、縱ひ如何なる障礙と厄難に遭遇するとも、毫末も之に屈せず之に恐れず、斷々乎として所信を實行するのが大憤志である。四十二章經に

『夫れ道の爲めにする者は、譬へば一人と萬人と戰ひ、鎧を掛け門を出で、意或は怯弱し、或は半路にして退き、或は格鬪して死し、或は勝を得て還るが如し。沙門の學道も應當に其の心を堅持して、精進勇鋭、前境を恐れず、衆魔を破滅して道果を得べし。』

とあるが如く、從晝至夜、油斷なく精進せざるべからず。

昔、慈明・谷泉・瑯琊の三人伴を結んで汾陽禪師に參ず。時恰も苦寒、衆人之を憚る。慈明、志道に在り、曉夕忘れず、夜坐して困じ來れば、錐を引て自ら刺し以て睡夢を拂へり。後、汾陽禪師の法を嗣ぎ、道風大に振ひ、西河の師子と號せられしこと『禪關策進』に見ゆ。近世濟門の巨匠白隱禪師は、青年の頃、濃州榎本の瑞雲寺に往て馬翁に師事するの時、偶々夏日書を曝し、內外の典籍堂中に滿つるを見、師

禮拜し目を閉ぢて探り索め、圖らずも慈明大憤志の條に撞着し、之を以て日新の錐と爲せりといふ其の後に於ける白隱禪師の大憤志は今古稀れに見る處である。今日の禪客にして若し師の如き大憤志があつたならば、必ずや第二の白隱たることを得るであらう。或は白隱を凌駕する程の機輪を轉ずることも不可能とは謂ふべからず。

晦堂祖心禪師は自ら『初め道に入つて自ら甚だ易きを恃みたりき。黃龍禪師に相見するに逮んで、退いて日用底と矛盾すること極めて多きを思ひ、遂に力行すること三年、酷寒溽暑も志を確めて移らず。漸くにして事々理の如くなることを得たり。而今や咳唾掉臂も亦た是れ祖師西來の意なり』というてある。吾人愧らくは未だ是の如き力行を敢てすること能はず、其の志弱きが爲めに、數々魔障に遮られ、寸進尺退を免れざるは、甚だ遺憾なことである。又、參禪の客は大憤志と與に大疑情を抱くの必要がある。

大疑情

大疑情といへばとて、最初の信根を動搖する譯ではない。信根の上に發する疑團である。『自己元來是れ佛なりとせば、其の佛とは畢竟何物ぞ、自己とは是れ什麼ぞ』と、大疑情を起して參究し去るべきである。自己を究むること明かならざれば、天地萬物をも亦明らむること能はず。佛を究むること明らかならざれば、一大藏經も亦一も明むべからず。自己を明らむるは、佛を明らむるなり。佛を明らむるは、自己を明

らむるなり。『趙州の無』『洞山の麻三斤』從上の公案は、すべてこれ自己の注脚である。『德山の棒』『臨濟の喝』これ皆自己の活動である。此の大自己は凡情・妄智の識る所に非ず。心理・物理の究むる所に非ず。如何にしてかこれを究め明むべき。

承陽大師はその直路を開示して、坐禪を勸め、『坐禪は佛を究め、自己を究め、道を究むる所以』なることを誨へ下されてゐる。

然し、澤水和尚が其の假名法語に於て

『坐して居るのみを坐禪と言はず、行住坐臥共に深く公案を疑ふを眞實の坐禪と云へり。如何程長坐不臥にして端正に坐すと雖も、深く疑ふ心なくんば禪に非ず、默照の邪禪なり』といひ、又更に

『六祖大師曰く「道由心悟、豈在坐臥」と此を以て知るべし、坐禪は只深く疑はしめて、自性を悟らしむる爲ばかりの方便なることを。』

というてゐる語などに迷はされてはならぬ。澤水法語のこの一段の如きは、實に大なる誤謬である。大邪見とも言ふべきものである。

坐禪は身心を調御するの妙術なり。身心を調御し了りし者は坐禪を以て身心を護持するなり。護持するといふは解脫の身心を保任することである。故に眞の坐禪には、疑情も無く、工夫も無く、非工夫も無い。卽ち身心脫落の三昧である。

大疑情を抱持せよと云ふは、吾人が自己を究明する一手段としてである。一たび此の究明に向つて進まんとするに當つては坐と臥とを論ぜず、動と靜とに拘らず、發心の最初より行住坐臥に工夫し去らんことを要す。而して、坐禪の中に於て此の疑情を念頭に置き、猛烈に之を工夫せしむるは、一應、禪觀を以てその工夫を策進するのであつて、一種の善巧方便である。但し吾が正傳の坐禪そのものは、疑不疑を超出し、善惡の諸念を休歇し、迷悟の兩頭を截斷してゐる。正傳の禪は、かくの如きものであるが故に、眞に能く疑團を氷解するの正道たり得るのである。

坐禪は右いふが如くにして、必ずしも工夫を認めざるに非ざるも、工夫の有無を以て直ちに禪の正邪を爭ふが如きは、全く方便と眞實とを混同し、自己の研究と三昧の當體とを同一視するより起る謬見にして深く誡むべきものである。

先づ靜坐せよ

有爲の士に勸む

禪に參ぜんと欲する人は、先づ試に靜坐せられよ、否や、禪に參ずる人のみにあらず、苟も智を磨き德を養はんと欲するの人、苟も志を決し、大事を處せんと欲するの人は、請ふ試に靜坐せられよ。心を丹田に落着け、目は半眼に開き、脊梁骨を竪立し、兩脣皮を閉却し、手を組み足を組み、呼吸を調へ、念想を離れて、ドツシリと靜坐して見られよ。五分でも十分でも半時間でも一時間でも宜い。机の前でも、窓の邊でも、蒲團の上でも、汽車の中でも、構ふことは無い。善をも思はず惡をも思はず、順境にも執着せず逆境にも恐怖せず、驀然として金剛不動の地に坐り込んで御覽なさい。煩悶する人、妄想する人、腹の立つ人、愚痴に纒はれし人、儲けた人、損した人、皆來つて靜坐一回せられよ。知識も道德も、決斷も覺悟も、忍耐も慈悲も、悉く此の靜坐の源泉より流れ出でずといふことは無い。少くとも此等諸德の根柢を確立することが出來るのである。

支那の羅山和尚が石霜禪師に向つて、『起滅不停の時如何』と問うたことがある。起滅不停とは、吾人の精神が見るもの聞くものゝ上に亂れて、或は起り或は滅し、忽ちにして苦樂その趣きを變じ、忽ちにして悲喜その地を易へ、輾轉反側して、暫くも停まること無きをいふ。かゝるときに於て、如何に用心すべきやと羅山和尚は問うたのである。すると石霜は之れに答へて『直に須らく、休し去り、歇し去るべし』といはれた。休歇とは靜坐のことである。靜坐して分別の門を閉ぢよ、一心を不動の地に安住せよ。一心生ぜざれば萬法に咎なし、宜しく龜の六藏の如くなるべし。

釋尊の御在世に一道人あり、河邊に坐して調心の法を修して居つたが、どうしても心が治まらぬ。或時一疋の龜が水を出でて草叢の上に遊んで居ると、野干があつて走り來つて、其の龜を捉へんとした。すると龜は忽ち頭と尾と四足とを縮めて甲羅の内に藏れて了ふた。流石の野干も遂に手を下すことが出來ない。道人は之を見て大に感悟し、『嗚呼我等も亦た是の如し、眼に色を見、耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を嘗め、身は物に觸れ、意は法を緣ず、斯く眼耳鼻舌身意の六根が妄動して、色聲香味觸法の六塵に接する所より、煩惱妄想が紛然として生ずる。若し六根門を閉却すること、龜の頭尾四肢を藏すが如くならば、六塵の惡魔、爭でか侵すことを得んや』と思惟して、それよりは一心に兀坐を修し、終に道果を證した。

是を龜の六藏といふ、六藏三昧は靜坐の第一關である。

一切を放下すべし

坐り込んで、妄想も、觀念も、煩悶も、工夫も、一切放下するが宜い。靜坐は致したいが時間がないなどと言ふ勿れ、其の多忙多事が寧ろ靜坐の效驗を試むる最好機會である。若し精神に苦痛を感ずることあれば、直ちに精神を放下して靜坐せよ。苦痛を心に懸けてはならぬ、苦痛を脫しようとアセッてもならぬ、直下に苦痛の根城たる精神を脫落し去るが宜い。腹の立つ時などは靜坐の爲めには一段の便宜である。靜坐して、我れを忘れ、己れを忘れ見よ。腹が立つと思うてもならぬ。腹を立つまいと思うてもならぬ。是は少し無理な注文の樣であるが、決して左樣ではない、足を組み手を組み、息を調へ身を眞直にして、心を丹田というて、臍の下の腹の底に落ち着けさへすれば、自から思ふまいとも思はぬ樣になる。

大智禪師の十二時法語に『佛祖の正傳は、唯だ坐禪にて候。坐禪と申すは、手を組み足を組み、身をも曲げず正しく持せ玉ひて、心に何事の思ふことなく、設ひ佛法なりとも心に懸けずして御座候べし』又『坐禪の用心は、佛祖をも世間の善惡をも、なげ捨て、心に思ふこと勿れ、爲すことなきを、坐禪とは申し候なり』とある。これは、全く坐禪の正門である。

空見識を誡む

今日の禪に參ずる人の中には、或は一則の公案を拈弄し、或は沒滋味の古句を把玩し、或は棒頭を振廻し、或は喝とか咄とかと怒鳴り散らし、其の形體や儀禮などには少しも頓着せず、損をしても平氣に構へ、悲しい時にもニコ〱して居る樣なことを、禪の本領の如くに考へて居る人がある。丹霞の燒佛、南泉の斬猫、一休の磊落、桃水の乞食行などを以て、禪の特色の如くに思うて居る人がある。是等は禪の作用を見て、直ちに禪の本體と誤まり、禪の影法師を以て、禪の實相と誤つたのである。

若し靜坐調心の法を忽諸にして、單に禪機のみを弄する時は、動もすれば、放曠疎野の氣風に傾き、遂には綿密の行持、恭謙の美風を失墜する樣にもなる。是れは一種の禪病と謂ねばならぬ。

立派な禪僧にして非常に疳癪の烈しい者が出來たり、徒らに壯言大語を縦れ事とし、少しも眞面目な處の無い者が出來たり、『前に釋迦なく後に彌勒なし』などと唱へて、佛を佛とも思はず、法を法とも思はず、空腹高心、自ら唯我獨尊を氣取る者が出來たりするのは、盡く禪病に罹つた重症患者である。何れも三十棒を免るゝ分が無い。

靜坐靜心

六祖大師の御語に『善知識、何をか坐禪と名く、此の法門の中、無障無礙。外、一切の境界に於て、心念起らざるを、名けて坐と爲す。內、自性の不動を見るを、名けて禪と爲す』とある。實に是れ無比の御指南です。兎角、我等は見聞色聲の爲めに驅使せられて、自己獨立の大安心を有せぬ。若し、外、善惡一切の境界に對して妄心妄念を生起せず、內、自から善惡超脫の地に安住することを得ば、卽心是れ佛陀、觸處是れ解脫である。

『唯凡情を盡せ、別に聖解なし』故に吾人は第一に苦樂の根城たる分別を打破し、愛憎の源泉たる妄想を枯渇せしめねばならぬ。是の如く大無心の地に至りぬる時、忽然として天地と我と一體、佛祖と我と同性なることを自覺し、渺たる五尺分段の身に於て、天地無邊の妙德を顯現し、佛祖不思議の妙用を發揮することが出來る。

正三老人の所謂『佛法修行は、我見を去り、自他無差別にして六和合を用ひ、誠の心に至て、上、四恩を報じ、下、三有の衆生を度す、此心卽ち五倫の道正しく使ふ寶なり』とは此處のことである。是を『己れを忘れて己れを守る』ともいふのである。

世法は佛法を妨げず

吾が有緣の高士、冀くは、隨時隨處に靜坐せられよ。心靜かなれば萬境自から靜かなり、心忙はし

ければ諸法悉く忙はし。閑中の靜坐あることを知りて、鬧裡の靜坐あることを知らざるは、眇目の漢である。承陽大師の親訓に

代宗、順宗の帝位にして、萬機いとしげかりし、坐禪辨道して、佛祖の大道を會通す。李相國、防相國ともに輔佐の臣位にはんべりて、一天の股肱たりし、坐禪辨道して、佛祖の大道に證入す。たゞこれこゝろざしのありなしによるべし。身の在家、出家にはかゝはらじ。乃至、況や世務は佛法をさゆとおもへるものは、たゞ世中に佛法なしとのみしりて、佛中に世法なきことを、いまだしらざるなり。

とある。至道はこれを遠きに求むべからず、心頭を滅却すれば火も亦涼し、恒河の法門膝下にあり、先づ須らく靜坐すべし。

公案と坐禪

公案とは何ぞや

公案を拈提することは、是非とも必要である。自己の經驗より考へても、又、實際、參禪の上よりしても、等閑に附してはならぬものである。が然し、世間多くの人は勿論、所謂禪定家と稱せらるゝ人々に於ても、兎角、公案と坐禪とを混同して居る傾向のあるのは遺憾である。

坐禪をするといへば、いつでも公案を工夫してゐなければならぬものゝ如くに思うてゐる人がある。甚しきは公案を工夫することが坐禪の目的であると考へて居る人がある。これ臨濟に於て極めて多く聞く處であつて、中には知名の師家にて、尚且つかゝることを平氣で云うて居るものすらあるとの事である。

如斯、公案と坐禪とを同一視するのは大なる誤解と云はねばならぬ。公案を拈ずるは、坐禪に限つたものではない。公案は道を求める人の其の指針となり、生死の一大事に向つて、自己の大疑團に陷り、煩悶懊惱してゐる學人に一線路を與ふるの力がある。が、この公案を拈ずることは、坐禪の時に限つてはゐ

ない。坐禪に於て公案を拈ずるのは、宗師家が學人のために、斯道奬勵の一手段として施した場合になすのであつて、公案と坐禪とは、決して同一のものでないと云ふことを充分會得せねばならぬ。

提撕の二種類

公案の工夫を目的としてする坐禪は、自然、待悟の禪となる。待悟の禪は、吾が承陽大師の尤も御誡めになつたところである。何となれば、禪そのものは佛威儀であつて、悟りを開く爲めの閑家具ではない。不思善・不思惡が禪の本面目である。吾等はこの境地に達することを目的とせねばならぬ。

然し、公案を拈ずることが、坐禪の場合絶對に不必要であるのかと云ふに、決して左樣ではない。これを論ずるには實際問題に於て、參禪者を二分に區別する方がよからうと思ふ。

其の一は、目的の確立しない者に、目的を授ける意味に於て、公案を必要とするのである。即ち禪に對して何等修養の目的を持つて居ない者であつて、多く一般寺院の弟子、世に雲水と稱して、幼少より南船北馬、師を尋ね道を訪うて、行雲流水の如く來往してゐる青年僧侶に公案が要るのである。彼等は幼より頭を剃り衣を纒ひ、師命によつて坐禪するもの丶、畢竟何を目的として端坐するか分らない。單に默々として坐せるだけであつて、殆ど無意味である。要するに、貴重なる光陰を空費するに止まる譯である。故に師家たる人は、斯る學人に向つて、宜しく道念の開發に勉め、將來の理想を示し、公案を授けて、これ

に向つて修行の要路を提撕せねばならぬ。

第二は、參禪者の中に、何か一種の病を帶びて居る人がある。たとへば人生の行路に大疑團を懷いたとか、散亂する邪念に苦しむとか、ある事情の束縛のため煩悶に陷つたとか、かゝる人は在家の、所謂、居士なるものに多くある。師家は斯の如き參禪者のため、其の心機を、一轉せしむるの要針として、公案を授けることが尤も必要である。

默照禪と看話禪の調和せざる所以

要するに、公案は、師家が學人に對して示す所の求道の標準である。つまり確實なる發心の目的を示すのが公案である。故に、公案は從晝至夜に於て間斷なく研究すべきであつて、必ずしも坐禪に限つた譯ではない。

坐禪は正則の上より謂はゞ、公案工夫を藉らずとも、自分の禪定力によつて、所有疑團を氷解せしめ、而して健全なる自己を實現して行く妙術である。乍併、前述の如く求道の方針、未だ確立せざる煩悶者には、其の激勵の手段として寸隙も怠慢なく修行せしむるには、是非とも公案の力が必要である。

然らば理論を離れて、現在の實際問題として如何と云ふに、予の考ふるところにては、之を二つに區別して、一は初發心の者に參禪の要路を示し、制裁を與へて、從晝至夜に於て工夫を怠らぬやうにするため

に公案を授ける。次に稍々禪機純熟して、聊か這個の事を認めるやうになつたならば、公案の工夫と坐禪とを混同せぬやうに注意をすることが肝要である。之を混同し過ぎたのが、即ち默照禪と看話禪の調和せぬ所以であらうと思ふ。

抑々、默照禪といひ看話禪といふ、その眞意を得ば、氷炭相容れざるが如きものではない。支那宋末に二大禪僧、曹洞の宏智正覺と臨濟の大慧宗杲とあり、その會下各々隆昌を極めて、自ら黨を分ち、大慧の徒は宏智の徒を嘲つて『默照の死禪』といへば、宏智の徒また『看話の邪禪』と罵りて報い、大に爭へりと雖も、共にこれ禪門の正嫡なり。

謂ふ所の默照の禪とは、默は寂默、照は照らす、外見よりこれを見れば、默々として端坐して死せるものの如くなるも、內、宇宙の靈機を照了して、佛の境地に逍遙すといふ意味である。

看話の禪とは、話は公案の謂であつて、公案を看得することによりて頓に佛地に到入せんことを期するものである。

即ち默照の禪は、坐禪の眞面目を了知して、所謂純禪の妙旨を全了するものであり、看話の禪は、坐禪の眞面目と公案の工夫を、混同してゐるが如き觀を呈してゐるのである。

公案を工夫しても歸著するところは、工夫なきの境、即ち非思量の域に達せんければ、禪の面目が現はれぬのである。併し其處に到達する迄は無論公案も必要である。されば公案の工夫は必ずしも吾が曹洞禪と矛盾はしない。『坐禪用心記』の中には、『睡眠を催さば一則の公案を拈ぜよ』と云うてある。睡眠は懈怠を意味する。かゝる懈怠の輩を引立てる策勵の方法として、公案を拈提するもよからうと云ふの意味である。が、併し道を求むるの至誠が熱烈であれば、自己の全身悉く工夫公案になつて來る。行住坐臥、道に進んで居れば、天地間の總てが公案ならぬものはない。かくて練磨に練磨を重ね、說得に說得を施して、終に工夫なき工夫の境に達する。

『坐禪儀』等を見ては、公案の工夫と云ふ文字は少しも見えぬ。されど承陽大師は正法眼藏中に、古人の公案を拈じて、彼の南岳大師が六祖に參じて『何者か恁麼にし來る』といはれた一言に向つて、八年間工夫を費された、と云ふ事柄を賛ぜられ、又、太梅の法常禪師が、馬祖大師に道を求めて『即身即佛』の意義に向つて辨道せられた行持を稱譽されてある。

以上の如き公案の事蹟は、承陽大師御自著の語錄中に多く見受けるところであるが、少しも惡く云はれてない。獨り高祖大師のみならず、太祖常濟大師の如き『平常心是道』の一句に向つて勇猛精進、工夫辨道を費さるゝこと六ケ年、最後に、『吾會せり』の一句が胸襟より迸り出でゝ、忽然として大事を了ぜられたとのことである。

古人必ずしも默々端坐のみして居た譯ではない。行住坐臥に於て工夫を費された。然れば、吾人は學人の根機に應じて、公案を授けるも可なり、又、公案を取りあげて了ふのも一つの公案である。

一種の禪弊

禪は元より一定の規律に拘束せらるべきものではない。或時は放行、或時は把住、與奪自在底の活機輪を轉ずるにあらずんば、眞の面目は現成せぬのである。されば公案に對しても、或は是認に偏し、或は否認に偏するは誤つた見解であつて、一方にのみ寄ることは、參禪者と共に師家たるもの丶深く注意を要すべきことである。

臨濟宗の階子禪の修行の如きは、一段一段と公案の數が重なるに隨つて、禪の妙味を會得するのであるが、成程、禪定を練るには或は結構であらう。乍併、其の結果、高貢我慢の念を生じ、一度他の證明を受け、或は印可を與へらるゝと、自ら悟りに慢じて、天下の人を罵倒し、唯我獨尊を氣取るの弊が、今日歴然として事實上にあるのは、實に嘆かはしい極みと謂はねばならぬ。

これ一種の禪弊である。階子禪の如きも、師家が學人に對する一種の手段としては或は宜いかも知れぬ。乍併、例せば『趙州の無』といふ時は、縱に三世を窮め、横に十方を坐斷したる無の現成にして、時間・空間を超越して、天地乾坤悉く無の面目ならぬものはないのである。此の面目に接し、徹底無字の大眞意

を了得する時は、一千七百の公案掌を指すが如く、全く無の一字に歸着して了はねばならぬ筈である。然るにこの無字を通過して、更に他の公案に行くといふが如きは、實に一場の妄想に過ぎぬことになつて了ふではあるまいかと思ふ。

禪の實地問題

一長一短は數の免る丶能はざるところであつて、其の弊害より謂んには、洞門・濟家、孰れも同意味であるかも知れぬ。濟家に於ては些々たる成功を見て、直ちに大悟徹底せりと思惟して慢心を發するが如き傾がある。洞門に於ては、兎角、其の目的を定めずして、默々として坐するを能事とするの結果、理に於ては、或は宜しいかも知れぬが、事實、何の所得もなく、光陰を空費するの傾きがある。爲めに學人の奬勵にはならぬ。

故に、か丶る場合は大いに公案を鼓吹して、學人をして寸時も油斷なく、向上の一路に向つて奮進するの勇氣を養成せねばならぬ。これ禪の實地問題であつて、必ずしも古人の示されたる例を擧ぢねばならぬといふことはないのである。

要するに、一般の人々に向つて禪の功德を示し、禪の何たるかを了解せしむるやう、師家分上の人は其の見地に於て、與奪自在底の活三昧に住して居るでなくてはならぬ。一定の規律も必要には相違ないが、之

に捕はれて自由がきかぬやうでは何の所詮もない。

眞面目の發揮

要するに、公案は禪に入るの標準を示したものである。初心の間は漠然として把捉することが出來ず、目的なしで勞力を費すの弊に陷る人がある爲に、師家が隨時、指導の手段として示すのが公案である。元より禪の眞面目は工夫でもなければ公案でもない。行住坐臥に於て寸時も油斷なく、心得、且つ實行せねばならぬのは端坐である。その端坐をするがために、時あつて必要なるのが公案である。

然らば、端坐して公案を拈提してゐれば、禪の目的が遂に達し得らるゝかと云ふに、決して左樣ではない。更に進んで非思量底を思量すると云ふ境涯に到り、悟後の修行に精進せなければならぬのである。

約言すれば、現在行はれつゝある臨濟禪の形式、即ち看話禪が、禪の入門に適する方法であつて、而して默照の禪、即ち曹洞の禪風が、禪の堂奥を究めるに尤も適當であらうと思ふ。

されば臨濟・曹洞、孰れも優劣はない。濟家と洞門と兩方融和して始めて禪の眞面目を發揮する事と信ずるのである。參禪の士、宜しく此の事を識得して、以て向上の一路に專心ならんことを祈る次第である。

禪道の第一關

似而非禪者の粗暴

禪家には「一超直入如來地」といふ語がある。一足飛びに佛の境界に進出する、一氣に理想境に驀入してしまふといふ語である。半過通の人は此の語に惑はされて、足もとをお留守にしてしまひ、亂暴狼籍を極めて、よい氣になつてゐる。學問をする上にも、此の風が混入して、研究が放縱に流れ、難しい所になると、所謂空見識で吹き飛ばすといふ癖がある。

予が本鄕の旃檀林に學んでゐた頃には、隨分滑稽な談が澤山あつた。試驗の時、碧巖の『鷓鴣啼處百花香』の句を講義せよと命ぜられ、或る學生は、何としてもその講義が出來ぬ、そこを所謂、空見識で吹き飛ばすことになつた。學生、口を開いて曰く、鷓鴣とは這箇なり『此の處』といふ字である。啼くとは『無く』とも書く、『鷓鴣啼く處』とは、『這箇無く處』、つまり『何もない處』といふこと『無一物の處』といふことである。『無一物のところ無盡藏、花あり月あり樓臺あり』と古人もいうたが、その道理を此處

には「鷓鴣啼く處百花香」とあるのである、と滔々數百言を費して大講義をやつた。陰で聞くと實に立派な提唱で、不思議にも宗意がまた自ら通じ、面白く說明されて居るが、文字の解釋は滅茶苦茶で抱腹絕倒せざるを得ない。

又、或人は「杲日三竿伸脚眠」の句を講じ、竿の上に脚を伸べて眠ることだといつて、平氣の平左で喋喋と辯じ出した。三本の竿の上に寢たり起きたりするとは、果して何人の境界であるか。是れは輕業師のお話ではない。三とは三界とも、三惡道とも、三毒とも見るべきである。三界の不安なることは直立する竿に立つよりも危ふし。されど此の事を明らめ得たらむ人ならば、此の不安なる三界に在りながら、大安心を得て王三昧に住し、八風吹けども動じないとやつてのけた。これには、驚かざるを得なかつた。此等は極端なる例であつて、今日では、斯る無文字の人は藥にしたくも有るまいと思ふ。併し、心に解せぬやうな處に至ると、一流の空見識を以て、之を切り拔けむとする風が多少殘つて居るかと思はるゝ。是れ畢竟見識を濫用してゴマカシの道具に供するものである。唐の孫思邈の語に

『膽は大ならむを欲し、而して心は小ならむを欲す。智は圓かならむを欲し、而して行は方ならむを欲す。』

とあるが、禪的修養も亦是の如くならむを要する。其の膽は大にして、宇宙の靈機をも掌握し、佛祖の鼻孔をも提挈し、卽身に菩提を成就し、卽座に淨土に遊戲し、而して精神界の上流に立つて、人天の師表

たらむことを期する底の志氣を持たねばならぬ。それと同時に心術は『其の睹ざる所を戒愼し、其の聞かざる所を恐懼し』一事に處し一理を考ふるに當りても、小心翼々とし、能く其の獨を愼んで、毫末の油斷なきを要するのである。又、其の智は圓かにして一偏見に墮せず。世間を捨てず世間に着せず、佛法に偏せず佛法を離れず、大乘小乘を打して自己の光明と爲し、佛法王法を融じて自己の家珍と爲し、世間百科の學說、外道各派の教育をも研鑽して、偏僻固陋の私見を死守せざらむことを要すると同時に、其の行は方正謹直にして一擧一動をも等閑にせず、一言一行をも輕忽にせず、動靜進退、規に合ひ矩に中り、所謂身を手標と爲し、身を以て人を化する程の覺悟が無ければならぬ。是の如きは中々の至難事であつて、普通人には容易に其の目的を達することは出來さうも無いが、唯だ信念堅固の人ならば、假令十分とまでは行かずとも、幾分は必ず其の地に至り得べきものと思ふのである。故に、禪道修行の第一關は信念の確定に在るものと思ふ。

信念は吾人の生命なり

信念、即ち信仰は、佛教の生命である。否、人道の生命である。信仰無き者は佛弟子でも無い。佛教徒でも無い。禪者は比較的信仰を輕視する風があるやうに感ぜらるゝことが往々ある。『釋迦何人ぞ、我れ何人ぞ』といふ見識の爲であらうが、是れは最も戒愼すべきことである。假令、該博なる知識を有し、縱橫無礙

に佛教を討究して、其の堂奥に通曉する底の智慧ありとも、若し信仰が無かつたならば、是は佛教研究の器械たるに過ぎぬ。佛教を研究するには、缺くべからざる大事な器械ではあるが、器械それ自身には、サツパリ佛教の有難味は無いのである。故に華嚴經には

　信は道の元功德の母たり。一切諸の善法を長養す。疑網を斷除して愛流を出で、涅槃無上の道を開示す。

とある。されば信念の確定は、成道の源泉にして功德の生母である。

信仰には向內的と向外的との二種ある。而して禪門古今の祖師は、此の二種を併行して勸導せられて居る。向內的信仰とは、信仰の基礎を自己に立つるので、向外的信仰とは、信仰の對象を外に求むるのである。內外異りと雖も、其の歸する所は是れ一である。學道用心集に承陽大師は

　佛道を修行する者は、先づ須く佛道を信ずべし。佛道を信ずる者は、須く自己本道の中に在りて、迷惑せず、妄想せず、顚倒せず、增減なく、誤謬なきことを信ずべし。(原書漢文)

と仰せられ、天目中峯禪師は、

　參禪要ニ深信一、豈應レ從ニ淺近一、直擬レ跨ニ懸崖一、不レ辭レ拓ニ白双一、橫披ニ古佛衣一、高佩ニ魔王印一、
　道源功德山、成承ニ慈母孕一。

と示されてある。是れ卽ち向內的信仰である。卽ち、自己是れ佛なることを信じ、自己是れ大道なることを

信ず。我は宇宙の一分體なり、我は社會の一員たり。我と佛と何の別かある、我と衆生と何の隔てかある。故に我が身を以て佛ならしめずんば誓て休せず、衆生をして我が道に入らしめずんば誓て止まず、是くの如き大志願は皆な信念より生ずるものである。精神一到何事か成らざらむとは、自信力の威力を述べたのである。知らず、今日の人、果して此のやうなる自信力ありや否や、甚だ覺束ないやうに思はるゝ。或は其の節操を二三にし、或は面從腹背、虛僞百端なるが如き、皆自信力の乏しきに依るのである。

伊能忠敬が幕府の命を奉じ天下を周遊して測量の事に從はむとし、客を會して盛んに留別の宴を開いた。適々梁上の乳燕が席上に墮ちて死んだ。衆皆な緣起惡しとて此の行を危んだが、忠敬は曾て意に介せず、乳燕の死何ぞ我が事に關せむと云うて、將に草鞋を着けむとせし時、草鞋の紐が斷れた。衆は益々危んだが、忠敬は平氣なもので、金鐵ならぬ鞋繫が、時ありて絕つこと怪むに足らずと云うた。愈々門頭に出で往くこと數步にして、忽ち家に釀せし酒桶破れて酒が四方に放流した。衆皆な色を失うたが、忠敬はビクともせぬ。大に笑つて、桶の破れるは然るべき理由あつてのことである。何ぞ關心するに及ばむやとて、遂に出發したが、果して何等の滯りも無く、とう〳〵其の目的を達したとある。

佛陀の瞻仰

次に向外的信仰とは、宇宙絕對の眞理、萬世不磨の大道たる標準を向ふに立てるのである。其の眞理の

代表者、大道の好模型は佛陀である。故に佛陀を以て信仰の對象と爲すことは、各宗各派何れも變りは無い。唯だ信仰の內容が大略二つに分れて居る。一は佛陀の慈悲に依賴して其の救助を仰ぐこと、一は佛陀の大德に歸依して其の大德を分化することである。前者は主として他力宗の信仰、後者は主として禪門の信仰である。尤も、禪門の信仰にも佛陀の慈光を仰ぎて、ひたすら其の濟度を冀ふことが無いではないが、其の目的とする所は、矢張、自己本具の靈光を發揮するに在るのである。此の時こそは病人が醫士の勸告に從ふが如く、軍人が上長官の指揮に從ふが如く、毫末も私の料簡を挾まず、只々佛陀の敎訓を遵守し奉るのである。退いて我々の心頭を返照し來れば、耻かしい事のみが多い。承陽大師が

唯だ貪名愛利の妄念のみあつて、更に菩提道心の取るべき無し。

と歎かせられたが實に其の通りである。心に虛僞があるから、善も僞善と爲り、行も僞行となる。精神の內部を掃除して見たならば、百中の九十九までは名利の塵芥ばかりであらう。演壇に勤儉の必要を喋々する講師が、歸途、料理店の樓上に借金の上塗をすることや、徒步主義會の居士が、二人曳の人力車で馳け附ける事も有りがちの事である。矢張り學者は學問の器械、宗敎家は宗敎の道具、說敎師は安心談の蓄音器、演說家は理論の發聲活動寫眞である。眞個の生命に生きる學者宗敎家等に至つては、甚だ乏しいやうに見受けられる。故に肚裏幾許の閑妄想を吐き出して、更に纖塵の虛僞を立せず、專心一意に宇宙眞理の權化たる佛陀に歸依し奉り、佛陀の大智慧を瞻仰し、佛陀の大慈悲を恭敬し奉ることを忘れてはならぬ。こ

れが向外的信仰である。

靈光燦然

扨て此の二つの信仰は、併び修すればとて、決して矛盾を來すことはない。併び修してこそ兩つながら其の全き事を得るのである。喩へば前後の歩の如く、一歩は前に在り、他の一歩は後に在り、左右各々前後して始めて前進する事の出來るやうなものである。佛陀の大人格の中に此の全身を投げ込んで、幾ど自己の存在をも忘却し盡した時、始めて佛陀の大人格と自己の全身とが融合和同して、自己本來の靈光が燦然として輝きを發するのである。承陽大師は此の消息を

いとふことなく、したふことなき、このときはじめて佛のこゝろに入る。たゞし心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、たゞわが身をも、心をもはなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりをこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、こゝろをもつひやさずして、生死をはなれ佛となる。

と御示し下されてある。厭はず慕はずとは、生死に對し、人生に對して智慮分別を弄せざることである。佛の家になげ入れてとあるは、向外的信仰、生死を離れ佛と成るとあるは、向内的信仰の究竟したる境界である。理論としては兎に角、實行としての禪はこの信仰を發した後でなければ、修養も何もあつたもので

ない。此の信仰が發すれば、信仰の威力によりて、膽も大なるべく、心も小なるべく、智も圓かなるべく、行も方なるべし。

大佛教家の生ぜざるは、大信仰力の發せざるによる。大信仰力を養ふことは、實に生命ある佛教の實行者たる禪客の第一關であることを忘れてはならぬ。

先聖の遺訓

發菩提心

吾が高祖承陽大師の御親訓に

『此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。』と申してあります。苟も佛教を信ずる者は、平生底に於て、此の御親訓を以て信仰の基礎とせねばなりませぬ。何故なれば、佛教の大功德を獲んと欲せば、先づ第一に菩提心を發得することが肝要であるからです。菩提は梵語で、支那では道とも覺とも譯してあるから、つまり、菩提心とは佛道を求め佛意に歸依するの心である。一口にいへば道心である。獨り佛教信者のみならず、苟も人間としての道德を全うせんとする者は、必ず道心を起さねばならぬ。道心があつてこそ、人間の行爲が眞に價値あるものとなるのである。

幕末の偉人吉田松陰先生は、幕府の忌む所となつて牢獄に投ぜられたが、獄中でも猶ほ孟子の講義をし

て居られたそうだ。聽く者は氣が氣で無い、今にも殺される命であるに、書物の講釋を聞たからとて致し方がないと思ひ、それよりも何にか面白き話しでも承はりたしと申せしに、先生は容を改め、扨々心なき事を言はるゝかな。『死生命あり』とは三歳の童子も猶ほ知る所ならずや、縱ひ疊の上に坐し錦の褥に包まるゝ身なりとも、天命來たる時は忽ちにして死なねばならぬ。命數の盡きると盡きざるとは、必ずしも獄中に在ると否とには關はるものでは無い。人間といふ者は、縱ひ一日でも此世に在る中は、暫時も離るべからざる者は道である。故に中庸には『道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず』とあるでは無いか。道は人の生命である、道なき人は人に非ず。一日道あれば一日人たることを得べし。故に、予は諸士の爲めに道を講ずるのであつて、決して孟子の章句を摘むのでは無いといはれたそうだ。

吾々人間たる者は、誰でも是の如き心得が無ければなりませぬ。而して此の道ある心を發するには、此の人間の身を受けて此の世に生れて來た吾々こそ、最も好適の位地を得て居るのである。南閻浮の人身といふは吾々人間の身を指したのであります。佛教では、此の世界は須彌山の南方に當つて居るといふので、南洲とも稱します。閻浮は樹の名である。印度には澤山ある喬木なそうな。此の樹を以て此の世界に名づけて南閻浮というたものです。

吾々人間には萬物の靈長たる身と心とを具へて居る。就中、此の心なるものが、知識德行の源泉であつて、磨けば磨く程無限に發達すべき性能を有して居る。人間以下の衆生は、惡業の障りが重いから此の性能

を現はすべき力用が無い。又、天上界の衆生は、果報の勝れて居る爲めに世欲に耽り、却て道念を發すべき機會に乏しいと申すことであります。吾々は幸にして此の人身を受くべき因緣に遭遇することが出來たのは、實に喜びの中の喜びといはねばならぬ。是れ全く前世の願力堅剛なるが爲めに、此の娑婆に生れ來つたものであらう。

娑婆は梵語で、支那では忍土又は忍界と譯して居る。堪忍世界といふ意味である。此の世に生れた者は、內、諸々の煩惱を忍び、外、寒暑風雨等の苦しみを堪へねば、人生の目的を全うすることが出來ぬから、堪忍世界と名けたものである。吾々は、前に述べた通りの果報勝れし娑婆界に生れ、殊に釋迦牟尼佛の正法に値ひ奉りしは、面り佛を見奉ると寸分違ふ處は無いのであるから、實に此の上も無い喜ぶべき身の果報ではないかといふのが、先刻讀上げたる贊題の大意であります。

併し、寶の山に入りながら手を空うして返るといふ樣に、折角、復と得難い果報を受けて居ても、肝心なる道心をも發さず、又、道心を實現すべき修養の心得も無く、唯だウカ〳〵と生涯を送つた分では、何んの生れ甲斐も無い譯であります。然らば、如何なる標準に依て道心を發起し、且つ增進すべきやといふに、我が本師釋尊が御涅槃の砌りに、御遺訓として御示し下されたる八大人覺の御教こそ、最も適切なる標準であらうと思ふ。

我が高祖承陽大師は、建長五年八月廿八日、(太陽曆の九月廿九日)の御入滅であるが、其の年の正月六

日に、特に八大人覺一篇を書して御示し下されました。又、太祖常濟大師は正中二年八月十五日（太陽曆の九月廿九日）の御入滅ですが、其の月の八日より、特に御弟子達の爲めに、八大人覺を御提示あらせられたとある。殊に高祖大師は『此の八大人覺を知らざらんは佛弟子に非ず、此の八大人覺は正しく如來の正法眼藏涅槃妙心なり、吾々は必ず之を習學して生々に增長し、必ず無上菩提にいたり、衆生の爲に之を説かんこと釋迦牟尼佛に等しくして異なることなからん』とまで仰せ下されてあります。

八大人覺といふは、法門の數が八あるから八、即ち少欲・知足・遠離・精進・不妄念・禪定・智慧・不戲論の八ケ條です。大人は佛のこと、覺は覺悟、又は覺知の義、獨り佛の覺知して實行したまへる法門なるを以て、八大人覺と稱したのである。故に、今日の吾々も、能く此の法門を修學する時は、取も直さず眞實の菩提心を發起し增進して、立派な佛の境界ともなることが出來るのであります。

少欲

先づ第一が少欲です。少欲とは欲を少なくせよといふ御語であるが、是を禁欲主義とのみ思うては大變な間違ひである。少といふは、適當なる制裁を加へよといふ意味なのであります。

人は生れながらにして必ず欲といふものを持て居る。生命の欲・財産の欲・色情の欲・名譽の欲・食物の欲・安息を求むる欲・此等は人間通有の欲である。此の欲あるが爲めに、人間は自づと活動して居る樣

なものである。併し、何等の制裁もなく紀律もなく、唯だ欲のまゝに欲を起したならばどうであらう。其の結果は、親は其の子を虐待して顧みず、子は其の親を苦しめて耻ぢず、兄弟・朋友・妻子・親族・互に欺き互に詭はりて、まるで畜生にも劣る有様となるに相違ない。古今の、犯罪者とか、大悪人とかいふ者を見るに、盡く無節制なる欲念が罪悪の原動力となつて居る。汽車に二筋の軌道あるが如く、欲にも必ず退て堅く守るべき常軌が無ければならぬ。今の少欲と仰せられたるは、自ら其の欲を制するに人倫の常軌を以てし、如何なる場合に於ても、其の軌道を逸せざれとの御訓戒であります。

デカートが作つた處世上の格言なるものに四箇條ある。即ち一に『人は己の教育せられたる法律と宗教とに身を委ねよ』、是れ一種の菩提心である。二に『活動すべき場合に於ては、神速に且つ自己最良の判斷に從つて活動せよ』、是れ己れを欺かざるの勇氣である。三に『己の願望を滿足せしむるよりは、寧ろ之を制限して幸福を求めよ』、是れ正しく少欲の意義である。四に『眞理を捜求するを以て一生の務めとせよ』、是れ向上的修養の基礎であります。論語に『富と貴ときとは是れ人の欲する所なり、其道を以てせずして之を得れば處らず』といひ、孟子に『其義に非ず其道に非ざれば之に祿するに天下を以てするも顧みず』とあるが如きは、皆な少欲を説いたものです。故に少欲の修養は人間の道徳を進むる根底とも謂ふべきものであります。

第二に知足とは、足ることを知るのであるから、吾々が自分の位地と分限とを自覺して、忠實に其の職務を守り其の分限を盡し、毫も不平不滿の心を生ぜざるの謂である。

尤も吾々人間は常に向上心を起し、卑きより高きに昇り、小より大に進むの志氣を具へねばならぬものではあるが、其の志氣を貫徹するには、法則に合うたる秩序を履みて進まねばならぬものです。故に、今日には今日の職分あり、明日には明日の位地あるを以て、今日は今日の職分を堅く守り、明日は明日の位地に相當したる業務に服し、而して之を守ること最も忠實なるべく、之に服すること最も至誠なるを要するのである。若し妄りに不平を抱き不滿を訴ふるが如きことあらば、決して完全に其の職分を守り、其の業務に服することは出來ませぬ。

貧乏人が金持の眞似を爲やうとしても出來るものでは無い。下級の者が上級の人の眞似を爲やうとしても出來るものでは無い。故に、貧乏の時は貧乏人相當の職分を盡し、下級の中は自身の階級に適當なる生活を爲し、以て自己の權利を保任して、各自の義務を全うするのが人の人たる道であります。

古人は『らしくせよ』といふことを申してある。卽ち男は男らしく、女は女らしく、親は親らしく、子は子らしく、夫は夫らしく、妻は妻らしくせねばならぬ。主人が主人らしからず、奉公人が奉公人らしか

らず、商家が商家らしからず、農民が農民らしからざる時は、家庭を治むることも、職業に精勤することも出來ぬこととなる。此のらしく主義が取も直さず知足の行である。若し足ることを知らざる時は、徒らに他人の財を羨み、妄りに他人の權利を侵さんとし、不義の富貴をも貪ぼり、不相應の奢りをも敢てするに至る。人間の煩悶と罪惡は、多くは是れより生ずるのであります。

之に反して、足ることを知り、分に安んずる者は、縱ひ襤褸を纏ひ鹽を嘗めて、九尺二間の陋屋に住するとも、職を盡し道を樂しみ、心地坦然として俯仰天地に慙ぢぬに依て、其の精神上の快樂は高位貴人にも勝るものである。又、縱ひ車を挽き泥を被りて、奴隷同樣の境遇に在るとも、能く因緣を諦めて分限に安んじ、品行方正にして道德を修むる時は、其の人格上の價値は賢人君子にも劣らぬものである。故に遺敎經に『知足の法は富樂安穩の處なり』と仰せ下された通り、足ることを知るは精神上に富貴快樂を得る所以の法である。

『傳家法』といへる書物には『足ることを知る者は身貧けれども心富む、得ることを貪る者は身富めども心貧し』といひ、古歌には『事足れば足るにまかせて事足らず足らで事足る身こそ安けれ』とある。故に吾々は一面に進取の志氣と勇氣とを備ふると同時に、一面には分に安んじ足ることを知り、『家に儋石の備へ無くも心に天地の春を有つ』底の餘裕を存せねばなりませぬ。

遠離

第三は遠離です。遠離とは遠く人生の雜沓を離れて、身を閑寂の地に置くことである。併し、一般人は中々人生を離るゝ事などは出來るものでは無い。高祖大師は遁世、即ち遠離の旨意を諭して『遁世と云ふは世人の情を心にかけざるなり、たゞ佛祖の行履、菩薩の慈悲を學して諸天善神の冥に照す所を慚愧して、佛制に任せて行じもてゆかば一切苦しかるまじきなり』と御示し下されてある。此の御示しに從がふ時は、縱ひ人生の最只中に在りて、人事上に活動して居ながらも、人生の爲めに束縛せられず、超然として、心を古今不變の大道に遊ばしめ、且つ淸淨なる信念を培養し得ば、此の身此の儘が遠離解脱の境界となることが出來るものである。

即ち、大燈國師が『坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』と詠まれた樣に、社會に處しても社會の爲めに誘惑せられず、人事を營んでも人事の爲めに妄念を起さず、常に心の奧底に、佛の道を蓄ひ聖賢の敎へを守るからして、世間も出世間も同樣である。人の人たる道を全うせんと欲する者は、是非とも是の如き修養を存することが必要であります。

精進

第四は精進である。精進とは、精はクワシクと訓じ、純粹にして雜り氣の無きこと、進はスヽムと訓じ、自己の目的に向て進歩向上し、如何なる困難に遭遇するとも、斷じて退かざるの謂である。普通語を以て言はゞ、勤勉努力することであります。

怠惰は貧窶の門戶、勉强は幸福の母、日に勵み月に進で息まざれば、如何なる難事と雖も成し遂げられぬといふことは無い。『困難愈々甚しければ愈々多く勞苦を爲すべく、危險愈々甚しければ愈々多く勇氣を顯はすべし』とは古人の格言ではないか。世に天然の釋迦なく自然の彌勒なし、大聖人も、大賢人も學者も、英雄も、皆勉强の賜である。されば一向出生菩薩經には『阿彌陀佛は、昔し或る國王の太子たりし時、此の微妙の法門を聞て奉持精進し、七千歲の中、脇席に至らず、意傾動せず』と說てある。善導大師は念佛門の祖師であるが、堅く大戒を護持して寸毫も犯さず、四十餘年の間、別に寢處を設けず、堂に入て念佛し、寒冷の時と雖も、必ず汗を流し氣竭るに非ざれば息まれなんだとある。況てや、禪門の高僧の如きはまた格別で、二祖大師は達磨大師に參ぜし時、夜半に雪中に立ち、左の臂を斷斬て大法を求められ、雪峯禪師は晝夜坐禪して、坐蒲團を布き破ること十八枚であつたとある。何事も、精進力に依らざれば成功を見ることは出來ませぬ。

然るに、吾々は兎角に安逸を以て幸福の如くに思ひ、動もすれば、どうか遊んで居て食べられる樣な身分になりたいものだなどといふ考を起し易いものです。故に、此等の考から小成に安んじ、少しく御

金でも溜れば直に樂隱居でもする氣になる。而して此の根性が人間の果報を失墜して惡道に墮落せしむる原因となるのであります。佛作佛行を以て、未來永久の目的とするの志があつたならば、死んでも精進は息められぬ筈です。

不忘念

第五の不忘念は、忘れずに念ずるといふのであるから、始終一貫して正念を相續することです。正念といふは、私を棄てゝ道を守らんとするの念力と、佛の御教を尊信して常に之を守るの念力とである。換言すれば、道念と信念との二つです。信念なき道德は堅固ならず。道念なき信念は正しからざるを以て、此の二つの念力の相融合したのが眞の正念であります。

吾々は、幸にして此の正念を發することが出來ても、見る物、聞く物の爲めに精神が惑亂して、何時の間にか正念が藏れて了ふことが多いものである。故に遺教經には『若し不忘念ある者は、諸々の煩惱の賊、即ち入ること能はず（乃至）若し念を失する者は卽ち諸々の功德を失す』と御示し下されてあります。佛教には發心・決定心・相續心の三心を說いである。

發心とは最初求道の志を發すること、決定心とは彌々其の志しが決定して信念の確立したること、けれども、種々の境遇に觸れて其の信念が薄弱になることがあるから、第三に相續心といふことを勸めたの

だ。即ち一旦決定せる信念が永久無間斷に相續して、威武も之を屈すること能はず、富貴も之を淫すること能はず、貧賤も之を移すこと能はずといふ處まで進まねばならぬ。此の信念にして能く相續する時は、如何なる場合に臨み、如何なる時節に廻り逢ふとも、微塵も動搖するものでは無い。却て其の場合と時節が信念を增長するの因緣となるものである。

畫師の良秀といふ者は、火事の爲めに自分の家が燒けるといふのに、欣々然として炎の燃え上がるを見て居つた。人怪んで其意を尋ねしに、彼は之に答へて『今日始て火炎を描くの妙術を習うた』と申したさうである。

又、或る勉强家の青年が、友人に誘はれて始て演劇を見て、非常に感服して居たが、それからといふものは一層勉强に身を入れた。友人が再び觀劇を勸めたるに、彼れは『此の程演劇を觀しに、俳優なる者は此の暑いのに鬘を冠り、綿入を着て、舞臺の上で踊つて居た。私は之を見て處世上の心得を悟つた。即ち暑さをも暑しとせずに働かねばならぬといふことを感じた。夫故に自身の目的を達する迄は飽迄勉强する覺悟である』と答へたそうだ。正念相續する者は、見る物も、聞く物も、盡く吾が善知識となるものであります。

第六は禪定である。禪定の禪は梵語で、飜譯して定とも靜慮ともいふ。心の散亂を靜め、寂定の狀態に安住するを以て定といひ、妄念思慮を打ち靜める邊から靜慮ともいふ。

吾々凡夫の心といふものは、兎角、外境を追うて、色・聲・香・味・觸・法といへる六塵の巷を飛び廻はり、爲めに吾我・名利の忘念を起し、貪慾・瞋恚・愚痴の三毒煩惱を幻出し、其の結果は遂に種々の惡業を造り、無量の苦しみを招くに至るものである。故に先づ以て其の散亂せる妄念を靜めて一心を湛寂にし、以て煩惱惡業の巣窟を打破するのが禪定であります。

若し心の散亂に任せて居たならば、決して正しき智慧を研くことは出來ぬ。平日の仕事をしたり、學問をしたりするにも心が落付て居らねば出來ぬものです。況てや、眞正せる智慧を錬磨せんには、第一に妄念を制することが大切である。故に遺教經には『若し定を得る者は心則ち散せず』とも『智慧の水の爲めの故に善く禪定を修して漏失せざらしむ』とも、御示し下されてあります。

尤も、今日、禪宗と稱する宗門に於ける禪定は、決してこれのみの意味ではありませぬ。此の禪定が非常に發達して、禪力に依りて八大人覺全體の功德を總合完成したのが、禪宗の禪である。此の事の詳しき說明は他日に讓ることとして今は略して置きます。

昔、六祖慧能禪師が既に五祖の衣鉢を相續はせられたが、まだ盧行者と稱して在家の姿で居られし頃、南海に至りて法性寺といふ御寺に宿られた。其の時、二人の僧があつて、寺の門前に立てたる幡が風に吹

かれて動くのを見て、大議論を闘はした。一人の僧は『幡に動性ありて動くのである』といふと、他の一僧は『こは風に動性ありて動くのである』というて、互に一歩も讓らず論量をして居つた。つまらぬ議論の樣だが此の中には中々理窟のあることである。其の時、盧行者は兩人を諭して『風動といふも、幡動といふも、皆一面のみを見た識見に過ぎぬ、是の如き議論は佛法に於て更に益なきものである。佛法の正眼より見來れば、元來、風動にもあらず、幡動にもあらず、是れ實に仁者の心動である』と示されたといふことです。

此の『心動』の一語は實に佛法の極意を道ひ盡された御教へであります。吾々にして眞實精神の汚濁を洗ひ德性の根底を淨めんと欲せば、先づ以て心動、卽ち心の散亂妄動を靜めることが緊要です。是れ卽ち禪定の第一步でもあり、且又、其の終極でもあるのであります。

智慧

第七が智慧である。智慧といふと、直ぐ學問、技藝といふ樣なことを聯想したがるものであるが、今茲でいふ所の智慧は、少々意味合が違うて居ります。

無論、愚痴の反對が智慧であるには相違ないが、此の愚痴障には二通りあります。一には迷理の惑というて眞理に迷ふ者、卽ち斷見・常見等の邪見をいふ。二には迷事の惑というて諸法の事相に迷ふ者、卽ち

外物に轉ぜられて慾の奴隷となるをいふ。如何に學問が出來て利口であつても、若し邪見に墮ちて、或は神佛の存在を疑うたり、因果を撥無したり、靈魂斷滅を說いたりしては、依然たる愚痴の衆生といはねばならぬ。又、如何程倫理道德の學に通じ、法律制度の道に達しても、其の人の心行が正しくなかつたり、品行が修まらなんだりしては、決して智慧ある者とは申されぬ。

此等の人は、學問の事を喋べるだけの機械であつて、學問を有する活人とはいはれませぬ。故に、遺教經に釋尊は『汝等當に聞・思・修の慧を以て而も自ら增益すべし』と仰せられてある。聞とは正法を耳に聞くこと、思とは其の理を究むること、修とは之を實行することとです。此の實行があつてこそ始て眞に智慧ある人と申されるのです。實行なき者は學問の機械たるに過ぎぬ。今日、敎育の盛に行なはれて居るにも拘はらず、道德が廢つて居るといふのは、つまり學問の機械ばかり殖えて來たからであります。

魯の哀公が孔子樣に向つて『予は此程甚しく物忘れをする者を聞た、そは其者が家を徙した時、自分の女房を忘れたと申すことぢや』といはれると、孔子樣は之に答へて『それはまだ忘るゝことの甚しき者ではありませぬ、眞に甚しき者は女房どころか、自分の身すら忘れて居ります。昔の夏の桀王の如きは、貴きこと天子たり、富天下を有しながら、無道を行うて國遂に亡ぶ、これが忘るゝことの最も甚しき者であります』といはれたそうです。

我國でも、關白秀次は人を殺すことが道樂であつたから、殺生關白といはれた程です。此の秀次が或

時、六郷義郷に向て『世の人は随分物忘れをする者が多いと聞くが、予は頗る記憶力に富んで居る』といふと、義郷は之に答て『イヤ殿下の如きは、關白といふ貴とい位地に上りながら、妄りに人命を殺して自ら楽みと爲すと聞く、關白は民の父母も同然であるに、父母にして其子を忘るゝは、是れ忘るゝことの甚しき者であらうかと思ひます』といふたとある。

道霈禪師は聞・思・修の三慧を喩へて『聞慧なきは覆器の水を受ること能はざるが如し』倒さにした水瓶の様なもので、一滴の水も入らぬ、又『思慧なきは漏器の受くと雖も而も失するが如し』入れた水も皆な漏れて少しも溜まらぬ、又『修慧なきは穢器の漏失せずと雖も穢れて用ゆべからざるが如し』で、實行しなければ何の役にも立たぬといふてあるが、實にその通りであります。

不戯論

第八は不戯論です。戯論とは戯むれ言といふので、俗に冗談・滑稽・駄法螺などいふ様に道理の根據を有せざること、言ひ換れば、何等の意義も無く、確實なる論理もない無駄事を戯論と申すのであります。縦ひ立派なことを言はふとも、單に世間有爲の法にのみ止まつた事ならば佛教から見ると矢張一種の戯論です。

『一切有爲の法は夢と幻と泡と影との如く、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし』と

は金剛經の金言である。人生觀來れば大夢の如し、其の人生の間に在りて、名を貪り利を漁り、五慾の香を追て六塵の影を尋ね、惜い欲い、憎い愛いというて、朝から晩まで、七顚八倒して居るのが凡夫の常態である。が、彌々一息截斷の時に至りて、一生涯の行事を振回つて見たならば、果して何物が殘つて居りませう。未來までも擔でいつて、三途の川原に於て、正々堂々と閻羅王に向つて報告して、其の讃歎を受け得られる樣な手柄が何處にあります。

遽伯玉は、五十にして四十九年の非を知つたというて居る。自己本位から割出した一代の功業は、多くはお愧かしい事のみであらうと思ふ。僅か厘毛の爭ひから大喧嘩をしたり、有りもせぬ名譽の爲めに權利を爭うてみたり、口腹の爲めに由なき罪を作つたり、人を苦しめて面白がつたりする人が少なく無い。人間界のする事を眞面目に研究して見たならば、百の九十九までは戲論の業といはねばならぬ。

或勝負事をする者が、蛙の鳴聲に就て、勝て戾る時はカツタ〳〵と聞え、負けて返る時はハダカダ〳〵と聞ゆるというたそうである。又、或者は、金持の家へ行くと、時計の音がチョツキン〳〵と聞え、貧乏人の處へ行くとシヤツキン〳〵と聞える。當世風の若者が步くと靴の音がゲツキウ〳〵、頑固な老爺だとキユウクツ〳〵と聞えるというたそうだが、世の中の喜怒哀樂は大概之に類した事より生ずるものである。

佛樣の如き三世通達の眼、大慈大悲の御心より見る時は、實に老病生死の大海に我見我慢の波を起し

て、自らそれに浮きつ沈みつして居る様なものであります。故に、此等の迷執煩惱を解脱して、宇宙の大道、天地の妙理、永久不滅の大眞理を以て精神の住居と爲し、未來永遠の大理想を確立し、現在の一歩一歩を愼んで、刹那々々にその大理想に向て向上して行くのが、不戯論です。言ひ換れば、佛心を以て我心と爲し、佛の願力を以て己れの願力と爲し、佛の御教へに此の身心を依托して、最も愉快に、最も公明正大に、道を守り、道を行なひ、道を運轉無礙にし去るのが不戯論であります。

我が宗門の上でいへば、懺悔の一念に身・口・意三業の罪垢を洗ひ淨め、佛祖正傳の大戒を稟受して此の身此の儘、佛の御位に證入して、卽心是佛の大安心を法定し、更に大慈悲心を培養して、未來際を盡して、普く一切衆生を利益せんとの大願心を起し、日々の行持を愼しみて其の本分を盡し其の義務を全うし、所謂『道德的生活』を任持して、以て國家の大恩、父母、祖先の洪恩に酬い一切衆生の恩分にも酬い、佛祖の慈恩に報答し奉るのが眞の不戯論であります。

古人は戯論に二通りあることを說て置かれた。一には知識上の戯論、卽ち空理空論に耽るの類、二には行爲上の戯論、卽ち無意義の生活をして居る輩のことです。併し、一口に申せば、完全なる信念を有せざる者の生活は、總て戯論といはねばなりませぬ。よしや少欲知足の德を守り、遠離精進の行を勵むとも、内に確實なる信念なき時は、矢張、戯論滑稽の人たることを免れぬ。故に此の不戯論を一番の終りに置かれたものであります。

全體、今日の世の樣を眺めると、如何にも名利世界の樣に思はれる。人間一世の目的を以て、名譽と利益との二ツに歸して居るのが、現代の狀態ではあるまいか、名譽は人に取りて最も貴ときものゝ一つではあるが、名譽なるものは、元來、人格の價値を表彰する徽章である。人格の價値なき者が名譽を得るのは、乞食が御大名のまゝ事をする樣なもので、一の滑稽劇を演ずるに過ぎぬ。

淨瑠璃本の太閤記の中に、光秀の母が、誤つて光秀の爲めに鎗で突かれし時、自ら、主を殺せし我子の天罰が、親に報い來れるものと明らめ、斷末魔の苦しき中にも、光秀を誡めて『不義の富貴は浮べる雲、主君を撃て功名顏、縱ひ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも劣りしとは知らざるか、君に背かず親に事へ、仁義忠孝の道立たば、もつそう飯の切米も百萬石に勝るぞや』というてある。人間は是の如き正義の思想が無ければならぬ。他人を突倒しても、他人を蹴落しても、自分だけは立派な顏をしやうとして是を名譽なりと思ふが如きは、錦に泥團を包んだ樣なものであります。又、利益とてもその通りです。家を富まして國家の實力を作るべきは實に是れ現代の急務である。併し、所謂『不義の富』では何んにもならぬ。殊に、人間の價値も、國家の實力も、金錢の力のみで出來るものでは無い。『金錢の富は眞の實力を現はすべき道具である』黃金萬能主義の惡思想は、滔々として天下を風靡し、青年でも、老人でも、

多くは此の思想の爲めに刻々に道念を殺ぎ取られて居る。

或人は、或學生が友人に不幸ありて、その御通夜に赴いたが、棺前に於てまるで金の話しで一夜を明して居つたとて、大に慨歎して居られた。又、或る女流敎育家が『私は仕合せ者といふ人程不幸な者は無いと思ふ』といはれた。これもそうである。金があつて、甘い物を食べて、多くの下女を使ひ、麗はしき衣服を着け、勝手次第に物見遊山をして、不斷は寢て遊んで、贅澤して暮して居る樣な人のことを、『彼の人は仕合せ者ぢや』というて人々が羨むのである。此等の人は、世に於て益なく、自身に於ても功がない。丁度御飯を食べる人形の樣なものである。其の癖、我儘が多いから、中々厄介千萬な器械である。かやうな連中は小人中の小人ともいふべきものである。

之に反して、釋尊最後の御敎訓たる八大人覺の行を習ひ、永久不滅の大道あることを確信し、その大道に向て進趣せんことを期し、以て自利々他圓滿の功德海に逍遙するのが、眞の大人、即ち佛の性格を有したる大丈夫の菩薩である。吾々は斷然志を立て、此の大人の德を成就するの修養に努めねばなりませぬ。

米國十八代目の大統領グランド將軍は、我國にも來遊したことがあるが、中々信仰の篤い立派な君子人であつた。氏の嫌ひな物は卑怯者と虛言者であつたそうだ。氏が大統領に選擧せられた際、一室に在りて議會に與ふる敎書を起草しつゝありし折柄、名刺を通じて面會を求めた客があつた。取次の者は氣轉を利

かして『御留守というて返しませうか』と申せし時、氏は大に叱つて『否々、斯る言を吐く勿れ、予は如何に劇務の中に在るとも己れを欺くことは出來ぬ』といはれた。

又、氏は非常に堪忍の強い人で、一生の間に腹を立たことは三回だけであつたとある。其の一は自分の部下の一兵卒が婦女子を強姦したる時、氏は勃然として怒り、直ちに其の兵卒を銃殺した。今一つはリッチモンドに出陣中、一農夫が馬を虐待するのを見て、氏は懇ろに農夫を諭して虐待を中止した。然るに、農夫は氏の命に應ぜず、益々鞭を擧げて馬を打つたので、馬は連りに悲鳴を發した。時に氏は憤然、部下に令して『此者を捕へて六時間樹木に縛せよ、馬は最も聰明なる獸類なり、主人にして賢明ならば殆ど凡ての事を馬に敎ゆることを得べきものぞ』というたとある。

此の外、氏の事蹟には多くの美談があります。兎に角、氏は名利以上に大なる信念を有して居つたに相違ない。況や、佛の御敎を信仰する吾々にして、若し此の大人行を持つの志氣が無かつたならば、此の一生は舊に依て妄想窟中の閑活計を打するに過ぎぬ。

釋尊の將に涅槃に入りたまはんとするに臨み、諄々として御說き下されたる八大人覺の敎は、實は御慈悲の涙の塊まりです。凡夫世界の暗路を照す光明幢です。否、世界無比の大聖の大福音です。佛敎有緣の人は言ふに及ばず、縱ひ佛敎以外の人と雖も、此の大福音に觸れたる以上は、眷々として之を服膺するこそ永遠の最大幸福を獲得する所以の道であらうと思ひます。

七つの淨き華

釋尊は、花の御園に於て御誕生あらせられ、花の如き御身を具へ、花の如き麗はしき佳瑞を現はし、花の如く淨き御生涯を御送りなされ、一切衆生を誘引して花の淨土に導きたまうたのである。佛樣と花とは影の形に從ふが如く、少しも相離るゝといふことは無い。

佛教には七淨華といふことがある。飜譯名義集には『不染を淨と曰ふ、華は即ち果に對して言ふ、即ち因中所修の行なり』と註してある。されば淨とは一切の雜染を離れたるをいふ。吾々の此の世に處するや、縱ひ四苦八苦の惱みあるとも、五慾六塵の穢れあるとも、三業淸淨にして更に浮世の塵を受けざるを淨といふ。

淨といふは、或る意味に於ては善の換詞と見ることが出來る。淸淨身とは至善の身である。御淨土といふは至善の世界、即ち道德的生活の世界をいふ。然れば、今日の人生なるものが次第に發達して、眞箇

の精神的文明の妙成績が現ずれば、變姿自在である。

次に華といふは果に對するの辭、華は因で實は果である。吾々の修行は恰も華の如く、此の修行力に依りて佛道の果實を結ぶのである。行ずれば證共の中に在りと申せば、修行の華が開きさへすれば佛果は自づと證得せられるものである。此の華に七通りあるから七淨華と申すので

第一は戒淨華である。正語・正業・正命を得るのが戒の功德で、即ち口業も、身業も、兩つながら道德の法則に隨順することである。

第二は心淨華・精進・正念・正定の謂であるから、正念に住して道に精進し、內心寂靜にして物の爲めに汚されざるをいふ。

第三には見淨華、即ち正見・正思惟の謂であるから、正しき智慧を以て眞理を認むることである。

第四には斷疑淨華、即ち道を求むる上に於て正しき信念に住し、一點も疑惑を挾まざることである。佛を見奉る上に於ても、又、自己心中の佛を顯得する上に於ても、疑惑の念があつては決して修業力を現はすことは出來ぬ、承陽大師は『佛道を信ずる者は、先づ須らく自己を信ずべし』と仰せられてある通り、吾々は第一に自己を信ずることが肝要である。自己元來是れ佛なりと信じてこそ、修業の志も堅固になり、且つ釋尊に對し奉りても、吾々の理想的大人格として深く之に歸依し、渴仰し、羨望し、模倣する樣になるものである。故に自己心內の佛を信ずることが深ければ、それだけ釋尊を信ずる心も深くなるもので

ある。而して此の信仰は寸毫の疑念をも抱いて居てはならぬ。常濟大師は『汝が衣裡に繋ると雖ち、汝疑に依て知らず、汝正に是の人なり』と仰せられてある。此の疑團を斷除したのが斷疑淨華である。

第五には分別淨華、分別とは理を究むることである。既に信心發得せば、增々知識の敎を被むり、又は經卷を採りて眞理を辨まふることである。

第六には行淨華、眞理を辨まふることを得ば進んで眞理を實現すべく實踐躬行することが肝要である。

第七には涅槃淨華、涅槃は最終の彼岸境である。般若心經に『一切の顚倒夢想を遠離して究竟涅槃す』とあつて、一切の煩惱妄想を打破し盡せば、忽然として大涅槃の境に逍遙することが出來る。涅槃は梵語此に寂滅と譯す。寂滅とは煩惱及び生死の苦を斷ずるの謂であるから、義に依りて不生不滅とも譯してある。是れ則ち吾人大安心の境であるに依て、涅槃經には寂滅爲樂と說てある。

弘法大師は涅槃經にある、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の四句を歌として「いろは」を製作せられ、寂滅爲樂のことを『淺き夢見じ、醉もせず』と詠ぜられた。洵に好く涅槃の意義を盡された樣に思ふ。凡夫の迷執は多くは淺はかなる夢を見て居る樣なものである。又た一切の妄想は酒に醉て狂ひ廻るにも似て居る。地獄の瞋火も、餓鬼の貪愛も、畜生の愚痴も、皆な心一つの迷より生じて居る。若し眞理の堂奥を搜り煩惱の根源を斷ちなば、夢も忽ちに覺め、醉も忽ちに醒めるであらう。是れが眞の涅槃である。此の涅槃こそ佛法の極則、安心の歸處であるから、華の最上なるものである。

以上の七淨華は何れも吾々の心の園に咲くべきものである。

心の華

十輪經には、供養の中の華は敬心を表したものであると說てある。世に華ほど美しいものは無い。故に我が國でも、皇室の御紋章は菊の花で、國民の精神を現はすには櫻の花を以てして『敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花』と詠じてある。華は物の最も美なるものである。之を心の方で申せば、吾々人間の眞情が一番美くしいものと謂はねばならぬ。故に明治天皇の御製にも『思ふことつくらふこともまだ知らぬをさな心のうつくしさかな』と御詠じになつて居る。子供の心には嘘も無く飾りも無い。實に天眞爛熳であるから、どちらから見てもうつくしいものである。吾々も斯の如き心の華を持たねばなりませぬ。昭憲皇太后の御詠にも『花になれ實をも結べといつくしみ生ふしたつらん大和撫子』とある。華あれば必ず實がある。眞實心の華が咲けば必ず佛果菩提の實を結ぶに相違ない。釋尊は、成道の最初には華嚴經を說かせられた。而して最後には法華經を御說きになり、全く華に始つて華に終る。釋尊の御一生は心の華の現はれであつた。而して、此の華は因果相待の華では無く、因果不二の華である。

華には優美の德ありて見る者をして快樂を感ぜしむ、吾々の精神も亦た優美の德を備ふる時は、人をし

て自づから歡樂の情を起さしむるものである。優美の德を備へんと欲せば、先づ以て至誠、即ち正直であらねばならぬ。正直は正しく精神の華である。次には堪忍を守らねばならぬ。堪忍ある者は、其の心柔和にして妄りに爭ふこと無く、自然に愛敬ありて、人をして愉快を感ぜしむるものである。次には萬事に親切なるべきこと、心に慈悲あれば何事にも親切なるものである。孝經には『其の親を愛する者は敢て人を惡まず、其の親を敬する者は敢て人を侮らず』とあるが如く、眞實に親を愛する程の人ならば誰れに向ても親切なるべきである。涅槃經には『諸有の善根は慈を根本と爲す』ともありて、慈愛ある人は萬事に親切なるを以て一切の善根も皆之より生ず。是れ實に心の華の最も美なるものである。

昔、芭蕉翁は、吉野の花を見んとて都を立出でゝ大和路に入り、竹内村を過ぎて孝女お今の美德を聞き、特々、之を訪ひ、餘りの有り難さに自分の旅費の全部を與へて其の儘、都に歸られた。或人が翁に向ひ、折角、大和路に入りながら花をも見ずに歸られしこそ惜けれと申せしに、翁は『予は吉野山の花は見ざれど、竹内村に於てお今といへる人間の花を觀しことの嬉しさよ』と答へられたとある。是れ正しく心の華を認られたのである。戊申の御詔書に『華を去り實に就き』と御諭しあらせたまひしは、徒らに外觀を飾りて内部の充實せさることを御誡め下されたのである。今云ふ所の心の華は、精神の奥底より發したる道德的美觀をいふのである。

拈華微笑

殊に釋尊は靈山會上に於て花を拈じて正法眼藏を迦葉尊者に授けたまうた。四十九年の說法、善を盡し美を盡されたるも、未だ以て御心に滿足あらせたまはず、最後に於て八萬の大衆を靈山の會に招集せられた。所謂、大會を御開きなされたのである。八萬の大衆は、今日こそは如何なる妙法を御宣說あらせらるるやと思ひ、頸を伸して說法の座を瞻仰して居たのである。やがて釋尊は轉法輪の寶座に陞りたまうた。八萬聖賢の目は一齊に釋尊の御身邊に注がれた。然るに釋尊は優曇波羅華といへる名華を執て、ズツと大衆の面前に拈出せられた。而して一言半句の御說法もあらせたまはぬ。大衆は佛意を測り兼ね、只だ凝視し奉るのみであつた。時に摩訶迦葉尊者ありて、破顏微笑というて、さも嬉し氣にニツコリと御笑ひなされた。その樣子は實に得も言はれぬ美しさであつたらうと思ふ。釋尊拈花、迦葉微笑す、此の間の消息は其の人ならでは知ることが出來ぬ。乃ち以心傳心である。時に釋尊は『吾に正法眼藏涅槃妙心あり、摩訶迦葉に附屬す』と仰せられた。優曇華の一枝、固より大乘小乘の論に非ず、色空有無の沙汰を絕す、若し活眼を以て之を觀れば、宇宙の神秘は此の一枝頭に於て開顯せられ、天地の美妙は此の一華裏に在りて印出せらる。是れ實に心の華の最尊最上なるものである。

靈雲禪師は桃花の開くを見て大悟せられたが、是も亦た拈花の佛意に契當したのである。承陽大師は此

の話に題して『春風に綻びにけり桃の花枝葉に殘る疑ひも無し』と詠ぜられた。吾々も亦た此の公案に參得して以心傳心の妙機を轉じたいものである。

淨妙の佛土とその實現の方法

花の淨土というても、必ずしも之を遠くに望むべからず、又、之を死後の世界とのみ思ふべからず。法華經壽量品偈には『衆生劫盡きて大火に燒かると見る時、我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり、園林諸々の堂閣種々の寶をもて莊嚴し、寶樹華果多し、衆生の遊樂する所なり』云々とある。然れば佛の在す處が花の淨土である。

前にも申せし如く淨土の淨といふは至善の義とも見られる。即ち道德の異名である。『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教』自淨其意は精神の道德的向上をいふのである。吾々は此の意味に於ける花の淨土を目前に實現せねばなりませぬ。淨土實現の法は其の心を淨め、身口意三業の上に於て惡を止め善を修するに在り。故に維摩經には、『淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに隨て則ち佛土淨し』とある。昭憲皇太后は曾て十二德を御歌に作らせられ、淸潔といへる題には、『白妙の衣の塵は掃へども憂きは心の曇なりけり』と御詠じなされてある。されば、吾々お互は先づ以て心意の淸淨を期せねばならぬ。淨心の法は三學に在り、三學とは戒と定と慧との三である。

戒とは非を防ぎ惡を止むるの法則である。吾々は常に妄情と私慾の爲めに制せられて、知らず〳〵惡道の苦因をのみ作つて居るに依りて、自ら己れの妄情を制し私慾を警めることを忘れてはならぬ。

次に定とは禪定で、念慮を靜め精神を統一することである。是れは坐禪に依るのが捷徑である。心を落着けて坐り込み、脊梁骨を眞直にして下腹に力を入れ、全身の氣息を丹田の底に收めなば、自づと立派なる精神力を發揮することが出來る。若し熟練を積みて其の極處に達すれば『行も亦禪、坐も亦禪』で、朝から晩までの事が盡く禪定力となるものであるが、初めの中は是非とも禪定に依らねばならぬ。

次に慧は智慧である。智慧も大別して二通りある。一は人の人たる道を辨へて之を守ること、一は絕對智で吾々の本性を明らめ、生死を飛び超たる大生命を認識するの慧である。

以上の三學が幷び行はれてこそ、眞の淨心を得ることが出來る。而して之を得るには欲求の心が熱烈でなければならぬ。單に佛敎は無慾主義であると思ふのは間違である。天台の修行止觀坐禪法要の中には第五方便行というて大欲を說いてある。その第一が慾である。天台大師は之を釋して『世間一切の妄想顚倒を離れんと欲す、一切諸禪智慧の法門を得んと欲す、故に亦は名けて志と爲し、亦は名けて願と爲し、亦は名けて好と爲し、亦は名けて樂と爲す』云々とある。第二が精進、第三が念、煩惱の賤むべき、菩提の貴むべき等を念想して、增々其の志を勵ますこと。第四が巧慧、世間・出世間を比較して其の輕重を明らめ、出離生死の妙法を分別決定すること。第五が一心、即ち一心不亂にして餘念を交へざること、以上

の五行は修行の要訣であるが、その本は慾樂である。釋尊も『一切の善法、欲を其の本と爲す』と仰せられた。佛敎に無慾主義を示してある場合はあるが、それは邪慾を制したのである。

世間法を攪亂し、出世間道を妨害するものは邪慾の業である。一切の罪惡は皆な邪慾より生ず。若し邪慾を制して其の中正を得ば正慾從つて起る。故に華嚴經には『善法欲を斷ずるは是れ菩薩の魔事なり、是を以て入道の初めは欲を道本と爲す、其の極位に至りては法愛も須らく忘るべし』とあり。大智度論には『善法の恩を知るが故に常に諸〻の善法を集めんと欲す、故に欲滅すること無し、諸〻の善法を集修して心に厭足なし、故に欲滅すること無し』と仰せられて一の事緣を引かれてある。

福德を樂欲して厭足することなし

卽ち、一の盲目の比丘があつて、御袈裟を縫うて居りしが、絲が針より脱けて之を透すことが出來ぬ。そこで人々に向て『誰人なり福德を爲さんと欲する者あらば、我が爲めに鍼に袵せよ』と申しける時、釋尊は直ちに其の前に現はれたまひて、『我は是れ福德を樂欲して厭足なきの人なるぞ、速かに汝が鍼を持ち來れ』と仰せられた。盲比丘は是れ佛なることを知り『佛樣は無量の功德海、皆な其の邊底を盡したまへり、云何ぞ厭足なしと仰せたまふぞ』と申上げしに、釋尊は『我は本より欲心を以て善を修めて厭足なし、故に成佛することを得たり、是故に今猶息まず、更に功德の得べき無しと雖も我が欲心は亦遂に休せず』と

仰せられたとある。萬德圓滿なる大聖が、一の盲比丘の爲めに御袈裟を縫ふ針に絲を透して遣はされ、自ら之を御喜びになる。實に麗はしくも亦有り難き因緣である。

吾々も亦是の如く益々善法欲を起し、君の爲め、親の爲め、家族の爲め、同胞の爲め、更に進んで世界人類の爲めに盡さねばなりませぬ。さうして其の身を修め其の家を齊へ、其の國を治め、其の天下を平らかにす、是れこそ眞に花の御淨土である。

釋尊の此の世に出現したまふ、但だ吾々をして心の華を開發せしめ、吾々の國土をして花の淨土たらしめんとの御誓願である。吾々の眞生命は時間、空間を超越して居るから、現在成佛といふも、未來成佛といふも決して異なつた敎へでは無い。華嚴經には『衆生心淨きが故に淸淨刹を見ることを得る』と仰せられた。此の一念心頭に於て佛心を感得し、佛淨土を實現することが大切である。

釋尊は百花珠を聯ねたる藍毘尼の御園、中なる無憂と名くる樹の下に於ての御誕生、實に花の淨土を目の前に展開せられたのである。吾々は、宜く心の華に佛の御惠みを含み、花の淨土を家庭社會の上に現成せしめ、その日常の行持が七種淸淨の華ともなりなば、釋尊の御法身は今日今時の上に降誕し莊嚴されるのであります。

禪と武士道

日本魂

日露戰役に於て、我が帝國の武力は、殆ど全世界をして驚きの目を欹たしめた。日本は何に依りて斯くまで大捷を博したかは、一大疑問として列強專門家の研究する所となつた。

其の際、英國の或新聞紙に現はれた評論家の評論が頗る奇拔であつた。その說は『日本が露國に對し、物質的勢力に於て、甚しき相違ありと認められざるに、斯くも連戰連捷の好成績を擧げたのは、全く國民の熱烈なる信念の力である。聞く、日本には國民固有の宗教としてサムライ宗なるものあり、君臣共に此の宗教の信者である。其の本尊は皇祖皇宗及び現大元帥陛下である。その經典は軍人の御勅諭と教育の御勅語である。本來、經典の無い宗教であつたが、明治の御代になりてから經典が出來たのである。その信條は極めて單純なもので、安心の歸着は「お腹が空ても飢じふ無い」といふに在る。併し此の信念は非常に猛烈なるものであつて、之れが爲めに支那も露國も皆な敗れたのである』といふ批評であつた。模

象の見の如くなるも、當らずと雖も遠からずで、此の評論中にも日本魂の眞價の偉大なるを認得して居る樣に思ふ。

日露の役に豫定の退却を以て有名なりしクロパトキン將軍は立派な武將であるそうな。後に感想錄を書いて、その中に『日露の戰ひは、兩國の實力を比較するに、何れの點から見ても、あの樣な大失敗を招かうとは思はれなんだ。而して實に見苦しき敗北を取りしは、日本には軍艦よりも大砲よりも强大なる武器がある、それを計算に加へなんだのが失敗の大原因である。軍艦よりも鐵砲よりも恐ろしき武器とは、卽ち大和魂である』といふ意味を書いてある。

獨逸のシーボルトも『日本人は、行住坐臥、國家といふことを忘れぬ、旅行をする時にすら日の丸の國旗の形にした握飯を懷中して歩いて居る』というた。成程、妙な處に着眼したものです。握飯は眞白で中に梅干を入れて置くから全で國旗型であるとも見られる。その國旗を懷中するのみならず、それを腹の中に入れて、國旗を以て血や肉を製して居るから確かなものだ。要するに、日本魂とは盡忠報國を以て吾人の最大目的となし、一生涯の間に現はれる千態萬狀の行動も、畢竟、陛下の御爲め國家の爲めといふに歸するのである。

『民安く國おさまれと祈るかな人の爲よりわが君のため』『君のため世のため何かおしからん捨てゝ甲斐ある命なりせば』かういふ觀念は、所謂國家的信念と稱すべきものであつて、國民全體に此の精神が備はつ

て居る。よし平生に於ては格別此の精神の認むべきものが無いにもせよ、一旦緩急ある場合は勃然として此の精神の威力が國民の上に現はれて來る。殊に劍を執り死を決して戰鬪に臨む軍人の上には、著しく此の精神力が發揮せられる。是を武士道と稱するのである。國民の上に武士といふ一階級のありし時代は言はずもがな、現に軍人諸君及び軍人分會員諸君の如きは、此の武士道の權化として、各々其の本分を盡して居らるゝのであらうと思ふ。

禪の特長

此の武士道と吾が禪とは、鎌倉時代よりして常に離るべからざる關係を有し、我が武士道は禪に依りて養はれ、更に幾段の發達を見るに至つたのである。源の賴家の榮西禪師に於ける、北條時賴の道元禪師、普寧禪師等に於ける、北條時宗の祖元禪師に於ける、楠公の楚俊禪師に於ける、藤原藤房の關山禪師に於ける、菊池武重の大智禪師に於ける、何れも禪に依りて武士道を鍛練せられて居る。

抑も、禪なるものは佛法の總府とも稱し、佛心を體得するの法門であるから、決して、向上の機にのみ通じて、向下の機には通ぜぬといふ樣な不完全なものでは無いが、武士道的訓練を施すに當りて、最も適切と信ぜられたのは禪であつたものと見える。その理由はと申せば、禪は單刀直入的の法である。佛敎には八萬四千の法門ありて、大乘・小乘、權敎・實敎、無量の法網を敷てあるが、禪は其等の枝葉に拘泥せ

ず、驀直に佛心を活捉することを敎へて居る。又、禪は死生を度外にして、死生の間に立て不老不死の別天地に濶歩することを敎へて居る。又、禪は洒脱の境界を信得して毫も俗事に屈托せぬ。又、禪は一事一物の上に全力を傾注して觸處々々に大安心を決定することを敎へて居る。此等の特長が武士道訓練に的中した爲めに、禪を以て武士道を鍊磨するやうになつたのである。軍人の御勅諭には忠節・禮儀・武勇・信義・質素の五德を擧げて御示し下されてあるが、禪の修養が、忠節と武勇の訓練に適切であるのみならず、禪は一面には非常に禮儀を確守し、信義を重んじ、且つ質素の家風を慫慂して居るのであるから、益益以て禪道に歸仰するに至つたものと思はれる。

以上の諸說を綜合して、若干の事例を擧げて見れば、曹洞宗の道元禪師は北條時賴公を度して、敎ふるに尊皇護國の道を以つてせられた。其の結果、大政奉還をさへ勸められたといふことである。又、時宗公の師となられた祖元禪師は宋末の人であつたが、嘗て元兵が師の居處に亂入し、其の首領が白刄を揮つて師の首に擬した時、師は從容自若として「乾坤無レ地レ卓ニ孤笻一。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬ニ春風一。」の一偈を唱へた。元兵も此の非凡の傑僧なるに感じて、悔謝して去つたとある。山岡鐵舟居士は此の偈を愛誦して、劍術の道場を春風軒と稱せられた。後に時宗公は師を迎へて鎌倉の建長寺に住せしめ、更に圓覺寺を創し開山とした。

弘安四年、元の忽必烈が十萬の大兵を率ゐ來りて筑紫を侵したときに、よくこれを鏖殺することを得た

のは、時宗公修禪の力に待つものが甚だ多い。大楠公がまた七生報國の誓を立てゝ名譽の戰死を遂げられたのも、明極楚俊禪師の提撕によるものが多いのである。

禮儀と武勇

禪は是の如く大解脱の靈機を撥轉すると同時に、一面には非常に禮儀を重んじて居る。即ち、威あつて猛からず、儀あつて則るべし。天地に秩序あり、萬物皆な其の位に住し、曾て他を侵さず、曾て他を輕んぜず。山高しと雖も些子の慢氣なく、水深しと雖も毫末の卑屈なし、秩序井然として一絲亂れず、禪は此の天地の禮節を體現するを目的とするが故に、進退動作、整齊にして紊るゝこと無し、歐陽修は禪刹を訪うて『三代の禮樂此の中に存す』というたほどである。

軍人も亦禮儀を重んずること最も嚴格であるから、禪風を景慕するは自然の勢であります。又、武勇は軍人の生命であるが、血氣にはやり、粗暴の振舞は最も禁ずる所、つまり大勇・沈勇を貴ぶのである。故に、平時に在りては溫和を第一として愛敬を旨とし、一旦、劍を執つて進む時は水火をも猶ほ且つ辭せぬ。禪も亦平生に於ては和顏愛語の德を守り、一朝、法を守つて進むに當りては、自己を放下して驀直に向前するのである。一棒一喝の惡辣手段も皆な禪機を鍛錬するの方便である。『寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦みもなし』此の三昧力より發する勇氣であるから金剛よりも强烈である。

眞の大勇は腹の底に銀山鐵壁の如き正氣を養ふより發するものである。此の浩然の大正氣こそ其の人格に絶大の威德を加へるに依りて、令せずして行はれ、言はずして人服し、身を動かさずして鬼神も恐れを爲すものである。昔、鼠小僧といへる賊が、毛利大膳太夫の奥方の室に忍び入りしに、奥方は燈下に書を繙て居た。賊の來るのを見るも更に驚く樣子もなく、『汝は何者ぞ』『今時分忍び入る者は、言はずと知れた盜賊だ』『そうか、賊か、然らば之を與ふべければ、速かに去れ』とて聊かの金を與へられた。鼠小僧は何となく沈着なる奥方の氣に呑まれて、思はず腰を屈め『へー有り難ふございます』といひつゝ障子を締めて行かんとするを、奥方は呼び留めて『これ〳〵、もつと正しく障子を締めて行け』と言はれた時、恐ろしくなりて冷汗を流し、靜かに障子を締め直して、ブル〳〵しながら逃げ去つたが、後に捕縛されし時、此の事を話し『あの時の樣な恐ろしき事は無かつた』と役人に申したそうである。

又、昔、龜山法皇が龍山の離宮に在せし時、御殿の中に種々の妖怪事があつたので、南都の榮尊阿闍梨に勅して修法せしめられた。阿闍梨は力を盡して法を修したが更に効なし。依つて更に東福寺の無關禪師に命ぜられた。禪師は二十人の禪僧を率ゐて宮中に於て攝心し、唯だ坐禪するのみでありしが、妖怪は忽ちに終熄した。法皇、叡感斜めならず、離宮を革めて禪刹と爲し、師を開山とせられた。今の南禪寺がそれである。是れ皆な大勇の威德と申さねばならぬ。

次に、信義の德は法を守ること至誠なるを本とす。ごまかし根性や野心妄想があつては信義の德は崩れる佛教は信を本となす。信は自ら昧ますなきに始まる。故に自己の心地が益々玲瓏皎潔となつて、終には佛光明をも放つに至るのである。禪の修行は卽心是佛である。自己心上に佛心を體現し佛德を莊嚴することが至要である。南北朝時代に、兩朝の御和睦に骨を折れた薩摩の僧石屋眞梁禪師といふがある。此の人が周防邊に於て一人の若者と路連れになり、遂にその者の家に泊ることとなつた。然るに彼の若者は盜賊であつたので、深夜に禪師の寢室に潛かに入つて來た。禪師は坐禪して居たので、直ちに『誰れぢや』といはれた。彼は此の一語を聞くや、何となく恐ろしき樣な心地して、覺えずそこに坐りて白狀した。禪師は驚く色なく、『汝は盜賊にありしか、されど汝が如き草賊は、どうで碌な寶を取ることを知るまい、愚かなる者よ、若し寶を得んと欲せば、何ぞ終身受用不盡底の物を取らざる』と言はれた。そこで彼は『その樣な寶はどこにありますか、是非敎へて戴きたい』と願ふと、禪師ヅカ〱と進まれて、直ちに彼の胸倉を摑み、『這裡に在り』ソレ其の寶は此處に在るでは無いかといはれた。彼は、是に於て思はず悔悟の念を生じ、禪師の德に歸し、遂に其の弟子となつて、後には立派な人になつた。吾々御互も亦此の心中の寶を探り出して卽心是佛の光明を放たねばならぬ。

次に、禪僧は古より質素の生活に於ては殆ど無類である。今日と雖も、雲水生活は全く質素の標本である。彼の澤菴禪師は、徳川三代將軍が品川に東海寺といへる大刹を創立して、開山に請された程の高僧であるが、寺領を謝絶して市中に托鉢し、町の裏手の塵芥捨場に、大根や人參などの食べられる處をも疎相に切り捨てゝあるのを見て、勿體なしとて弟子共に拾はせ、大根の切り屑の固くなつた奴を桶に入れ、鹽を撒き重石を載せ、漬物として食べられたのが今の澤菴漬の起原である。（今でも東海寺には澤菴藏があつて〆繩を張て居る。尤も澤菴漬とは言はず百本漬と稱して居る。）人參や午蒡は好く淨め、油で煮て味噌汁に作りて召し上つたのが建長汁だと申して居る。釋尊ですら乞を以て食とし、日中一食、凡て他の施しを受けて品の好惡を選ばず、故に『比丘の口竈の如し』といふた程である。而して如何なる不味い物でも皆な尊重の念、恭敬の心を以て其の供養を受くるのが佛子の洪範であります。

健全なる信仰

軍人御勅諭には五ヶ條の標準を御示し下されて、最後に誠の一字を以て御結び遊ばされた。卽ち、開けば五ケ條、合すれば誠である。誠は天地の公道、國民の常道に契合したる正直玲瓏なる心的狀態をいふので、換言すれば一大信念であります。釋尊は三種の實を示された。卽ち、『自身を誑かさず、衆生を誑かさ

ず、諸佛を誑かさず』、之を三種の實といふ。言ひ換れば、己れを欺かず、人を欺かず、天を欺かざることである。是れ實に健全なる信念であります。

山岡鐵舟居士が取つ置きの御話しに、駿河國に顋長の長四郎といふ者があつた。顋の長い男であつたから顋長といふ異名がついた。此の長四郎は初め盗賊を業とし、多勢の子分をも有して居た。或時、江戸表の大山の役僧らしき和尚が、大分懷中に金がありそうであつたから、途中で心易くなり、終に道連となつて一旅館に宿した。此の旅館で胴卷を取る積りであつた。夜半に至り、ソツと和尚の座敷の障子を明けて見ると、蒲團の上には和尚の姿が見えずして一株の柏の樹が生て居る。不思議に思うてマゴ〳〵して居ると彼の柏の樹がチラリと動いたかと思ふと忽ち和尚の姿と變じ、長四郎を見て、『イヤ來たかサア入れ』、長四郎は餘りの事に驚きて、此の和尚は化物か左なくば幻術使ひであらうと思ひ、その儘に休み、翌日、途中人通りの無い處で、自分の素性をも打明し、和尚の幻術の事を聞き、『私もその術を覺えたいものである。柏の樹に化ることが出來ればドンな處へも忍び込み、若し見付けられたら庭に飛下りて柏の樹になつて居れば大丈夫だ、願くは其の術を敎へて戴きたい」和尚は快く承諾して、『此の術を習ふには坐禪をせねばならぬ、昔、趙州禪師といふ御方に、一僧が「如何なるか是れ祖師西來意」と問うた、祖師とは達磨大師のこと、大師が西の天竺より支那に來りて禪法を傳へられたが其のお悟りは如何なるものかとの尋ねぢや、すると禪師は「庭前の柏樹子」庭の前の柏樹と答へられた、柏樹が何故に達磨のお悟りであらう。坐禪し

て此の理を工夫すれば柏樹に化る樣になる、汝は、兎に角、三年程坐禪して見るが宜い、キッと化方が覺えられるであらうぞ」と敎へられた。長四郎は何が何やら少しも解らぬが、化けて見たい許りに家へ返つて每夜坐禪をしたが一向に化けられる樣子が無い。されど精神の靜まるに從ひ、今迄の貪婪飽く無き賊心が恥しくなり、いつの間にか本心の善に返り、漸々に純良なる精神となつたのである。そこで子分共を集めて懇に說諭を加へ、自分の所持金を分與して正業に就かしめ、已れは罪滅ぼしの爲めにとて、專ら慈善、救濟の方面に全力を盡したのである。彼が死するに臨み『吾は未だ罪滅ぼしを爲し了る程の善行を積まぬに依て、今一度は此の娑婆に生れて慈善事業を努めたい、それには念佛を唱へて御淨土へ導かれてはならぬから、一同はどうか念佛の代りに顒長の長四郎といふことを唱へて貰ひたい』とて、一同に『顒長の長四郎』を何百返となく唱へしめ、自分も之を唱へつゝ笑を帶びて終りを遂げたそうである。是も一種の信仰である。此の信仰に依りて眞心が現はれたのである。

斯く申せばとて客觀的信念を排するのでは無い。禪門に於ける信仰は、客觀的佛陀の大德大用を吾々本具の鏡に映して、佛と吾と平等一枚になることを期するのである。故に劍を執りて陣に向ふも、銃を提げて務めに服するのも、皆な佛作佛行となつて來るのである。而して此の武士道的大精神が日常生活の上にも實現せらるゝが故に、起居動靜の上にも殺活自由の靈機を撥轉することが出來るのである。されば禪的武士道なるものは、正しく人類の大道、國民の大義を全うすべき修養上最も崇高なる標本であります。

百尺竿頭進一歩

人生の價値

高祖承陽大師の垂語に『百尺竿頭一進一退』といふことがある。

百尺竿頭とは、最高最善の境致を指したので、禪の上からいへば、一切の妄想、執着を截斷して、大無我三昧に安住したことである。が然し、古人も『百尺竿頭に一歩を進めて、十方世界に全身を現ず』といつてゐる。大無我の境致よりして、更に進んで順逆縱横の靈機を撥轉することを道破したのである。

人間といふ者は、吾我・名利の爲めに支配せられて、本心の純潔さを瀆され易いものである。古歌にも『心から邪しまに降る雨はあらじ風こそ夜の窓は打つらめ』と詠まれてある。

人間が本來具有する心性は、佛性とも良心とも稱して、神にも佛にも聖賢君子にも讓らぬものであるが、吾我・名利の風の吹き廻しで、種々の罪惡をも造り、樣々なる邪業をも演ずるのである。この吾我・名利の妄念を遠離して、本心の光輝を發揚するのが、向上の行持である。この行持ある人を『百尺竿頭の那人』

ともいふ。

彼の佛國禪師が

『道人日用の事、白日靑天の如く、脫體現成、遍界藏さず。全佛法是れ世法、全世法是れ佛法、八面玲瓏絲毫障礙の處なし、若し能く是の如くならば、塵勞の中に在りと雖ども、塵勞に染汚せられず、福貴の中に在りと雖ども、福貴に羅籠せられず、蓮華の水に著せざるが如し』

といはれたのは、百尺竿頭の消息である。

佛國禪師は、後嵯峨天皇の皇子にして、禪門に投じ、法を圓覺寺祖元禪師に嗣ぎ、其の門下より天龍寺開山夢窓國師を出された。

修養方面からいへば、百尺竿頭とは、道を守ること堅固に、德を修むること純眞にして、貧富の爲めに其の志を變ぜず、得失の爲めに其の心を動ぜざることである。是の如き境致を得た人こそ、人格の崇高なる紳士・淑女とも稱すべきものであらう。

予は曾て尾崎行雄氏の紳士論を聞いた事がある。其の說に、『日本の紳士は不品行の手本を布き、英國の紳士は社會人の不品行を矯正するの利器となる。日本にては官府に媚びて、御用を承はり、不當の拜借拂下を願ぶが如き卑劣なる言行を敢てする。日本にては金さへ儲ければ忽ち紳士となることができる。英國の如きは卑劣の言行は大禁物で、一たび之を犯せば、世人は直ちに紳士たるの名稱を剝奪す。即ち紳士

の資質は財產に在らずして言行に在り、外形の事物に在らずして其の心志に在る。其の心志、篤厚純正にして、其の言行、また溫雅善良なれば、茅屋に在るも猶ほ紳士と稱することができる。それとは反對に、また、權勢赫灼たる大貴族にして、素行正しからざるがために、人から紳士と稱せられないものがある。『彼は當國第一流の豪族ではあるが、紳士では無い』といふ批評を聞くことがある。要するに英國にては、國家の爲めに一身の利害を忘れ、勇にして暴ならず、溫雅にして柔弱ならざるを、紳士の本領となすのである。然るに我國には、幇間紳士あり、諂諛紳士・花柳紳士・叩頭紳士・折膝紳士・受賄紳士等々あるは甚だ嘆かはしいことである』といふことを尾崎氏は論ぜられたのであつた。

先般、英國より歸朝せる某學士の談に、『倫敦市民は如何にも、紳士的態度を存してゐるけれども、市內の有名なる某公園に至つては、隨分、醜猥なる風儀を見ることも少くない。一寸失敬して一ケ處コツソリと其の實況を撮影して來ました』といふことであつた。併し學士は附け加へていつた。『一般市民の樣子を見ると、彼の公園を通行しながらも、猥褻なる光景などを演ずる者があると、殆ど十人が十人とも、それを見ぬやうに顏をそむけて通行して居る。これを見て『さすがに倫敦である』と感服しました。我が東京などは之に反して、醜劣な情景ほど多人數が環視して、而も之に彌次馬を飛ばす樣であります』と。

だから國民の品位を優良ならしめんと欲せば、日本の社會的品位を向上せしめねばならぬ。社會的品位を向上せしめんには、人生の價値を定むるに、道德を基準とするやうに致さねばならぬ。從つて道德的自

尊心を養ふことが必要である。

横濱の諸星千代吉氏が、一昨年、歐米を一周して歸朝せられし時のお話に、氏が倫敦に往かれし時、停車場より乘合自動車に乘りて豫定のホテルに着いたところ、大切なる手提袋を車內に置き忘れたことに氣が附いた。驚いて旅館のボーイに其の事を話すと、『實際、自動車內にお忘れなすつたものならば御心配あそばすな、倫敦には泥棒は居りません、警察へ屆出てゐるでせう』といはれたには、二度喫驚されたさうです。それから、其のボーイに案內せられて警察に行つてみると、既に手提袋は同署に屆出てあつたさうです。

そこで、諸星氏は感心して『我が横濱市の如き、斯る事のありし際に、「横濱市には泥棒は居りません」といふやうな大膽な挨拶は出來かねる、何卒、今後、社會道德の向上を圖りて、倫敦に劣らぬやうになりたいもの』と言はれたので、予も同感に堪へなかつた。

道德にせよ、宗教にせよ、特種の人の所有では無く、人類全體の生活の基本になるべきものであるから、科學の發達と共に、精神的には、道德的觀念と宗教的信念とが、影の形に從ふが如く、生活の土臺となつて行かねばならぬ。そこに人生の價値が見出されるのである。

眞の自由

元來、此の世の中には自由といふものは、容易に得られる譯は無い。よしや比較的自由の身であらうとも、之を幸福なりとして、甘んじて居ては、結局、不自由の結果を招かねばならぬ事となる。

釋尊御在世の時、生聞梵志なる者が、釋尊に對して『在家出家は、何を以て苦と爲し、また樂となすや』と問ひしに、釋尊は『在家の者は不自在を以て苦と爲し、自在を以て樂となす、出家人は自在を以て苦と爲し、不自在を以て樂と爲す』と示されたことがある。

こゝで在家といふは修養に志なき者、出家とは修養に志ある者と見るが宜い。人格的修養に志なき者は、錢寳・穀畜・奴婢等に於て、意の如く自由なるを、幸福と感じ樂みとなすが、修養に志ある者は、却て反對に、不滿足を以て滿足となすものである。

彼の修養上必要なる忍耐とか、勤勉とか、儉約とか、制欲とか、規律を守るとか、約束を履むとかいふことは、何れも自由放縱とは相反するものである。けれども、眞の大自由、大自在なるものはその中から生れて來る。故に吾々は、常に自由は不自由の種にして、不自由こそ寧ろ眞の自由の基なる事を忘れてはならぬ。眞の自由といふことは、道德の世界と、宗敎の世界とのみに於て、求め得られる。

道德の世界は、如何なる人をも包容して、漏らすことは無い。山村水郭に在りても、賤が伏屋の中に在りても、窮屈極まる勤勞の身に在りても、忠孝の誠、正直の道、慈愛の德の如きは、完全に體現し得られるではないか。

『よきに似てあしきに似る、なべて世の人の心は自在鍵なり』
『道といふ言葉に迷ふこと勿れ、朝夕己がなしわざと知れ』
手の舞足の踏む所に、道徳の世界がある。道は開展せられてゐる。

又、宗教の世界も同樣で、拔提尊者は、夜半、墳墓の間に坐しながら、甚樂々々と叫ばれた。韋提希夫人は、監禁の身にて在りながら、西方極樂の世界を眺め、彌陀の大慈光に浴してゐる。信仰心だに堅固なれば、苦境に在り、逆運に處する時、猶一段と佛陀の慈悲を感得することが深くなる。是を禪門では、唯心の淨土というてゐる。

吾々は、斯く解放せられてある道徳の世界、宗教の天地に逍遙して、自由無礙の境致を占め得れば、人格も自づと高尚になり、日常の生活にも、價値づけられる事となるのである。道徳的行爲と宗教的誠信のみは、人生をして恒久たらしめる。光明赫々たる樂土を現ずるものは、たゞこれ道徳的の行爲と宗教的の誠信である。現世に於ても、善業に富み徳行に長じたる者は、無形の榮譽をも負ひ無限の幸福をも感ずるのである。

一休和尚が、或る女性に示されたる假名法語にも、『慈悲は福徳の家に生れ、慳貪は貧苦の身に生まる、柔和忍辱の心は姿を好く生れ、禮拜は高位高家に生る、殺生をしたる者は短命に生る、是の如く何れも皆因緣により果報を得たる人、此の理を知りて、現世にも惡行を造らずば、必ず善果を得べし』とある。此等

は能々翫味すれば、平凡の中にも、貴とき教訓の存することが知れる。故に、吾々は、私慾妄情より判斷したる幸福や名利を超越し、理想的人格の最向上の標準として、眞の自由を獲得したきものである。是れが、百尺竿頭一進一退の境涯とも稱せられるのである。

默山和尚の操行

默山和尚は、武州北葛飾郡大輪迦葉院の開山である、生國は東北地方で、青年の頃、江戸に上り、駒込吉祥寺内、旃檀學寮に入つて修學してゐた。

親切なる友人があつて『貴僧は學問に親むよりも實地に參禪すべき性格である、今や下總關宿在山王の東昌寺に、卍山禪師の御弟子隱之禪師ありて、盛んに禪を擧揚せられてゐる、往て參ぜられよ、必ずや得る所あらん』と忠告してくれた。默山和尚は喜んでこの忠告を受け、早速、隱之の門に趨り、六年間程、嚴格なる接得の下に、晝夜無間斷に修行して大悟し、遂に傳法を許された。

そこで、一旦は笈を負うて出て、東海道方面の各名刹を訪ひしが、幾も無く歸山して、師僧の下にて悟後の修行を勵んだ。隱之は其の道念綿密なるを嘉し、命ずるに典座の職を以てした。――典座といふ職は六知事（禪寺の役僚）の一にして、衆僧の食事を辨ずることを掌る重任である。

穀財に乏しき禪院にして、數十人の衆僧の食事を辨ずることは容易ならざる役であるが、默山和尚は非

常なる精進力を以て職務に當つて居つた。三四ヶ月を經ると、誰いふとなく『典座和尚は狡猾である、自分丈け內所の御馳走を製へて食して居る』といふ噂が立つて、食物には極端に儉素なる僧院のことで、その噂は中々高くなり、遂に隱之禪師の耳にまで觸れた。

禪師は甚だ怪み、『默山に限りては、そんな我儘をする者とは思はれぬが、食物が自由になる所から、或は橫着な量見を起したのかも知れぬ、いざ十分にその實地を點檢せん』と、或る朝、風邪の氣味だといつて出堂せず、隨侍の者を殘らず僧堂に赴かしめ、こつそりと起て衣を被し、手には警策を持ち、拔足して典座の寮舍に至り、微しく障子を開て室內を眺めると、爐中には焚落しの火に小鍋がかゝつて烟を吐て居り、その傍に默山は端然として坐禪してゐる。禪師は怪みつゝ闥を排して進み入り、默山の面前に立たれた。

默山は、徐に眼を開いて禪師を見、低頭默禮して『今朝は御風邪と承はる、御氣分は如何でございます』、禪師『いや惡寒を感じて堪え難い、大分暖い物が出來て居る樣ぢや、少々振まふてくれよ』、『是れは禪師には御食り遊ばすことは出來ますまい、何なりと作りて進ぜませう』、『いや是非此の鍋の中を貰ひたい』、『然らば試みに少々差上げて見ませう』と、小皿を持ち來り、鍋の蓋を取り、少しく之を盛つて呈した。禪師は小皿を手にするなり、グッと一口含んだが、呑吐不下で、呑みこむことも吐き出すことも出來ぬほど、何とも言はれぬ不味さであつた。

そこで、禪師は『默山是れは何んぢや、何人の食するものぢや』と尋ねられた。默山はハラ〳〵と涙を流し『道業未熟なる私が、三寶供養の食を調辨する典座の任に充てられしは、實に願うて無き幸福で、永劫不滅の勝緣と感じますが、職務上、聊かにても怠慢の念が生じてはならず、一微物と雖も之を疎略にしては相濟まず、一番、身心を策勵し、職分の神聖を瀆さざらん事を期し、就任の其の日より、流し場の落ち口に、木綿の大袋を裝置して、一日中、流れ落ちる一切の物を袋に受け、毎夜、大衆就寢の後に之を開き、木の枝や菜料の腐蝕した物なぞを取除き、殘りし物は大根、人參の切り屑、米麥粥饘の滓澱まで、皆な此を鍋に收め、昨日の殘類・殘飯を加へ、之に生鹽を混じ、毎曉、煮沸して是を一日の食料として、頂戴致します。初めの內は、食し得ざるほど無味でありましたが、只今では甘露の如く甘しく戴かれます。且つ、此の食を攝りましてからは、身體益々剛健にして、一日勞働するとも疲勞を感ぜず、日々夜々、愉快に辨道をしてをります。是れといふも佛祖の御加護と、御師匠樣の餘光とであると思へば、此の鍋に向ふ毎に、感謝の涙に咽びます』と答へられた。禪師は之を聞いて涙を浮べられ、其の足にて直ちに僧堂に赴き是を一場の話柄として、大衆を接得いたされた。

〻默山和尚は是の如き道人でありし爲め、雲水の身にて在りながら、既に多數の隨徒をも有せられた。或時、大衆を率ひて托鉢を修し、今の迦葉院の所在地に來たところ、日沒になつたので、民家に宿を求めようとしたが、有緣の信者も無かつたので、宿をして來れる家も無かつた。そこで山林中に一夜を過すことと

なつたが、その地は、可なり小高い砂山で、鬱蒼として幾百千株の松が茂つてゐる。暁天、林中の打坐はまた格別、その内に民家より舉がりし炊烟は松樹の間を縫ふが如くに靉びき、其の景色言はん方も無く麗しかつたので、和尚は大衆を顧みて『さても清潔幽寂なる境地よ、此處に伽藍を建立せば、如何に、辨道に適するならん』と言はれた、大衆はこれによつて大に心動き、總勸發を以て、附近の信徒に謀り、一寺を創立すべしと、衆議一決した。和尚、大に喜びて、然らば余が貯藏せる涅槃金を提供せんとて、行李を開いて二分の財を出された。

大衆は顏を見合せて、一伽藍を建立するに僅か二分ばかりの本錢では、有るも無きも同じこと、此の金は、どうぞ行李の中に收められたいと申せしに、和尚は機嫌を損じ、昔、釋尊は衆と共に行くみぎり、地を指して『此の處、宜しく梵刹を建つべし』と仰せられた、帝釋天は早速一莖草を把りて地上に揷み『梵刹を建つること既に畢れり』と申した。釋尊は微笑せられた。釋尊の大德は一莖草を得て梵刹を建立せられた。余は薄福少德にして、釋尊に比すれば、日下の孤燈よりも劣つてゐる、故に、自己の全財產を投じて伽藍を開創せんとす。徒らに價格の輕重を論ずるは是れ俗見である。俗見を以て梵刹を建てんとするは其の淨域を汚すものであるぞと可責いたされた。

大衆は飜然、志を決し、それより附近の士女を勸導して、遂に堂々たる一宇を開創したのが、是が今の鷄足山迦葉院である。私は埼玉縣に任せし折、屢々當院に應請し、且つ開山忌にも拈香したことがあ

つた。開山の遺品たる袈裟・念珠・寶石等もあるが、最も異なつた什寶としては一足の襪子（坊さんの足袋）がある。默山和尚は、一生涯一襪子であつたといふ。されば爪の當る處などは、幾度も〳〵布片を充て〳〵繼いであるので、襪子中に厚い處もあり、薄い處もあり、一重の處もあり三重五重の處もありて、まるでごろごろになつてゐるが、私は開山遺傳物中第一の至寶であるというたことがある。

默山和尚の如きは、百尺竿頭に腰を据ゑず、進んでは度生の機を轉じ、退ては修養の力を鼓し、自ら不自由を求め、而もその不自由の中に、自由の天地を創造せられたものである。

眞實の意味に於ける自由は、最高の理想であるから、これを擁護すべきは勿論であるが、自己の修養として常に不自由を樂しむの心懸を存し、不自由の中に大自由の天地を、道德的宗教的に、展開すべき工夫を怠つてはならぬ。

善法欲

華嚴經の金文

人は其の天性として必ず一つの欲求を有して居る。而して此の欲求こそ人間活動の源泉である。若し人にして何等の欲求が無かつたら、枯木死灰と擇ぶ所がない、獨り人間のみならず一切の動物は皆一種の欲求的情意を有して居る。更に一歩を進めて大觀し來れば、森羅萬象も亦其の天性として欲求的活力を有せざるはない。唯動物の有する欲求には理想も無く目的も無い。從つて變化もなく發達の力も微弱である。人間は之に反して、善惡是非の別こそあれ、必ず其れ相當の目的を有し、しかも變化に富み發達の無限なる力を有して居る。人の萬物の靈長たる所以も亦た全く玆に在るのである。但し變化に富み發達力を具へて居るだけ、それだけ充分の教導と制裁とを加ふるの必要がある。然らざれば其の本性の活力が、却て種々の衝突を來たして、世を害し、他を毒するに至るものである。彼の五祖法演禪師が

衲子、心城を守り戒律を奉じ、日夜、之を思ひ朝夕之を行ひ、行ひは思ひを越ること無く、思ひは行

ひを越ることなく、其の始めありて而して其の終りを成す。猶ほ耕やす者の畔あるがごとくんば、其の過ち鮮なし。

と云はれし如く、制裁も規繩も無き欲望ほど危險なるものは無い。佛敎に於て、少欲といひ、禁欲といひ、知足といひ、遠離といふも、皆是れ五祖禪師の謂はる﹅『耕者の畔』を與ふるものにして、其の之を制するは、寧ろ善良に之を發達せしむる所以なることを忘れてはならぬ。故に華嚴經には

善法欲を斷ずるは、是れ菩薩の魔事なり。

と仰せられてある。菩薩とは眞正なる佛弟子の稱號である。換言すれば健全なる佛敎信者の名稱とも見るべきである。信者というても出家、在家に通じて居ることは言ふ迄も無い。魔とは害とも譯して事業を障礙するの謂である。佛敎を信仰し、且つ之を實踐躬行する上に於ける第一の障礙物は、善法欲に乏しきことである。如何に天才に富み識量に裕かなりとも、若し此の堅牢なる善法欲なかりせば、決して佛敎の功德を實現することは出來ぬ。

或所に俄か分限があつた。其の友人が相集りて君は非常に金儲けをしたさうな、就ては、御祝ひとして吾々に御馳走をせぬかと云ふと、彼は外ならぬ親しき友達なれば、御馳走もしたいけれど、一つ無い物があつて、それがならぬというた。そこで友人等は新世帶のことなれば、無い物のあるのは尤もじやが、全體何が無いのじや、席が無いのか、道具が揃はぬのか、但しは料理人が無いのか、料理の材料が無いのか

といふと、イヤそれらの物は皆整つて居る。然らば何が無いのだ、實は御馳走をする氣が無いから困るのじやと申したさうである。金力もあり材料もあり實務者もありて、一切萬事が完備して居ても、精神にその氣がなければ、何等の作用をも現はすことが出來ぬ。

古聖先賢の善法欲

今より五十餘年前に遷化せられた、越後國、松の山出身の大訥愚禪和尚は、當時有數の高僧であつた。駒込の吉祥寺にも住職せられ、故法雲普蓋禪師も御隨身の一人であらせられた。和尚の感化力の偉大なりしことは、越後の頸城邊に至れば、今猶ほ明かに認めることが出來る。和尚は松の山長命寺に於て、剃髮せられたと申すことであるが、幼少の頃は餘り怜悧の方では無かつたらしい。檀徒の者が長命寺の方丈に至り、和尚さんは近頃は面白き鳥を飼はれしと見え、イツ來ても本堂の方で、サアボ〱と啼て居ると申しければ、和尚は苦笑して、アレは鳥では無い愚禪といふ小僧じや。此の程から大悲呪を教へて居るが、中々覺えられぬと見え、毎日同じ處を復して居るのじやと云うたとか。愚禪和尚は斯る小僧さんでありしが、善法欲の力は、能く參禪學道の功を積み、遂に天下の名僧となられたのである。

佛教に於ける三學も六度もツマリは善法欲の標準である。優婆塞戒經には、菩提を求むるの心得四事を明して曰く

一に善友に親近す。二に心堅うして壞れ難し。三に能く行じ難きを行ず。四に衆生を憐愍す。これらの敎訓は頗る適切なるを覺ゆるのである。善友に親近する時は邪路に走らず、心堅固なれば外境の爲めに束縛せられず、行じ難きを行ずるが故に勇猛の志氣益々其の力を得、衆生を憐愍するが故に、常に道德的生活を爲すことを得る。

洞門近代の高僧、總持獨住第一世旃崖奕堂禪師は、名古屋の御出身であるが、十九歳の時、美濃國關の龍泰寺來應禪師の會下に掛錫せられた。來應禪師は師に對して『參禪辨道の士は須く先づ誓詞を立つべし』といはれた。すると師は、直ちに左の三大誓願を立てられたさうである。

一朝分明に、生死の逆流を踏斷せずんば、卽ち誓て休せず。

十二時中、佛祖不傳の行履にあらざれば、卽ち誓て踐まず。

從劫至劫、違情順境に於て、第二念誓て生ぜず。

爾來六年間、脇を席に着けられなんだとある。予の先師新井如禪老漢も師と與に來應禪師に參隨すること數年であつた。

先師曾て予に語つて、奕堂禪師の志氣の剛邁なるは驚くに堪へたり。來應の會下に在るの時、日中一食の誓願を立てられき。吾も亦相共に此の願を發したるも、一年餘にして遂に之を止めたり。師は遂にその誓願を廢せられなんだというて居られた。

又奕堂禪師は三十四歳の時、三州香積寺に至りて風外禪師に參ぜられ、四十歳の時、雲烟裏に聖胎を長養せんとの誓願を發し、彼の有名なる大悲山山居の志を堅め、之を風外禪師に告げられた。風外禪師は笑つて『山可なり、水可なり、錫を卓するの所、卽ち是れ道場なり』というて、左の一偈を賦せられた。

大悲山裏道。超レ嶺又超レ峯。何日尋ニ芳躅一。雲間得ニ再逢一。

師も亦た之に和して

鳥道伴ニ游龍一。穿レ雲入ニ萬峯一。善財非ニ種草一。何用更相逢。

と賦せられた。師の山居の詩に曰く

不レ厭ニ奇巖嶮一。隨レ流弄ニ轉機一。從他貧徹レ骨。雲贈半肩衣。

師は常に山を下りて大阪なる風外禪師の處に參ずるに、徹夜に歩行し、二十里に近き道を往復せられたさうである。師が山科大宅寺に首先住職せられたのは、四十三歳の時であつたさうな。師の如きは實に善法欲によりて、古人を凌駕する程の精進三昧に入られたものである。是れを鐵漢の志氣を具すともいふべきか。卍山禪師の垂訓に

參學の高士は、專ら鐵漢の志氣を具するを要す。既に此の志氣を具す、名利之を撓ますとも撓まず、愛欲之を柔ぐとも柔らがず、剛然撲然として破綻の處なし。行もまた鐵一團、坐もまた鐵一團、(乃至)盡十方打成鐵一團。

とある。吾人は此の鐵漢の志氣ありてこそ始めて能く善法欲を起し、且つその大理想を實現することが出來るのである。

善法欲と俗情と耽著

然るに世上動もすれば、自分の徒弟を偏愛したり、又は伽藍を貪ぼり求めたりすることを法欲といふ者がある。これらの多くは法欲どころでは無くて、甚しき非法欲である。眞個の善法欲なるものは、專心に善法を欣樂し、大道を願求し、法の爲めには、己れを忘れ、身を忘れ、道の爲めには、名を忘れ利を忘れ、十二時中間斷なく、善法を修め大道を實踐せんことを欲望するの志氣をいふのである。孝子の父母に對するや、唯父母あるを知りて己れあることを忘る。忠臣の君國に對するや、唯君國あるを知りて我れあるを忘る。故に能く一身の勞を辭せず、一命の危きをも顧みず、かくしてこそ眞個の善法欲といふべきである。況や我が佛敎の上から申せば、確然たる信念を發起し、その信念の上に進取の氣象を立て、實行の力を奮ふに非ざれば、善法欲とは稱せられぬ。

大信念の上には、名も無く利も無く、我も無く人も無い。併し、これがやがて眞正に名を成し、福利を享け、己れを度し、人を度する所以の道なることを忘れてはならぬ。

汾陽の眼禪師は曾て七十餘員の善知識に參じて道を究められた。法を行ふに急にして更に觀覽を事とす

る無し。人が其の無風流なるを譏るを聞き、大に歎じて曰く、先徳豈に山水の爲めに行脚せられんやとて益々道業を勵まれた。

長沙の太守張公は師の高徳を慕ひ四箇の名刹を以て請待せられたが、師は之に應ぜず、我は長行粥飯の僧のみ、佛心宗を傳ふるは細事にあらずとて堅く辭退せられた。張公は更に太子院といへる名刹を以て請ぜられたが、猶ほ門を閉ぢて山を下らず。時に石門の聰禪師は之を聞いて、一日闥を排して入り、師を誡めて曰く、『佛法は大事なり。請退は小節なり。汝は大法を荷擔するに力ある者、今是れ何の時節ぞ。而も安臥せんと欲するや』と、師、矍然として起つて曰く、『老兄に非ざれば、此の語を聞かじ、速かに嚴辦せよ、吾れ行かん』とて、乃ち始めて請に赴き、大に法輪を轉ぜられたとある。

これらをこそ眞に能く百尺竿頭に一歩を進めたるものと謂ふべし。身を以て道に投じ、超然として守る所あるに非ざれば、決して佛教的人格を作ることは出來ぬ。然れども若し向上の死漢となりて、濟世利民の作用なくんば、獨善自調の人たるを免れぬ。終日道に志ざし、終日人の爲めにするで無ければ、菩薩の善法欲は成ぜられぬ。古今を對照するに古人は專ら自修に急にして利他を忘るゝの傾きありしが如し。今人は應用を維れ事として、着實なる自修力を有すること稀れなり。故に口に道德を論ずるも、心に道德なく、所謂道德を以て生活の資と爲すものゝ如し。口に宗教を談ずるも、心に宗教なし。卽ち宗教を以て一種の營業となすが如き狀態あるを免れず。是の如くんば是れ善法欲に非ずして擬善法欲なり。賣善法欲

なり。衒善法欲なり。佛道と相距ること白雲萬里である。

その精神を沒却すべからず

故に、吾人は熱心に善法欲を起して、自ら止まることを知らざる程になりたいと思ふ。釋尊の娑婆往來八千返も、彌陀佛の四十八願も、皆な善法欲の大なるものである。思益梵天所問經に、菩薩左の四法を守らざれば、佛種子を相續することは出來ぬとある。

一に本願を退かず、二に言は必らず施行す、三に大欲精進、四に深心に佛道を行ず。

右の四法も、唯だ一善法欲の內容である。佛敎に於て、離欲寂靜を勵むるも、是は寧ろ完全なる善法欲の發起を策勵するの方便である。世を棄つるは世を救ふ所以の道にして、世を厭ふは世を進むる所以の方法たるを忘れてはならぬ。大死一番大活現成といふも此の事である。吾人が眞實修養を爲し遂げんと欲せば、先づ以て大に善法欲を起し、而して之を導くに至聖の慈敎を以てし、之を養ふに堅牢なる信念を以てし、之を制するに佛祖の戒律を以てし、之を勵ますに鐵漢の志を以てせば、希くは佛祖の心身を實現し、且つ古人を驀過するの機用を發揮することも亦た難からざるべし。

達磨大師の禪

支那禪門の開祖

達磨大士は支那禪門の開祖であつて、梁の普通元年に印度より支那に來化し、大通二年十月五日を以て少林寺に於て入滅せられた。大士は、寶誌公が梁の武帝に『觀音の垂迹だ』というたほどの方で、稀世の聖者であつたに相違ない。本月は恰も御祥月であるから大士の偉德及遺訓の一端を述べて、其の聖德を偲び奉りたいと思ふ。

大士は、言ふ迄も無く印度僧で、釋尊正脉二十八代の祖師である。傳記に據れば、大士は刹帝利種族で南印度、香至王の第三子である。

父王は非常なる佛敎の篤信家で、或時、二十七祖般若多羅尊者を請じて、贈るに貴重なる寶珠を以てせられた。王に三子ありて、長を月淨多羅、次を功德多羅、末を菩提多羅と稱した。尊者は受くる所の寶珠を三子に示して『世間能く之に及ぶ物ありや』と尋ねられた。長子・次子は異口同音に、『此の寶珠は、七

寶中の最も尊貴なるもの、尊者の道力に非ざれば之を得ること能はじ、宜しく之を將來に傳へて以て偉德を紀念せられたし』と答へた。然るに、第三子の菩提多羅のみは『此の珠尊しと雖も世寶たるに過ぎぬ、諸寶の中に於ては法寶こそ尊とけれ、此の珠に光りありと雖も世光たるに過ぎぬ、諸光の中に於ては智慧の光こそ尊とけれ』云々といふ答へを致された、尊者も大に感ぜられたが、菩提多羅も亦尊者の德に歸して程なく出家せられた。是が即ち大士である。

大士は尊者に參侍して苦修練行すること四十年の久しきに及び、尊者の滅後、其の遺囑を奉じて六十七年間を印度各地に、盛んに破邪顯正の威德を發揚せられた。師の尊者に事ふること四十年、師の寂後、印度の傳道六十七年といへば、併せて百年餘となる。出家以前の年もあるから、支那へ往かれたのは少なくも百二三十歲餘の老齡であつたらうと思ふ。一百二三十歲になりたる老軀を以て、敢然、大遠征傳道を決行したる豪邁の志氣、熱烈なる信念は實に驚嘆に價する。支那駐錫、約九年にして遷化せられた。或書には一百五十餘歲の示寂と記してある。

大士の態度

大士は、國王の太子たる身を以て、幼少の時から、物質生活に對する耽着心を有せず、專ら法寶を欣求し、智光を琢磨することに精進せられたことは、前の寶珠問答でも察せられる。

印度に於ける大士は、教を南天に敷き、主として有相宗・無相宗・定慧宗・戒行宗・無得宗・寂靜宗と稱する六派の宗旨に對して、其の偏執を彈斥し、導くに正傳の佛法を以てし、隨時隨處に獅子吼して大法輪を轉ぜられたのであるから、印度時代の大士は最も傑出したる大雄辯家で且つ大活動家であつたかと思はれるが、支那に西來して始めに梁の武帝に相見せられし當時より、態度一變、直ちに向上の一路を打開し、『直指人心、見性成佛』を標榜して、直截根源の金剛王寶劔を振り翳されしことは、武帝との問答を見ても想像し得られる。

大士は梁を辭し、北の方、楊子江を渡りて魏に入り、進んで嵩山の少林寺に至り、錫を一草堂に駐めて所謂面壁九年の活計を打せられたが、併し、單に默坐してのみ居られた譯では無い。有時は經行し、有時は立定し、有時は說法し、有時は接得せられたが、其の傳道の中心が禪であつたから、一切の言教、一切の行持、皆な禪定三昧より發現し來たのであるに依て、九年默坐と稱するのである。

印度に在りては動の人、說の人にてありし大士が、何故、支那に入りてより靜の人、默の人となられたのであらうか、こゝに大士の潑溂たる精神が窺はれるやうに思ふ。

支那佛教は大士以前に於て既に弘く流通し、譯經も盛んに行はれた。殊に禪經の飜譯なども、大士より約四百年も前から行はれ、從つて禪の實行も頗る多數であつた。且つ、禪の思想が老莊哲學と類似する點がありし爲め、到る處に歡迎せられた樣であつた。梁の時代にも、有名なる傅大士や寶誌公といふやうな

禪的の學者があつたのである。是の如く禪・敎共に傳來せられて支那佛敎も道具建ては稍や備つて居た。

そこで、大士は、天童如淨禪師の言はれし如く、荷物は既に到着して居るから、別に持參する必要は無い、吾は荷主であるから、荷物の取扱ひ方、道具の使用法を敎ふるのであるといふ目的で、一經一論をも手にせず、空手にして西來し、一切の佛法をして自己たらしむべく、是心是物、是心是法の王三昧を高唱せられたものである。『說の時默、默の時說、大施門開いて壅塞なし』と永嘉が絕叫せし如く、說中に默あり默中に說ありて、隨處に主と作り、與奪自由の靈機を轉ぜられたものである。大士はたゞ楞伽經四卷を將來せられたといふことであるが、予、按ずるに、如何に大士なればとて、相當の荷物も書籍も携帶せられたであらう。されど、是れは其の經論を正依として立敎開宗せられたといふ意味では無い。

二入四行の法門

廓然無聖の公案、禮拜得髓の機緣は、大士の眞面目を參究する好材料であるが、今は之を略して置く。併し、大士と雖も、決して無孔の鐵槌の如き摸索不着の手脚をのみ弄せられたのでは無い。故に、大士も亦一線路を通じて二入四行觀の說示がある。卽ち『入道多途なるも要は唯だ二種なり』というて、理入と行入との二門を開かれた。理入といふは端坐三昧である。外、諸緣を息め、內、心喘ぐこと無く、寂然無爲にして大道と冥合し、自己本來の面目を現成して佛心に證入するの法門である。行入

といふは、佛教に於ける一切萬行で、これを四行に攝して示された。四行とは報寃行、隨緣行と無所求行と稱法行とである。予は此の四行を且らく大忍行・大智行・大信行・無爲行と名けて見る。

報寃行とは、廣く情・非情に通じて己れを苦しむる寃害、卽ち境遇の壓迫、自然の禍難等の場合に處し、斯る苦惱・逼迫は皆な夙業の致す所と明らめて、天をも恨みず人をも咎めず、益々勇氣を鼓して離苦得樂の功德行を勵むことで、是れ正しく大忍行である。

隨緣行とは、能く三世因果の原則に照して因緣の理を覺了し、己れの本分を自覺し、苦樂昇沈の由て來る所以を明らめ、私欲・私情・邪見・邪思惟を離れ、法性に隨順して定められたる人道・佛道を遵守するのであるから、所謂自覺の生活である。大智行と稱すべきものである。

無所求行といふは、凡夫はとかく何物かを求めて無我なること能はず、その求むる心が、やがて利己的觀念となつて、知らず〳〵樣々なる煩惱を釀造する。故に、世間・出世間の有ゆる欲求希望を超越して清淨無垢なる大無我の信念に住するのが無所求行である。金剛經には『應無所住、而生其心』とも『信心清淨、卽生實相』とも說いてある。梁の武帝は大士に相見せし時『朕、卽位已來、寺を造り經を寫し僧を度すること勝て記すべからず、何の功德かある』と問うた。大士は直ちに『功德なし』と喝破した。帝は驚いて『何を以て功德なきや』と問ひしに、大士は『此は但だ人天の小果、有漏の因、影の形に隨ふが如く、有りと雖も實に非ず』と諭された。武帝は佛教を信ずるのみならず、偉大なる佛教の實行者であつたが、

但だ、求むる所あるが爲めに其の行業に不純分子が混入して居る。是の如き欲求はこれを超越し、純淨なる一大信念より發するのでなければ、佛行でない。信行でない。信行は不純なる欲求を離れた大行である。無所求行である。

稱法行といふは『性淨の理、之を目けて法と爲す』とあるから、法とは大道の異名である。自己と大道と一致して、自己の行動が大道の運用となり、身は卽ち法身、心は卽ち道心、任運にして六波羅密を行じ、自然にして大慈悲の妙用を發するのが稱法行である。故に稱法行は、是を無爲行とも稱せらる。

此の四行は、自然の順序であつて、無階級の階級である。四行に依て證入すれば、理入と相合して遂に二致なし。以上二入四行觀は決して方便道では無く、最も適切なる禪門修證の標準である。

祖師西來の意

然れども、大士の眞面目を會せんと要せば、一切の雜知・雜解を放下して、兀々端坐し、打成一片にし去らねばならぬ。徒らに閑名目を弄しては、遂に他の寶を算ふるの徒となるであらう。

故に、僧あり曾て趙州に『如何なるか是れ祖師西來意』と問ひし時、趙州は『庭前の柏樹子』と答へた。庭前に柏樹子あり眼を開きて仔細に看よ。此の僧、大に怪み『和尚、境を以て人に示すこと莫れ』柏樹子は

外界諸法中の一微物である。そんな物を達磨の佛法などとは以ての外だと突懸つた。趙州曰く『境を以て人に示さず』予はそんな一微物を以て示したのでは無いぞ。僧又問ふ『如何なるか是れ祖師西來意』趙州また『庭前の柏樹子』と答へられた。是の如きは禪門の特色にして寸鐵人を斬る底の大公案である。又、一僧ありて、雲門下の傑僧たる香林に『如何なるか是れ祖師西來意』と問うた。時に香林は『坐久成勞』といふた。永く坐禪して居たから大分勞れたらうといふのが答へであつた。だが、雪竇は此の公案を碧巖の十七則に收めて參禪者の龜鑑とせられた。

大道、元來、大小の量を絶す、故に、一法を擧ぐれば盡乾坤總に這裡に在り、一塵を立すれば一切の佛國土悉く這裡に莊嚴せらる。喫茶喫飯も皆な理入三昧を出でず、坐臥經行も四大行持に非ざるは無い。教内・教外を論じたり、文字の立・不立を爭ふが如きは、猿猴の水月を捉ふるに似たり。

故に、眞に能く達磨大士を供養せんと欲せば、須く其の精神に供養を捧げねばならぬ。徒らに過去の大士を憧憬するは、精神を供養する所以でない。唯だ、能く二入四行の遺訓を奉じて、是を實究眞參し、以て法寶を探り、智光を磨き、目前に活達磨を現出せんことを期すべし。是れ大士に對する報恩の最勝なるものである。

曹溪の遺訓

曹溪と神秀

曹溪大師は、支那禪門の六祖、大鑑慧能禪師である。達磨の禪法は、曹溪大師の時に於て非常なる勢を以て普及したのである。

曹溪大師は、片田舍なる新州の人で、早く父に別れ、柴を賣つて母を養うて居られた薄福の人であつた。偶然なる機會に於て、心を佛法に傾け、遂に黃梅山に登りて五祖弘忍禪師に參ぜられた。禪師は、直ちに其の大器なるを認め、特に碓房の主任を命ぜられた。曹溪は、命を承けて碓房に下り、自ら米を舂くこと八ケ月、此の間に禪門の玄旨に參徹せられたのである。

五祖の會下には七百人の修道僧が居つて、其の上座が神秀であつた。神秀は志操・德行・學問・識見共に會中の長者でありしと見える。五祖は、大法付屬の人物を定めんとして、會中の大衆に其の悟處を呈似せよと命ぜられた。其の時、神秀より呈似したのが次の五言四句である。

身是菩提樹。心如二明鏡臺一時時勤拂拭。勿レ使レ惹二塵埃一。

曹溪は、盧行者と稱して、碓房の勞役に服して居つた後進の士であるが、其の識見は實に拔群にて、神秀の見處を背はずして、次の偈を呈似したのである。

菩提本無樹、明鏡亦非レ臺。本來無一物。何處惹塵埃。

是に於てか、五祖は、曹溪を以て正嗣となし、密に衣鉢を傳へられた。

後、神秀は北方に於て祖道を宣傳し、曹溪は南方に於て宗風を擧揚せられた。世人は是を南頓北漸と稱した。卽ち、南方曹溪の禪は頓敎的の法門にして、一超直入如來地の要道を開かれ、北方神秀の禪は漸敎的の提撕にして、漸々修學、究竟成佛の妙則を授げられたのである。併し、此の兩大師の禪風を全然各別のものと見てはならぬ。

神秀の見解も實に簡明適切である。身は是れ菩提樹とは卽身成佛の妙理を斷定したもので、心は明鏡臺の如しとは吾人本心の全體全用を提唱したのである。但だ、凡夫人は妄想執着に蓋はれて、此の身心をして煩惱苦患の魔窟に投じ、容易に之を脫することが出來ぬ。依て、時々に勇猛精進して本來具有の佛心を顯現せよとの意見である。吾々は常々此の敎訓に從つて修養せねばならぬ。

されども、單に此の見地のみにては甚だ禪門安心の極則に達したものとはいはれぬ。その悟處は相待的範圍を出でぬ。故に曹溪は佛敎々理の根本義を看破して、凡夫と佛、迷と悟、善と惡、淨と穢、此等の差

別相を超越したる第一義を、本來無一物と喝破せられたのである。曹溪は決して神秀の所見を否認したのでは無く、更に一層樓に上りて、祖道の祕藏を開かれたのである。要するに、神秀は專ら修養の用心を說き、曹溪は高く悟道の妙趣を唱へたのである。

故に、曹溪大師も決して修養上の心術を忽諸にはして居られぬことは、其の遺訓に依りて見ても明らかである。今、遺訓の中、左の一篇を擧げて、曹溪禪の一端を紹介して見ようと思ふ。即ち、

心平何勞ニ持戒一。行直何用ニ修禪一。恩則親養ニ父母一。義則上下相憐。讓則尊卑和睦。忍則衆惡無レ喧。若ニ能鑽レ木出一レ火。淤泥定生ニ紅蓮一

（和譯）心平かなれば何ぞ持戒を勞せん、行直ければ何ぞ修禪を用ゐん、恩には則ち親しく父母を養ひ、義には則ち上下相憐む、讓には則ち尊卑和睦し、忍には則ち衆惡喧無し、能く木を鑽りて火を出すが若くなれば、淤泥定んで紅蓮を生ず。

といふのである。是れは韶州刺史韋據の爲めに、大梵寺に於て示された偈頌の一段である。此の際、曹溪は唯心淨土己心彌陀に就ての頗る詳細なる說法があつたのである。

宗教と道德

普通には、道德は人の道で、人と人との關係を基礎として現はれたもの、宗教は佛の道（又は神の道）

で人と超人的なる佛（又は神）との關係を土臺として成り立つたものとしてある。併し、宗教も、道德も吾々人間としての眞の道、誠の德に歸着するのであるから、決して絶對に區別せらるべきものでは無い。是を別々の物として取扱ふのは、便宜上、宗教と道德とを二分して其の範圍を限定するが爲めである。曹溪の教では、宗教・道德一體の上から法門を開示せられて居る。

佛教は、本より信仰を以て、入道の門戶として居るが、佛教を信じた者の修養は、戒律と禪定とを二大法門として居る。持戒とは佛教律を持つこと、即ち佛教道德の實踐である。禪定とは一心を不動の地に置き、雜多の妄念を掃蕩すること、廣き意味を以て言へば、端坐ばかりではなく、念佛行も亦一種の禪である。戒律には五戒・十戒等、種々の條章を設けられて居るが、一言以て之を蔽へば、諸惡莫作、衆善奉行即ち一切の惡を斷じ、一切の善を修するといふに歸する。但し、善惡の標準に有漏・無漏の別がありて、淺きより深きに至り、麁より細に入る所から、道德とも宗教とも名が分れて來るのである。

曹溪は極めて簡明に、一心が平穩なれば、別に持戒に勞するに及ばぬ、種々の戒律も歸する所は、一心の平和を得んが爲めである。又、日日の行動が正しければ、それが即ち禪定であるから、別に改めて禪を修するの必要は無いと示された。併し、一心の平和は持戒に依らされば完全なる能はず、行動を正直にするには、是非とも坐禪、又は信仰の力に依らねばならぬに依て、戒律も、禪定も、決して捨つることの出來ぬ要術であるが、その目的は『心平行直』に歸するにあるのである。

『心の平』といふことは、唯だ無事・無爲にして、ぼんやりして、湯上りの時の樣な心持になつたことでは無い。換言すれば、精神の最も健全なることである。精神の全能力が道德的に發達したることである。國家の平和とか、世界の平和とかいふことも『無事是れ貴人』といふ樣なことをいふのでは無い。國家が、物質的にも、精神的にも發達して、完全なる理想境を實現し、人類全體が、平等に幸福を樂しむことになるのが、眞の平和である。

凡そ天地の間に生存する物は、一草一木の上にまで、各々自己の能力を發展してゆくといふ力を有て居る。甲乙丙丁、皆な其の力あるが爲めに、自然に激烈なる競爭が行なはれる。其の競爭の最も甚しきものが、弱肉强食となり、國際間には戰爭ともなつて現はれる。是れは免がるべからざる生物自然の作用である。之を小さくいへば一家族、一町村の間にも、自づから利己的競爭が行なはれて居るものである。併し、此の間に於て圓滿に双方に調和し、各々其の能力を發揮し乍ら、而も能く平和を保つことの出來るのは、全く精神の大德大用である。

精神の作用は、實に靈妙不可思議であつて、獨り、人と人との關係を調和するのみにあらず、人と物との關係をも完全に調和せしむる德を有て居る。その德の根元を慈悲ともいへば愛ともいふのである。此の慈悲の德は、佛性の慈悲心というて、吾々の本性に本來具有する所のものである。此の慈悲心は、智と行との二德を含有したもので無くてはならぬ。

禪宗の御本尊は釋尊で、文殊・普賢の二菩薩が兩脇立になつて居る。釋尊は大慈悲體で、文殊菩薩は智の權化、普賢菩薩は行の權化である。釋尊の大慈悲光明の中には、智慧の力と實行の力とが附隨して居るのである。吾々も亦斯くなければならぬが、斯くなるには適當なる訓練を要することは言ふ迄もない。此の慈悲が、報恩觀念ともなり、社會奉仕ともなり、不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不飮酒ともなる。此の德に依つて、父子・夫婦・兄弟の間も、國家及び社會の上も、自づと調和が出來て平靜に歸するのである。その根本の精神が智行圓滿になつたのが、心の平和といふのである。

次に『行直く』といふは、直は正直とも質直とも熟字して、心に私曲なく、虛僞なく、道に由て進むことである。

昔、支那の五臺山下に一老婆の茶店を開くあり、登山の雲衲が、その老婆に向つて、『臺山の路、何れの處に向つてか去る』五臺山に上るには何れの路を行くべきやと問ふと、彼は直ちに『驀直去』眞直に行けと答ふるのが常であつた。雲衲が有り難ふといふて一禮して、眞直に出懸ると、老婆は之を見て、いつでも『好箇の阿師又恁麼にし去れり』ア、好い雲水さんだが、矢つ張足許がぐらついて居る哩と、冷かすやうにいふのであつた。此の事は其の時代に於て隨分名高い問題となつた。

五臺山は文殊の道場であり、文殊は智慧の菩薩である。眞實の智慧に接觸することは、眞直な道を履むことに依つて得られる。佛眼を以て宇宙を大觀する時は、森羅萬象悉く是れ佛心の露現である。凡夫は

情に私曲あり、智に偏執あるが爲めに、佛心を體得することが出來ぬのである。老婆は此の意味に於て天下の禪者に警告を試みたものと見える。

禪といふも、三昧といふも、佛心體得の法である。故に、曹溪は、行ひにして正しく直く、起居動靜、佛心に一如ならば、別に、外に禪道を求むるには及ばぬぞといはれたのである。曹溪の教ふる所は道德と宗教とを融合して、絶對圓通の大道を日常生活の上に實現するの妙義である。

感恩と正義

曹溪大師は更に恩・義・讓・忍の四德を擧げられたが、此の四德は平和なる精神、質直なる德行の內容と其の效果とである。

先づ第一が恩である。恩とは恩惠・恩愛の恩で、他の恩惠を感ずることと、恩惠を他に施すことゝの二樣がある。いつもいふ通り、佛教の道德は報恩主義である。此の恩情に富む人は、常に有り難いと感じ、氣の毒な、可愛そうぢやと感ずる。されば、此の情あるものは、必ず先づ親く父母に孝養をするものである。忠も孝も恩を感ずるのが本である。ありがたし、忝けなしと感ずる時は、忠も孝も之を勵まずには居られぬもの、恰も、飢たる時に食を求め、渴せし時に水を求むるが如きものである。權利だの、義務だのといふ理窟をならべて居る暇のあるものでは無い。

佛教に於ては君主の恩、父母の恩、衆生の恩、三寶の恩、是を四恩と稱して、之に報ゆべきことを教へて居るが、此の四恩は、お互が既に之を受け、又は現に受けつゝある恩惠であるから、之に對して有り難いと感ずる時は、人間として良心の存する限りは、どうしても報謝の誠を致さずには居られぬものである。是れが君に對しては忠となり、父母に對しては孝となりて、殆んど無條件に報謝の大義を盡すことゝなるものである。

今の世の人は、動もすれば、自分の身體にまで、最先きに權利とか義務とかいふ條件を附したがる傾向がある。之れが爲めに、却て自己の眞價を發揮することが甚だ不完全の樣に思はれる。元來、報恩なるものは、妄りに狹い卑しい條件の下に行ふべきものでは無い。之と同時に、無暗に人に強ゆべきものでも無い。全く自己本心の最も高く淸き情操より發する人格的行爲である。

次に、人にも物にも、皆な盡くその本性・本務といふものがある。水の潤へる、火の熱する、風の動搖する、地の堅固なる。皆な其の本性である。吾々人類として、古今東西に渉りて、動かすべからざる本來の職分がある。是れを法爾の秩序といふ。君臣の義、父子の親、夫婦の別、朋友の信、是れは決して人爲的の法に非ずして、正しく法爾の秩序である。此の秩序を嚴守すれば家も齊ひ國も治まる。之に反すれば心安からずして世亂る。此の秩序を守りて、各々其の本分を盡すのが義である。故に、義を守りて誤らざれば、上に在る者は下を憐れみ、下に在る者は上を敬まひ、秩序井然として、各々其の處に安んずるを

得るものである。若し然らざれば、上は下を虐げ、下は上に抗し、一家・一社會すらも平和を全うすることが出來ぬ。

衲は昨年、布哇に在りし時、勞資協調の點に就て、我が同胞たる勞働者にも、又、耕主たる米人にも、懇ろに、協調の必要を說き、且つ衆生恩の重大なることを感ずべきやう勸めたりしが、その折、米人某氏の求めに應じ、左の一詩を作りて之に與へ、其の意を譯して御聞かせしたことであつた。

自他共敬協調源。主伴相扶道始尊。欲レ濟二勞資親善美一。祇應三深感二衆生恩一。

自他互に相尊敬して、主人も從者も、相共に扶け合うてこそ、協調も人道も成り立つものである。優婆塞戒經には布施の功德を讃歎せられ、布施する時は、不善心と猜疑心と邪見と慳悋の心とを除け、施す時は平等心に住して、他に對して聊も輕蔑の念を起すなよと仰せられた。

勞働は神聖なり、人類の生存は相互の勞働より成る。苟も道德と法律とに反せざるものならば、職業の種類や報酬の多少に依りて、妄りに其の人格を侮蔑すべきものでは無い。農夫でも、職工でも、下女でも、車夫でも、妄りに輕視すべきものではない。それには深く衆生恩の尊貴なることを感ぜねばならぬ。然らざれば勞資親善の美を濟すことは出來ぬ。

又、勞働者の方でも、自己を輕んせず、職分を等閑にせず、能く責任を重んじ、義務を盡し、以て忠實の德を發揮すべきである。事毎に不平を起しなば、何くに行くとも滿足を得ること難し。自ら其の職務を

輕んぜば、忠誠に業を勵むこと能はざるのみにあらず、自づから其の品性をも傷つくるものである。故に曹溪は『上下相憐れむ』の四字を以て信義の德を示されたのである。

推讓と安忍

第三には讓德を擧げられた。讓とは恭儉推讓の道である。自ら傲慢を制して、德と功とを他に讓るの心懸けである。

何事でも自分一人の力で成功するものでは無い。所謂衆生の恩力といふことは、如何なる場合にも忘ることは出來ぬ。工業家の成功は勞働者のお蔭である。商業家の成功するのは店員や沽客のお蔭である。主人が安樂に生活するのは家族や召使のお蔭である。此の身の健康なるは父母のお蔭である。年老て安心なるは子孫のお蔭である。大將の成功は士卒の勤勞に依る。勞働者の幸福は資本家の恩力に依る。能々其の出て來る所を觀ずれば、決して自ら貢り、且つ他を賤むべき筋のものでは無い。

銘々が斯く他の恩分を自覺する時に於てこそ、尊卑和睦して、主人も家來も、資本家も勞働者も、商人も買手も、大將も士卒も、自然に共敬相愛し、茲に美はしき謙讓の德が現はれるものである。之に反して驕慢心の强い者は、自分としては進取發達の道が塞がり、他人に對して、和敬親睦の德を損し、遂に、自己の墮落と失敗とを招くことゝなる。謙讓の德ある者は、物事をひかへめにするに依り、節制も、儉約も

禮儀も、愼しみも、備はるものである。

第四は安忍の德、忍は六度の行の一であつて、梵語には羼提といひ、舊譯では忍辱、新譯では安忍と譯して居る。忍辱は如何なる恥辱を與へらるゝ場合にも忍んで腹を立てぬこと、安忍は心を安んじて萬事に耐忍することで、安忍の方が意味が廣い。優婆塞戒經には、世忍と出世忍との二種を擧げてある。飢渇・寒熱・苦樂等を忍ぶを世忍といひ、能く信仰や道德を忍持して、他の迫害や凌辱に堪へて、妄りに感情の奴隷とならざるを出世忍といふ。要するに、忍は心の力、又、心の守りである。其の心を大山の如くにして、他の爲めに動亂せられず、其の心を大海の如くにして、能く百川を容るゝの度量雅懷を有するのが忍である。

忍力薄弱なれば、常に外境の刺撃に動かされて、其の心を安んずることが出來ず、從つて種々の罪惡が惹起されるものである。現代人は、理智の發達と社會が複雜の度を增すとに依りて、一般に神經が過敏になつて、物事に激し易く、どつしりとした度量に乏しいので、相當智識を有し、人格ある者でも、往々にして見苦しい醜態を演ずることが見受けられる。是れ一は忍德缺乏の失であらうと思ふ。

以上恩・義・讓・忍の四德は、吾々の此の世に處して暫時も離るべからざる精神の寶である。此の四德が訓練されて、漸々に圓熟せば、其の心も自から平らかにして、其の行ひ亦自から直かるべし。併し、是の如き修養は不斷の努力に依らねばならぬ。恰も、木を鑽て火を出すが如く、火の出ない中は鑽木の勤め

を息むることは出來ぬ。吾々の修養も亦、恩・義・讓・忍の徳が身・口・意の上に實現し得るまでは、飽まで努力せねばならぬ。

三歳の童子も之を知ると雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し。修養の價値は、知に在らずして、行に在り、學に在らずして徳に在り、果して能く修養其の功を奏することを得ば、譬へば淤泥の中に紅蓮を生ずるが如く、人生混濁の中に在りて純淨無漏の徳を現はすべし、是を唯心とも淨土とも己心の佛陀ともいふのである。

不斷の修養

修養は不休不息で無ければならぬ。青年の時代に於て修養に勤めたる人も、老境に至ると之を忽諸に付して、唯だ他人にのみ修養を勸むる樣になり易いが、實をいへば、老境に達する程、一層、修養に力を致さねばならぬものである。

曹溪大師は碓房に米を舂くこと八ケ月、黄梅山を辭してより十五箇年の間は、漁獵の間に混じ、獵士を相手にして、說法敎化をして居られた。即ち田舍廻りを主として居られたのである。後に廣州の法性寺に至られた。同寺には印宗法師といふ學者が居つて、盛んに講說の筵を張られた。

或時、門頭の旛が風に靡くのを見て、一僧は、是れ風の動くのであるといひしに、一僧は、否、是れは

旛の動くのであると主張した、此の簡單なる問答に追々と理窟を附して、大激論を始めたのである。是れは詰らぬ議論の樣であるが、意味甚だ深長なるものである。曹溪は徐ろに兩僧を諭して、結局『是れ風動にあらず、是れ旛動にあらず、仁者の心動なるのみ』との斷案を下された。是れを端緒として、大に禪門頓敎の秘奧を開いて法輪を轉ぜられたとある。

爾來、曹溪は『佛法は世間に在り、世間を離れて覺するにあらず』と說き、全生涯を通じて、無間斷の修養を打せられた。吾々も亦曹溪の遺風に倣ひ、造次顚沛の間、舂米運水の裡にも、能々其の心を平らかにして其の行なひを直くせば、日常生活の上が、直に佛敎道德とも禪定三昧ともなるのである。

維新の俊傑、西鄕南洲は、鹿兒島市福昌寺無三和尙に參禪して、不動の安心を得られた。十七歲より二十八歲まで、日々、參禪せられたそうだが、和尙も亦、南洲の大器を勘破して、惡辣の手段を以て、思ひ切つた接得をしたといふ。此の無三和尙は島津公の臣下なりしが、晚年にして出家し、橘仙和尙に嗣法し、遂に公の菩提所福昌寺に進住した程の傑僧であつた。禪機嶮峻當るべからざるものがある。

或時、南洲は其の友吉井友實と與に和尙に參ずるに當り、兩人申合せて、老漢の室に入れば直ちに痛棒を與へらる、今日は庭前にありて商量し、老漢が棒を拈ずるを見ば、驀直に走り去らむとて、往きて椽下に立て參叩した。すると、和尙は眞向から『這の生意氣者めが』と叱りつけたが、其の聲恰も雷の如く、流石の兩人も覺えず震ひ上つたそうである。

和尚は是の如き大力量の禪僧でありしが、福昌寺に住職して、始めて晉山開堂の式を行ふに當り、或る寺院の僧が、和尚の出世を妬み、之を辱しめんが爲め、巧に藩公に説いて、藩公をして奇拔なる問答を致さしむることとなつた。

彌々開堂の當日、和尚は拄杖を提げて須彌壇上に登り、香を拈じて、聖上陛下の萬歲を祝禱し、次に藩公の福壽無窮を禱りたる後に、大問答に移つたのである。すると、藩公は突然席を立て堂の中央に進み、和尚をにらみ視ながら、大音を發して『如何なるか是れ久志良の土百姓』といはれた。（和尚は元と久志良の農家に生れ、後に藩士の姓を襲で士分に入つたのである。薩州は士分を尊敬すること、他に過ぎたるを以て、農商は卑しき者と見なされて居つたのである。）參列者一同は、此の意外なる藩公の態度を見て、其の意を解すること能はず、驚膽張目して居つたのである。然るに、和尚は泰然自若、微しく笑を含みて、徐ろに『泥中の蓮華』と答へた。泥中に働く土百姓なればこそ、麗はしき蓮華の秀づるを見るのである。蓮華一たび開けば滿池を淨化する。泥中に出でゝ泥に染まずと雖も、此の淨き華は淤泥に依てこそ見ることが出來る。

人生を離脫するは佛法の本意に非ず、此の人生こそ好箇の選佛場である。而して人生に處して人生の爲めに染汚せられず、心華開發して、人生を美化し淨化す、是れぞ禪道の目的である。此の境致に達するには、是非とも時々に勤めて拂拭する底の修養力に依らねばならぬ。而して徹底不染汚の境界に達すれば、

此の身即ち是れ佛身、此の土即ち是れ佛土、盡大地皆な是れ解脫門、治生產業亦正法に非ざるなし、是れ則ち絶對境にして、是を本來無一物といふのである。

島津公は和尙の答話を聞いて、一層歸依の念を厚うせられた。併し、和尙は、決して自分の生ひ立ちを辯護したのでは無く、正しく佛敎の目的、曹溪禪の端的を擧唱したものである。故に、吾々も、曹溪の遺訓に基きて、穩健着實なる修養を努め、以て自利々他の根源を開發することが肝要である。

時々に勤めて拂拭せよ

慧能と神秀

達磨大師五世の法孫、大滿弘忍禪師の門より、曹溪・神秀の二大神足を出した。曹溪大師は能く五祖の心印を傳授して、一超直入如來地の玄風を煽揚せられた。神秀大師は其の知見に於て、曹溪に一着を輸せし爲、五祖の衣鉢を單傳するに至らざりしも、其の修行の着實なる、其の信念の高邁なる、眞に百代の師表と爲すに足つた。

五祖、一日、大衆を總集して告げて曰く、生死事は大なり、汝等終日只だ福田を求めて、生死の苦海を出離せむことを求めず、自性若し迷はゞ福何ぞ救ふべき。汝等各々去て自ら本心般若の性を取つて、各々一偈を作り來て吾に呈せよと。時に神秀大師、一會の上座として教授の任にあり、自ら左の一偈を作りて所見を呈せられた。

身是菩提樹。心如二鏡臺一。時々勤拂拭。勿レ使レ惹二塵埃一。

此の偈は簡なりと雖も、能く神秀大師の眞面目を發揮して餘蘊あること無し。第一句は即身是佛の義を

明かし、第二句は心地の本來、智德圓明なることを明かし、三四兩句に於ては學道の標準を說かれたのである。是れ自己の實驗しつゝある修養法を述べられたものである。五祖は此の偈を見て大に其の修行の親切なるを賛して

此の偈に依つて修せば、惡道に墮することを免れむ。此の偈に依つて修せば、大利益あらむ。

と仰せられたが、未だ衣鉢を附囑するに至らなかつた。是れを見ても修行の容易ならざることを知らねばならぬ。縱ひ學は眞理の邊際を盡し、行は道德の大本に通ずるも、猶ほ證契卽通の人たることを得ざるは、塵埃を拂拭するの力ありと雖も、未だ無塵埃の聖地に達せざるが爲である。

六祖壇經には『五祖が衆に向つて大に神秀の呈偈を賛せられたるは、一時の方便にして、決して其の眞意に非ず』と云ふが如くに記してあるが、此等の記述は、恐くは後人の附加したものであらう。五祖は蓋世の古佛である。豈に其の言を表裏して權謀的態度を取られやう。壇經の行由第一の文中に往々にして信じ難き記事あるを見る。是れ曹溪大師の德を稱揚するが如くにして、却て其の德を傷くるの過を免れざるものと謂ふべきである。

五祖は眞面目に神秀の修養を賛して、學佛道者の模範と爲さしめ、而して其の室內に於ては更に向上の鉗鎚を下して

汝は只だ門外に到りて未だ門內に入らず。

と誡められたは、用意の周到なる、提撕の精細なる、錦上に華を敷くの觀がある。

曹溪大師は當時盧行者として、碓房に在りて苦役に從事して居た。神秀の偈を聞いて是を肯はず、卽ち其の韻を次で曰く、

菩提本無レ樹。明鏡亦非レ臺。本來無一物。何處惹ニ塵埃一。

五祖、此の偈を見て、三更に入室せしめ、遂に衣鉢を傳授して、正統の六祖と爲し給うた。

寒苦、人をやぶらず、不修、人をやぶる

吾人は深く此の因緣を參究して、古人の法を求め、道を究むるに忠實なることを知らなければならぬ。此の兩師の所見を以て相反するものであると思ふは、大錯と云はねばならぬ。神秀の『時々勤拂拭』と云ふは學地の分際にして、曹溪の『本來無一物』は證位の活計である。神秀は途中に在りて精進し、曹溪は家鄕に歸りて安坐す。『拂拭』は猶ほ病を療するが如く、『無物』は猶ほ病なきに到るが如くである。病を療するは病無きに到らしめむが爲めであると知らば、『無物』の境界は、畢竟『拂拭』の結果なることを識るべきである。故に吾人は先づ以て神秀の身心を學得し、而して後に曹溪の骨髓を把捉せむことを期すべきである。十方の佛陀何れか、時々の拂拭を勤め給はざる者やある。三國の祖師何れか、塵埃業果を恥ぢ給はざる者やある。故に承陽大師は

徒らに塵土に化して人に厭はれむ髑髏を以て、能く幸に佛正法を行持すべし。是の故に寒苦をおづる莫れ、寒苦未だ人をやぶらず、寒苦未だ道をやぶらず、但だ不修をおづべし、不修それ人をやぶり、道をやぶる。暑熱をおづること莫れ、暑熱未だ人をやぶらず、暑熱未だ道をやぶらず。不修よく人をやぶり、道をやぶる。

と示されたるにあらずや。後代の禪者、往々にして此の志操を忽にし、神秀の身心を除外して直ちに曹溪の堂に上らむとし、遂に行持を輕視し、修養を蔑如するの風ありき。恰も他力門の僧侶が、言を他力に借りて、自行を等閑にするに似てゐる。是れ禪弊を生ずるの一原因である。我が佛、藏經を說き給ひし時末世の我等を懸念して

當來の沙門、弊惡鄙賤、深く慳貪を懷き、深く瞋恚を懷き、深く不信を懷き、三毒熾盛心行塵擴にして、制御すべきこと難からん。

と仰せられた。吾人は不幸にして此の懸記の大に當れることあるを悲しむのである。

信力に發する天籟を聽取すべし

忝くも、住持三寶の境界を拜し、一切衆生の導師を以て自ら任ずる身を以て、或は不義の財を貪ぼり或は悲理の忿怒を發し、或は信念の培養を忽諸にするが如きことあらば、佛弟子たるに於て何かあらむ。

是の如きは、畢竟、信念の薄弱と精進力の缺乏とに起因するものであらうと思ふ。言ふまでも無く、信念は佛教の生命である。佛法の寶山に入ると雖も、信念の手無くんば何の益かあらむ。信念の力は絶對である。

　君が代を思ふ心の一筋に我が身ありとは思はざりけり。

とは、梅田雲濱が國家に對せる信念にあらずや。また

　鷲の山誰かは月を見ざるべき心にかゝる雲しなければ

とは、西行法師が佛陀に對せるの信念にあらずや。信念の前には名聞も無く、利養も無く、自己も無く、他己も無し。唯だ道のみありて存するのである。故に信力堅固なる者は、其の身は直ちに法身にして、其の心は是れ道心である。

　白河法皇が、曾て法勝寺を建て給ひし時、僧永觀を召して『功德幾くぞや』と問はせられける。觀、默然、良久して『計るに罪に非るべし』と奏せりき。或時、觀に向つて、宇治殿が平等院を建てられし功力如何んと問ひし時、觀は『是れ餓鬼道の業のみ』と答へしとぞ。恰も達磨大師が、梁の武帝の『朕、即位以來、寺を造り、經を寫し、僧を度すること、勝て記すべからず、何の功德かある』と云へる勅問に對して『並に功德なし、是れ但だ人天の小果、有漏の因にして、影の形に隨ふが如く、有りと雖も實に非ず』と答へ給へるに似てゐる。皆是れ信力より發したる天籟である。

又、我が佛は、優婆塞戒經に於て精進を以て六波羅密の正因なりとし、特に善生に告げて曰く
精進に二種あり。一には正、二には邪。菩薩は邪精進を遠離して、已に正精進を修す。信と施と戒と聞と慧と慈悲とを修するを正精進と名づく、至心に常に作して三時悔ゆること無く、善法の所に於て知足を生ぜず、學ぶ所の世法及び出世の法、一切皆な正精進と名づく。
菩薩復た身命を惜まずと雖も、然も法を護るが爲には當に身を愛惜すべし。四威儀を常に修することと法の如くにし、禪法を修するの時、心に怠懈なく、身命を失する時も、如法を捨てざれ。
此等は獨り佛教者の規箴たるのみならず、實に是れ人道の大本である。悲いかな、吾人は此等の聖訓を見聞すと雖も、自ら能く其の心を制御すること能はず、動もすれば俗情の爲に驅使せられ、妄見の爲に誘惑せらる。故に十二時中暫時も油斷なく、念々に精神を修養し、刻々に正法を勤修して、以て初發心に負かざらむと行持するを至要とするのである。是れ神秀大師の所謂時々勤拂拭の手段である。

勤行精進しかして後に人を教ゆ

神秀曾て五祖下に在りし時、心に苦節を誓ひ、樵汲自ら役して佛道を修行したとある。後年、唐の武后の召に應じ、內道場に於て法輪を轉ぜし時の如ぎ、王公士庶皆な風を望んで拜伏せられたりと云はれてゐる。又、中宗の朝に、大臣張說が、常に弟子の禮を執りて參詣せしが如きは、全く行力の致す所である。

晩年に於ける示衆の偈に曰く

一切佛法。自心本有。將心外求。捨父逃走。

是れ猶ほ未だ學地の分際を脱せずと雖も、その修養、その精進、知るべきである。優婆塞戒經に曰く

先づ自ら惡を除き、後に人に敎へて除かしむべし。若し自ら除かずして能く他を敎へて除かしむ、この理あること無し、是の故に菩薩先づ應に自ら施し、自ら戒を持す。足ることを知り、勤行精進して、然る後に人を化すべし。

自信敎人信、自行敎人行、自覺敎人覺、是れ古今不變の典則である。此の典則に辜負するに於ては、決して自ら其の身を保つこと能はず。況や敎師たり、牧師たるの職分を盡すことをや。而して是を守らむには洞山大師の所謂、潛行密用の家訓を忘れてはならぬ。

物徂徠の高弟山縣周南が長州侯に仕へし時、顧問の職に任じて大に政敎を輔け、君側に在ること數十年なりしも、其の爲す所を知る者なかりしとぞ。人、之を問ひけるに

易に含章の言あり、我輩の務め此に在り。

と對へられたとある。含章は周易坤卦の辭にして、其の才德を人に顯はさゞるを云ふ。

縱ひ含章の人たりとも　桃李不言下自作蹊。精勤拂拭の大功偉德、誰か能く之を遮るものあらむや。

自己の省察

退歩の修養

退歩といふは、向ふへ〳〵と進み行く心を引留めて、退て己れを悟り、己れを究むることである。道徳的には之を反省といふ。何事でも自己を反省するに依て、善悪共に修養の基となる。故に、荀子は「善を見れば脩然として必ず以て自ら存す、不善を見れば愀然として必ず以て自ら省る、善、身に在れば介然として必ず以て自ら好み、不善、身に在れば菑然として必ず以て自ら悪む」といふた。是れは、人の善き行を見たならば、自ら其身を整へて、己れにも此行があるか無きかを省み察して、有る時は益々勉めて失はず、無き時は勉め勵みてこれを修むる様にするが宜い。人の不善を見たならば、自ら憂へ懼れて、己れにも此不善な行が有るや否やを省るが宜い。我が身に善き行がある場合は、固く守りて好み樂しむべく、我が身に不善の行がある場合は、泥滓の身を汚すが如く憎み嫌ふべしとの意である。

フルードも『人は一面に靜寂を欲するの性を有するを以て、日夜、暴風の如く寄せ、旋渦の如く捲き來

る世の業務の上に、反省思慮する事を得るものなり、若し夫れ、人に此反省の時なからんか、身は濃霧の掩ひ去る所となりて智見は其光を失ふに至るべし』というて居る。人は、欲望の爲めに蔽はれて、常に外界に向つて欲望の滿足を得んとするものであるから、動もすれば、人の爲めに謀つて忠實を缺いたり、朋友と交りて信義を失うたり、之を知りながらも之を行ふこと能はざるに至る。是の如き人は、得意の時には奢侈に流れ、傲慢に陷りて、精神に幾多の缺點を生じ、失意の時は、世を恨み、人を怨み、自ら煩悶の爲めに囚はれて其の精神が自づと病的になることが多い。故に、明治天皇の御製には「よしあしを人の上には言ひながら身を省りみる人なかりけり」と嘆かせ給ひ、「天をうらみ人をとがむることもあらじ我が過ちを思ひかへさば」と御誡め給うてある。此の反省は、道德的退歩の修養である。

佛敎的省察

佛敎では『諸法皆是れ因緣より生ず』と說てあるから、善惡・苦樂共に因緣の致す所と諦めて、運命開發の道を外に求むるよりも、先づ以て內に省みて己れに求むべきである。因緣の理を以て單なる諦め主義と思うてはならぬ。深く因果・因緣の理を觀ずれば、善惡・苦樂共に其の由て來る所の原因を究め、之と同時に將來の善果樂報を招くべき因種を蒔き直して、之を涵養し、振作することに努むる樣になる。

證道歌には『惡言は是れ功德なりと觀ずれば是れ即ち吾が善知識と成る』とある。人より惡口を言はれ

た場合、少しでも己れに惡言を招くべき缺點あらば、速かに己れの行を矯正するが宜い。若し、全く根無し言であらば、是れ夙世に作せる惡業の報なりと觀じ、恰も灯火を以て闇を照すが如く、一層善根功德を積んで、自然に其惡言を防止する樣に致さば、一朝の惡言が、將來、自己改善の資料となるものである。是の如き觀念に長じなば、良心は益々明らかになり、品性も彌々高潔となりて、惡口を言ひし者は却て讃歎の聲を發するに至るであらう。是れ卽ち退歩的訓練の效果である。

更に進んで、禪門に於ける退歩の工夫を一言するならば、禪門に於ては直ちに、自己是れ何物ぞと、究盡するのである。吾々は朝から晩まで、苦しいとか、樂しいとか、善とか、惡とか、寒いとか、暑いとか云うて悶慄て居るが、その苦樂善惡を感知し、意識する底の物は、畢竟、何物であらう。『心にも及ばぬものはなにがあると心に問へば心なりけり』、實に不可思議體である。精神現象は、心理學者に於て精密に研究して居るが、精神の本體に至つては、現在の科學的論證のみでは滿足は出來ぬ。禪門に於ては、第一に此大問題を工夫するのであるが、是れは、如何程研究の智を運らしても、容易に解決はつかぬ。縱んば臆斷的に解決がついたとするも、畢竟、凡夫心を見究めるに過ぎぬ。解決がついたとしても、それは依然として煩惱の卵を見付け出しただけである。そこで禪門では、先以て一切の妄想分別を截斷り、善惡苦樂を超越して、大無心の境界に進ましむるのである。是れが退歩の工夫である。

此の工夫に依つて、豁然として自己の本體を見得することが出來る。自己の本體を見得すると同時に、

佛心・佛德の光輝が開發して、茲に一大安心の境地に達する。是を禪心の顯現とも、自己の承當ともいふのである。此の境地に到るには、妄想の禍中より解脱するが先決問題であるから、その方法として坐禪を實行するのである。太祖大師は『夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ』と仰せられて居る。坐禪をすれば、心地を開明する、自己を承當するのである。而して、此の坐禪は、決して上根・上智の人とか、知識階級の人とかに限つた方法に非ずして、老若男女と上智・下愚とを論ぜず、苟も志だにあらば、誰でも學得し去ることが出來る法門である。

自己大成の要道

三界は心の所造である。故に、煩惱心を以て世界に處すれば、盡天盡地、總に是れ煩惱の世界となる。佛法の眼を以て世界を觀る時は、山河大地、悉く是れ佛法の世界となる。宗鏡錄には『一切の國土は是れ佛國土なり、一切の法は是れ佛法なり』とある。佛法といふは、眞理の光りと慈悲の惠みである。眞理は決して無形では無い。山の高き水の深き、柳の綠、花の紅、皆其の儘、眞理の光明である。日月の輝きを放ち、雨露の潤ひを與ふる、何か慈悲の恩惠に非ざる。此の眞理を體得すれば、何事を爲るのも、其儘佛法であるから、忠孝信義は言ふに及ばず、商工業等も佛法の行持である。

天柱禪師は『爾等、一切事上、須く實頭なるべし、おほよそ世間に實なる者は佛法に實ならざる無し、

佛法に實ならざる者は世間上も亦實なること無し』と言はれた。一切事、總に佛法なりとせば、政治には政治の佛法あり、商業には商業の佛法あり、乃至、勞働には勞働の佛法がある。苟も倫理道德に反せざる業務ならば、皆佛法の行持である。實頭といふは誠心誠意である。但だ普通謂ふ所の正直のみではならぬ。眞實心は禪心の發動、道念の流露である。一擧手一投足の上にも、大道を履踐するの志氣が無ければならぬ。茶を飲み飯を喫する上にも、佛法を實行するの覺悟が無ければならぬ。實頭の人とは、高尚なる道德心と、不動着なる定力と、大道を運用する智見とを融合調和した人をいふのである。

實頭の人といふものは、苦中に在りても必ず樂心があり、貧窮に處しても其の心常に富めり。是れ其の胸中卓擧にして名利の窩窟に滯らぬからである。澤菴和尚は、曾て幕令に觸れて羽州に配竄の身となりしも、毫も屈托は無かつた。或人が「思ひやる思ひ入るさの山住もうきはのがれぬ浮世なるらん」といひ送りけるに、『いづこにも心のおくの入さ山君は浮世のさかと見るらん』と返歌せられ、後に赦されて江戸に召されし時、『御意ならばかへりたくわん思へども江戸はいや〱むさし世の中』と詠ぜられた。此の數首の中にも、澤菴の面目躍如たるものがある。

澤菴和尚は、柳生宗矩を接得して、禪劍一味の妙道を說き、且つ忠道を示して、『忠を盡すといふは、先づ我心を正くし、身を治め、毛頭、君に二心なく、人を恨み咎めず、日々の出仕怠らず、一家に於ては、父母に能く孝を盡し、夫婦の間少しも猥になく、禮儀正しく、妾婦を愛せず、道の道をたち、父母の間お

ごそかに道を以てし、下を使ふに私の隔てなく、善人を用ゐ近づけ、不善人を遠ざくる様にする時は、善人は日に進み、不善人は自ら主人の善を好む所に化せられ、惡を去り善に遷るなり、此の如く君臣、上下、善人にして慾薄く奢を止むる時は、國に寶みちて民も豊に治り、國は自ら平になるべし、是忠の初なり、此の金鐵の二心なき兵を以て、上樣の御用に立てたらば、千萬人を遣ふとも心のまゝなるべし」云々と、又『御賢息、御行狀の事、親の身正しからずして子の惡を責むること逆なり、先づ貴殿の御自らを正しくなされ、其の上に御意見もなされ候はゞ、自ら正しく、御舍弟内膳殿も兄の行跡にならひ正しかるべければ、父子ともに善人となり目出度かるべし」云々と示された。明治天皇には『思ふにはまかせずとても人心平らかにこそあらまほしけれ』といふ有り難き御教訓がある。如何なる場合にも平靜の心を保ち、道を修むる志だに堅固ならば胸中常に卓犖たるものがある。

實頭の人は自ら禪機を得る。禪機は圓通無礙であるから、一偏見に囚はれぬに依て、俗界の中に在りて佛國土を現成し、一小事に對しても大眞理を受用する。商人が賣買をする上も諸法實相の法門となり、箒を執て掃除をなし針を把て裁縫する場合にも、修養三昧を離れぬ。『此經の心を得れば世の中の賣り買ふ聲も法を說かな』とは承陽大師法華經の詠歌である。密師伯が把針して居りし時、洞山大師が『把針の事作麼生』と問ひしに『針々相似たり』と答へた。運針に慣るれば針の目がキチンとそろふ、修養と仕事とが一つになつてゐる。吾々の平生も、念々道を離れず歩々道を履み行ふ樣にせねばならぬ。

禪門の祖師が、差別の相を執する者には平等の理を說き、空見を認むる者には實相を示し、有の見をも無の見をも打拂ふのは、人々本具の禪心を自證して、その圓通無礙なる禪機を撥轉せしむるための殺活自在なる手段である。禪心は佛性であるから、慈悲博愛の德は任運に現はれて來る。獨り人間や動物の上ばかりで無く、草木、水土の上にも、仕事の上にも、自づと親切で、叮嚀で、蔭日向なく、玲瓏明白となる。二刀流の元祖宮本武藏正名は、禪に參じて頗る所得のあつた人。彼が歌に『乾坤を其儘庭に見る時は我は天地の外にこそ住め』と詠ぜしは禪心の意で『見るやいかに加茂のきをひの駒くらべ駈つ返すも坐禪なりけり』は禪機を詠じたものである。權勢も利益も決して輕視してはならぬ。出世間の教門であるからとて、名利を厭ふ譯では無い。只だ是を絕對の目的として執着するから罪業の因となるのである。故に、佐藤一齋は『君子亦利害を說く、利害は義理に基く、小人亦義理を說く、義理は利害に由る』といひ、また『眞の功名は道德卽ち是れ、眞の利害は義理便ち是れ』と言うて居る。輓近、世道人心漸く衰へ、名を義理に藉りて實を功利に求め、表に公利・公益を說いて內に私情・私慾を遂げんとする者、日日に多きを加ふるが如し。殊に國民の上位に在る人に、非常に不眞面目な且つ疎暴な風が段々甚しくなる樣に思はれる。實に嘆かはしく思ふ。

政治家とか、宗教家とか、教育家とか、實業家とか、富豪とか、地主とかいふ、治者・識者・權利者の位地に在る人々より、綱紀肅正の實を擧ぐるに非ざれば、國民の思想を健實にすることは至難であると思

ふ。國家の今日は實に重大時機である。國家の盛衰消長は、今日の國民の勤怠・臧否に依て定まる。深く禪心を養ひ、禪機を錬ることは、國民的修養の上に最も必要であらうと思ふ。禪心・禪機は禪門の特有では無い、實に佛教の主眼である。否な、人々箇々の自己を大成する所以の道である。

主人公禪話

主人公の公案

支那唐代の高僧に瑞巖禪師といふ方があつた。毎に方丈に在て、高聲に『主人公』と喚び、自ら答て曰く『諾』、又曰く、『惺々着、他時異日人の瞞を受くる莫れ』、又答て曰く、『諾々』と。扨も面白き獨り芝居である。主人公とは檀那さんといふ程の語である。卽ち、禪師は、時々刻々に『檀那さんや〳〵』と喚びかけられたのである。その檀那さんとは各自の心のことである。心は一身の主人である。心は啻に一身の主人たるのみならず、實に天地萬象の主人である。一身の中に於ては眼耳鼻舌、天地萬象の中に於ては、山川草木・禽獸鳥魚、皆な主人公たる一心の號令に基いて、夫々の作用と特質とを現はして居る。故に、號令の如何に依りて善惡是非の別を生じ、苦樂昇沈の蹟を異にす、『千なりや蔓一筋の心より』一切萬有は皆な唯心の所造である。

心此に在らざれば、見れども見えず、聞けども聞えず、食へども其味はひを知らず。心がフラ〳〵と外に

遊びに出て、歸ることを忘れると、まる／＼此身體の能力を喪失することともなる。『こゝろこそ心迷はす心なれ、心に心、こゝろ許すな』油斷が出來ぬ。明治天皇の御製にも、「われとわが心折々かへりみよ知らず／＼も迷ふことあり』と御諭し給はれてある。故に瑞巖禪師は自ら此の心に呼びかけて主人公主人公、檀那さんや／＼といひ、『惺々着々』お氣をつけられよ、『然らざれば、他時人の爲めに瞞着せられますぞ』と注意して、自ら『はい／＼』といつて、自省を怠らなかつたのである。當時の禪僧は、從晝至夜、修行三昧であつたから、かやうな變つた修行振をもせられたものである。併し、今日の吾々と雖も、矢張、自己の主人公を喚び出して、時々、刻々に警戒を施すことは肝要である。彼の曾子が『吾れ日に三たび吾身を省る、人の爲に謀て忠ならざるか、朋友と交はつて信ならざるか、傳へて習はざるか』といひしが如きは、最も修養に忠實なるものと申すべきである。

扨て、此の主人公と稱する吾々の心の本體は、果して如何なるものであらうか。見んとすれども相なく、捉へんとするも形なし、而も神妙不可思議の作用を發す、泣くも、笑ふも、悲しむも、喜ぶも、皆な此の心神の作用である。孔子やソクラテースの如き聖賢も、秀吉やナポレオンの如き英雄も、皆な此の心の產物である。『心にも及ばぬものは何かあると心に問へば心なりけり』、實に不思議なものは心である。心理の研究、靈の討究は、日一日と其の精緻を盡して居るが、『心體是れ何ぞ』といふ問題に逢着すると、如何なる學者も、未だ徹底したる解答を下すことは出來ぬ。

太田道灌の參禪

有名なる太田持資は、道灌と號して江戸城の創建者である。江戸青松寺雲岡禪師の室に投じて參禪せしに、禪師は、授くるに瑞巌主人公の公案を以てせられた。道灌は、從晝至夜、熱心に『主人公』を工夫し、既に二年を過れども未だ透破することが出來なんだ。一日、越生といへる處にて一人の巡禮に逢うた。行く行く種々の物語りをして、『お前は何處の人ぢや』、『私は京都の者であります』、『彼地の山水と關東の風景とは、孰が好いかい』、『さやうさ、處變れば品變る、京都には京都の特色があり關東には關東の特徴があり、山の隈、河の邊、野も里も皆な夫々の風光が、自づから天眞の美を現はして面白い』、『いやおほきにさうであらう』互に話し合うて居る。とき恰も山寺から鐘の聲がゴーンと聞えて來た。すると巡禮『唯だ鐘聲のみありて異なること無し』――檀那さん、あの鐘の聲だけは、どこで聞ても變りはありませんよといつた。この一語を聞きし瞬間、道灌は忽然として大悟し、主人公に相見することが出來たといふ。

道灌が、其の主定正の爲めに命を奪はるゝ時、道灌は沐浴中で、浴室にゐた。浴室の四方の壁から鎗刀を突出したのだが、道灌は露驚く樣子もなく、『かゝる時さこそ命の惜からめかねて無き身と思ひ知らずば』の一首を詠じ、恬然として落命したとある。斯かる場合に臨んでも、泰然自若、所謂生死岸頭に立て遊戲の三昧に住し得たのは、全く禪定の偉力の致す所であつたのである。

個人的主人公と家庭的主人公

主人公の第一義的參究は、格外の妙調なれば、暫時これを後にし、第二義門に下りて吾人の修養の問題として之を說明すれば、凡そこれを五通に分けて見ることが出來る。一には個人的の主人公、二には家庭的の主人公、三には社會的の主人公、四には國民的の主人公、五には國家的の主人公である。

個人的の主人公とは吾々の精神であるが、主人たるものが主人たるの能力を發揮するには、必ず主人公として恥かしからぬ權威が無ければならぬ。若し主人公にして、マゴ〳〵したりグラ〳〵したりして居ては、到底、一身を統御することは出來ぬ。古人の偈に、『學道猶レ守ニ禁城一。晝防ニ六賊一夜惺々。中軍主將能行レ令。不レ動ニ干戈一致ニ太平一』といふがある。中江藤樹先生の歌にも『何事もおのれに出づる山彥の答ふる音や人の世の中』とあり、古歌にも『我よきに人の惡きはなかりけり人のあしきは我があしきなり』とある通り、善惡も苦樂も多くは己れより出づ、故に、己れを守ることは、恰も戰時に於て禁城を防護するが如く、少しも油斷なく、不斷に能々用心せねばならぬ。晝の中は外界の刺擊を受くることが多い、即ち色・聲・香・味・觸・法の六境が吾々の眼や耳や鼻や舌や身や意を刺擊して、動もすれば迷界に沈淪せしめ、智慧道德の寶を略奪するに依て賊に喩へたものである。能く此の賊を防ぎて魔手の略奪を免かるゝやうにせねばならぬ。又、夜になると、精神が昏々として沈滯するに依つて、能々警しめ勵まして、惺々なら

しむることが、大切である。

是の如く、修養に怠らざれば、終には、朱に交つても赤くならず、此の世に處すること、猶ほ蓮花の泥中より出でゝ泥に染まらざるが如くになり、吾人の精神は常に公明正大にして、恰も中軍の主將が能く三軍を統制して命令を誤らざるが如くになるから、一身五體は齊しく其の命令に從つて毫も違反することが無い。此の時こそ仁者は敵なしで、手を擧ぐれば忠孝となり、足を運べば仁義となる。

昔、劉安世が司馬温公に修養の法を問うた時、公は『其れ誠乎』というて、誠の一字を以て答へられた。安世は更に『之を行ふに何事を先きに務むべきや』と問ひしに、公は『妄語せざるより始めよ』と言はれた。安世は甚だ易きことと思ひしが、扨て、日々の言行を自ら點檢して見ると、中々、容易に正直といふことが守られぬ。そこで、一命懸命に修養して、力行七年の後、漸く言行一致の域に達することが出來たとある。此の主人公、中々、油斷が出來ぬ。故に、吾々は、是非とも自己の主人公を覺醒せしめて、十分に其の權威を高めなければなりませぬ。

次に家庭的の主人公とは、則ち一家の御主人である。一家の主人たる者は、家族全體の模範となる心得を以て一家を統御せねばならぬ。萬一にも、一家の主人が不品行であつたり、我が儘であつたり、道樂者であつたりしたならば、一家の不幸と家族の不安とは果して如何計りであらう。司馬温公も『凡そ家長と爲りては、必ず謹んで禮法を守り、以て群子弟及び家族を御せよ』というて居る。兎に角、一家の中心と

なるべき者は、必ず一定の紀律を設け、常々自己の修業を怠らぬやうにせねばならぬ。

人間といふものは、動もすれば自己本位で我が儘を働き易いものである。酒癖の悪い主人とか、夜遊び好きな主人とかいふものもあり、又は主婦にして虚榮に耽つたり、身分不相應に物見遊山をしたりするもある。かくては、自然、家風が紊れ、家族の心も落着かず、遂には沒落の不幸を招ぐ樣にもなる。故に、一家の主人公たる者は、必ず適當の家憲を制定し、衆に先だつて能く之を守り、而して其子弟や家族を善導せねばならぬ。

縱ひ召使ひの者たりとも、何れも一人前の人間であるから、相當の敬意を拂ふべきである。同情心に乏しき主人を有する家庭は、自他共に敗亡を免れぬ。或主人が、夏の日に、布袋腹を露して丁稚に扇がしめ、それ扇げやれ扇げというて、長い間力一杯に扇がせて、『やれ〳〵これで少しは汗が引込んだ』といふと、丁稚は涙聲で『檀那の汗は皆な私の體へ來ました』といふたそうな、萬事がこんな風では、決して一家の主人公たる權威を保つことは出來ぬ。

社會的主人公と國民的主人公

次に社會的の主人公とは、社會の各階級に於て首腦に位する人々である。主として所謂上流の人々である。上の好む所下之れより甚しきは無し、社會の覺醒とか、改善とか、向上とか、いふことは、今日の急

務であるが、此の目的を達するには、上流の人、又は首腦に位する人々が其の大部分の責任を負はねばなるまいと思ふ。社會多數の人々は存外に無邪氣な者である。自己の生活に大不安を感ずる樣なことがあれば格別であるが、然らざれば、上流の人の意向と指導とに依りて、白くもなれば黑くもなる事が多い。尤も、其の社會の一部には色々樣々な分子もあるには相違ないが、何れにしても、上位の人の志操と言行とが大なる影響を全般の上に現はすものである。それで、迂衲は、社會の腐敗や弊害は、當該社會の上流者が最も多くの責任を負はねばなるまいと思ふ。

今謂ふ所の社會とは、種々の團體や、組合や、同主義者の集團に名けたものである。政治には政治社會あり、實業には實業社會あり、軍人社會・學者社會・宗教社會・勞働社會等は言ふに及ばず、青年團・婦人會等も亦一の社會である。此等社會の上位に眞に有德なる人士があつて、精神を捧げて指導の任に當りなば、必ず其の社會に一新生面を開くことが出來やうと思ふ。今日と雖も、決して其の人なしとは斷言せぬが、偶ま相當の君子ありとするも、同輩の人々は之に對し、其の長處を見ずして短處を採り、種々なる難癖をつけて無能者にして了ふ樣な風がある。さなきだに、長者に對する尊敬心の衰へたる今日の事とて、相當の師表に接しても、之を師表となすの考へがない。況てや、師表たる人の甚だ稀れなる所より、自然に自己本位にのみ傾きて、恰も羅針盤の無い船に乘つて大洋を度る樣な狀態である。故に、社會には、自づから社會を啓導すべき主人公を有する樣にせねばならぬ。又、各社會の人々は、自ら進んで一世の模範とも

なるべく修養することが必要である。

此の外、社會には自から社會精神といふものがなければならぬ。最も健全なる道德を核心として、時代の趨勢に背馳せず、各自の使命を遂行し得べき生々したる精神こそ眞の主人公である。此精神が無ければ、社會存在の意義も無くなる譯である。

然るに、今日の政治界・實業界等に、果して此精神が堅實に養はれて居るであらうか。論より證據、實際の狀態如何を觀察すれば、恰も目と口と計りが働いて、精神なきが如き狀態である。苟も社會の改善發達に志ある者は、此際、大に社會的主人公の出現を期さねばならぬ。

次に國民的の主人公とは所謂國民の思想上統一せられたる一大信念である。謂ゆる大和魂である。迂衲は、曾て國家の三寶と稱して、我が國には萬邦に比類なき寶が三つある、一には國體、二には此國體を中心として養なれ來りし國民精神、三には此の精神を培養するに最も大なる效績を現はしたる佛教を擧げて置いた。

佛教は印度に生じ、支那を經て、我が國に傳はつたものであるが、我が國に入りてよりは、全然、我が國民性に順應し、忠孝の大源を養ひ、國體の尊嚴を擁護するに努めたのである。聖德太子は曾て十七憲法を制定せられ、その第二條に於て『篤く三寶を敬ふべし——乃至——人尤惡なるもの鮮し、克く敎ふれば之に從ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以てか抂れるを直うせん』と仰せられて、佛教を國民精神教化の大

法として御採用になられた。佛教は、元來、甚深の哲理と圓滿なる道德とを多量に包藏したる大宗教であるから、能く國家の理想に順應し、國體の擁護と國民の指導とに當つたのである。加之、印度・支那に於ける佛教の殆ど全部は我が國に傳來し、千有餘年來、多くの高僧賢哲が番々出世して、大乘佛教の秘奥を開き、益々教理の妙致を究め、之が應用の洪範を示されたものであるから、全世界に於て我が國ほど佛教の完備した處は無いのである。故に、之を國體と國民精神とに並べて、我が國の世界に誇るべき至寶であると稱したのである。

我が國民精神は、萬邦無比の國體を基礎として、幾多の鍛練を經、殊に佛教に依て十分に培養せられて居るから、金城鐵壁の如き堅牢無比なる精神の底には、怨親平等に攝取して餘さざる慈悲報恩の觀念が充實して居る。故に、我が國民精神は、大剛にして且つ至慈である。設ひ武を磨き勇を練ると雖も、彼の所謂軍國主義・侵略主義とは大に其の質を異にして居る。此の大精神は、我が國七千萬人の思想を統一總合して、萬々世に渉りて變動は無い筈である。而して其の統一點は皇室中心、忠孝主義に在るのであつて、その中には、自づから博愛も自由も含蓄して居るので、決して單なる帝國主義ではない。

國家的の主人公

次に國家に於ける主人公とは、畏れ多くも我が天皇陛下の御事である。建國以來、皇統連綿、神の御裔

なる陛下は神聖不可侵なる主權者にてわたらせられる。我が帝國は、正しく陛下を主腦とし、中心として國家の體制が存立して居る。事新らしく言ふ迄も無く、我國に於ける君臣の關係は、恰も父子の如きもので その系統に於ても、その情義に於ても、殆ど血族的・歷史的大關係を有し、切ても切れぬ親しみがあるのである。我國の、世界に誇るべき特色中の特色は全く此にあるのである。

近時、外來思想と稱するものがあつて、動もすれば國民の思想に動搖を來たすの恐れがある。是れは吾吾國民が大に警戒すべき緊要事である。併し、世界の表面に如何なる思想が發生するとも、我が國民固有の精神たる忠君愛國の觀念、皇室中心の信念が鞏固でさへあれば、決して國家を危うする樣なことは無い。世界の各方面に革命等の發生する度毎に、却て我が國民性の眞價が現はれて來るのである。

國家的主人公にてまします大君の御大權は、絕對神聖であるに依て、吾々國民は、寢ても寤ても大君の大御心を奉戴し、大君の御傍に奉仕するの心を以て親しみ奉らねばならぬ。和氣清麿は忠誠の士であるが、毎夜、寢室に臥す毎に首を宮闕に向けたとある。古歌に『何處にも君住むかたを枕にてあとにはなさぬ都なりけり』といふ、最も殊勝の心懸けといふべきである。

直接、大君の大政を輔弼し奉る所の大臣宰相の御方々はいふに及ばず、苟も官公吏、若くは軍人となりて、大君の股肱腹心たるべき者は、公明正大、常に國民の儀表となるの覺悟が無ければならぬ。萬一にも、其の志正しからず、其の行ひ私曲に渉るが如きことあらば、自然、大君の御聖德を傷つけ奉る事

となりて、その罪は五逆罪にも勝ることになる。一般國民も亦、飽まで國家の御主人公として其の大御心に從ひ奉り、一點も違背することがあつてはならぬ。要するに、國家の御主人公たる我が大君と、國民的主人公たる統合的精神とが相合して國家永遠の發展を見ることが出來るのである。

宗教的主人公

更に、宗教的主人公といふのが大切である。宗教的主人公とは宗教信仰の中心力を確立することである。信仰の中心力とは、恒久の安心を決定して、自心の全部を支配する程の力を得ることである。吾々の或は佛を信じ、或は法に歸依する心が堅固なる時は、その佛なり法なりが其の身に取りて絶對の至寶であつて、何物にも換へられぬ貴さを感ずるものである。法華經に『一心に佛を見奉らんと欲して自ら身命を惜まざれば、時に我れ及び衆僧倶に靈鷲山に出でん』とあるは、佛を信ずる時の精神狀態である。華嚴經に『若し一句未曾聞の法を聞きて大歡喜を生ずれば、三千大千世界の中に滿つる珍寶を得るに勝れり』とあるは、法を信ずる時の精神狀態である。

佛といふは智德圓滿の大聖である。佛の法は智德開發の功德藏である。故に我が佛教に於ては、佛と法とは一體である。その佛法に歸命して深く信仰を捧ぐる時は、歡喜、身に餘りて、此の信仰は、金錢にも、名譽にも、生命にも換へられぬものである。雪山童子は、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂とい

へる四句の偈文を聞かんが爲めに、其の身を鬼の口に投込まれた。支那禪門の二祖慧可大師は、法を達磨大師に求めんが爲めに、雪深き庭面に立て左の臂を斷ち切られた。堅固なる信仰には必ず不惜身命の精神が現はれて來るものである。

而して、其の目的は、名譽の爲めにも非ず、利益の爲めにも非ず、只々佛の御德と法の力とを渇仰して永遠の大安心を獲得し、以て無上佛果を成就せんと欲するにあるのである。此の信仰はやがて精神の力となり、中心力となり、無限の快樂を生み出す所のものであるから主人公と稱するのである。

信心冥合の威德

此の宗教的中心力たる信仰も、若し其の根柢が薄弱であつたり、其の觀念が不健全であつたりしては、主人公たる權威を備ふることが出來ぬ。世の人の信仰狀態を檢するに各般あるが、至誠眞實の心を備へて、慈悲報恩の念に住し、上菩提を求め下衆生を利する誠意に燃え、信仰の對象たる本尊は智德圓滿にして、死生を超越し、煩惱を脫落したる廣大なる慈悲體であるとき、この信仰は本當に正しき强き信仰である。元來、宗教上の信仰、殊に佛敎に於ける眞の信仰は、所謂神人感應で、佛と我と一體になる處に信仰の妙趣があるのである。『佛身は法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず』とあるから、佛の光明は全宇宙に輝き涉つて居るのである。佛教に於ける信仰は、此の大光明に全身を投ずるのである。此の大光明

は、絶大なる般若の智徳と圓滿なる慈悲の妙徳とである。即ち不可思議光と無礙光とである。佛の在す所が東である西であると局限をつけて爭ふことなどをしない。古とか今とかいふ局限も無い。我々は常に佛の大光明に包まれて居るので、如何なる場合にも佛の御慈悲に漏るゝことは無い。吾等は己れを忘れ、我れを忘れ私心私欲を去る時、そこに涙の溢るゝ計りに有り難く、貴く、嬉しい佛を感ずる。智識も、道徳も、自我も、他我も、一切放下して、眞個無我の境に住するとき佛を感ずる。是に至つては自力とか他力とかいふ判斷も下されるものでは無い。是れ即ち絶對的信念で、こゝを三祖大師は『信心不二、不二信心、言語道斷、古來今に非ず』と唱せられてゐる。

この境地は、但し人間の知識や道理に背馳するものでは無い。要するに、智徳の根本源泉たる宇宙絶對の大道に全身心を投入するのである。佛の御境界は、取りも直さず大道の表現である。大道というても空空寂々なるものでは無い。大道は活々したる靈體であるから、大道そのものがソツクリ智慧の光明幢で慈悲の功徳藏である。此の大道に融合して大道と一如の妙徳を備へたまうたのが佛である。故に、此の佛と一如になるのは、即ち大道と一如になるのである。起信論には四種の信心が說てある。一には根本を信ずること、即ち眞如の法を樂念すること。他は佛と法と僧との三寶を信ずることである。一は主觀的信心で、他は客觀的信心である。但し此の主觀的信心と客觀的信心とが融合する所に人法一體の究竟の信心が得られるのである。涅槃經には一層適切に『大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり』と御

示し下された。眞の信心は是の如きものであるから、此の信心、能く智慧の根底となり、道徳の淵源となり、自づから人生を眞化し、善化し、美化するものである。

現時、人心動もすれば浮薄に流れ、信仰も亦何となく浮々して居る樣な風に思はれる。此の人心の弱點に乘じて、樣々な異教が發生して、益々混濁の度を進めつゝあるかと思はれる。一方には極端に物質的・實利的思想が勃興すると同時に、一方には極端に神秘的・奇蹟的迷信が鼓吹せられて居る。文化運動の盛んなる現代としては、實に不思議なる現象と謂はねばならぬ。畢竟ずるに、宗教的主人公が御留主であるからである。宗教的ならざる者が、宗教らしい假面をつけて、妄りに主人公の席を犯して居るのである。

信仰は道の元、功徳の母である。此の信仰心が健全で無いと、個人的主人公も、家庭的主人公も、乃至、社會的主人公も十分の權威を備ふることが出來ぬ。今や、我が國民は外來思想の襲撃を受けて、防守兩ながら警戒を要すべき大切なる時代となつて居る。政治の問題でも、勞資の問題でも、一として安心し得るものが無い。此の場合、主人公中の主人公たる大信仰心の修養こそ、最も一大事と申さねばならぬ。是れは決して佛教徒としての重要事であるのみならず、我が國家の發展上、特に注意を要する重大問題であると思ふ。願くは、此の際、上下一致して主人公の威德を莊嚴せられんことを。

純一の佛法

花あり月あり樓臺あり

昔、中峰禪師は、趙子昂の死を悼み、有緣の人々に、特に純一の佛法を提唱された。そのときの語に『大道、目前に在り、山は是れ山、水は是れ水。玄機、物表を越ゆ。聖も聖に非ず、凡も凡に非ず。』といはれてゐる。天地の大道は、十方に周遍してゐる。山水草木、一として大道ならざるは無い。宇宙の靈機は、乾坤を包容してゐる。聖凡苦樂、一として佛法ならざるはない。

然るに、吾人が常に大道の中に在り乍ら大道を識得せず。常に靈機を掌握し乍ら靈機を昧却し、枉げて三界六道の巷に迷ひ、漫りに三毒五欲の淵に溺るゝ所以のものは、但だ自ら有無の兩邊に惑うて、憎愛の二見に着するからである。有といひ、無といふ、皆な對待の分別より起る、憎といひ、愛といふ、盡く取捨の憶想より生ず。一たび憶想を斷じ、分別を離るれば、憎愛の境、立處に泯じ、有無の見、長く絕ゆ。此の時始めて、佛法、觸處に現前し、至道、隨處に開通す。

春は花　夏杜鵑　秋は月　冬雪さえて冷しかりけり

四時の循環、萬象の生起、悉く皆佛陀の光明にして、吾人の一擧一動、一進一退も、總に是れ至道の妙用である。道に古今の隔て無きを以て、古今共に是れ一佛道である。法に東西の別なきを以て、東西倶に是れ一佛法である。是を絶對の有とも稱し、非有の有とも名く。法華には唯有一乘法といひ、涅槃には悉有佛性ともいうてある。古人が『無一物中無盡藏、有レ花有レ月有二樓臺一』といはれしも、全く唯有の佛法を宣揚せられたものである。

迷ふものはこれを見ず

天地法界、總に是れ佛法なりと諦觀し去る時、佛法の面目が隨時隨處に活躍する、純一の佛法海には、有に對するの無も無く、有を空ずるの空も無い、一草一木も佛法であり、一塵一芥も佛法である、一擧一動一進一退も盡く皆な佛法である。有無の兩頭に滯らされは、必ずや純一の佛法を識得することが出來るであらう。

往昔、潙山禪師衆に示して曰く、『一切衆生無佛性』と、鹽官禪師は亦た衆に示して曰く、『一切衆生有佛性』と。鹽官の會下に二僧あり共に潙山の處に詣して、無佛性の話を聞き、大に疑心を抱き、且つ怪み、恰も外道の説を耳にせるの感を起し、偶ま庭中に坐して、潙山の高弟仰山の來るを見た。（仰山は祖門傑出の

大善知識である。」二僧は仰山が潙山の高弟であることを知り、仰山に向つて『師兄切に須らく佛法を勤學すべし、容易なることを得ざれ』というた。即ち貴僧の師匠潙山は斷滅の邪説を主張して『無佛性』といつてゐる。大なる誤である。佛法は『有佛性』を信ずる宗教である。佛法の修行は、自己の佛性を顯現するを以てその眼目となす。若し『無佛性』といはゞ諸佛の成道利生、祖師の化導垂手も、恐くは徒勞の業なるべし。貴僧夫れ宜しく邪説の爲めに囚はるゝこと勿れと忠告したのである。仰山は既に潙山の骨髓に徹してゐる。二僧の忠告を聞くや否や、直ちに一圓相を作りて托呈し、却て背後に抛向し、復た兩手を展べて二僧に就て索めた。仰山は無言で大答辯をしてゐるのである。一圓相は即ち佛性である。眞理である。背後に抛向したるは、佛性無の端的である。本來無一物の要處である。此の要處に體達して始めて、純一の佛法を占取することを得る。兩手を展べてサア御呉んなさいと仰山は二僧に迫まられた。純一の佛法を出して呉れといはれたのであるが、惜い哉此の二僧茫然として仰山の意を會することが出來なんだ。すると仰山は此の二僧に向つて『師兄切に須らく佛法を勤學すべし、容易なることを得ざれ』と忠告し返した。是れ賊馬に騎て賊を逐ふの活手段である。二僧は益々沒分曉であつたが、求道の志氣に油斷なかりし爲め、鹽官に返らんとして行くこと三十里、時に一僧忽然として省あり、大に叫んで『方に知る、潙山の所謂一切衆生無佛性の言誠に錯らず』といひ、再び潙山に却回した。他の一僧も亦た更に行くこと數里にして水を渡らんとして忽然として省あり、亦た大に叫んで『方に知る潙山の所謂一切衆生無佛性の言誠に錯ら

ず』というて、同じく潙山に却回したとある。

二見に住すること勿れ

參禪の高士は此の一段の因緣に就き審細なる工夫を下すべきである。徹底無佛性なることを了却するに非ざれば、純一の佛法を辨肯することが出來ぬ。『有りといへば有りとや人の思ふらん答へもぞする山彦の聲』で、有といへば有に迷うて眞を失するは、凡夫の常情である。『無しといへば無しとや人の思ふらん答へてもなき山彦の聲』無といへば無に執して、却て實に背くは愚迷の妄見である。蜷川親當の妻が『麻絲の長し短かしむつかしやうむの二つをいつか離れん』と歎きしも皆な此の有無の二見に囚はるゝを悲しんだのである。

彼の加賀金澤の名藍たる大乘寺の佛心和尙が、長州侯の請を受けて侯の香華院に住せし時、一僧ありて地獄・天堂は果して之れありやと問うた。和尙は直ちに『無』と答へた。其の席に列せし藩士達が非常に驚いて、幾許の時間を經たる後、地獄・天堂は果して之れ無きやと問うた。すると和尙は直ちに『有』と答へた。問者は更に、それは先刻の答へと矛盾して居るにあらずやと責問せしに、和尙は『イヤ御身等には有るというて聞かせねば御布施を出す氣にはなれまいがな』との挨拶であつたといふ。和尙の舌頭には全く骨が無い。盡法界無佛性の時、盡乾坤有佛性である。

理學博士近重眞澄君の參禪錄にも此の話を擧げて、之れに評論を施して『禪宗では實に有と曰つても無と曰つても同じこと、和尚決して滑稽を演じて居るのでは無い。有卽無、無卽有である。それを藩士に向うて有と曰つたのは、和尚全く御布施がほしかつた。否、御布施を出す樣な心に成つて欲しかつたので有る。御布施を出さゝうと云ふのは世間地である。無と云つて居る所は出世間地である。世間地と出世間地とを自由に捏廻して洒脫自在にやつて居る』と言はれてある。博士の禪に對する研究は頗る着實なりと謂つべし。

然れども、祖師門下に於ける有無の公案に就ては靴を隔てゝ痒を搔くの感なき能はず、若し有を以て世間地と爲し、無を以て出世間地と爲さば、恐くは有字の公案に辜負するのみにあらず、無字の公案にも蹉過することを免れざるべし。體用とか理事とか色空とか、實在界・現象界とかいへる格式に滯らば、爭でか純一の佛法を識得せんや。三祖大師が信心銘に於て『二見に住せず愼で追尋すること勿れ』と仰せられたは正しく之れが爲めである。然れば卽ち有無の兩邊を泯絕して、始て純一の佛法を見破し得ることが出來るのである。

至道は無難なりただ揀擇を嫌ふ

純一の佛法なる正當時は、盡法界是れ佛陀の覺體である。悉有佛性の正當時は、全宇宙是れ祖師の妙道

である。雪を戴ける山岳、石に咽ぶ溪水、何れか佛法にあらざる。霞に咲ふ梅花、霜を凌ぐ青松、何れか佛法にあらざる。森羅萬象、一々大光明を放ち、大智慧を開き、大神通を現じ、大利益を施して居る。唯だ貪欲熾盛の者は之を見ること能はず、憎嫉瞋恚の漢は之を見ること能はず、愚痴邪狂の類は之を見ること能はず。至道無難、唯嫌揀擇である。禪の妙心妙機は全く玆に在るのである。

今や禪風海内に遍しと雖も、正傳の禪旨未だ宣揚するに至らず、動もすれば一機一境の禪を弄して、磊落疎暴を以て佛法と爲し、呵佛罵祖の機を學んで、自負尊大を以て祖道と爲し、或は人生を偏輕して、超世に誇り、人事を蔑如して、脫俗を擬し、其の言ふ所、智慧なく神通なく、其の行ふ所、慈悲なく、光明なき者あり。是れ皆な禪を學んで未だ成らざるものと謂つべし。故に吾人は斷言す、盡法界に向て純一の佛法を顯現せんと欲せば、先づ自己の身心をして佛法たらしむべし。

殺活の靈機

殺人劍と活人刀

佛教に於ては掃蕩門と建立門との二門を設けて、群生を利濟する樣になつて居る。邪魔な物を取除く方面を掃蕩門といひ、正しき道を顯現する方面を建立門といふ。掃蕩門の極點に達したものが大般若で、建立門の極點に達したものが華嚴經・法華經である。

吾々の實際的修行の上から見ても必ず此の二門が具備せねばならぬ。精神の上から申せば私慾・邪見、身體の上から申せば惡き習慣・習癖、此等の者は、斷然掃蕩し盡すの意氣がなければ、決して本當の修養は出來ぬ。而して、之と同時に、健全なる信念を養ひ、圓滿なる行持を勵み、始めて完全なる人格を建立することが出來るのである。

佛教には、七佛通誡の偈といつて『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教』といふ教がある。此の偈文の中、諸惡莫作は掃蕩門で衆善奉行は建立門である。又、淨土門では厭離穢土欣求淨土といふが、厭

離穢土は掃蕩門で、欣求淨土は建立門である。

縱ひ煩惱卽菩提、生死卽涅槃と唱ふるも、修行の方面からいへば、煩惱と菩提とは澁柹と甘干の關係の樣なものである。『惡しきとて唯一筋に捨るなよ澁柹を見よ甘干となる』澁柹卽甘干なりと雖も、直ちに澁柹を食して甘干なりとはいふべからず。澁柹を離れて外に甘干ありといふことを得ざるも、澁柹その儘を喫して甘干なりと稱するも亦是れ妄見なり。澁柹は宜しく純熟せしめて、其の澁味を去らざるべからず、是れ卽ち修養なり。その澁を去るのは掃蕩門にして、甘干を成ずるは建立門である。禪門に於ては、此の掃蕩門的威氣を殺人刀といひ、建立門的修德を活人劍といふ。此の二門に於て、圓轉無礙なる、正に是れ殺活の靈機である。

猛然劍を執て起ち、敢然銃を提げて戰ふ、百萬の强敵前に當り、鐵壁銀山の路を塞ぐあるも、進んで之を粉碎し盡して寸塵を餘さず、是れ殺人刀の銳鋒である。『國のため仇なす仇はくだくともいつくしむべきことなわすれそ』と、明治天皇の御製あらせられて、敵國の將卒をも憎ませたまはず、結局、東洋全體の平和を克服し、相共に文明の慶に賴らんことを期したまうたのは、實に絕大なる活人劍の威德である。

心賊の掃蕩

又、自己が自己に對する修養の上にも、此の靈機を撥轉することが必要である。山中の賊を破ることは

易く、心中の賊を敗ることは難し』心中の賊を殺し盡すに非ざれば、眞個の活生命を得ることは出來ぬ。

性空妙普禪師は曰く

學道猶如レ守二堅城一　晝防二六賊一夜惺々
中軍主將能行レ令　不レ動二干戈一致二太平一

と晝は眼耳鼻舌身意の六根門を警護して、色聲香味觸法の六賊の襲撃を防ぎ、彼をして一歩も心王の威嚴を犯さしめざる樣にし、遂には彼を感化して歸順せしめ、善良なる民たらしむべきである。卍山禪師も亦吾人に示して曰く

常守二心城一護二心王一　常鞭二心馬一追二心賊一
常揮二心劍一警二心兵一　常握二心弓一退二心怨一
若能恁麼用レ心　則不レ出二閫外一坐致二清平一

と。試に各自の胸中を洞察し觀よ、各自の精神界は、常に良心と妄念、菩提と煩惱の交戰地域となつて居る。卽ち神兵と魔軍との爭闘が間斷なく行はれて居る。而して、動もすれば魔軍の勢が却て猖獗を逞うし、神兵は日夜に敗退の狀を呈して居る。是れが凡夫界の有樣である。智識を以て心城を守らんとすれば、魔軍は忽ち五慾を以て我を襲ふ。是を以て智者學者と稱する者も、遂には不仁不義の狼穽に陥いることを免れぬ。信仰を以て心王を護らんとすれば、魔軍は忽ち迷執を以て我を誘ふ。是を以て宗教家・信仰家と稱せ

らるゝ者も、遂には迷信固陋の群に伍し、却て常道に反し、自法愛染の我見に墮するの罪を致す。又、意志力を鍛錬して神兵を進めんとすれば、魔軍は殘忍を以て我を欺く。是を以て剛毅勇猛の士と稱せらるゝ者も、遂には傲慢不遜、我見增長の徒と爲り、剛愎狼戾、亂暴狼藉の漢と爲る。中々に侮り難きは魔軍の戰術で、禦ぎ易からざるは魔將の勢力である。

趙州無字の利劍

是に於てか、吾人は第一に丈夫決烈の志を奮起して、縱橫無盡に殺人刀を揮ふの勇氣が無ければならぬ。禪門に於ける工夫と信念とは何れも最も猛利なる殺人刀である。無の字の公案についても、一度は通身の疑團を起して參究して見るが宜い。趙州に僧あり問ふ、狗子に還て佛性ありや也た無しや。州云く無、此の無の一字は有無を超絶したる無である。若し有無の兩頭を執して、佛には佛性あり、狗子には佛性なしと思ひ、若くは人間には佛性あるを以て成佛すべし、狗子には佛性なきを以て成佛すべからず抔といはば、是れ差別の相に着する妄見にして、果然として依草附木の魍魎たるを免れじ。故に此等の妄執我見を打破し盡して、無門關に謂ゆる『關將軍の大刀を奪得して手に入るるが如く、佛に逢うては佛を殺し祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、六道四生の中に向て遊戲三昧す』といふに達得せねばならぬ。

臨濟禪師曾て黄檗に三度『如何なるか、是れ佛法的々の大意』と問うた。黄檗は三度ながら棒頭を揮て臨濟を打れた。此の痛棒は獨り臨濟を打着せしのみならず、天地萬象をも打着して粉碎したのである。黄檗も臨濟も倶に棒殺して全宇宙一微塵の存在をも許さぬ時、眞個の佛法が百草頭上に脱體現成するのである。然るに悲しい哉、凡夫は殺人刀を使ひ得ぬから、自己に欺かれ、自己に瞞ぜられ、自己の爲に三惡道に墮落せしめらる。

信仰の活三昧

菅公の如き大賢すら配所の憂愁に堪へず、時に左の如き述懐の吟があつた。

病追二衰老一到　愁逐二謫居一來
此賊逃無レ路　觀音念一回

と。『觀音を念ずること一回』は信念の發現である。此の信念亦是れ殺人刀である。信念は能く精神を統一して偉大なる威力を與へ、爲めに所有魔軍に打勝つの妙用がある。觀音を念ずる力の功德廣大なることは、普門品に說き盡されてゐる。信念は愉快を生じ、愉快は大勇を生ず。故にカーライルも『驚くべきは愉快なり、忍耐は此の中より生ず』というてゐる。スペンサーも『暴風怒濤の裡に在ても磁石は其の方向を誤まること無し。そは磁石は地球の北極を指すのみにて、風波の勢力は何の影響をも之に及ぼす者に非ざれ

ばなり、堅固なる信仰も亦是の如し、其の理想とする所は天の北極なれば、浮世の風波の爲めに些の變動をも蒙るべきものに非ず』といふて居る。信仰の力は實に偉大である。而して禪と信仰とは遂に一致して相離るゝものでは無い、何となれば信仰の極致には必ず三昧力があるからである。

殺人の刀はこれ活人の劍なり

此の殺人刀を揮て、自己心中の魔賊を殺し盡せば、忽爾として本具の性德の現前すること、雲晴れて月現ずるが如くなるべし、これを承陽大師は『身心自然に脱落して、本來の面目現前す』と仰せられ、常濟大師は『妄緣盡る時、妄心隨て滅す、妄心若し滅せば不變の體現じ、了々として常に知る寂滅の法に非ず』と仰せられた。本來の面目が現前し、不變の靈體が現前して了々として常に知るその境地は、是れ則ち活人劍そのものである。此の活人劍を使得し去る時は、布施となり、愛語となり、利行となり、同事となり、六波羅密となり、萬行となる。釋尊四十九年の御化導も、盡く活人劍の靈機である。

昔、武田・上杉・川中島に對峙し、上杉謙信は奇襲直に武田信玄の本陣を猛撃した。謙信單騎進で信玄に逼る、信玄に多くの影武者ありて其の軍裝を同うす、何れが其の人なるやを辨じ難し。中に眼光炯々威風群を超えたるあり。謙信は瞥見して是れ必ず信玄なるべしと思ひ、直ちに大刀を振翳し、大喝一聲、『正當恁麼の時如何』と言うて打下した。彼は果して信玄であつた。軍扇を以て之を受け『紅爐上一點の雪』と答へた。

紅爐上の雪有るが如くにして無し、敵といひ味方といふ畢竟一時の影幻のみ、豈に實體の認むべきあらんやといふの見知であらう、謙信再び大刀を振翳し『消て後如何』『信玄復も軍扇を以て受け『犀川水潺々』と答へた。犀川水潺々、是れ則ち天地萬象の實相である。凡夫は幻影を執して妄りに取捨憎愛の念に蔽はれ、爲めにその實相を見ることが出來ぬ。或は繩を以て蛇と誤まり木骨を以て鬼面と錯まる。故に繩なき繩に縛られて、自ら求めて三界六道に輪廻することを致す。毫釐も差あれば天地遙に隔たるとは此の事である。

然れば、吾々は先づ以て、自己の妄想我見に對して殺人刀を揮ひ、而して後、活人劍を提げて濟生利民の佛行を營まんことを期せざるべからず。社會の發達を圖るには先づ以て社會を毒する病源を究明して、斷然之れが匡正改革に努め、而して後善良なる事業を振策すべきである。然れども此の殺活の靈機は必ずしも前後あるに非ず、殺人刀卽ち活人劍の道理あることを心得置かねばならぬ。惡を去ること一寸なれば善に進むことも亦一寸なり。邪を退くこと一尺なれば正を顯はすことも亦一尺なり。諸惡莫作の時、自ら衆善奉行は現はるゝものである。毒にもならず藥にもならずといふことを申すが、毒にならぬ物は必ず藥になつて居る。唯だ使用法が不充分なるが爲めに藥にならぬと思はれるのである。毒を去るに全力を盡し、修養を積むものは、必然の結果として藥になつて居る。故に殺人刀を使得するに於て必ずその全力を傾注せねばならぬ。

國際競爭の如き、國家的殺人刀を揮翳して驀進すべし。國家の大理想と人道の根本義とに基いて、國民全體が大々的覺悟を以て、殺人刀を揮はねばならぬ。卽ち擧國一致、確固不拔の志氣を鼓して、全世界の魔軍をも降伏し盡すといふ程の威力を揮はざるべからず。國家の大目的は頗る宏遠である。吾等國民の責任は益々重大なることを忘れてはならぬ。吾々は常に此一生を捧げて國家と人道との犧牲となるの覺悟を有せねばならぬ。

山中鹿之助は常に三日月を拜して祈請を籠めた。その目的は『願くは我に七難八苦を與へよ』といふのであつた。それでいゝ、釋尊は娑婆往來八千返せられたが、その本誓は魔軍を退治して一切の衆生を安穩快樂ならしむるためであつた。高祖大師は釋尊の降誕會のとき、衆に示して、『若し法を傳へて衆生を度するに非ざれば、未だ名けて眞實の報恩とは言はれぬぞ』と、仰せられた。法を傳ふるとは正法の弘通である。上、正法を弘通し、下、群生を利濟す、諸佛菩薩の本誓願は唯だ是れのみである。快川和尚は織田信長に燒き殺さるゝ時『安禪何必須二山水一　滅二却心頭一火亦凉』といつた。

死中に活あり活中に死あり、動處に靜あり靜處に動あり、木人方に歌ひ石女立つて舞ふ。是れ則ち禪機の活三昧である。此の際此の時こそ實に是れ鍊機の好時節、時、恰も國家難局に際す、實にこれ鍊機の好時節なり。此の機逸すべからず勇猛精進宜しく活禪定を打すべし、殺活の靈機揮ふべし。

戰爭も亦これ佛行なり

無敵の師

我が帝國は、忠孝を以て經とし仁義を以て緯とし、以て世々厥美を濟し來つたものである。殊に我が至尊陛下は、皇祖皇宗、如天の隆德を承け繼がせられ、至仁至慈、四天下を照したまふに依り、神武天皇の御勅に『六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ふて宇と爲す』と宣らせたまひし如く、其の御恩德は五大洲をも包容して盡く仁義の德を敷かせらるれば、天上天下、一國一人としてこれを敵として背すものはあらせられぬ。陛下の赤子たる吾々臣民も亦此の大御心を奉戴して、益々博愛の德を發揮し、以て大國民の襟度を中外に示すの覺悟を忘れてはなりませぬ。故に日清の役と云ひ、日露の役といひ、日獨の役といひ、西伯利出征といひ、終始一貫、盡く仁義の師に非ざるは無い。卽ち、諺に云ふ『慈悲の殺生』である。

明教大師、嘗て兵を論じて『兵は刑なり、仁に發して義を主とす、仁に發すれば仁を以て亂を憫れむ、義を主とすれば義を以て暴を止む、義を以て暴を止む、故に相正うして相亂れず、仁を以て亂を憫れむ、

故に生を圖つて殺を圖らず、是故に五帝の兵、之を正刑と謂ひ、三王の兵、之を義征と謂ふ、義征擧つて天下懷かざる莫く、正刑行なはれて天下順がはざる莫し』というてある。又『夫れ兵は逆事なり、已む無くして君子之を用ゆ、是の故に聖人は德を尙んで兵を尙ばず』というて、文中子の『亡國は兵を戰はし、霸國は智を戰はし、王國は仁を戰はし、帝國は德を戰はし、皇國は無爲を戰はす』といひし語を引て置かれた。

兵は逆事なりと雖も時としては止む無く之を用ゆることがある。而して之を用ゆるは全く陛下の御方針即ち我が帝國の最大目的たる東洋の平和と、我が帝國の發展との爲めである。換言すれば、平和の爲め、人道の爲めの戰である。然れば我が帝國軍人の戰に臨むは、畢竟、平和の爲め人道の爲めに獻身的努力をするのである。此の意意に於て、我が帝國の兵は實に無敵の師と謂ふべきである。

されば日露の役起りし折、明治天皇は深く之を慨かせられて、『四方の海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ』と御製あらせられた。軍人に對せられても『國の爲め仇なすあだはくだくともいつくしむべきことな忘れそ』といふ有り難き御諭しすらあらせたまうたのである。聖德太子の十七憲法の第六に『惡を懲し善を勸むるは古の良典なり、是れを以て人の善を匿すこと無く、惡を見ては必ず匡すべし』云々とある。是れは國民に對する賞罰の原則を示されたものであるが、戰爭も亦決して此の意に基かざるものでは無い。害蟲の膚を侵すあれば、時としては其の膚を切解せねばならぬ。邪毒の肉を侵すあれば、

時としては其の肉をも斬り取らねばならぬ。諺にいふ『小の蟲を殺して大の蟲を助くる』のである。然れども、切解其の宜きを得ざれば、却て毒害を助長することもある。手術、其の正を得ざれば反て生命を失ふこともある。されば政治家でも、實業家でも、大々的覺悟を以て國家の威信を失墜せぬ樣に努力せねばならぬ。我が軍人諸公にして、能く此の意を體せば、忠孝も、仁義も、盡く此の中に含有せられるに依つて、戰爭も亦一大道德の活行持と稱することが出來る。

昔、弘安の役、元の大兵突如として我が九州の博多を侵し、其の勢頗る猛烈であつた。我が國は恰も青天霹靂の思ひを爲し、都鄙倶に騷然たり。時に北條時宗公が執權職として鎌倉の幕府に在りしが、彌々乃公自ら出馬して强敵を邀擊せんとし、將に鐵馬に跨つて出發せんとするや、直ちに其の師たる圓覺寺開山佛光國師祖元禪師の許に赴かれ、行きなり『大事到來せり』と言はれた、師曰く『如何か向前せん』さあどう進むぞ、時に公は威を震つて『喝ッ』と大喝せられた。師は莞爾として『眞の獅子兒、能く獅子吼す』といはれた。是れ實に印可證明である。公の一喝は正しく公の渾身力である。鞍上に人なく鞍下に馬なし。自を亡じ他を亡じ、生を超え死を越える底の大力量であつて、百萬の大敵も之を視ること土芥の如く、鐵壁銀山も一蹴して便ち摧くべき大手脚である。我が軍人諸君の如きも亦之に倍增する大力量を養成し、以て國家に報效して戴かねばならぬ。

抑も、軍人としての、唯一の生命は忠節である。忠節といふは一身を犧牲にして御國に報效するの精神力である。我が國は國民皆兵といへる兵制に依り、日本全國の臣民は一人も殘らず皆な軍人たるべき大義を負うて居る。男子も、女子も、爺さんも、婆さんも、皆な兵隊であるのである。併し、國家を擁護するには武器を持つ人が要る。そこで國民の內から最も軍人に適する者を選んで、軍務に從事せしめらるゝのであるから、今の軍人諸君は、吾々國民全體の代表者となりて、國家の干城に任じて居らるゝのです。故に此の忠節てふ精神力は國民全體の生命といはねばならぬ。

軍人の御勅諭には忠節の本義を御諭し下されて『軍人にして報國の志堅固ならざるは、如何程技藝に熟し學術に長ずるも猶偶人にひとしかるべし、(乃至)國家を保護し國權を維持するは兵力に在れば、兵力の消長は是れ國運の盛衰なることを辨へ、世論に惑はず、政治に拘はらず、只だ一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ』と御示し下されてある。忠節の忠といふのは眞心のあらん限りを傾けて大君の爲めに盡し奉ること、節といふは、如何なる場合にも二心を抱かざることである。我が國は忠孝一本の大道に依て國民道德が涵養されつゝあるのであるから、此の忠節の精神は百行萬德の淵源であつて、卽ち絕對的道德の基礎である。『國を思ふ道に二つは無かりけり戦の場に立つも

立たぬも』と明治天皇が御製あらせられし如く、軍人ならざる者と雖も常に此の忠節を以て本分と爲ねばならぬ。況てや軍人は忠節の精神が生命であるから、如何に困難なる場合に遭遇するとも、微塵計りも此の精神の弛まぬ樣に百錬千鍛して置くことが肝要である。

內、能く忠節の德を蓄ふれば、自づから總ての行動上に道德的價値を現はすものである。忠はマコトであるから眞に忠を守る時は、その一道が能く誠實の德を產み、信念の力を進め、慈愛の情をも發し、和合の道にも徹するものであります。又、節は竹に節のある如く各自の本分を堅持して二心を起さゞるの謂である。故に、眞に節を守る時は、その一道が能く義務を盡し、職分を修め、正義を守り、天職を全うするものであります。古人が『民やすく國おさまれと祈るかな人の爲よりわが君のため』、『君のため世のため何か惜しからん棄てゝかひある命なりせば』と詠ぜしが如きは、全く忠の本旨に叶うて居る。又『山はさけ海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも』と詠ぜしが如きは節の心に合うて居る。軍人の御勅諭には『忠節を盡すを本分とすべし』といふを劈頭にして『軍人は禮義を正くすべし』、『軍人は武勇を尙ぶべし』、『軍人は信義を重んずべし』、『軍人は質素を旨とすべし』といふ都合五箇條の標準を御諭し下されてあるが、畢竟するに忠節の二字が一番根本です。眞に忠節なる者ならば、自然に禮義も正くなり、武勇も養なはれ、信義も質素も守られるものです。

凡そ人の人たる目的は果して何でありませう。無限の空間に渺たる五尺の體、無限の時間に僅か七十年

の壽命、考へて見れば人間なるものは餘りに微弱なものではありませんか。縦ひ百年の壽を保ちしとて、死ぬ時の味は矢張同じ様なものです。如何に長命したればとて鶴は千年龜は萬年の一少部分に過ぎぬでは無いか。巨萬の財を積み最高の位に昇りしとて、一息截斷の時は無一物の面目に立ち返るの外は無い。併し乍ら、幸にして道を守り道を行ふ時は、吾々の一擧一動が幾千萬人の幸福を進め、幾千萬年の後に迄も其の遺德を傳ふることが出來るものです。朝に道を聞て夕べに死すとも可なり、人間の價値は壽の長短や財の多少に依つて定められぬ。道を盡す者は貴く道を盡さゞる者は賤いのである。

宋の方蛟峰は『富は道德を蓄ふるより富めるは莫し、貴きは聖賢たるより貴きは莫し、貧きは未だ道を聞かざるより貧きは莫し、賤きは耻を知らざるより賤きは莫し、貧うして分に安んぜざる之を窮と謂ふ、仕へて能く道を行ふ之を達と謂ふ、志を一時に得る之を夭と謂ふ、芳を百世に流ふ之を壽と謂ふ』というて居る。依つて私も亦之に倣うて、某軍人の囑に應じて『富は忠節を守るより富めるは莫し、貴きは孝道を盡すより貴きは莫し、貧きは恩誼を忘るゝより貧きは莫し、賤きは信義を缺くより賤きは莫し、職を曠うし約を破る、之を窮と謂ふ、分に安んじ業を樂む之を達と謂ふ、榮を一時に誇る之を夭と謂ふ、功を千歳に傳ふ之を壽と謂ふ』と書して上げたことがある。而して此等は皆な忠節が中心となつて諸德を成ずるのであります。

軍人が戰場に臨む、本より決死の覺悟で無ければならぬ。去り乍ら『死生命あり、富貴天に在り』といふは慥かに眞理の一面である。尤も、富貴天に在りといへばとて、寢て居て富貴を生み出すことは出來ぬ。天とか命とかいふは、我が佛教に所謂因緣の理を指したものと見るが宜い。既に因緣であるとすれば、人力のあらん限り、攝生にも注意し、勤儉をも守らねばならぬ。然らざれば、不攝生といふ新たなる原因に依りて、有る壽命をも減殺するの結果を招ぎ、新たなる怠惰、若くは奢侈の惡因に依りて、持て生れた富貴なる果報をも失墜することがある。されど、命數の如きは、多くの場合、夙緣の定まる所があるからして、戰場に臨みし爲めに死するものとは斷じ難いものである。故に軍人諸公の如きは死生を命に任せて決して頓着せざる樣にせねばならぬ。唯だ忠節といへる大道を獨歩して勇往邁進するが宜い。

楠公は四十三歲を一期として湊川の露と消えられたが、其の神格的生命は千載の後益々光輝を放つて居る。忠孝兩全と稱せられたる楠正行公は、二十三歲の時『かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる』の一首を吉野の如意輪堂の扉に記して、四條畷に戰死せられたが、其の神靈は帝國の史乘に雄大なる光彩を添へて居る。楠公をして、南朝第一の功臣と歎稱せしめし菊池武時公は、四十二歲にして陣歿せられたが、其の道德的生命は永久的に不滅である。幕末の偉人吉田松陰先生は三十歲にして死刑に

處せられたが、『身はたとひ武藏の野邊に朽るとも留め置かまし日本魂』と詠ぜられし忠魂は、今猶ほ精神界に活躍して居るでは無いか。此等の諸公は、肉的生命は決して長しと謂ふべからざるも、靈的生命は天地と與に窮りは無い。人間の眞價値は全く玆にあらねばならぬ。

抑も道德なるものは無階級のものである。道德的精神には上下の差別は無い。軍人としては、上、元帥大將より、下、一兵卒に至る迄、儼然たる級階があつて、少しでも之を侵すことは出來ぬ。然れども、忠義孝行等の道德に至つては、箇々、唯我獨尊である。一兵卒の忠節は其の分量を少くせよとか、元帥大將の忠節は其の範圍を廣くせよとかいふ制限は無い。故に、恐れ多くも教育の御勅語には『朕、爾臣民と倶に眷々服膺して咸其の德を一にせんことを庶幾ふ』と御仰せ遊ばされてあります。何と勿體ないことではありませんか。吾々は斯る尊とき天爵を戴いて居るのであるから、自ら第二の楠公たり第二の武時たらんことを期せねばならぬ。

『徒らに百歲生けらんは、恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり』とは、承陽大師の慈訓である。縱ひ百歲の壽命を保つことを得ても、何等爲す所が無かつたならば、決して生き甲斐のある人とは申されませぬ。之に反して、忠節三昧の人となりて道の爲めに其の身を棄てなば、所謂生きては忠良の士となり、死して護國の靈となり、其の偉勳は萬代不滅であるではありませんか。況てや吾人の心體は元來不生不滅である。生死あるが如くに思はるゝのは、晝と夜との如きものです。太陽西に沈むも太陽其の物は決して滅したる

に非ず、明月東より現はるゝも明月其の物は決して生じたるに非ず、隱顯出沒は天地間に於ける活動變化の狀態たるに過ぎぬ。楠公は戰死の前日、明極楚俊禪師に參じて『生死交謝の時如何』生と死との交代の際に於ける覺悟を進問せられた。禪師答へて曰く『兩頭倶に截斷して一劍天に倚て寒し』、生と死との兩頭を截ち切て見よ、不生不滅の心劍は天地間に於て無限の活動を呈して居るのである。公は更に『畢竟如何』と安心の歸着を問はれた。禪師時に威を震つて一喝せられた。既に生死を超越し來る、此の時、自己の生命は無限絕對である。是れ則ち宗敎的大安心の妙處であるから、外に別に安心の道を求むるには及ばぬではないかと仰せられた。楠公は是に於て金剛不壞の大信心を獲得せられたのであります。

忠節三昧

信心といふは精神の歸依處を決定して全身心を是に投ずることである。故に忠節三昧の如きも亦一の大信心である。忠節の本は誠である。此の誠を操持して終始渝らず、縱ひ水火の中に陷るとも微塵も動ぜざる是を安心と稱す。軍人の如きは常に此の大信心を把定して陣頭に立つべきである。

甲府慧林寺の開山快川禪師は武田家の歸依僧であつた。武田家滅亡の時、織田信長公の爲めに燒打をされた。衆を率ゐて山門の樓上に登り、火焰に包まるゝに及び、大衆に對して『諸人者大火焰裏に向て如何が法輪を轉ぜん』と下語せられた。衆、各々一轉語を呈す。時に炎々たる猛火は既に樓上に漲ぎり迫つた。

禪師は獅子吼の勢を以て、『安禪不必須山水、滅却心頭火自涼』と擧唱せられ、遂に一衆と共に火中に寂を示したといふことである。

上杉謙信公は春日山下林泉寺宗謙禪師に就て參禪し、達磨不識の公案を與へられ、工夫幾旬、遂に大悟して自ら不識庵主と稱された。其の壁書に『生きんと願へば必ず死するものなり、歸らずと思へば歸る』とあるさうです。こゝにも死生を超越したる禪機が現はれて居る。

伊達家の忠臣として有名なる伊達安藝は圓同寺の石水和尚に就て參禪した人である。主家の大事に當り將に死を決して江戸表に出でんとする時、特に和尚を尋ねて教を乞うた。其の時、和尚は『如何なるか是れ劍刄上の事』と試問した。兎に角、江戸の邸には惡人輩が蔓つて居る。其の敵中に飛び込んで行くのであるから白刄を渡る樣な危險を侵さねばならぬ。時に安藝は『法戰場中に勝旗を立つ』と答へた。邪は竟に正に勝たず、正義は最終の勝利者である。和尚は更に『意旨如何』安心問題に對する點檢です。安藝は直ちに『無二無三』と答へた。是れ卽ち忠節三昧である。和尚、猶ほ試驗の手を緩めず彌々其の本陣に切り込んで『如何なるか是れ生死の大事』と問うた。安藝は響の聲に應ずるが如く『一超直入如來地』と答へた。生死の大事を明め得たる者の前には、至道坦々、生死などいふ關所は無い。盡天盡地是れ佛陀大覺の放光明である。當處蓮華臺、觸處涅槃門である。和尚、大に感嘆して『危きを見て命を致すは、卿に非ずして誰か之を全うせん、往け、往て退くこと勿れ』というて別れたといふことであります。

赤穗義士の首領たる大石内藏之助良雄は、主家の大事に遭ひし時、赤穗華岳寺の良雪長老より『君辱めらるれば臣死す、唯箇の死、是れ當面の鐵橛子なり』とて死の一字を授けられ、生死を超脱したる絕對の死三昧に住したのである。後、佯て放蕩を裝ひて敵の警戒を鈍らし、彌々時節到來と見て江戶表に下る時、山科の自宅に於て良雪長老に別れを告げ、語を改めて『扨、吾々は彌々以て復讐の期も近づきたり、されど、此の世に於て劍刄上に身を躍らしなば、未來は恐くは修羅道の巷に迷はん、願くば我等が爲めに厚く菩提を弔はれよ』と時に長老は『內藏之助殿、御身は今尙ほ恁麽の妄想を抱かるゝや』と申した。大石は合點ゆかず如何なる旨意ぞと尋ねしに、長老、再び口を開き『貴殿等、今日の事ある、全く君の爲めに已れを忘れ、道の爲めに身を捧げたのである。人、生れて道に殉ず、是れ佛祖の所期にして聖賢の志す所である、豈に喜ぶべきに非ずや、道に殉じて喜んで終りを遂ぐ、此の心卽ち是れ道心、此の身卽ち是れ法身なり、能く此の意を領せば何の憂ふることか之れあらん』と述べければ、大石は非常に滿足し、欣然袂を拂て江戶に下り、間も無く復讐の壯擧に及んだのである。故に、彼が死に臨むや泰然自若『あらたのし思ひは晴れつ身はすてつ浮世の月にかかるくもなし』、『極樂の道は一筋君とともに阿彌陀を添て四十八人』の詠歌を遺し、自刄したのである。忠節の三昧は、やがて大信心を獲得するに依て、生死岸頭に立て圓通無礙の大安心を得ることが出來るのである。

併し、信心なるものは御佛を以て歸依處とするのであるから、決して冷靜のものでは無い。その御佛は大智慧と大慈悲との功德體であるから、御佛に對する信心を發起する時は、恰も赤子が慈母の懷に投ぜしが如く、安心歡喜言ふ所を知らざる程の大滿足である。而して、其の大智慧も、大慈悲も、ツマリ誠の一字に歸するのであるから、此の德を修めて自己心中の至寶となすことを得ば、自づと絶對的忠節三昧の人となるのであります。故に、大慈悲父たる御佛の方からいへば是を事信といひ、忠節三昧の方からいへば是を理信と稱するを得べし。併し事・理、元來一如である。こゝを承陽大師は『諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり』と仰せられました。

楠公は觀音大士を信仰して、戰場と雖も大士の尊像に離るゝことは無かつたのである。新田義貞公も亦非常なる信者であつた。公の武士道訓には『但、信力なくして戰に勝つ事なし、されば每朝早く起きて皇室の御名を微音に七遍唱へて、次に鏡を取りて面を見、次に曆を取り其の日の吉凶を知り、次に楊枝を取りて手を洗ひ口を漱いて、西に向うて念佛若くは眞言、本尊は心の引くに隨うて祈念すべし、神明に横道なく意正直を好み、廉直を宗として身の災を遁れ、祈念を先として家の運を待つべし』云云とある。德川家康公は日課三萬遍の念佛を唱へ、關原合戰以後は日課六萬遍を唱へたとある。上杉謙信公は毘沙門天を

理想の本尊として『假令隻手劍を揮ふも之を毘沙門天の利劍に比すべく、慈悲忍辱の手を以て破邪顯正の事に從はん』と誓はれた。加藤淸正公は『南無妙法蓮華經』の題目を幟標として鬼神の如き勇を振はれた。其の他、古の名將勇士にして信仰心の無き人は恐くは一箇もあるまい。是に於て我が國の武士道と佛教とが如何に離るべからざる關係あるかといふことを味うて見るが宜いと思ふ。

斯くいへばとて、强ちに古に倣へと御勸めするのでは無いが、人には必ず精神の奧底に大なる力が無ければならぬ。況てや生死の懸崖に立ちて砲烟を侵し彈雨に浴するといふ場合、若し泰山の如き不動の精神力が無かつたならば、到底、日本魂の權威を發揮することは出來ぬ。至誠を以て大智慧大慈悲體の佛陀に歸仰する、そこに安心もあり、滿足もあり、歡喜もあり、快樂もある。而して、大信心の結果、自づから生死の鐵關を蹈破し、盡未來際不滅の大生命を獲得することになる。此の大信心の中に報國盡忠の覺悟を長養するから忠節の觀念が非常に大きなものにもなり、永遠無窮の願力ともなる。

丹州田邊の城主細川幽齋公は古今の歌人であつた。田邊城が石田三成の兵に圍まれし時、皇上、殊に歌書の失はれんことを憂ひたまひ、三條公を勅使として同城に御差遣なされた。そこで公は寄手の軍にも此の旨を通じ、時間を定めて入城し細川幽齋と對談せられて居る中に、時間が經過したので、敵陣より打出したる彈丸、兩公の中間を飛び過ぎた。流石の三條公も思はずビクッとせられた。幽齋公は莞爾として、『ここを指して打つ鐵砲の玉きはる命にもかふべきや此の道』と詠じたとある。大丈夫此の氣節なかるべからず

昔、中山勘解由は宗關寺の隨應和尙に就て參禪せしが、八王子の戰に、流箭、其の額に中りし時に、豁然大悟し『提ニ起吹毛劍一。凡聖齊潛レ蹤。淸風拂ニ明月一明月拂ニ淸風一』の一首を詠じて瞑目したといふ。軍人は此の見知なかるべからず。

思ふに忠節は道德的大精神力である。此の道德は能く萬德を包容し、此の精神力は能く不滅の大生命を現成す。此の德と力とを鍛錬せば戰爭も亦佛行なり、菩薩行なり、大慈悲光明なり、大功德三昧なりと究盡し去ることを得るであらう。

禪想に映じたる釋尊の降誕

釋尊の降誕

曹洞宗の太祖常濟大師、示誨に曰く

たゞ諸人の精進と不精進とによりて、諸佛、頭出頭沒せるのみなり。今日も頻りに辨道し、仔細に通徹せば、釋尊、直に出世なり、只だ汝ら自己不明によりて、釋尊、昔日入滅す。汝ら既に佛子たり、なんぞ佛を殺すべけんや。

と、實に痛切なる親訓である。吾等が不明によりて、釋尊の偉大なる德光が、過去に埋り去られ樣としてゐる。吾等が、自己自身に徵し、眞の自覺を得來るとき、釋尊は大光明を放つて、出現あらせられる。

抑〻大聖釋尊は、今を距ること二千數百年の昔、卯月八日の花の曉、千林、珠を綴る藍毘尼の園、香、妙なる無憂樹の下に於て、聖母摩耶の胎を出で、三十二相八十種好の御姿を、五天竺の中央に降誕したまうた。九龍、香水を吐て、聖躬を浴し奉り、金蓮、仙葩を捧げて、玉足を承け奉る。忽ち右手天を指し、

左手地を指し、『天上天下唯我獨尊』と獅子吼あらせられた。此の一段の因緣、實に是れ難値難遇である。古今東西を通じて斯かる奇特の事は幾んど絕無である。

併し乍ら此の降誕の奇瑞を驚歎して、唯だ理由も無く隨喜渴仰するのみでは、決して釋尊の孝子順孫とは言はれない。儒書にすら『夫れ孝は善く人の志を繼ぎ、善く人の事を述る者なり』というてある。

雲門禪師といふは、禪宗五家の隨一たる雲門宗の宗祖である。禪師は『天上天下唯我獨尊』の一語を拈じ、『我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめん、貴ぶらくは天下太平を圖る』と申された。釋尊は生れ落ちるや否や、天にも地にも唯だ我れのみ獨り尊しと言はれたが、餘りに傍若無人の御語では無いか。宇宙萬象は本來平等にして、曾て佛と衆生との隔ては無し。隔てありと見るは、妄想の所爲に過ぎぬ。柳は綠、花は紅、其の儘が、大解脫の相である。山の高く海の宏き、其の儘が等正覺の姿である。濟度せらるべき衆生も無ければ、濟度すべき佛も無い。『雨霰雪や氷と隔つれど落れば同じ谷川の水』雨を貴び霰を賤んで、貪瞋痴慢の煩惱を起すが如きは、畢竟、平等の理を忘れて差別の相に迷ふからである。然るに釋尊は、御自分丈が眞理の權化なるかの如く、唯我獨尊などと仰せられしは、甚だ以て片腹痛い』と雲門は絕叫した。平等界中に於て貴いの賤いの、迷の悟のといふ音沙汰は無用である。釋尊、風なきに波を起し、『天上天下唯我獨尊』などといはれた爲めに、却て宇宙の眞理に一點の汚を生じた。故に若し此の雲門が其の時に居合したならば、一棒の下に打殺して、狗子にでも喫して仕舞ひ、其の形骸迄も奇麗に片付けた

であらう。さうでもしたら眞理の本體・妙用が隱れず、天地が盡く正覺の相を現じ、萬象各々解脫の光明を輝かし、善惡是非の波風たゝぬ太平の天下を見ることが得られたであらう、と實に途方塗轍もない不敬の語を雲門は發した。が然し、これが却つて釋尊の本懷に叶うてゐるのである。

出世の本懷

釋尊出世の本懷は、衆生をして佛の知見を開かしめんが爲めである。佛の知見とは妄想執着を解脫して、本來成佛の本德を現はした境地である。天竺の演若達多といふ婦人は鏡に向つて己れの顏の映らぬに驚き賊の爲に頭を盜まれたと思ひ氣違の樣になつて室羅筏城中を狂ひ廻つた。或人が之を憐れみ、後から拳を揮つて力任せに彼女の頭をたゝいた。彼は思はず『ア、痛や』というて手を以て頭を押へ『ヤア失つた頭が此處に有つた哩』と申したといふことである。我等凡夫は貪瞋癡慢疑の爲めに心の鏡を曇らしてゐる。佛の知見を失うてゐる。演若達多の二の舞をしてゐる。それを憐んで、汝の頭はドコへも行きはせぬ其れソコに在るぞというて、御示し下さるのが、釋尊一期五十年の御教化である。つまり吾人をして各自が『唯我獨尊』であることを開示せられたのである。一たび此の佛知見を得る時は『高い山から谷底見れば瓜や茄子の花盛り』宇宙萬象其の儘が佛身佛體、手の舞ひ足の踏む所、其の儘が慈悲光明であることが分る。此の時こそ、雲門の樣に誕生佛を打殺す底の活手段を弄することも出來る。禪門では是れを殺佛の機

といふ。此に至つて、始て佛の御慈悲に眞實感謝の涙を灌ぐ。譬へば嬰兒の時は、親達が『頭テン〳〵』を教へて呉れるのを喜ぶが、成人すればソンナ馬鹿げたことは眞平御免といふ。眞平御免といひ得るに至つて始て親達が御辛勞下されたことが譯り、覺えず感涙を絞るのである。瑯琊の覺和尙が雲門を評して『雲門謂つべし此の深心を以て塵刹に奉ず、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲す』と申された。實に雲門の一棒は獨り釋尊をして釋尊たらしむるのみならず、宇宙法界、森羅萬象をして、盡く佛たらしむるものである。これぞ眞實佛恩報謝の大義を全うしたるものと稱すべきである。

誰れかこれその人なる

然るに雲門去り、瑯琊去り、而して佛法今將に衰滅せんとす。釋尊出世の本懷、また將に沒却せられんとしてゐる觀がある。此の時に當り、第二の釋尊あり、出でゝこれを興隆するにあらずんば、それ天下蒼生を奈何にせん。知らず、何人かこれその人なる。

『人々悉く道器なり』何人もその人であらねばならぬ。誰人も第二の釋尊であらねばならぬ。何人も釋尊たり得る資格を有せないものはないのである。佛陀に非ざるよりは眞實の佛法を開示すること能はず、釋尊に非ざるよりは眞實の正法を顯現することが出來ぬ。苟も佛教に因緣を結ぶ者は、宜しく釋尊を今日に實現せしめ奉らんことを望むべきである。殊に靑年佛教徒にありては、一層此の希望と信念とを有すべ

きである。然らずんば、佛の經卷ありと雖も、恐くは時世を警誡し、策勵し、指導することが不可能となるであらう。然らば如何にして、吾人は直下に釋尊たり得るか、釋尊を今日に實現せしめ得るか。

自覺と精進

釋尊となるの道、他なし、自覺と精進これである。自覺と云ふは自己の本性を悟了し、自己の靈能、自己の職分を覺知し、以てその實現を全うすることである。自覺の內には自ら覺他の妙德がある。覺他は必ず自覺に依らなければならない。

次に精進といふのは精一杯の力で進むこと、つまり一心に勉强することである。優婆塞戒經には、正精進と邪精進との二種を擧げて、『菩薩は、邪精進を遠離して、正精進を修せよ』とある。惡念・邪念・妄念を起して、惡業・邪業・妄業に勵むは邪精進で、何の役にも立たぬ。役に立たぬ計りか寧ろ大害となるのである。正精進とは、經には、『信・施・戒・聞・慧・慈・悲を修するを正精進と名く』とあるから、淨き信仰と、慈善事業と、修身と、學問と、正しき智識と、他を樂しましむるの行と、他の苦痛を救ふの業とを修め行ふ事である。一口に言へば自利と他利との行を併べ修することで、畢竟、前の自覺の實行に努力することである。

佛教八萬の法門もつまる所は自覺と精進とを說明したものに過ぎぬ。是れ即ち釋尊敎化の本旨である。

昔、高野の明遍僧都が法然上人に向つて『唐土の念佛には南山流とか、廬山流とか稱する流義がある、上人の念佛は果して何流なるや』と問はれしとき、上人は打ち笑ひつゝ、『源空は別に流義とてもござらぬ、強て言はゞ、西方の阿彌陀流なり』と答へられたさうである。吾人が佛教を修學するにも枝葉に拘はらず、方便に泥まず、直下に釋尊の本旨を參究して、所謂釋迦流の教義を信受し奉行するの心懸が無ればならぬ。釋迦流の佛法顯現する處に釋尊の法身は活現しますのである。

涅槃經には『我れ實に閻浮提界を出でず』とあつて、釋尊は常在不滅にして、因縁に應じ時節に依り、處々身處々現である。華嚴經には

『如來の淨土、或は如來の寶冠にあり、或は瓔珞に在り、或は衣紋に在り、或は毛孔にあり、是の如きの
　毛孔既に世界を容る』

とあれば、釋尊の法身は一切に普しである。釋尊の法身が實現せざる時とてもなく、活現せざる處とてもない。悲いかな、吾人は精進力乏しきがために釋尊を實現せしめ奉ることが出來ぬ。自覺の未だ明らかならざるため、釋尊の法身を活現することが出來ぬ。承陽大師の慈誨には『釋迦牟尼佛とは誰といふぞと、審細に參究すべし』とある。各自は釋迦牟尼佛の佛德に漏れてゐないのであるのに、釋尊を拜し得ずにゐるのは、全く自己を覺悟せざるの致す所で、恰も水中に在りて渇を叫び、火裡に住して熱を求むると一般である。

われといふちひさき心すてゝみよ大千世界にさはるものなし。

大死一番大活現成

先づ自己を忘却して見るが宜い。徹底無我になり切つて見るが宜い。自己胸臆裏の妄想煩惱を一掃して洒々落々たるべし。妄情盡きぬれば本性自づから現はるゝこと、暗、消じて、明、來るが如し。此の境界に至らざれば佛法を學得するも、彼の葉公が愛せし龍と同じく、終に是れ僞佛法たることを免れぬ。昔、元の胡石塘、世祖に謁する時、其の戴ける笠の傾けるを覺えず、世祖に『卿が學ぶ所は何ぞや』と問はれて、『治國平天下の學なり』と答へた。世祖大に笑つて自家の笠子すら尙ほ之を正うすること能はず、爭でか天下を平かにすることを得んやと云うて、遂に用ゐられなんだとある。今の人も、若し自家の覺悟未だ成らざれば濟世利民の菩薩行は、得て望むべからざることである。

承陽大師親しく吾人に敎へて、

『佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは、自己を忘るゝなり』

と仰せ下された。自己を忘るゝといふは、自己をして徹底自己たらしむることである。自己をして天地の公道、本然の眞理と一如ならしむることである。學人此の地に至らざれば、眞個の法身は實現しましまさぬのみならず、却て法身佛を滅却し去るのである。

嗚呼、吾人今日の境界果して如何、「單定は癡定なり單慧は狂慧なり」無意味の坐禪は眞定に非ず、耳目の學問は眞慧に非らず、學彌々高うして德彌々卑しく、理彌々深うして實彌々薄きは、現今、學者の通弊ではないか。これに依つて活佛未だ活現せず、活法未だ活動せず、常在靈山の釋尊をして、末法澆季の雲に覆はれしむ。知らず、これ誰の過ちなるべきぞ。

吾人は、須らく大死一番、以て箇々圓成の道理を體現し、以て佛教徒たるの名を恥じめざらんことを要する次第である。

見明星悟道

降魔の威力

本日は我が本師釋迦牟尼如來が成道遊ばされましたる聖日を御迎へ申し上げて、茲に御恩報謝の法要を營辨し奉るのでありますから、聊か釋尊の成道に關する御話を申し上げ、相共に釋尊の御恩徳を稱揚し奉りたいと思ふのであります。

抑も釋尊は、今を距ること二千五百年（又は二千九百餘年前ともいふ）以前の四月八日に、印度迦毘羅城主淨飯大王の御子として、花笑ひ鳥歌ひ春光駘蕩たる藍毘尼の御園に於て、御后摩耶夫人の御胎より御誕生あらせられました。七歳にて大なる志を發したまひ、十九歳（又は二十九歳）の十二月八日の夜半に、御者車匿に命じて白馬健陟を牽かしめ、之に乘りて王城を立ち出でたまひ、檀特山に至り、髮を剃り、茲に始めて出家の姿と爲りたまひ、初の六年は諸方の仙人を訪うて道を究め、（又は入山以來修業六年の後三十五歳成道といふ）後の六年は、獨り尼蓮禪河の東岸なる前正覺山の苦行林中に住して、坐禪觀

法の行を勵まれました。此の間は一日に一麻一米を食せられたとあるから、其の時の御難行は到底想像も及ばぬ程であつたらうと思はれます。
御修行六年後、座より立て尼蓮禪河の水を以て御身を清淨めさせられ、且つ快よく一牧女難陀婆羅の献じたる乳糜の供養を受けたまひ、それより、古來幾多の仙人が金剛定に入りしと傳へらるゝ、佛陀迦耶なる畢波羅樹の下の金剛座上に、淨軟の草を敷きて結跏趺坐をせられ『我れ若し道を成ぜずんば誓つて此座を起たじ』との大願を發したまうたとある。然るに、寸善尺魔は世の習ひ、釋尊も亦た之を免れたまふこと能はず、種々無量の惡魔があつて、釋尊の御修行の妨害を試みたのである。成道の間際に至りて、惡魔の運動は愈々激烈を加へ、初は女色を以て誘なひ、後には悪鬼・羅刹の姿を現はして威嚇する等、殆ど有らん限りの手段を盡して障礙を加へたるも、釋尊の御境界は山の動かざるが如く、海の寛大なるに似て、如何ともすること能はずして遂に降伏したとある。是れ即ち釋尊降魔の大威力であります。
是等の事は、唯だ昔譚とのみ思ふことはなりませぬ。如何なる人と雖も、惡魔を降伏するに非ざれば眞實の成道は出來ぬ筈のものである。然らば惡魔とは如何なる者かといふに、魔とは梵語で障害の義である。即ち善を妨げ德を害し、心を亂し身を誤るものを指すのである。之を大別すると、人間界の惡魔と天上界、即ち第六天の惡魔との二つがある。又、內魔・外魔とて、內から出る惡魔、即ち煩惱妄念の魔と、外から來る惡魔、即ち惡友とか惡境遇とか天災地變といふの類、この二つがある。又、軟魔とて軟かな柔

しい魔と、強魔とて恐ろしい魔との二つがある。所謂己れの慾望に順ずるものは軟魔で、己れの心に逆らふものは強魔である。換言すれば、順境と逆境です。

人動もすれば、順境に對しては益〻執着して之を離るゝこと能はず、逆境に對しては煩悶惱亂して遂には自暴自棄に陥いりたがつてならぬ。故に三祖大師は『違順相争ふ是れを心病と爲す』と仰せられ、承陽大師は『違順纏に起れば紛然として心を失す』と御示し下されてある。一切の煩惱惡業は皆な是より生ぜざるは無し。古人も『身外の敵は防ぎ易きも心中の賊は破り難し』と言うてある。これぞ魔中の大魔ともいふべきものであります。

見性悟道

然るに、釋尊は、金剛座上に坐して、其の心動かざること大山の如くであらせられしゆゑ、內外・強軟の惡魔は日々夜々に妨害を試みたるも、毛筋程も御心をうつしたまはざりしかば、惡魔も遂に盡く退散して了つたのである。

そこで十二月七日の夜に至り、身心益〻爽かにして胸中一點の塵をだも留めたまはず、初更(午後八時)に於て一切の魔軍を降伏し盡し、大智眼を開て三界十方の世界を觀察したまひ、二更(午後十時)に至りて、神通眼を以て過去現在未來の三世を洞察したまひ、三更(夜半)に於て生死因果の始終本末を徹見し

たまひ、愈々第四更、即ち八日の曉に至り、明星の東の空に輝けるを見て、忽然として一切種智を得て、無上佛果菩提の大道を成就し、人天の大導師、大聖釋迦牟尼如來と御成り遊ばされました。是を見明星悟道とも成道とも申し奉るのであります。

此の時、天地瑞を呈し草木喜びを現はし、天界の音樂は自然に妙なる聲を發し、天華は繽紛として降り、梵天・帝釋は華を散じ香を燒き、『佛は無上正覺を成じたまへり、諸々の有情の爲に今こそ不死の門は開れたり』というて讃歎せられたとある。其の時の釋尊の御精神は果して何んなであらせられたでありませう。釋尊は此の時に於て、大慈大悲の徳相を現はし、功徳海藏の祕鑰を開き、天地に響く微妙の音聲をして、『我と大地の有情と同時に成道す』と宣うたのである。此の御一言こそは正法眼藏の祕曲、宇宙眞理の根源、劈頭第一の御宣言であります。諸君は此の『我と大地の有情と同時に成道す』と仰せられたる、御語を能く記憶して、親しく此の活句を研究し、翫味し、證得して下さるやうに願ひ度いのであります。

大地の有情といふは一切衆生といふことです。我れ一人の成佛成道では無い、一切衆生は皆な我れと與に成佛成道して居る。否、一切衆生のみならず、草木國土、天地法界も亦た皆な我と成佛成道して居る。天地の間に所有、人間も畜生も、草も木も、牆壁も瓦礫も、一つとして佛ならざるはなく道ならざるは無い。こゝを能く御承知を願ひたいのです。

佛樣には廣大なる智慧がある。限り無き御慈悲がある。光明もあり神通もある。而して、天地萬物は

皆な佛樣であるからして、草にも木にも、無限の慈悲と廣大なる智慧が備はつて居る。牆壁にも瓦礫にも光明神通が歴々と存して居る。決して或る哲學者が絶待無限とか平等一體とかいふ樣な理論では無い。高祖大師が『峰の色溪の響もみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿と』と御詠じ遊ばされたのは、理論上のことでは無い。高祖大師の御目からは山色溪聲のみならず、天地萬物も皆ながら、佛身なり、佛慈悲なり、佛光明、佛神通と御覽になつたのである。

然るに吾々には、どうしても草や木が大智慧を開いて居るとは見られぬ。石や瓦が大慈悲を備へて居るとは信ぜられぬ。が、是れ果して何故でありませう。こゝが佛教に於ける信仰と修行との最も必要なる所である。

釋尊も御發心の始めには此の世は厭ふべき苦痛逼迫のもの、此の身は悲しむべき無常不淨のものと觀ぜられたのである。而して、愈々成道の曉に至りて、一切衆生は盡く佛なるぞと徹證遊ばされた。諸君の御身も御心もソツクリ佛樣であるといふことを徹底、信ずることが出來ますか、出來ませんか、佛法の一大事は全くこゝに在るのであります。

眞理の光明

此の一大事を辨ずることは、到底、一席や二席の御話を以て盡す譯には參りませんが、且く譬を以て申

しますれば、拙僧の此の拳これは何でありませう。佛であるか、鬼であるか、將又、佛でも鬼でも無い無名の物でありませうか。若し此の拳を以て人の頭でも叩けば、直ぐ亂暴だ惡人だといはれる。さて此の時は此の拳の骨も皮も指も爪も盡く亂暴と惡人との主體となります。然るに、若も此の拳を以て親の肩癖を叩いたり、主人の腰でも叩きますれば、マア感心な孝行人ぢや、忠義者ぢやと賞められる。唯だ一の拳であるが、其の應用の如何に依ては、惡人ともなれば善人ともなる。善人が使へば徹底、善で、惡人が使へば全體が惡である。

此の天地世界も佛樣が見れば盡く佛體であつて、鬼が見れば盡く鬼の世界です。併し拳其物は何であるかといふに、一應見れば善でも惡でもない。善惡は唯だ應用の如何に依て生ずる一時の名字である樣に思はるゝが、決してさうでは無い。抑も拳は人身の一部にして、人としての作用を爲し、人としての務めを全うするの機關であつて、決して無意味なものではありません。語を換へて申せば、天地の心を現はすべき最も尊貴なる道具であるのです。高祖大師が『善惡は法なり法は善惡に非ず』と仰せられたる『善惡に非ず』といふは、無意味といへることではなく、寧ろ絕對の善なる事を示されたのであります。絕對の善とは佛である。

されば、吾々の手は卽ち佛の手で、吾々の足は卽ち佛の足です。吾々の全身は取りも直さず佛の全身です。眼にも大智慧の德があれば舌にも大慈悲の德がある。吾々が其の智慧を智慧と知ることが出來ず、其

の慈悲を慈悲として用ゐることの出來ないのは、唯だ妄想煩惱がある爲めである。自分の妄想煩惱を以て自分の具有せる佛樣を蔽うて居るのである。若し一度、妄想煩惱を解脱せば此の身此の儘が圓滿具足の佛樣である。『雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月』です。故に釋尊は成道の最初に於て『我と大地の有情と同時に成道す』と仰せられたのである。

併し佛樣の有難味は佛の心を得たもので無ければ解りませぬ。馬の耳に念佛、猫に小判ではサツパリ感應は無いです。其の代りに、智慧の眼があれば天地萬物にも智慧のある事が發見される。慈悲の力があれば日月風雲にも慈悲の存することが感ぜられる。ニユートンは林檎の地に墜つるを見て重力の理を發見しワツトは湯の沸騰に依り鐵瓶の蓋の擡上るを見て蒸氣を發明し、ヨングは石鹼の水玉に五色の燦爛たるを見て光線斜行の理を發明し、ブロウンは園中の樹木に蜘蛛の巣の懸れるを見て釣橋を作ることを發明したとある。苟も此方に智慧がありさへすれば、眇たる林檎の實も、蕞爾たる石鹼の水玉も、盡く般若の大智慧を開顯し、吾々の教師となつて吾々に完全なる智慧を授けて呉れます。

又、日月は長へに吾々を照し雨露は長へに吾々を潤ほし、花開いて我眼を樂ましめ鳥歌うて我耳を喜ばしむ。山を探れば樹あり、泉に臨めば水あり、風ありて涼を與へ、火ありて寒を防ぐ、此方に慈悲心がありさへすれば、天地萬物は皆な慈悲の佛德を現して居ることが解り、一粒の米にも、一滴の水にも、自づと感謝の意を捧ぐる樣になる。かくしてこそ天地萬物に活きたる精神が現はれて、吾々は見る物聞く

物に對して、宗教的信念を發揮する樣になる。これぞ正しく人道を開發する眞理の大光明と云ふのであります。

佛教の根本法輪

釋尊は十二ケ年の難行苦行を積ませられ、內外一切の惡魔を降伏して、茲に始めて佛陀大聖の御身とならせられた。即ち宇宙の大智慧を開き、天地の大慈悲を得、法性本有の光明神通を顯現せられ、『今此三界は皆是れ吾が有なり、其中の衆生は皆是れ吾子なり』といへる御境界と御成り遊ばされたのである。此の大智慧眼より普く十方法界を觀見したまへば、一切の衆生、一人として佛ならざるは無い。そこで彼の華嚴經にも『一切の衆生は皆如來の智慧德相を具す、但だ妄想執着を以て而も證得せず』との御歎息も出て來るのである。故に、成道の後、摩訶陀國の鹿野苑に下つて、憍陳如尊者等の五比丘を濟度したまひてより、四十九年、三百餘會の御說法、八萬四千の御法門も、唯だ一切衆生の妄想煩惱を斷じ盡して、本來成佛の智德を顯現せしめんが爲めの慈悲方便であります。

衆生の根機千差萬別なるが故に、佛の法門も自ら相同じからず、男女の身體に迷うて貪着するもの〻爲めには、不淨觀を示して、肉體は畢竟血肉の所成にして、皮一枚を剝がせば臭穢充滿して目も當てられぬ狀態を觀想せしめ、以て浮世の中に在りながら、浮世の塵に汚れざる大解脫の因種を成就せしめらる。

又、瞋恚の煩惱深くして、事毎に怒り腹立ちて、憎み、恨み、妬み、情火に身を焦す者の爲めには、慈悲觀を示して、一切の男子は皆是れ我父なり、一切の女人は皆是れ我母なり、四海の內は皆な我が兄弟、法界の羣類も皆な我が血肉なりといふ念相に住して、人を看ること己れの如くなる慈悲心を生ぜしめば、獨り瞋恚の煩惱を斷ずるのみならず、攝取不捨の佛大願をも成就するの基を開き下されたのである。

又、愚痴暗昧にして因果を知らず、理非を辨へざる者の爲めには、授くるに因緣觀を以てして、三世因果、善惡業報の理を觀ぜしめ、彼をして自づと良心を味まし、道理を味ます樣な事も無からしめ、終には宇宙の本體、生死の理法をも明らめて、玆に哲學的佛教の大眞理にも體達するの法門を開示せられたのである。

又、精神が常に散亂して、從晝至夜、五欲六塵の奴隷となりて、更に安心立命の分なきもの〻爲には、數息觀、又は坐禪三昧の法をも示されてある。數息觀とは出入の息を一息となして之を數へるのである。先づ心を靜め息を調へて、一ツ二ツ三ツと數へ、十迄數へたならば復た元の一ツ二ツより數へるのである。かくすること數回なる時は、自然に心が落付くものである。それより更に進んで禪門正傳の坐禪を修し、遂には見性大悟の域にも達するのである。

又、多障というて種々の障礙を受け、所謂其の身の境遇や世の中の事情に苦しめられて居る者の爲めには、敎ふるに念佛觀を以てし、人生の是非得失に貪着せず、一心不亂に佛陀の慈悲光明を瞻仰し奉る

時は、歡喜の念内に溢れ、感謝の情外に發し、四苦八苦の間に在り乍らも、超然として微妙の法樂を得る樣になる。此の觀念が發達し、今日の淨土敎ともなつたのであります。

是の如く、釋尊の慈悲方便は、機に應じて趣を異にし、時に臨んで法を同うせずと雖も、其の目的の歸する所は、人々具有の智德を開發するものにして、同時成道の御宣言こそ實に佛敎の根本法輪といふべきである。

修證の妙義

佛敎の目的が同時成道の眞理を實現するに在りとすれば、吾々は如何なる方法に依りて其の目的を達すべきか、是れ各宗各派の由て分るゝ所以であります。而して我が曹洞宗に於ては、修證義の四大原則に基づいて、此の世に於て佛の戒德を成就し、此の身に於て佛の大慈悲を顯現し、遂には『平常心是れ道』といへる境界に達するのが修證の準則であります。

されぱとて、決して他宗他門に反對して、我宗の安心を示すのでは無い。他宗他門の敎ふる所の安心も起行も、盡く我宗の修證の二字に籠つて居るのでございます。從て三世の諸佛の御悟りも御慈悲も、盡く此の外に出でたものではありません。如何となれば、佛法は元來一佛法にして、諸佛も畢竟一佛道に歸するのであるからです。故に賛題の御文には『所謂諸佛とは釋迦牟尼佛なり』とありて、三世の諸佛も一釋

迦牟尼佛と同道同法です。『釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心の佛なりけり』です。何故ならば『釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり』で、人々本具の佛性、卽ち心の中の佛を現はされたのが釋尊の成道で、三世の諸佛も亦た心の中の佛を現はして、智德圓滿の境界に達せられたのである。故に『過去現在未來の諸佛皆な倶に佛となる時は必ず釋迦牟尼佛となるなり』で、皆な同時成道の佛知見を開きたまうたのである。

此の佛知見が智慧ともなり、慈悲ともなり、神通ともなり、光明ともなるのであつて、決して外から借りて來たのでは無い。盡く自己心中の所有の功德藏です。斯まで結構なる功德の寶藏が、吾々御互の方寸の中にチヤンと具はつて居るのであります。業障の深き者は之を聞きて信ずる事が出來ず、よしや信じても、此の功德藏を開く事が出來ず、無價の寶を抱きながら、我と我手で三界生死の大海に漂うて、凡夫惡魔の仲間入りをして居るのである。

昔、魯の哀公が、聖人孔子に向つて『我が領分内に能く忘るゝ者がある。曾て家移をした時に其妻を忘れたさうな』と言はれますと、孔子は『いやもつと甚だしき者があります、殷の紂王・夏の桀王は一天萬乘の君にてあり乍ら、却て其身を忘れて、遂に國家を亡ぼされました』と御答へになつたとある。人間にして人間の資格を失なひ、子にして子たるの德を棄て、妻にして妻たるの道を忘るゝ等は、皆其の身を忘れて了うた御仲間です。況してや三世の諸佛と同等・同體なる智慧德相を備へて居り乍ら、之を忘れ、之を度外にして、朝から晩まで、見るもの聞くものゝ爲めに苦しめられ、萬物の靈長たる最勝の善身をして、

煩惱の容物・罪惡の製造器械として了ふといふは、其の身を忘るゝの殊に甚しきものと言はねばなりませぬ。

若し一度、佛祖の御教を聞き奉りて『我は本來の佛にてあつた、我が方寸の中に三世諸佛同體の功德藏があつた』と、深く信ずることが出來たならば、自然に從前の煩惱惡業が、恥かしくて堪らぬ樣になるから、ア、惡かつたといふ懺悔心が起りて、心のドン底から妄念を拂ひ淨める樣になります。

而して、功德の寶藏を現はすべき方法として、佛祖正傳の御戒法を相續し奉り、惡を離れ善を修め、一切衆生を濟度せんとの大誓願を發し、此の大誓願が一切萬境の上に作用を現はして、不殺生ともなり、不偸盜ともなり、不邪婬ともなり、不妄語ともなり、重々の戒德を發揮するのである。元來、御戒法と云ふ者は功德藏の德相です。故に、戒法を相傳するのは佛樣の功德藏を受け奉りて、吾々本具の功德藏を顯現するので、譬へばマツチの火を以て蠟燭の火を現はす樣なものであります。

即心是佛

元より、一時に圓滿なる佛心を成就することは不可能のことであるけれども、信仰の誓願さへ堅固なれば、漸々に具足圓滿の域に達するのです。所謂『日々に新にして又日に新たなる』の理である一の堪忍行を持てば一分の功德を得、一の布施行を成ずれば一分の佛となる。太田錦城の梧窓漫筆に『平日は無道の

者たりとも、乞食非人に一錢を與ふれば、此の一事は文王の心にて、堯舜文王の化身なるべし』とあるも此の意です。一日でも正直の心を存せば、其の一日は神の身である。一時間でも大慈大悲の心を具ふれば、其の一時間は佛の身である。

住吉明神の御託宣には、『我に神體なし慈悲を以て神體とす、我に神力なし正直を以て神力とす、我に神通なし智慧を以て神通とす、我に奇特なし無事を以て奇特とす、我に方便なし柔和を以て方便とす——慈悲の目に惡しと思ふ人ぞなき罪ある身こそ猶ほ不便なれ』とありて、家康公が常に此の御託宣を信じられたといふのも、全く神となり佛となるの道行きであるからです。吾々の心の田地には、先天的に慈悲・正直智慧等の苗が植付てあるのです。三世諸佛の功德莊嚴も亦た吾々の心中に具足して、曾て缺くることが無い。故に『是れ即心是佛なり』と贊題にあるのです。

併し、即心といへばとて、煩惱邪見の妄念が直ぐ佛だなどと思うては大間違です。吾々の精神には種々の惡習慣が混入して、中正を失うて居る點が頗る多い。それを整理するに非されば、本性の光明は現はれぬ。其の整理の標準は、佛教に於て樣々に御說き下されてあるが、雜阿含經に、四具足とて四通りの御示しがあります。第一が信仰です。信仰の力を以て一切の虛僞を離るゝのである。信仰には略して二つの要素があります。一は其の心に寸毫も邪念を挾まざること、二つには智德圓滿なる佛陀の大慈悲に歸依すること、此の二つの要素の合體したものが眞の信仰です。次には戒行です。所謂惡を離れ善を行ひ、以

て心を調のへ身を修むるのである。次には布施です。即ち貧を賑はし苦を救ふ所の慈善行である。次には智慧、即ち健全なる智識である。此の四つの徳が備はりさへすれば、自然に即心是佛の境界にも達せられるのであらうと思ふ。

抑も釋尊の成道したまひしといふは、決して哲學者が哲理を發見した樣な事では無い。哲學的大智識を得たまひたるも成道の一部分には相違ないが、之を以て成道の全體とは申されぬ。成道といふのは、釋尊が宇宙の本源を徹證し、萬物の始終を覺了し、而して釋尊の全身が眞理と同化し、眞理の全體全用が人格化して釋尊となりたまうたのが眞の成道です。されば、今日の吾々も亦た釋尊と同一に、宇宙の眞理の權化となるに非ざれば、生きた佛教とは申されませぬ。其の生きた佛教は何處に在るかといへば、人々具足箇々圓成である。故に贊題の終りに『即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん』と仰せられた。

即心是佛というても、決して昔話しでも無く理論一遍でも無い。又、他人の噂でも無い。誰れのことぞと審細に參究すれば、皆な人々箇々の事である。此の即心是佛の眞理が、眞實自分の者となつてこそ、始めて本當に佛教を活現し、佛の大恩を報謝し奉ることが出來るのであります。

修證義にも『其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持その報謝の正道なるべし』とありまして、唯徒らに香を燒き拜を設けて、佛名を唱へ、經典を讀誦するのみでは、以て報恩の實を擧ぐることは出來ませぬ。眞實の報恩は全く日々の行持にあるのである。日々の行持とは、佛教の上で申せば、釋尊の御教を其の身に實行して、釋尊成道の大功德を日常の行爲の上に現はすことであります。本より佛の御德の全分を現はすことは出來ぬことであるが、縱ひ其の一分なりとも、此の身に實行して佛恩の功德を彰はし、以て濟世利民の功績を擧げるのが報恩の第一義であります。

然らば、如何にせば日々の行持を全うすべきやといふに、釋尊の御修行に倣ひ奉りて、先づ第一に惡魔降伏の力を現はすことが肝要です。惡魔多しと雖も、吾々の心の中に潛伏する煩惱の惡魔が一番惡ろしい。殊に今日の人心の狀態は如何でありませう。世は文明となり、人智日々に發達するにも拘らず、精神界の有樣如何と顧みれば、道德の觀念は漸次薄らぎ、萬事萬端が唯だ競爭をのみ維れ事とし、而して其の競爭も、多くは自分一身の利益を圖ることに汲々として、眞正なる慈悲博愛の美風は、地を拂つて滅却せんとしつゝあるではありませんか。畏れ多くも、明治天皇も曾て此の事を御軫念あらせられて、『ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん』といふ御製さへあらせられたと承つて居ります。是れ皆な內心煩惱の惡魔の所爲です。

故に此の惡魔を除くには、已れに克ち、私を制するの力を養ふことが大切である。此の已れといふ奴が

惡魔の頭領です。或人が此の己れと云ふ奴の油斷ならざる事を示して『おさへたと思ふ下からはねかへす油斷のならぬ我はつはもの』と詠んだ。『然らば之れに勝つの法ありや』と問ひければ『腹立たば人をも世をも恨むまじ其儘あしき心殺せよ』と詠んだとある。

又、白隱禪師の上足なる東嶺和尙が、嵯峨に於て說法せし時、非常に寒氣强く、北風室に入つて凌ぎ難かりしかば一衆皆な慄へてゐた。和尙は之を見て大に叱し、『寒い位を辛抱できぬ者は還俗して了へ、そんな柔弱な心では禪を學ぶも功は無い、汝等切に須らく道を其心に求むべし、魚は水中に在りて水あるを知らず、人は妙法の中に在りて妙法を知らぬ』というて諭された。時に有名なる心學の泰斗の中澤道二が其の座にあり、之を聞て大に悟り、『和尙の佛法は我等の求むる心を外にせず、是れ即心即佛の妙法なり』というて感歎し、それより參前舍を開きて盛に道を講じたとあります。

又、支那禪門に於て有名なる大梅法常禪師は、達磨大師八世の法孫なる江西の馬祖大師に對して、『如何なるか是れ佛』と問はれし時、馬祖大師が『即心即佛』と答へられた一言にて大悟徹底し、遂に大梅山に入りて千古無比の操行を全うせられたとある。

前にも述べし如く、即心即佛と申せばとて、吾々の散亂妄動する心をそのまゝ佛なりと思うては大變な間違です。故に、內心煩惱の惡魔を降伏して、正知見を開き、眞道を現はしてこそ、始めて即心即佛の光明を發揮することが出來るのです。口先の佛法や表面許りの御念佛は何の役にも立たぬ。釋尊開示の法門

が吾人の人格と爲つて現はれた時が、佛教の新生命が活動したのである。此の新生命が實際に活動してこそ、始めて佛教の佛教たる所以の効果が顯はれます。その活動の狀態が修證義に所謂受戒入位と利生報恩である。

我等幸ひに、受け難き人界の身を受け、遇ひ難き佛法に遇ひ、殊に釋尊成道の法身舍利を供養し奉るは、何等の好因緣であらう。何等の好機會であらう。此の好因緣を虛うせず、此の好機會を取逃さずに、釋尊成道の本面目を研究し、即心是佛の妙境界を進修し、以て眞實報恩の大功德を成就する樣に心懸くるのが、何より大切な事であらうと思ひます。

日日是好日

吉凶の本

人生には、苦樂相半して、小車の廻るが如く、始終、吉凶・禍福が循環して居る。故に、人間第一の希望は、凶を避けて吉に就き、禍に遠かりて福を求めんとするにある。卜筮も、家相も、姓名判斷も、皆な之より生ず。宗教上の祈禱も、禮拜も亦、人心自然の、この要求に基いて現はれたのである。だが、吉凶・禍福なるものゝ依て生ずる本源を識らずして、唯だ徒らに、末を捉へ、影を追うてのみ居ては、如何なる善巧方便を弄するとも、決して永久的吉祥を獲得することは出來ぬ。世には、何れにか吉凶・禍福を掌つて居る鬼神でもある樣に思ひ、又は運命と稱する一種不可思議の勢力があつて、吾々の境遇を自由にするかの如く思ふ人もあるが、是れは、何れも枝葉にのみ注意して根本を知らざるより出でたものである。凡そ、天地間に於ける森羅萬象の活動進化は、皆な天地自然の妙用たる因緣・因果の法則に依るものであつて、一法として偶然に現はれ出づるものはない。凡夫は、僅かに五十年か七十年、長くも百年を超え

ざる短かき生涯を以て標準となして見るに依て、兎角、不可解の事が多い様に感ぜられ、それより色々の妄見を惹起して斷・常の二見に墮するのである。斷見とは、全然、因果相續の理を否認して、未來も無く、神佛も無いなどゝ、無神、無靈魂を主張する方である。常見とは、偏狹なる常住論で、人間は何時までも人間となり、男子は何時までも男子、女子は何時までも女子となるべきものと思ふの類である。彼の情死などを遂ぐるものは、多く此の低級な常見に囚へられる處より爲すのである。吾々は、こんな常見に陷ることを避け、どこ迄も、三世に渉り無限の時間を通じて因果・因縁の法則を推し究めねばならぬ。

先づ惡業の方から申せば、惑・業・苦の三道といふものがある。惑は迷ひである、業は惡業、苦は果報である。凡そ、此の世に生れて、自然的に苦報を感じ、或は生れ乍ら身體が弱いとか、貧窮に苦むとか、魯鈍であるとか、又、何等の不良行爲も無きに、様々なる災厄に罹るとかいふの類は、皆な宿世に於ける惡業の因縁に依るものである。總て、人生苦惱に屬する事は、悉く惡業の產物ならざるは無い。而して、其の惡業は、惑といふ迷妄煩惱を根本となす。迷妄煩惱なるものは無量無數であるが、其の代表的煩惱といふべきが、所謂貪欲と瞋恚と愚痴との三つで、これを三毒といふ。此の外に、見惑というて、道理に昧き見知に關する病もあるが、此の見惑は、愚痴の中に攝して見ることも出來る故に、華嚴經普賢行願品に在る懺悔の御文には、『我、昔、造る所の惡業は、皆無始の貪・瞋・痴に由る、身・口・意に從つて生ずる所なり。一切、我、今、皆懺悔したてまつる』とある。之に反して、善果報は善業の所產であつて、善業は善心よ

り發す、善心とは前の三毒に反する心で、つまり無貪・無瞋・無痴である。即ち正義と同情と知識とである。而して、苦樂ともに其の種類は澤山であるが、其の狀態を總括して吉凶といふのである。

然れば、吉といひ凶といふ、其の本は善惡の業であつて、業の本は迷と不迷、邪念と正念に在り。而してこの正邪は一心より起る故に、佛教に於ては『三界唯心、萬法唯識』といひ、又、『心外無別法』といふ。邵康節も『人心生二一念一天地悉皆知、善惡若無レ報。乾坤必有レ私』というて居る。吾々の一心は實に是れ禍福・吉凶の本である。故に、苦惱を脫せんと欲せば、先づ其の行ひを改むべし。其の行ひを改めんと欲せば、其の心を愼み、以て福慶・吉祥の基を開かねばならぬ。若し然らずして、唯だ外部に向てのみ、凶を去り、禍を除かんとしても、中々、其の目的を達することは出來ぬ。古語に『善を行ふに凶日なく、惡を作すに良辰なし』といふがある。即ち、いくら大吉上々吉の日でも、惡い事をしたならば、忽ちに凶日に變ずべし、いかほど大凶日であつても、至誠、善を修めなば、必ず良辰となるのであらう。

此の故に、佛樣や菩薩方の身には凶日といふものは無い。惡人・邪見人の前には良辰といふものが無い。吾々は、縱ひ佛樣や菩薩の身にはなれずとも、その御心に習ひなば、自然に凶を去り吉に就き、やがては『日々是れ好日』といふめでたき生活を遂げ得ることになるであらうと思ふ。

日々是れ好日といへる語は、雲門禪師の語であるが、曹洞太祖常濟大師は、傳光錄に於て、『人々悉く道器、日々是れ好日なり』と御示し下された。實に吾々の尋常に忘るべからざる大切なる御語である。道器といふは道の容器といふことで、此の身心に依りて道が現はれるのである。忠義も、孝行も、正義も、博愛も、畢竟名義であつて、實際でない。此の身を以て、君と親とに盡し、上を敬ひ下を憐れみ、弱者を救ひ窮民を助ける實行があつてこそ、始めて尊貴なる人道が現はれて來るのである。是の如き尊き身心を吾等は持ち乍ら、動もすれば、此の身心を以て非道を働く器として使ふ。是れ所謂其の身を忘れたるもので世に是れほど情無い事は無い。

幸にして、我々が、身は道器なりとの自覺を起し、人の人たる價値を現はすのみならず、更に進んで佛の道を信じ、佛の御敎へに從がひ、大菩提に向つて實行を期するならば、現身に於て、佛菩薩の如き美德を莊嚴することが出來る。その時は、一年三百六十日、一日として吉日良辰ならざるは無い。是を日々是れ好日と申すのである。

然らば、御互が、日々を好日たらしめんとするには、如何なる覺悟を要するかといふに、私はまづ、承陽大師の所謂三心を以て修養の基礎とすることが、最も適切であらうと思うて御勸めをする。其の三心とは喜心と老心と大心とである。

初めの喜心といふは歡喜の念を起すことである。修證義に、『人身得る事難し、佛法値ふこと稀なり、今、

我等、宿善の資くるに依りて、既に受け難き人身を受けたるのみにあらず、値ひ難き佛法に遇ひ奉れり、生死の中の善生最勝の生なるべし』とある。實に萬物の靈長と謂ふべき人間の身に生れ、殊に、大日本帝國と稱する、全世界の中に於て、最も神聖なる國體を有する御國に生れ、飽迄、大君の御鴻恩を被むり、且つ文明の時代に遭ひ奉りしことの嬉さよ。人間の一代は夢幻にも似て、思へば果敢なき浮世にはあれど幸にこの一代を夢幻に了らしめざる尊き釋尊の御教へに値遇し奉り、獨り未來永遠の安心を獲得するのみに非ず、將來、菩薩とも佛とも成りぬべき因縁を結ぶことを得たるは、何といふ有り難きことであらう。

縱ひ心に叶はぬ境遇に處したり、意の如くならぬ時運に廻り逢うたり致すことがあらうとも、それは生死海中の一波瀾に過ぎぬ。吾々は、佛の御導きに依て、無上菩提の彼岸に到達すべく進みつゝあるのであるから、その途中に於ける苦痛も、厄難も、或る意味に於て、我が修行力を勵ます所の因縁となるものである。『晴れてよし曇りてもよし富士の山元の姿は變らざりけり』信仰力さへ堅固であれば、順境も、逆境も悉く皆菩提心を增進する資料となる。明治天皇は御製に於て『思ふこと思ふがまゝにならざるがかへりて人の身の爲めにこそ』と御仰せ下された。だが、人情といふものは、兎角に境遇に支配され易いものであるから、所有境遇に打勝つだけの力を造つて置かねばならぬ。(この事は後の大心の處にて說明することと致します。)

或人が、浮世の事の五月蠅きを嫌ひて、山深く菴を構へ、「なか〳〵に山の奥こそ住みよけれ草木は人の善惡を言はねば」と詠んだ。すると、某道人は此の歌を非難して、是れは求道者の志ではない。深山に入りて人生を遠ざかり居ては、縱ひ心靜かに神安くとも、何等の活動も無いから、枯木死灰も同樣である。人間といふものは色々の境遇に逢ふ爲めに、却て修行も出來、心膽をも鍛へることが出來るのであるといひ、『山の奥こそ住みよけれ』のよの字を『う』の字に改めて、『山の奥こそ住み憂けれ』として以て、修養の心得にさせられたとある。

彼の菜根譚にも『世路風霜、吾人錬心之境也。世情冷煖、吾人忍性之地也。世事顚倒、吾人修行之資也』とある。吾々は此の觀念を以て、逆境をも逆境とせず、遠大の理想を抱いて大信心を相續せば、如何なる場合にも歡喜心を失ふことは無い。

眞情の力

次に、老心とは、老母の兒孫を愛するが如き心を形容したので、詰り慈愛の心をいふのである。慈母の愛念は、最も內面が充實して而も奥深く、且つ永久的のものである。此の慈愛の迸しる時は、殆ど身心の全部を打込んで、母子一體といふ狀態になるものである。而して、此の間に毫末も野心が無い。尤も、此の子を育て上げて、老後の樂みを得ようといふ樣な希望も無いでは無からうが、此の希望は決し

て絶對的希望では無い。萬一、其の子が大病に罹つて回復の望みの絶えた場合でも、母の慈愛は少しも變らぬ。不幸にして、其の子の死亡した後でも、母の慈愛は殆ど同一の深さと長さとを以て、亡靈に對して居る。されば悲母の慈愛なるものは正しく絶對である。故に神聖で純潔である。吾々も亦た是の如く、深くして且つ長く廣き親愛の情を以て、上にも下にも、人間にも動物にも、草にも木にも推し及ぼすのが老心である。

此の親愛の情を以て、國家及び國民に對する時は、眞に能く献身的忠誠を現はすのである。『ありて身のかひやなからん國のため民のためにと思ひなさずば』、『君のため世の爲め何か惜からん捨てゝかひある命なりせば』といふ歌の如きは、皆な此の眞情の溢れである。楠公の如き、淸正公の如き、乃木將軍の如きは、全く己れを沒却して忠誠を傾け盡された。

日露戰爭の終熄して平和に復せし時、或る凱旋軍人に、出征中の所感を聞きしに、彼の人は『出征の途に就きし折り、內地の中に到る處盛んなる歡送をしてくれられたるは大に感謝すべきであるが、中には何となくお祭り騷の樣な處も見受けられて、往々厭氣を催すこともあつたが、東海道線大井川附近を汽車が通過せし時、二三人の老婆が、停車場の構內は雜沓して、迚も入り込むことが出來ぬ爲め、線路に沿うた田の畔の邊に、席を敷き其の上に坐り、手を合せて汽車の來るを待ち、目前を通過する時、ハラ〳〵と淚を流して頭を低れて見送つた。其の側に無邪氣なる二三人の孫が、是れ又、悲げな顏をし乍ら 掌を合せ、頭を下げ

て居た。その態度は、彼等の眞情が渾身に溢て居る様に思はれ、之を見た兵士の面々も何とも言はれぬ感じがして、なんとなく、自分の責任の一層重大になつたといふ感を抱いてゐた。是れが出征前後に於ける所感の重なるもの﹂一であった』と申された。

大正五年の六月、印度のタゴールが東京に來りし時の演説に、『御國は東洋を代表したる最高文明の國と聞き、且つ、千有餘年來、佛教を以て國民教化の中心として居られると承はり、景慕の情に堪へざりき。此の度、始て御國に來り、宿志を果すことを得たるは欣幸に堪へず。但し、最初、神戸に上陸して、暫時、同地に滯在し、同地は最も進歩したる良港なりと聞きたるが、實地に來て見れば、其の殆ど全部が歐米式で、恰も歐米の地に行きたる様に感ぜられ、どうしても日本と觀る事が得られなんだので甚しく失望せり。同地を去つて、汽車にて東京に來るに及び、途中、靜岡の驛を通過の折、多數の人々が、香爐を持し掌を合せて御迎へ下された、其の態度、自づから信念の情味が溢れて居る様に感ぜられ、始て御國の眞精神に觸れたる心地が致しました』というた。タゴール翁も、我が國民の純潔なる情致を見たものであらう。

尾州知多郡横須賀町、玉林齋佐治大謙師は十四五年前より獨力、子守學校を開きて子守を教育し、近年は更に幼稚園を開設して、専ら此等の教育に全力を盡して居られる。同町の漁民の子に近藤みすみ（大正七年に十五歳であつた）といへる少女あり。大正二年に父を喪ひ、母に事へて至孝、家甚だ貧なるを以て、

同町某呉服店に奉公して子守をして居た。大正三年に前記の子守學校に入學し、毎日、主人の子を負うては熱心に勉强して居る。佐治師は、入學せる子守に貯蓄思想を奬勵する爲め、毎日五厘づつ貯金せしむることと致した。此の零碎の貯金も、一ヶ月には十五錢となり、一ヶ年には一圓八十錢となる。幾分か蓄積が出來ると、それを引出しては器具・書籍等を買ひ求める。然るに、前記みすみは三ヶ年程の間、一錢も引出を爲さぬので、佐治師は、或時、同人に向ひ『貯金も大分溜つたが、今まで一回も引出さぬのは何か目的でもあるのか』と尋ねしに、みすみは之に答へて、『先年、父を喪ひましたが、未だ父上の御入りになる御佛壇がありませぬ、そこで、その貯金を以て御佛壇を求めたいと思ひます』と申した。一日僅かに一錢位の小遣を貰ひ、其の中の五厘を貯金となし、二年も三年も辛抱して佛壇を求めんとは、如何にも優しく、麗はしき心情なれば、師も感嘆の涙禁ずる能はず、自ら幾分の補助をして、新なる佛壇を購ひ求め、其の寺に於て盛んなる入佛式を行うた。同町小學校教職員も大に同情せられ、入佛式當日は、高等科女生徒を引率して參列せられたといふ。其の後も相變らず五厘貯金を爲しつゝ更に引出さぬ爲め、何にか見込のあるものにやと思ひ、師は之を尋ねしに、『お母さんが、齒がかけて見惡くなつたから、入齒をして上げたいと思ひます』との答へであつたので、師は益〻其の至孝に感ぜられたといふ。同人は大正六年に子守學校を卒業して、同町の某製糸場に奉公して居るが、其の志といひ、品行といひ、模範工女ともいふべき程にてあるとか――衲は之を聞ゝて感嘆に堪へず、同町普濟寺の法會の折、母子共に參詣した際に、親しく接見

したが、みすみは、貧家の出にも似ず、如何にも柔和にして、相貌も、亦、品格も備はり、眞心が充滿して居る樣に見受けられた。

眞情の力は、天地をも動かし、鬼神をも泣かしむるものである。此の眞情を以て社會、民衆に對し、又は子弟に對し、且つ下々の者に對すれば、慈悲とも慈善ともなる。慈悲は神佛の心であるから、慈悲の心ある者は、必ず神佛の擁護を蒙むるものである。

觀無量壽經には『佛心とは大慈悲是れなり』とある。古歌には『佛とはなにをいはまのこけむしろ慈悲より外に敷く物はなし』と詠じてある。住吉明神の御託宣と稱する御語にも、『我に神體なし慈悲を以て神體と爲す、我に智慧なし忠孝を以て智慧と爲す、我に奇特なし無事を以て奇特と爲す、我に道德なし正直を以て道德となす』とある。是れ、果して御神託なるや否やは知らされども、神の御心は、必ず斯くあるべきものである。

天長節といふは、至尊陛下の御聖誕日であるから、吾々國民に取りては最も大切なる祝日である。此の天長節は、光仁天皇より始まれりといふ。天皇の寶龜六年十月十三日は實に其の御誕辰であつた。此の日を天長節と名け給ひし折の詔に『十月十三日ハ是レ朕ガ生日ナリ、此辰ニ至ル每ニ感慶兼ネ集ル、宜ク諸寺ノ僧尼ヲシテ、每年是日、轉經行道セシムヘシ、海內諸國並ニ屠ヲ斷スヘシ、內外百官、酺宴ヲ賜フコト一日、仍テ此日ヲ名ケテ天長節ト爲ス、庶クハ、便チ斯ノ功德ヲ廻シテ、虔ンテ先慈ヲ奉シ、此ノ慶

祥ヲ以テ普ク天下ニ被ラシメム』と、宣うてある。實に有り難き大御心ではありませんか。天長の佳節を行はせらるゝに當り、御經を讀ませ、殺生を禁斷して、祖宗を奉祠し、天下萬民を慈愛し給ふ。今日と雖も是の如き精神を以て天長の佳節を迎へ奉りなば、正しく御聖旨に酬ゐ奉ることが出來ようと思ふ。かく人の情をして善美ならしむるには、正しき信念を養ふことが大事である。

大丈夫の心

次に、大心とは大丈夫の心である。承陽大師は之を解して、『其の心を大山にし、其の心を大海にせよ』と仰せられた。山には不動の德あり、海には寛容の德あり、吾々も此の二德を涵養して、始て大丈夫の精神を有することが出來る。

人はとかく境遇の爲めに支配せられ、之に依て色々なる妄想を起し、邪心・惡念を萠し易いものである。故に、吾々は、先づ以て心を靜め、意を制し、境に對して動搖せざる底の力を養ふことが必要である。此の心は信仰と禪定とに依て養はれる。昭憲皇太后の御歌に、『事に觸れ身はいかさまに碎くとも心ゆたかにあらまほしけれ』とある。此の德が必要である。山中に逃れ入り、浮世に遠ざかりて、安靜の狀態を保つといふ樣な、消極的解脱ではならぬ。此の世に活動して居り乍ら、不動の精神に安住するといふことが肝腎である。

信仰と禪定とは決して別物では無い、信仰の究竟した處に眞の禪定はある。信仰とは、名利や慾望の爲めに本心を失却する樣な凡夫量見から離れて、天地と其の德を同うし、常住不滅の法身を顯現し、一切群生を永久に濟度せんとし給ふ所の大覺世尊に、此の全身心を歸投することである。故に、大歸依の信力を發すれば、夢幻の如き浮世の事には囚はれぬ。西郷南洲翁が、『命もいらず、名も入らず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困る者なり、此の仕末に困る人ならずんば艱難を共にして、國家の大業を成し得ざるなり』といふたが、命も名も官位も金もいらぬといふは、此れ等を超越したる一大信念があるからである。此の大信念は、物外に超然とし、能く自受用法樂を獲得するに依つて、自から安心不動の三昧に住す、是れ則ち信仰が禪定と一致した狀態である。また禪定は身心調和の法門である。足を組み、手を組み、心地上、一切の妄念を截斷し、大磐石の地に安住する時は、身心、自然に脫落して、本來の本心が現前する。此の時、自から周遍法界の佛心に相應する。法華には『深入二禪定一見二十方佛一』と仰せられた。是れ即ち禪定が信仰と圓融した狀態である。

斯かる境界に至れば佛の慈悲力が自から自己方寸の中に現前するに依て、一切衆生を視ること猶ほ赤子の如くになるから、其の心は恰も大海の百川を容れて厭はざるが如くになつて來るものである。

禍を轉じて福となす

併し、煩惱無盡誓願斷というて、吾々の煩惱は實に無盡であるから、之を掃蕩し盡すといふことは一朝一夕にして全功を收むることは出來ぬ。だが願力さへ强固なれば、漸々に慣習し、漸々に解脫することが出來る。是れぞ永遠の幸福を得、永久の快樂を享くる所以で、是れ程めでたいことは無い。而して吾々御互は幸福を求むるにも、自分一個の幸福を求めてはならぬ。自分一己の幸福よりも一家の幸福に重きを置かねばならぬ。一家の幸福よりも國家の幸福に眼を注がねばならぬ。

又、世の中は、大海に波瀾の湧くが如く、始終、樣々なる事に廻り合ふこと、彼の塞翁の馬の如くである。昔、塞翁、卽ち邊塞の城門を守つてるた翁の馬が亡げたので、隣人が氣の毒がつて見舞に行くと『翁は『なに惡い後には幸福の有るものぞ』というて平氣で居る。彼の馬は果して胡地より一疋の駿馬を連れて歸つて來た。隣人が之を祝すると、翁は『なに善き後には禍の有るものぞ』とて、別段喜びもせぬ。すると果して翁の子が落馬して大怪我をした。隣人が『飛んだ御災難で』といつて慰問をすると、翁は『なに惡い後には善きこともあるもの』というて平然として居た。後、其の邊境に戰亂が起り、壯丁は皆之に赴いて多く戰死した。そして、翁の子のみは、落馬の時の怪我にて戰場にも出でず、無事に生涯を送つたと申すことである。人間萬事多くは是の如くである。

故に、吾々は、自己の觀念に依りて、或程度までは禍を變じて福となし、凶を變じて吉となすの心得が無ければならぬ。或人が、知人に婚禮のありしを聞き、特にお祝ひに行つて、新婦に面會したところが、

嫁さんは恐ろしい目をして睨んだといふので『大層立腹して歸り『あんな嫁の居る家とは絶交する』というて散々に惡口を言うて居た。數日を經てから段々聞くと、睨んだのでは無くて、性來さういふ目であつたといふことが知れ、非常に氣の毒がつたといふことである。迂衲は、此の話を聞た時に、『人間は、往々邪推や疑念の爲めに、罪深き誤解を起す事のあるものぢや。觀念力を養ふ者は、本當に睨まれた場合でもあれは睨んだのでは無い、あゝいふ目付きで居らつしやると思ふが宜い。又、親や舅姑が、少々無理な小言をいうた場合でも、あれは自分を勵ます爲めの方便に仰せられるのだと觀ずるが宜い。物は、善意に解釋するがよい。さすれば、修養の資けともなり、已れを調ふるの道ともなるものぞ』と話した事があつた。

或人が、正月元旦に『なんでも今日はおめでた盡しで無ければならぬ、年始客が來た時、婦人ならば辨天さまといへ、老人ならば壽老人と申せ』と、子供等に命じた。間もなく辨天さまが來た。處が、門松の處に卒倒した。傍へ近づいて見ると、口から泡を吹き出して人事不省、たしかに癲癇を發したのであつた。さあ大變、主人は、すつかり鬱ぎ込で了うた。そこへ狂歌師が來て『門松にもたれて泡をふくの神、これぞめでたき辨才天かん』と詠んだ。主人もこれで大に機嫌がなほつたといふ話しもあるでは無いか。

それから、逆境を利用する覺悟も大切である。支那の韓信は、若者共に股をくぐらせられたのが却つて志を勵ます所の增上緣となつたといふ。英國のネルソンは、また脊が低くて某艦の艦長となりし時も、

此の爲めに『矮小の艦長』と嘲けられた。之に奮激して一段と努力を爲したのが、竟には軍神といはるゝ程の大人物となる基となつたといふ。是等は皆な禍を以て福となし、凶を轉じて吉となしたものである。證道歌に、『惡言は是れ功德なりと觀ずれば、是れ卽ち我が善知識と爲る』とあるが如く、人から惡口をさる る場合、それだけ我れに缺點あることを反省して、身を愼むとか、又は前世の惡業の致す所と觀じて、信心を勵むとかすれば、却つて道に進み、德を成すの因緣となるものである。古來より、至聖大賢となり、偉人と呼ばれ、哲人と稱せらるゝ人は、皆多くは逆境の人である。逆境ならざれば、自ら艱難の境に飛込まれた人であることを忘れてはならぬ。

又、前に述べたる三心の修養が出來ると、天魔も、妖怪も、畏れて近づかぬ樣になるものである。今の京都の南禪寺は、龜山法皇の離宮であつた。卽ち龍山の離宮である。時に妖怪荐りに作り、妃嬪屢ゝ魅せらる。依て、勅して南都の榮尊阿闍梨に修法を命ぜられた　阿闍梨は勅を奉じて祕法を嚴修したが、更に效驗が無かつた。依て、東福寺の無關禪師に命を下された。禪師は、二十人の禪侶を率ゐて離宮に安居し、粥飯禪坐、所謂大攝心を行ひ、經も讀まず、護摩も燒かず、然れども、妖怪は頓に熄んでしまつた。是に於て、法皇の御心、深く禪門に歸し給ひ、遂に離宮を革めて禪院とせられたのが今の南禪寺である。是れは人格の威力であらうが、その人格なるものは、全身心が佛法に相應し、身心が佛心佛行になつて居たからかゝることが出來たのである。吾々に於ても亦た能く前の三心の修養を怠らず、自然に此の身心に勝功

德を得、更に益〻信仰の念を進むることこそ、眞正なる幸福を得るの道である。

斯くする時、內、佛德を養ひ、外、佛力を被むる。諸天善神もその身を擁護し、惡魔邪鬼も近き侵すことと能はず、人生の海に種々の波瀾のあるまゝ、境遇の山に種々の雲煙の起るまゝが、皆な己れを勵まし、志を磨き、道に進み、德を成すの因緣となる。故に、人々悉く道器となり、日々是れ好日ならざるは無い。吾々は徒らに外の吉凶の影を捉ふることを爲さず、內に顧みて吉凶の根本を明らめ、以て眞個の吉祥の門を開き、日々是れ好日底の生涯を送りたきものである。

禪と福德

禪の禪たる所以は自己を徹證するに在り。一切の煩惱、一切の罪惡は皆な自己に昧きより起る。故に禪は大智慧の法門にして大解脱の要道である。人間浮世の名利を離れて、天地の大道を吾人の脚跟下に開通し、五欲六塵の幻影を泯して、聖賢の至德、自己方寸の中に現成するのが禪の効用である。然らば、世の人の、財寶を求め、長壽を願ひ、名譽を望み、快樂を希ふの類とは全く沒交渉の樣にも思はれる。されど夢想國師が、『佛を兩足尊と申することは、福智ともに滿足したまへる故なり、されば福智をきらふべきにはあらず』といはれし如く、禪と雖も、決して福德と智慧とに反對する譯のものでは無い。

抑も佛法なるものは、一口にいへば離苦得樂の法門である。苦報の極端なるものを三惡道といひ、樂果の最勝なるものを安養界とも淨土ともいふ。唯だ淺智の凡夫は、苦を厭ひながらも苦の本を絶つことを知らず、樂を欣ひながらも樂の基を開くことを忘れて居るから、いつ迄も苦界を解脱することが出來ないの

であります。苦といひ樂といふも、決して他より來るものに非ずして、其の根源は自身の善業・惡業にあるのでその善惡の業は悟りと迷ひとが土臺である。悟りとは天理人道を明らめてそれに隨順することで、迷ひとは智慧道德を昧まして、邪道に蹈み込むことであります。故に、佛敎に於て眞の幸福を求めしむるには、先づ眞の行爲の善淨無垢ならんことを勸める。其の行爲を善ならしむるには、必ず迷ひを轉じて悟りの道に入らんことを勸めるのである。さすれば禪と雖も、決して福壽を招くの法に反する者では無い。否、寧ろ完全に永久の福壽を得るのが禪の効果であります。然らば、如何樣に禪を修し、如何なる形に福壽を得るのであるかといふことを、一通り說明して見ようと思ふ。

先づ幸福といへるものゝ標準を、七福神に依りて御話しを致します。七福神とは、壽老人・大黑天・福祿壽・惠比須・辨財天・毘沙門天・布袋である。此の中、壽老人と福祿壽と布袋とは支那にて崇む神仙、毘沙門天・辨財天・大黑天は印度にて祭る所にて佛敎より出づ、惠比須だけは日本の神樣である。是の如き神人を寄せ集めて七福と稱したるは、何時頃より始りしものかといふに、或說には弘法大師の創作ともあるが、確なる證據は無い樣です。又、或說に依りますと、德川家康公が、或時、天海僧正に對して『國を富まし家を榮えさすに法ありや』と問はれしに、僧正は仁王護國經を引いて『經に「七難卽滅、七福卽生、人民安樂、帝王歡喜」とあり、又、「天災地妖の難なく、國土侵略の憂なく、民安く國治らん」とあるに依て、此の經を讀誦し、解說し、且つ奉行したまひて然るべし』と答へられた。公は更に『七福とは何

か』と問はれければ、僧正は『壽命・有福・人望・淸廉・愛敬・威光・大量』の七を擧げ、それを人型に表はして、壽老人以下の七神を描かれた。公、大に喜び、畫師狩野某に命じて畫かしめられたのが七福神の初めだと申してある。後者の方が正確な樣に思はれます。

七といふ數を擇んだのは、仁王經に七難七福とあるに依つたのである。其の七難とは、一には日月度を失ふの難、二には星宿度を失ふの難、此の二つは天變に屬す。三には災火の難、四には雨水變異の難、即ち水害である。五には惡風の難、六には亢陽の難、即ち旱魃の害です。七には惡賊の難、即ち凶賊禍を作して境界を侵し擾し、財を奪ひ身を苦しむるの類である。以上の七難を免るゝのが七福です。觀音經にも七難が說てある。その七難は一に火難、二に水難、三に羅刹の難、（羅刹は暴惡と譯して食人鬼の類である）、四に刀杖の難、五に鬼難（鬼とは人の志業を妨げたり樣々な祟りをなすもの）、六に枷鎖の難、七に寃賊の難（無實の罪に苦しめらるゝこと）であります。

是の如く種々の災難があるけれども、約めていへば四になる。一に身體生命を惱ますもの、二には精神を惑はすもの、三には資財を損ずるもの、四には志業を妨ぐる者であります。又、災難の原因を大別すれば、自然的と不自然的との二つとなります。自然的とは天災地變等に依ることや其の他逃れ難き災厄です不自然的とは自分の妄想や邪欲を以て故らに招きたる禍です。自然的は過去の惡業に起因するもので不自然的は現在の邪業に基づくものであります。此等の厄難に打勝て、壽命も、福分も、威嚴も、德望も、み

な盡く具足する樣になりたいといふのが、人間の最大理想として、希望する所であります。

御正月の御飾りとして、歲寒うして操を易へぬ常磐の松を門に立て、節目正しき竹を挿さみ、家產を讓るべき子孫の繁昌せよかしとての讓葉、幾千代かけて榮えよとての橙、身代を延ばさんとの熨斗鮑、堅固に住めよとの堅炭、喜こび多かれとの昆布、財寶をかきよせたしとの串柿、腰に梓の弓を張る迄の壽を保ちたしとの海老、何やかやと勝ち通しにとの榧勝栗、五穀豊饒にてあれかしとの瑞穗俵、皆な福壽を祈る人心の希望を表示したものであります。併し唯だ無暗に幸福を望んだからとても、其の幸福を成就する所以の道を知らざれば、所謂『盲人の牆窺き』で何の役にも立たぬことになる。是れ七福神に對する禪話を試みる必要ある所以であります。

壽命と福德

先づ幸福の第一として壽命です。無病健全にして天然の長壽を保つのが、人間一切活動の基礎であります。されば釋尊も、『無病は第一の利、知足は第一の富、善友は第一の親、涅槃は第一の樂』と仰せられてあつて、無病長命こそ正しく幸福の本であります。長壽の標本として擧げられたのは壽老人です。所謂『慈悲深く陰德をなす銘々の子孫に長く福壽與へん』といふが壽老人の願望と見える。

此の壽老人は支那の老子だといふ說もあり、又、南極老人星といふ人間の壽命を司る星だともいうて

ある。杖の先に一軸の卷物を掲げたるは、人間壽命の長短を記したるもので、鹿を侍せしむるは、『鹿は千歳を經ると蒼鹿といひ、又、百歳を過ぎて白鹿と化し、更に五百歳を歷ると玄鹿といふ。その肉を食すれば二千年の壽命を保つ』というてあるからである。併し壽老人の容を見れば、何となく脫俗して居つて、人間の名利に頓着せぬ仙姿がある。鹿も亦柔順にして優悠な動物であつて、所謂『飢ては藥圃を尋ね、渴しては靈泉を飮む』といふ極々綺麗な生活をして居ります。要するに壽老人は恬淡無欲の神仙である。恬淡であるから浮世の事に束縛せられず。其の心を寛くして物事にコセつかぬ。

志貴瑞翁は百歳になりても尙ほ健康であつたが、長壽の訣として人に告げて『氣を長くお持ちなされ』というたさうです。三祖大師は『性に任すれば道に合し逍遙として惱を絕す』と仰せられたが、是れが恬淡の妙である。性に任すとは、自然の法則に打任せて私根性を加へぬことである。妄りに貪ぼつたり、妄りに瞋つたりするのは性に背くのである。自分量見を打離れて天然の理法に基づきなば、日常の立居振舞も自づと道に合ふものである。卽ち親に對して、孝となり、君に對しては忠となり、恭儉を以て己れを持し、博愛を以て衆を待つ樣になれば、自心に愧る所も無く、恐るゝ所も無いから、實に大安心が得られます。又、無欲といふは、道を守り道を樂みて其の外を望まぬ事である。道を守るから自づと欲を制し、道を樂むから自づと分限に安んじて、常に滿足を得ることが出來る。一禪僧が山居僧の菴を訪うた時、山居僧が『何事かまゐらせばやと思へども達磨宗には一物も無し』といふと客僧も亦『何物も無きを賜はる

心こそ本來空の妙味なりけり』と返歌をしたといふことです。是れが無欲の快樂である。

されば水野澤齋も『心の養生とは常に怒と慾とを堪へ、心に耻しと思ふ事をなさゞること也』といひ、熊澤蕃山も『人は咎むとも咎めじ、人は怒るとも怒らじ、怒りと慾とを捨てこそ常に心は樂しめ』といはれました。古歌に『養生は其身の程を知るにあり程を過すは皆な不養生』『心をば常に靜かに其身をば常に程よくうごかすがよき』などとあるのは、皆な長壽の心得であります。併し肉體の壽命のみを求むるは淺き望みである。吾々は生死即涅槃と心得て常住不死の靈性を徹見せねばならぬ。無量壽佛は本來自己方寸の中に在り、此の無量壽佛を拜み奉らば、吾々の生命は天地と共に盡きるといふことはありませぬ。

第二には福德である。人間が如何に長生をしても、福德が無いと衣食にも困窮して、結局他人の厄介にのみなる樣な事になる。『憎まれ子世にはゞかる』といふのでは生甲斐の無いことです。故に福德を有することが大切である。此の福德の代表が大黑天である。南海寄歸傳によると『天竺の諸大寺、厨の柱の側に二尺か三尺位の像で、金の嚢を持ち小さい牀に坐して、一脚を垂れて居る神を木で刻んである。天竺の慣習で、其の神像を油を以て常に拭ふに依て眞黑になつて居る、是を摩訶迦羅天と稱す』とある。摩訶迦羅は大黑と譯す。我國では、大黑天を大國主命だともいふ。大國と大黑との音通より斯く解したものかも知れぬ。大國主命は其の子の事代主命と共に、一百八十一神を率ゐて天下を經營し、普く人民の爲めに難を除き福を與へられた神である。舊事本紀には『大國主命は嚢を負はれることもあり』と記してあ

るさうだ。

昔、傳教大師は延暦寺を比叡山に建立せられたが、叡山は日吉山王と大國主命を祀つた御山である。大師が山王に向つて冥助を祈られた時、神が米俵の積んである上に姿を顯はされた。其の形太だ黑く全身圓らかに、黃金鎚を把り寶の囊を負うて居つた。大師は、是れ正しく經文の大黑天ならんとて、手づから其の姿を刻みて、大黑天神經を誦まれたと申す事であります。

併し大黑天の御姿には深大なる意義がある。慶長の頃、太閤秀吉公の御氣に入りなる曾呂利新左衞門が德川家康公の詰所に於て物語りの際、大黑天の事に就て『世人が福神として祭るのは、此の神は肩を高く作りて頭巾を被る、是れ上を見ずして奢りを制し、其の本分に安んずるの相なり、人能く其分に安んぜば幸福は自から來るべし』といふた。時に家康公は口を開いて、『古より五字七字の訣といふことがある。五字とは「うへなみそ」、七字とは「みのほどをしれ」であるが。此二を守りなば貴賤共に幸を得るであらう。故に古歌にも「上な見そ身の程を知れ人並にあるべきやうに時に隨へ」とある。大黑天は、常に頭巾を被りて上を見ぬから、必要の場合には脫ぐことも易かるべし、武士が刀を腰にし、身の養生を愼むのも一旦の緩急に備ふるものぞ、只だ長生を貪ぼるのでは何の益もあるまじ、大黑も亦時としては帽を脫するの理あるべし』といはれたさうです。

思ふに色黑きは眞黑になつて働くこと、米俵を踏へて居るは財產を大切に守ること、頭巾を被るは無暗

に餘計な事に頭を出さぬこと、袋をシッカリと捉んで居るは堪忍の强きこと、槌を持するは活動の勇氣ある事と見るが宜い。故に古歌にも『忠孝の打出の槌に堪忍の袋を持つ人にめぐまん』『我槌は寶打出す槌でなし、、、、なまくら者のあたま打槌』『君に忠親に孝なる人あらば簑笠もやらう槌も袋も』などとあります。佛敎では菩薩の六度の中に精進波羅密、八正道の中に正精進を説てある。精進とは勉勉努力の謂である。『なせば成る爲さねば成らぬ成る事の成らぬは己が爲さぬなりけり』何事も精進力に依らざれば成功を見ることが出來ぬ。釋尊は『若し能く精進すれば事として難きもの無し』と仰せられた。勉强せんには先づ以て正しき志を立て、誠意と熱心とを以て愉快に勉强せねばならぬ。

我が高祖大師の如きは支那の天童山に在りて晝夜眠らずして修行せられた。大祖大師も加賀の大乘寺に於て辨道の時、六年間も脇を席に就けなんだとある。勉强には期限が無い。故に吾々は其の分を守り、其の職を重んじ、渾身の喜びを以て努力し去る時は、必ず其の功果を收むると同時に、求めずとも幸福は其の身に降るものである。セネカは『時は之を貪慾的に求めて可なる唯一の財寶なり』といひ、ピートル帝は『予が生活を能ふ限り長からしめんが爲めに能ふ限り短く眠れり』というて居る。吾々も常に此の覺悟を以て精進せば、精神と物質との兩方面に於て、必ず眞正なる福徳を獲得することが出得るに相違ありませぬ。

第三は人望、所謂名譽です。正しき美はしき名譽です。信用が無ければ人望は得られぬ。人望の在る處に名譽がある。此の人望の標本として福祿壽が擧られてある。福祿壽は支那の道教で祀る所の神で、天の三星ともいふ。前の壽老人に似たる神です。風俗記に依れば、宋の元祐年中、京師に一の老人あり、頭の長さ三尺、頭と體と稍や同じく、目秀で髯多く、卜筮を事とし、錢があれば酒を飲み、自ら其の頭を叩いては『吾は壽を增すの聖人なり』というて居た。それが遂に上聞に達し、拜謁を仰せ付けられて酒饌を賜はり、其の際、帝は年齡を問はれしに、『臣は南方より來りて黃河の澄むのを見ました』と對へた。黃河は一千年に一回澄むといふ事である。彼は斯く對へ了るや忽ち姿を隱した。そこで帝は壽星なるべしとて其の像を畫かしめ、是を福祿壽と名けたといふ事です。

是れは昔の御話、吾々御互の標準とする福祿壽はどうであらう。頭の高いといふは品性の氣高いことです。私利私慾を離れて品性の高潔なる人で無ければ、社會の名望は得られませぬ。眞正の福分は足る事を知るに在り。正義の爵祿は學問知識に依て得られる。故に『足る事を知る者は富む』とも『學べは祿其中に在り』とも申してある。又、壽命の方とても『徒らに百歲生らんは、恨むべき日月なり悲しむべき形骸なり』ともいうて、但だ年數を澤山經たればとて褒められませぬ。立派なる功德を萬世に遺すのが眞の長壽である。されば、內、足ることを知り、外、學業を修め、而して、能く社會公共の爲めに、利益ある事業に盡すのが眞の福祿壽であります。此の三德を全うするには正しき信念を養ふことが大切である。そ

こで古歌にも『神儒佛を尊ぶ人ぞ福祿壽永くかしらに宿り守らむ』というてあります。

信念を養ふには第一に自身を信ぜねばならぬ。ソクラテースは『汝自身を知れ』というた。然らば、どう信ずべきかといふに、古人が『即心即佛』といはれし通り、吾々は本來天眞の佛である。三世諸佛の光明も、十方の菩薩の願行も、畢竟、吾々の方寸の中に在る事を堅く信ぜねばならぬ。かういふ信念があつてこそ、始めて神をも佛をも本當に信ずることが出來るものである。吾々は元來、立派な佛であつて、天地の大道も、智慧も、道徳も、皆な我れに備はつて居るものと確信すれば、淺はかな量見や耻かしい妄情は、自然に愼まずには居られぬ樣になる。是に於てか、知足の念も、明らかな智慧も、美はしき事業も、自づと實現して來る樣になるものであります。

第四には淸廉の福です。淸廉とは、正當の理由なきものは釐毛と雖も貪る心なく、自ら其の分限に安んじ、其の天職を樂み、正直にして潔白なるをいふ。孟子が『其義にあらず其道にあらざるや之れに祿するに天下を以てするとも顧みず』といひし如きは、志操淸廉の大丈夫である。兎角、多くの人は欲望の爲めに道を過まり易いものである。不義の富貴は惡しと知りながら、之を貪り、淸潔の貧窮は耻るに及ばずと知りながらも之を厭ひ、知らず〳〵の間に五欲六塵の奴隷となる者が多い『欲深き人の心とふる雪はつもるにつけて道を忘るゝ』『心から流るゝ水をせきとめて己れと淵に身を沈めけり』恐るべきは貪欲であるから、我々は努めて淸廉の德を養はねばならぬ。此の德の標本として擧げたのが惠比須である。

惠比須は我國の神代に於ける、伊諸那岐・伊諸那美二柱の神の第三子蛭兒尊ぢやというてある。此の神は三歳になりても足が立たぬ爲め、石樟の船に乘せて海に流されたが、その船は攝州の濱邊に着たので、里人が之を祀つた。今の西の宮がそれである。一說に、惠比須は天津日高穗々手見尊だというてある。尊は海に釣して針を失なひ、和田津海に入りて赤女魚の喉より之を得、遂に海神の女を娶り、干珠・滿珠といへる二つの寶珠を得て歸られたので、福神と稱する樣になつたのだというてある。又一說には、惠比須は事代主の神だともいうてある。此の神の親なる大國主命は、袋を負ひ、此の神は魚を釣られし事蹟がある。且つ此の神が商賣といふことを始められたと申すことです。加之、此の父子の神は淸廉な御方で、自分の御國をソツクリ天孫に捧げられたことは皆な人の知る所であります。聖德太子が、推古天皇の九年三月に人民の爲めに市場を設けて賣買を勸められし時、惠比須神を祀られました。十月に惠比須講と稱して此の神を祀る事も、太子より始まつたのであります。

併し、此の神を淸廉の德の權化とせしは、禪的見地より觀れば一層面白く感ぜられます。茫々たる生死の大海、人生の荒波の上に際限もなく漂流して居るのは御互の身の上では無いか。此の大海と荒波とを己れの住家となし、願力堅固なる石樟船に駕して同情慈悲の釣を垂れ、以て一切の衆生を沈淪より釣上げ、自分一己は家を定めず、處も極めず、風に任せ波に隨ひ、更に貪り求むる所がない。所謂『煩惱海中の船筏師』で、契沖阿闍利が『生死の川に世を經し渡し守り渡しはてずば棹もをさめじ』といふ人で無ければ、

眞の清廉になり兼ぬるものです。清廉といへばとて、唯だ潔白を守るのみでは、矢張、向上の死漢たることを免れぬ。人生の荒波に漂流しながら、悠然常に笑を含んで、『爲人度生』の釣竿を弄する底の手脚が無ければならぬ。是を『木人方に歌ひ、石女立どころに舞ふ』ともいふのであります。

愛と威光と大量

第五は愛敬の福です。是がまた最も大切な福である。愛敬なきものは衆生緣を結ぶ事も、人を感化する事も出來惡いものであります。愛敬の標本は辨財天である。辨財天のことは金光明經等に出て居る。辨財天女經には『怨敵退散諸人愛敬一切福田財寶滿足』とある。寶冠の中に白蛇あり、其の面は老人の如くにして眉毛白し、是れは佛の出世每に逢うて、衆生を利益する事の久しき瑞相にて、之を宇賀神といふ。經の終りに釋尊は『宇賀神を輕んずること勿れ、西方淨土には無量壽佛と號し、娑婆世界にては如意輪觀音と稱し、正しく生身は日輪の中に居して四天下の闇を照し、吒枳尼天の形を現じては福壽を施し、大聖天と顯はれては二世の障難を拂ひ、愛染明王の形を以て愛敬を授け佛果に至らしむ』云々と說かせられてあります。

吾々も亦、愛敬を得るには『無理をせず理非明白に辨ふる人に寶を更に與へん』といふ歌の如く、第一には正しき道を踏んで少しも無理なる事を致さず、常に優美にして柔和なる顏色と容姿とを備へねばなら

ぬ。つまり平生、辨財天の様な顔をする様にせねばならぬ。さればとて、紅粉を施し美服を飾れといふのではない。天請問經に『持戒恒に端嚴』とあるが如く、佛の戒律を持つのが眞の美人である。佛の戒律といふは要するに三つの德を具ふる事である。一には身と口と意とに於て惡い事はせぬこと、二には常に善事を行ふこと、三には人間にも畜生にも都てに向つて柔和親切にして、深き憐れみのある事であります。

禪學を修むる者は萬人に抽んでて此三大德を修養せねばなりませぬ。見地の大なる者程却て慈悲の涙に富み、機鋒の剛なる人程却て柔和の情に厚きものである。三十棒を振廻し電光石火の活機輪を轉ずる底の大用を有しながら、一面には小兒をも懷け猛獸をも和ぐるの愛敬ありてこそ、始めて大丈夫といはるゝのであります。

第六には威光の福で、その代表的福神が毘沙門天である。此の毘沙門天は鬼神の總大將である。毘沙門天王功德經に依ると、金の甲を被り、左手には寶塔、右手には、如意寶珠を取り、足には羅刹毘闍舍鬼を踏んで正法を守護したまふ。金の甲は四魔の軍を除かんための勇を表し、寶塔には八萬四千の法藏・十二部經の文義を具するの智を表し、寶珠には無量の財寶を衆生に與ふるの仁を表した者である。且つ釋尊は更に告げて、『毘沙門に奉仕すれば、無盡の福・愛敬の福・智慧の福・長命の福・眷屬の福・勝軍の福・田畑の福・養蠶の福等を得る』と仰せられてあります。

是の如く無量の福があるけれど、其の主要なる者は威光である。即ち四魔降伏の武勇である。四魔とは一に煩惱魔、是は心の迷である。二に五蘊魔、五蘊とは色・受・想・行・識の五で、つまり此の身のことです。此の身は、色、即ち物質と、受・想・行・識・即ち精神との集合體である。此の身には生活上の苦・疾病の苦等の樣々の苦があります。三に死魔、即ち死ぬること。四に天魔、是は欲界の第六天に吾々の善根を妨ぐる惡魔があるといふ。つまり自然界の障礙をいうたのであります。

此の中一番恐ろしいのは心の中の惡魔である。王陽明も『山中の賊を破ることは易く、心中の賊を破ることは難し』というて居る。防ぎ難きは我見我執の心の迷である。故に古人も『おさへたと思ふ下からはねかへす油斷のならぬ我はつはもの』腹たゝば人をも世をも恨むまじそのまゝ惡き心殺せよ』というてある。此の心を殺すの法は禪定の力が最も捷徑であります。坐禪して寂靜の境界に安住せば、一切の我見は自づと粉碎せられる。

二祖大師が、達磨大師に安心の法門を問はれた時『心を持ち來れ、汝が爲めに安心せしめん』と仰せられた。心の本體を究めたならば、どこに迷ひなどといふ種があらうぞ、外界の色や聲を追ひ廻るから益々煩惱が增長するのだ。若し回光返照して『自己とは何ぞ』と參究したならば、自づと、內には煩惱の惡魔を降伏し、外には天魔を叱咤し、一身の繫縛を離れ、生死の間に於ても自由を得ることが出來るものである。

第七に、大量とは度量の寛大なることで、是れ亦無くて叶はぬ福德です。之に配するに布袋を以てしたのは、甚だ興味あることである。布袋和尚は契此と名け、支那寧波四明の僧で、奉化縣の岳林寺に居り、長汀子とも稱した。形肥え顏蹙り、腹が大きく垂れ、常に杖を以て布の袋を擔ぎ、自分の道具は皆其の中に貯へ、市に出でては物を乞ひ、得れば袋に入れ、飢に臨めば食ふ。世間の小兒が、大勢で、面白がつて附き纏へば、嘻々として喜び、物あれば之に與ふ。其の境涯の脫俗にして愉快なる比ぶるに物なし、梁の貞明三年、遺偈を書して、端坐して寂を示した。世に彌勒大士の化身ともいうて居る。『心宏く腹を立ずに睦まじく家内和合の人を守らん』と歌にあるが如く、腹の大きいのは大度量を示し、袋一つを擔ふは分に安んじて天命を樂むの姿、にこ／＼して居るのは堪忍の强きを知るべし。

吾々も亦是の如き大度量が無ければ、法界の所有一切衆生を以て所化の相手となし、未來永劫を期して佛事を行はんとする佛菩薩の願行を具ふることは出來ぬ。若し狹量小膽にして些々たることに拘泥し、恨みを結んだり怒りを洩らしたりする樣では、何事も滿足せぬものです。明治天皇樣の御製に『あさみどり澄み渡りたる大空の廣きを己が心ともがな』『さしのぼる朝日の如くさわやかにあらまほしきは心なりけり』とある御歌の樣な廣き淸き心を持たねばならぬ。古歌にも『波淸き海原のごと心をも唯廣々とくらせ世の人』ともある。

『正月元日などは人の心もなんとなくのび／＼して居る。昨日迄怒鳴あつた人とも笑顏を交換して居る

が『元日やこの心にて世に居たし』『年中の人の心は今日ばかり』といふ風に、いつも〳〵のどかにありたいものである。高祖大師は『其心を大山にし、其心を大海にせよ』と仰せられた。山には不動の徳がある。如何なる順逆の風が吹て來てもビクともせぬ大安心が無ければならぬ。それと同時に海に寛容の徳あるが如く、百川交々來るも更に厭ふ色なく、敵も味方も推並て慈悲の海中に攝するの度量なければ、未だ倶に禪を語るに足らぬものである。

自己と福神

『人みなの心一つにかしこくも七つのさちの神いますかな』、七福神といふも其の源は吾々の心の中に在るので、決して外より來るものでは無い。故に、古人は、『禍福門なし只人の招く所』とも、『積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり』ともいうてある。

徳川家康公は或時、近臣に向ひ、『御身等は金のなる木を存じ居るか、若し知らずは今之を示さん』とて幹を三段にして梢を『よろづほどよき』中段を『しやうじき』根本を『じひふかき』と書かれた。其の時、細川幽齋が、左右に四本づつの枝を付けて御覧に入れた。先づ右の上からいへば『あさおき』『いさぎよき』『しんばうづよき』『ゆだんなき』左の上からは『かせぎ』『ついえなき』『ようじやうよき』『かないむつまじき』といふのであつた。

又『あやめ草』には五福の傳授といふ歌がある。一には徳で、歌は『謙り神儒佛をば尊みてよろづ誠によろづ堪忍』二には福『はら立てず家内仲よくおごりなく、家職大切實義大切』、三には祿『怠らず勤め〳〵て眞實に裏表なく今日を大事に』、四には壽『樂をせず酒色財慾深くせず灸治朝起足ることを知れ』、五には子孫『金玉は寶に非ず善心を積む陰徳に子孫榮ゆる』とある。

國家の光輝も、國民の精神如何に由て現はるゝのであるから、月照上人は『磨き得て國の寶となるものは人の心の玉にぞありける』といはれた。家庭の快樂も心が本であるから『家内中なかのよいのが寶船心やす〳〵世を渡るなり』ともある。併し、幸福といふも、快樂といふも、畢竟、心の中の道徳の表彰であるから、福徳の基礎は必ず自己の身心に確立せねばならぬ。然らずして、徒らに福徳を望むのは、恰も木に緣て魚を求むるの類である。唯に益なきのみならず、動もすれば、之れが爲めに貪婪猜嫉の妄想を造り出し、遂に無繩自縛に陷いる樣になるものであります。

道徳というても決して別な物では無い。教育勅語に御示しあらせられし品目、戊申詔書に御諭し下されし要領、皆な必須の道徳である。而して、此の道徳の財産を增殖するには、資本が無ければならぬ。其の資本を佛教では、或は六波羅密と說きたまうた。卽ち布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧とである。又、十誦律等には七聖財と說きたまうた。卽ち信念と精進と持戒と慚愧と聞法と喜捨と定慧とである。其の他、三福田、八福田等の說あるも、盡く皆な自己の道徳より發生したる美果であります。而して此の道

德は、本來、吾々御互の本性の中に具有して居るのである。孟子も『萬物皆な我れに備はる』というて居る。然れば、何れも自己心中に所有する固有の財寶である。此の財寶を開發するの法は坐禪三昧が正門である。坐禪三昧は、所有開發方法の中に最も完全な要術である。故に高祖大師は、坐禪を以て安樂の法門なりと仰せられた。

坐禪すれば精神の動亂を制し、腹の底に心を落付て、泰然不動の地に住せしむるが故に、自づと妄想の爲めに束縛せられることが無くなります。心に憂ひなく、恐れなく、苦みなき是れが快樂の土臺である。のみならず、坐禪の結果は自づと本性の道を體得するに依て、必ず無限の樂みが生じて來る。

一休禪師が住吉に詣でられし時、『此地とて、無常の火は免れぬものを、住吉とは扨も呑氣な名を附けしものかな』と思ひ『來て見ればこゝも火宅の宿ならめなに住吉と人のいふらん』と歌はれしが、臥茶庵の老僧が返歌して『來て見ればこゝも火宅の宿なれば心をきめて住めば住吉』というたとある。同じ浮世にありながら、其の人の心一つにて、苦樂趣を異にし禍福報を同うせぬ。古歌に『炮烙と同じ浮世の人心氣を煎るもありほうずるもあり』とある通りです。『波の音きかじが爲めの山籠り苦は色かへる松風の音』で眞の安心を得ざれば、松風の音にも心が動亂するが、若し精神湛然として能く天眞の道を樂む者は『波の鼓きこえぬ山の奧も尙ほ面白かりし松風の琴』ともいはれる。

六祖大師が南海の法性寺といふに寓居し、まだ俗人の姿でお在での時、一日、二人の僧が、風幡に就て

大議論を戰はした。一人は『風が動くのぢや』といひ、一人は『幡が動くのぢや』といふ、双方共一理があるから容易に決せぬ。そこで大師の意見を問ふこととなつた。其の時、大師は『是は風の動くにも非ず、又、幡の動くにも非ず、御身達の心が動のである』と仰せられた。誠に千古不磨の斷案です。佛教八萬の法門も畢竟此の心動の理を說かれたものに過ぎぬ。

然らば『心とは何ぞや、心は何に依て動くのであらう、心の動くのは果して善か惡か』これらの理を工夫し去つたならば、必ず『心は天地の主、萬象の母』であるといふこともわかり、之と同時に『自己元來是れ佛』なることもわかり、盡天盡地微塵も他物は無い。森羅萬象一毫も佛ならざるものは無いといふことも知れ、こゝに絕大の大快樂が現はれ、大安心が決定せられ、無限の道德・無窮の福德が、一擧手一投足の上にも實現して、自身卽七福神たるに至るのであります。

平常心是道

學道の用心

宇宙の至理、天地の公道と云うても、決して之を遠きに求むべきでは無い。吾人の平常底、直に是れ公道なることを理解し確信し歡喜するのが、精神修養の第一步であると思ふ。

昔、有名なる趙州和尚が、其の師南泉和尚に『如何なるか是れ道』と問はれた。道とは至理公道のことである。三世の諸佛は此の道を闡明弘通せんが爲めに、大慈悲心を運用せられ、歷代の聖賢は此の道を履踐窮行せんがために勇猛精進いたされた。『如何なるか是れ道』と問はれて、南泉和尚は『平常心是れ道』と答へられた。即ち、道なるものは、高尙悠遠にして摸索すべからざるものと思ふてはならぬ。吾人の平常心が其のまゝ道であるぞといはれたのである。夜が明ければ起きる。起きれば洗面する、茶を飲む、飯を喫する、業務に就く、應接を爲る、是れが吾人の平常心である。花を見ては其の美なるを知り、月を觀ては其の清凉なるを感ずる。善を見ては自から喜び、惡を見ては自ら厭ふ、是れ則ち平常心の妙用である

至理公道は此の間に活動して居る。

抑も公道なるものは、宇宙萬象の外に在るのではない。宇宙の全體が正しく公道の姿である。公道には牆壁も無く、偏黨も無く、増減も無く、生滅も無い。而して吾人は宇宙の間に生れ、宇宙の間に長じ、宇宙の間に行住坐臥し、宇宙の間に喫茶喫飯してゐる。卽ち吾人は公道の中にあつて、生死去來してゐるのである。公道は平等である。故にその現はれである吾人も亦た平等でなければならぬ。公道は無限である故に吾人も亦た無限である。公道は普遍である。公道は絕對である。故に吾人も亦絕對である。普遍である。承陽大師曰く、

辨道に生死をみるに相似せりと參學すべし。生死に辨道するにはあらず。

と。吾人は天地の公道の中にあつて、行住坐臥し、天地の公道の中にあつて、或は生じ或は死するなり。生死ともに道を離れず。道は永恒なり、されば吾人の生死は、道の中の頭出頭沒なり。生ずるに相似して未だ嘗て生ぜず。死するに相似して未だ嘗て死せざるなり生と云ひ死と云ふ、畢竟、道といふ大海中に於ける、波瀾の一出一沒たるに過ぎぬ。吾人の平常底、何事か道にあらざる。何れの處か道にあらざる。苟も道に志し、道に親しからんことを思はむ人は、宜しくこの道理を諦むべし、平常心是れ道なることを覺悟すべし、是れが着實なる學道者の用心である。

修行の眞僞を知るべし

高尚なる研究、幽玄なる哲理、是れも大切に相違ない。獨り學問として必要であるばかりでなく、佛敎教理の根柢を明らかにするには、是非とも研究の上にも研究の歩を進めて、益々眞理の發揮を圖らねばならぬ。併しながら修養の上から見る時は、此等は第二段の事項に屬して居る。修養の第一歩は平常心是れ道なることを確信して、言語・事業・動止・威儀すべての上に於て、至理の德を現はし、公道の光を放つのが、一大事と言はねばならぬ。然らざれば現時社會の一部に於て憂ふべき現象なりと云ふが如く、智、彌々明らかにして、行、彌々昧く、學、益々深くして、德、益々淺しと、云ふやうな奇觀を呈するに至る無きを保せられぬ。否な斯かる奇觀は、到る處に現出されて居るやうに思はれる。甚だ悲むべきではないか。承陽大師の親訓に曰く

> しるべし、佛家には敎の殊劣を對論することなく、法の淺深を擇ばず、たゞし修行の眞僞をしるべし。草華山水にひかれて佛道に流入するもありき、土石沙礫をにぎりて佛印を稟持することあり、いはんや廣大の文字は萬象にあまりてなほゆたかなり、轉大法輪また一塵にをさまれり。(辨道話)

と。敎の殊劣を對論する向もあり、法を謗る輩もあるが、然し斯かる輩でも、釋尊の門下に投じた以上はどこかで應分の法益を享けて居るに相違ない。法華會上では增上慢人でありしも、他の會座に在りては、

柔順なる機類にてありつらむと思はれる。其の機に適せざれば醍醐も其の效を奏することが出來ない。其の機に適すれば、毒藥も却て妙功を現はすことがある。佛に千百億化身の神通妙用があるのも、之れが爲めである。

要するに教の優劣を爭ふよりも、實際上の功德如何を考量するが必要である。法の淺深を擇ぶよりも、應用上の利益如何を顧慮するが必要である。若し實際に益なく應用に適しないとしたならば、如何に立派なる理論でも教訓でも半文の價値なく、空理空論と化し去ることを免れない。是れ吾人の大に留意すべきことである。故に大法句經に曰く、

雖レ誦ニ千言一不レ行何益。不レ如ニ一聞勸修得レ益。雖レ誦ニ千言一句義不レ正。不レ如ニ一聞レ要可レ滅レ意。雖レ誦ニ千言一不レ義何益。不レ如ニ一聞義、行得レ度。

右の佛語などは吾人の修養上、暫時も忘れてはならぬ箴規である。大慈寰中禪師曰く、

說ニ得一丈一不レ如レ行ニ取一尺一、說ニ得一尺一不レ如レ行ニ取一寸一。

口先きばかりの佛法は、修養上何等の利益をも贏ち得ることが出來ぬ。一丈の說よりも、寧ろ一尺の行こそ貴いのである。周濂溪も、

聖人の道、耳に入つて心に存し、之を蘊めば德行と爲り、之を行へば事業と爲る、彼の文辭のみを以てする者は陋なり。

と云ふてゐるが、實に至言である。

第二念に墮せざれ

前にも述べし如く、道は平常に在りと雖も、唯だ第二念に注意することを忘れてはならぬ。花を見て綺麗なと思ひ、月を觀て淸涼なと思ふ、是れ第一念である。此の第一念には佛と凡夫との隔ては無い。聖人が見ても美人は美人、吾人が見ても醜婦は醜婦である。只だ其の次に起る思想感情卽ち第二念には少しの油斷もすることが出來ぬ。

柳は綠、花は紅、山は高く海は深しである。法法位に住する其の儘を心鏡に印することは、吾人も佛も一體同見である。第二念に至ると、種々樣々に分れて來る。墨子の絲に泣き、楊子の岐に悲みしは此處である。同一の花を見るにしても、或は花の美を感じ、天地の美妙を悟るものもあれば、或は花の下に一盃を傾けやうとするもあり。或は花に依て無常を觀ずるものもあれば、或は花を盜まむとして意外の罪を犯すものもあるであらう。

此の第二念の上に於て、忽ち佛とも爲り、凡夫とも爲り、外道とも惡人ともなるのである。所謂毫釐も差あれば天地懸かに隔たり、遂に空間の上には十萬億土の遠きを致し、時間の上には三大阿僧祇劫の久しきを見るに至る。十萬億土も三大阿僧祇劫も、唯だ初一歩の踏み出しより分れて、表と裏、明と暗との相違

を來す。故に古人は、『第二念に流注せざれ』と誡められてある。流注せざれとは、第二念を起すなといふことではない。本より起さぬ譯には參らぬ。流注するなとは第二念を誤るなといふ意味である。委しく謂はゞ第一念は本來の淸き心の現はれであるから、其の心を第二念に相續して、決して淸き心に反對なる邪心を起すなよとの誡めである。

煩惱はこれ修養の好伴侶

吾人の平常心には、惜しい欲しい、憎い可愛いと云ふものがある。此の心を如何せんと憂ふる人がある。成程、其の心が貪・瞋・癡の三毒となつて種々に煩悶し、惱亂し、罪を造り、過を生ずるに相違ない。併し、決して憂ふるには及ばぬ。其の心こそ正しく佛種子である。大光明・大神通・大功德・大法輪の根本である。

惜しい欲しいと云ふ心があればこそ、佛の誓願も、吾人の信仰も、希望も成立する。憎いと云ふ心あれば、或時は降魔の利劍を揮ひ、或時は斷惑の砲門を開くのである。眞勇・眞精進・眞解脫は皆な是れより生ずるのである。可愛いといふ心があればこそ、一切衆生皆是吾子の慈悲博愛も現はれる。唯だ第二念を誤るによりて三毒の煩惱と爲るのである。若し能く智慧ありて正念に住すれば、惜しい欲しいの平常心がそのまゝ是れ大菩提の源泉である。優婆塞戒經に曰く

一切の悪友、諸の煩惱業は、卽ち是れ菩薩道莊嚴の伴なり。何を以ての故に。一切の凡夫は智慧正念の心あること無し、故に煩惱を以て怨敵と爲す。菩薩は智慧正念具足す、故に煩惱を以て道伴と爲す。智慧ありて正念なれば、從前、煩惱と思ひしものが、却つて是れ眞箇菩薩道の好伴侶である。然れば卽ち宇宙の至理・天地の公道は吾人の平常に在りて圓通無礙である。自ら渺たる五尺の身と輕んずること勿れ、果敢なき浮世と厭ふこと勿れ、此の身は實に是れ至理の權化、此の世は實に是れ覺皇の道場である。故に修養の第一歩としては、予は左の觀念を忘れざらむことを誓ふものである。

一、吾人は吾人の平常心是れ至理公道の府なりと確信す。

一、吾人は常に第二念を誤らざらむことを期す。

一、吾人は如何なる場合に於ても歡喜の心を失はじ。

禪の安心

世の中には心配事が多い

心配は身體に毒である。が、今日、世の中に心配事の絶え間が無い。私には心配といふものが無いといふ人は一人も無い。小學校へ通ふ子供までが心配事をもつて居る。

子供の生活は天國の樣で、更に心配といふものが無いといつたのは昔の話で、今は試驗地獄の何のと、種々の心配をする。

日本は物價が低い、食ふには心配が無い、日本は氣候がよい、惡疫の心配が無いといつてゐたのは昔のことで、今日は、世界でも名高い、活計のたちにくい國になり、樣々の惡疫が流行する國となつた。

貧乏と病氣と罪惡とは兄弟分で、いつも一緒になつてをるといふが、我が國に、この恐るべき貧乏と病氣と罪惡が盛んに流行し出した樣に思はれるのは、安心のならぬ次第である。

釋尊は「三界は不安なり、猶ほ火宅の如し」と仰せになつて、世の中は安心なものでない、世の人々は、

いつも、おど〳〵して居らねばならぬ様になつて居るのだと示されたが、實際、世の中には、不安が滿ちてをる。

安心を欲しない人は居らぬ

『苦しい時の神頼み』、信心も何も無い人でも、心配事があり不安なことがあつて、どうにもたまらなくなると、信心氣を起す。神佛に頼つて、ほつとしたいのである。安心がしたいのである。旅立ちをした愛兒から、手紙が來ぬ。親は心配をして手紙を出す、電報を打つ、神棚に燈明をあげる、種々して子供からのたよりを得ようとする。ものは氣にし出せば、とめどなく氣になつて、仕方がなくなる。然うしたときに、そこへ安着のたよりが來る、親はまあよかつたと安心する、嬉しがる。

人は、如何なる時にも、安心を欲し、不安を恐れる。不安は暗黒であり、安心は光明である。人生をして生氣に滿たしめるものは安心である。安心は、實に人間生活の光明であり、萬善萬行の根本である。かるが故に、釋尊は、人に安心を得しむることのために、百方手をつくされた。釋尊の敎へを奉ずる宗派は數多くあるが、その何宗派たるを問はず、最大主要の目的となしをる所のものは、『安心』である。人に安心を與へたいといふ此の一事である。

佛の與へたまふ大安心（一）

釋尊が、四十九年の間、夜となく晝となく、熱誠を以て說き示された所の『安心』は、これを大體から分けて、三段として見ることが出來る。

第一段は、物事に頓着せぬことによつて得る所の『安心』である。

加賀の金澤に、お醫者さんがあつて、どんな場合にも平然として居る。煩悶もしなければ、心配もせぬ、全く萬事に對して無頓着である。

或る日、このお醫者さんの所に、火事が起つて、家が丸燒けになつてしまつた。平素の落つきぶり無頓着ぶりを憎らしいほどに思つて居た面々は、今度こそお醫者さんの取りみだした態が見えるだらうと見に行つた程であるが、御本人一向に取り亂さない。見に行つた頓興の人が『お醫者さん、いかにお匙が上手でも家の黑燒、何とさりやうぞ』と揶揄つた。するとお醫者さん『黑燒は大工左官の腹藥、それに世上の氣付けにもなる』とすました顏をしてゐる。更に家の燒失などを苦に病んで居る樣子が無い。これには皆が驚いた。このお醫者さんは少し無頓着であり過ぎるかも知れぬが、火事といはれて、腰を拔かしてしまふよりどんなによいか知れぬ。

世の中は、無頓着ばかりでは渡れない。相當、考慮を用ひなければならぬ。考へることは、人間ばかり

が有する特權であるから、これは用いなければならぬ。が、然し愚にもつかぬことを、くよくよするのはよくない。所謂煩悶懊惱はよろしくない。そんなものは、斷滅しつくさなければならぬ。

佛は萬德を圓滿したまうて居るが、それを、斷德・智德・恩德の三德に分けて、我等は修養の目標として仰いで居る。その所謂斷德なるものを體得するときに、我等は、物事に頓着することの無い、雄々しい思ひ切りのよい人間となる。愚にもつかぬことを、くよくよする樣なことは全く無くなる。

ものごとに對して、徒らに苦悶し憂慮し、憤怒し嫉視する樣なことは、早く解脫するがよいのである。

佛の與へたまふ大安心（二）

第二段に於て述べる所の『安心』は、佛の三德の中の智德を體得することによつて得られる所の「安心」である。各宗各派に於ても、最も力瘤を入れて說き、その宗の最大主要の眼目として居る所の「安心」は正しくこれである。而して、此の『安心』は、正智開發、卽ち淸く正しき信念を得る時に於てのみ得らる所の『安心』である。大悟徹底する時にのみ得られる所の「安心」である。

『淸く正しき信念』に就て、承陽大師は

須らく、自己もと道中にあつて、迷惑せず、妄想せず、顚倒せず、增減なく、誤謬なきことを信ずべし。是の如きの信を生じ、是の如きの道を明め、依つてこれを行ぜよ、乃ち學道の本基なり。

と誨へ下されてある。我等は『自己もと道中に在り』といふことを信得することほど、心丈夫に力強い安心を得ることは、他に斷じてないのである。

道を知らないものには、道を信ずるものゝの愉快さが分らない。其の心安らかさ、樂しさが分らない。道を知らず、求めず、信じない輩は、徒らに顚倒し、迷惑し、苦悶憂愁の日を重ねて、いら〳〵するばかりである。

道は力なり、智なり、仁なり。ひとたび、自己がこの道の中に在ることを信得し、自知するに於ては、その心强さ、安らかさは、實に言語に絶するものがある。如何なることにも屈托しない、どんな場合にも戸まどひしない。

衲は、小僧の頃、芝の增上寺福田行誡上人の敎へを受けたことがある。上人は、京都智恩院に轉住せられ、八十四歳の高齢で逝かれたが、上人臨終のとき、侍僧の方々は、古例によつて、上人の枕邊に二十五菩薩來迎の御繪圖をかけ樣とし、過つて閻魔大王の畫像をかけてしまつた。

一同は、あわてゝ取りはづさうとしたが、上人はそれを御覽じて『いや〳〵、さうして置くがよい、衲の手に筆をもたせてくれ、衲は閻魔さまに頼みがある。衲は、今、閻魔さまの代筆をして、二十五菩薩の許へ手紙を出す。至急御迎へを願ふのぢや』といつて、有名な七十九字の書面を認められた。

上人の如きは、道と自己とが全く融合して不二なることを信じて疑はず、行も道に於てし、住も道に於

てし、坐も道に於てし、臥も道に於てし、二六時中、道を離れられぬお方であるが故に、何が來ても、うろたへなさらぬ。

道と自己とが一つになつて居らぬ人は、いつもおど〳〵して居る。泥棒をした男は、巡査のサーベルがガチヤとしても、青くなる。道ならぬことをして居るものは、一目で分るといふのは、おど〳〵した心が、顏容にまで現はれて來るからである。

人が道を信じて居るかどうか、道を平生行つて居るかどうかを見拔くことは、禪門の正師家が最も優れて居る。正師家は修行人を導いて、親しく、道を信じ、道を行はしめ樣と努力する。修行人も亦、道を得て早く『安心』を得んとして生命がけである。

佛の與へたまふ大安心（三）

人生の不安・苦惱・憂愁を除き去つて安穩快樂、どんな場面に突き當つても、安住不動、更に驚かぬ境地、即ち安心の境地に就いて、それを三つに分け、既にその第一段と第二段とはこれを述べた。

第一段に於て說いたのは、心が外界のものごとに拘はる所より來る苦悶・憂愁を解脫する時に得られる所の『安心』である。この種の『安心』は、一步誤ると、因循姑息、消極退嬰となる。目をつむり耳をふさぎ、口を閉ぢ、以て外界との交涉を斷盡し、コチ〳〵に固まつて、全く世の中の無用物になつてしま

ふことにもなるが、それは、邪路にそれた場合のことで、正當のものでない。世の中の有爲轉變を見ながらに、而も、その有爲轉變のために、心の安靜をかき亂されることなき境地、これが第一段でいふ所の本當の『安心』である。佛の斷德を感得することによつて、得る所の『安心』である。

第二段で說いた『安心』は、心が道と相應し、自己と道とが相卽相入、一つになることによつて得られる所の安心、大悟徹底した人の安心、淸く正しき信念を得た人の安心である。佛の智德を體得することによつて、得る所の安心である。

次に進んで第三段で說かんとする『安心』、これは眞の佛敎の安心、佛の恩德を感得するときにのみ達せられる大安心である。

第一段の安心も第二段の安心も、ともに眞の佛敎の安心で、何れも立派な大安心ではあるが、若しも、これより述べんとする所の歡喜妙樂の大安心を伴はざるに於ては、第一段の安心も第二段の安心も、ともに外道小乘の安心たるに止まつて、大乘佛敎の安心では無いといふことになるのである。

歡喜妙樂の大安心

古歌に、「憂き波のあるにまかせて嬉しけれ慈悲の御舟に乘りし身なれば」とある。憂悲苦惱、艱難辛苦の絕え間なき、此の世の中に生息し、明けても暮れても、憂悲艱難にまつはられながら、而も、憂悲・艱

難に囚はれず、更に不平・不滿なく、その間に喜んで善處してゆく。いな、憂ひ悲しみもみな御佛の慈悲ぞと感受して、有りがたい、勿體ないと、感謝の日をつゞけてゆく、この境地に入つた人こそは、まことの大安心獲得の人である。大乘佛敎の名を恥かしめぬ「安心決定」の人である。

九州に妙喜といふ尼さんがあつて、大安心を獲得し、殊勝にも、進んで人中に出て、御佛の慈悲を說き、大安心を物語つた。

盲目千人の世の中、この尼さんの安心の分らぬ人があつて、妙喜尼に揶揄ひ、亂暴にも、だしぬけに頭から冷水をぶつかぶせたことがある。然し、尼さんは、けしきばんだ樣子もなく、

夕立にあつたと思へば、何でもありませぬ。流されてしまはなかつたが、幸である。これも御佛のお蔭であります。

といつて、にこ〳〵して居た。村人には、この心境は分らぬ、尙も妙喜尼をなぶりものにし、或る日の如き、その剃りたての頭をぶんなぐつたことがあるが、それでも妙喜尼は怒らない。

屋根から瓦が落ちたと思へば、何でもない。生命に、別條なかりしは、佛さまの御惠みであります。

といつて居る。何とされても悲しまぬ、怒らぬ。無理無體な事に出會すれば出會するほど、御佛を禮讃し、慈悲哀愍を歎美する。斯うなると、揶揄も迫害も手が及ばぬ。遂には、却つて迫害の手を下した人をまで、よく化導して善道に向はしむることゝなる。

見るもの聞くもの、することなすことの上に、御佛の御慈悲、御恩徳を感ずること、妙喜尼の如きに到れば、世に慈悲の相ならぬはなく、恩徳の現はれならぬはない。寢ても醒めても、歡喜妙樂、佛恩報謝の生活が營まれるのである。

大安心を獲得する方法

佛教の各宗各派、その數多しと雖も、その各々が最高目的となす所のものは、同一である。大安心を獲得せんとする一事は、同一である。『よぢのぼる麓の道は多けれど同じ高根の月を見るかな』

併しながら、その目的を達するための行き方には相違がある。念佛を唱ふるもあり、題目を唱ふるもあり、護摩をたくもあり、坐禪をするもあり、種々樣々であるが、我が禪門の方法が、最も正道であり、捷徑であり、而して、何人にも行れる容易い方法である。

佛々祖々が單傳し來れる我が禪門の安心決定の方法は、『只管打坐』である。坐禪である。厚く坐物を敷きて、腰を据ゑ、先づ右の足を以て左の脛の上に安んじ、左の足を右の脛の上に安んじ、寛く衣帶をかけて齊整ならしめ、右の手を左の足の上に安んじ左の掌を右の掌の上に安んじ、兩の大拇指を向へて相拄へ、正身端坐して、不思量底を思量すれば、よいのである。

不思量底を思量するといへば、頗る難かしさうに聞えるが、思量を思量にまかせて、拘はらざれば、そ

れでよいのである。

常濟大師の御遺訓に、『念起これ病、續がざるこれ藥』とある。心に樣々の妄念が、縱し紛起しようとも、紛起すれば紛起にまかせて置けばよい、取り合ふが最後、手がつけられなくなつてしまふ。取り合はずに置けば、自然に消滅して無くなつてしまふ。

坐禪は、まことに容易い修行である。安樂の法門である。而も、一度その心境を會得すれば、所謂行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然で、いつもかも坐禪の境地を保つて居ることが出來る。

加之、我が禪門の坐禪は、これを修して後に、佛地に到るとか、大安心を得るとかといふのでなく『一寸坐れば一寸の佛』、わづかの時間でも親しく坐禪を致せば、その當體、直に佛地であり『大安心』獲得の境地である。

故に、承陽大師の『學道用心集』には『佛道は人人の脚跟下なり、道に礙へられて當處に明了、悟に礙へられて當人圓成す』と示し下されてある。

佛の道、人の道、それは、各人各自の足もとにある。足を踏み出せ、誠心誠意、實行に取りかゝれ。立ろに本當の道が納得出來る。あゝこれかと道を悟るとき、その人は完全圓滿の人物となられるのである。

身心脱落

道への放身捨命

我が天童淨祖曰く、「『參禪は須らく身心脫落なるべし』」と。然れば則ち身心脫落は實に是れ參禪の骨髓、學道の樞機である。予は今此の骨髓を拈起し、此の樞機を回轉して、吾人日常修養の敎訓と爲さむことを望むのである。

身心を脫落するとは、身心を放下することである。身心を不染汚ならしむることである。身心を無罣礙ならしむることである。身心をして佛道佛法に一如ならしむることである。換言すれば放身捨命である。猶ほ換言すれば自覺である。而して直下に身心の大自在を得るは、參禪の勝功德である。但しこの大自在の地に進むには、道のために、渾身心の勇を振ひ起し、放身捨命をも敢へて辭せざる底の精神を起さねばならぬ。此の精神こそ大自覺の基礎である。大自在の基礎である。身心脫落の基礎である。悲いかな、吾人は容易に此の精神を奮ひ起すことをせぬ。

255

今日學を修めつゝある我が同胞諸賢の志操心行は、果して那邊にかある。卿等、何の爲に學を修むるやと問はゞ、自己の智德を啓發するが爲なりと答へらるゝであらう。智德を啓發して何をか爲すと問はゞ、敎を布き道を傳へて、人類を救濟せむが爲めなりとか、卓拔なる學士、好箇の博士とも爲りて、名聲を中外に輝かし、敎學界の偉勳者たらむが爲なりと答へらるゝであらう。若し、或は社會に優待されんが爲とか、父母兄弟を喜ばしむるが爲とか、好き寺を得むが爲とか、財帛を求めて快樂を盡さむが爲とか云ふ人あらば、それは論外である。だが予も亦た耻かしながら、此の論外の仲間入りをしたこともある。今も猶ほ妄想窟裡を出頭し得ぬが、慚愧の念だけは、日一日に加ふるを覺ゆる。

先づ自己を調ふべし

惟ふに、布敎傳道、濟世利民は、實に是れ佛徒の本誓本行にして、衆生利益の心は即ち是れ菩提心であるのであるが、此の菩提心をして眞に能く菩提心たるの實を得しむるには、先づ自らを調へて解脫を得べきである。先づ聲聞の身を現ずべきである。『外に聲聞の身を現はし、內に菩薩の行を秘す』るは、佛在世の佛弟子の狀相であつた。迦葉尊者然り、阿難尊者然り、一千二百五十人の佛弟子何れか、外に聲聞の身を現はさないものがあらう。

佛祖曾て聲聞を以て敗種に比し、自調を以て寒灰に比したのは、是れ彼をして向上せしむる爲

便である。三百由旬より五百由旬に誘引する前進の號令である。百尺竿頭一歩を進ましむるの提撕である。されど圓滿なる自覺は必ず覺他の徳相を現ずること、火を燭に點ずれば、燭自身が光明體となると同時に自然の作用として室の内外に輝き渉ると同じである。若し寒灰枯木裡に坐死する者があるとすれば、是れ究竟の解脱に到らぬが爲である。如何となれば、『唯だ凡情を盡せば別に聖解なし。』能く解脱を得る時、性徳自づから現はるゝこと、雲晴れて月の自づから光りを發するが如くである。所謂身心脱落の時は、直ちに脱落の身心を活現する時である。

道に安んずるの人

予は左に記する所の承陽高祖の親訓を拜讀して、深く身心を放下するの至要なることを感じてゐる。
宋土の海門禪師、天童の長老たりし時、會下に元首座と云ふ僧ありき。この人は得法悟道の人にて、行持、長老にも超えたり。或時、夜、方丈に參じて燒香禮拜して云く、請ふらくは某甲に後堂首座を許せと。時に禪師流涕して云く、『我れ小僧たりし時より、未だ此の如きの事を聞かず。汝、坐禪僧として首座長老を所望すること、大なる錯なり。汝、既に悟道せること我れにも超へたり。然あるに首座を望むこと、是れ昇進の爲か。許すことは前堂をも乃至長老をも許すべし、その心操卑劣なり。誠に是れを以て餘の未悟の僧は推察せられたり。佛法の衰微せること是れを以て知りぬべし』と云うて、流涕悲泣

す。是れに愧ぢて辭すといへども猶終に首座に請ず。其の後、元首座此の詞をば記錄して自らを愧しめて、師の善美を顯はす。今、是れを案ずるに、昇進を望み、物のかしらとなり、長老とならむと思ふことをば、古人是れを慙ぢしむ。只道を悟らむとのみ思うて餘事あるべからず。(正法眼藏隨聞記第三)

然れば、元首座が曾て悟道せしといふも、未だ究竟せる悟道とは云はれぬ。唯だ聰明の力を以て、少かに瞥地の智通を得たるに過ぎない。是を以て其の道力は未だ俗情を制するに足らず、却て俗情の爲めに左右せられ、海門長老を泣かしむるに至つたのである。故に若し道の爲めに身心を放下し、法の爲めに身心を脫落し去る底の心操なかりせば、佛徒の本誓本行たる布敎傳道・濟世利民の如きも、恐くは渡世の業たるを免れぬであらう。況や、學に誇り名に驕らむとするが如きは、畢竟、佛法を利するの人にして、佛道に安んずるの人ではない。知者たることを得べきも、道人たることを得られぬ。

孔子曰く、『仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す』と、吾人も佛道に安んずるまで修養したいものである。又、孔子は、『其の身正しければ令せざれども行なはる。其の身正しからざれば令すと雖も行はれず』と云はれたが、是れも吾人が忘るべからざる好敎訓である。

名利をあはれむべし

然らば吾人は如何なる工夫を以てせば、身心を脫落し去ることを得べきやと云ふに、所謂世間的欲求を

放下して一途に此の身心を擧げて佛道の中に損ぜむことを希ふべきである。欲求を放下すと云ふは、欲求の何物よりも佛道を重んずることとなり。佛道の爲めには如何なる欲求をも犧牲にせむことを自誓することである。生々世々、佛道を離れざらむと期するのである。名譽を求め利益を欲するは人の常情である。何ぞ必ずしも是を不是であると云はう。人事の多くは、此の常情を本として活動し、進歩し向上するのである。されど吾人佛教家は、此の常情以外に、大なる理想がなければならぬ。是れを菩提心とも誓願とも稱す。而して其の誓願と云ひ菩提心と云ふは、總て自覺の顯現たるべきものである。故に承陽高祖は、次の如くに御示し下されてある。

邪枉にして身命を名利の羅刹にまかす、名利は一頭の大賊なり。名利を重くせば名利をあはれむべし。名利をあはれむといふは、佛祖となりぬべき身命を、名利にまかせてやぶらしめざるなり。（正法眼藏行持の卷）

名利の爲めに、佛祖の慧命を敗らしむべからず、これ吾人第一の用心なり。然らざれば、誓願堅固ならず、學道も亦た遂に戲論に墮することを免れぬ。故に世人の賞讃を得るにあらざれば、正道と知りながらも之を行ふの志なく、社會の歡迎を受くる時は、非法と知りながらも之を捨つるの勇なきに至る。是れ全く自己の常情を先として、身心を脱落し能はざるより起るのである。

自己の志に酬ゆる至樂

昔、迦葉尊者、一日、泥を踏む、次で一沙彌あり。之を見て乃ち尊者に問うて曰く、『何ぞ自ら作務せらるゝや』尊者曰く、『我れ若し爲さずんば、誰れか我が爲めにこれを爲さむ』と。實に千古不磨の公案である。百丈禪師は曾て『一日不作一日不食』の行持を示し給はれた。佛祖の行持は衆生を濟度するのみに止まらぬ。山河大地・草木國土に向つても、任運に大慈悲心を顯現すべきである。即ち自己の志に酬ゆるのである。道の爲めにする艱難は寧ろ精神上の至樂である。法の爲めにする辛苦は寧ろ理想の滿足である。故に身心の脫落は身心の安樂であると究盡しなければならぬ。

百丈禪師の一日不食は、禪師一日の滿足である。迦葉尊者の踏泥作務は、尊者一時の法樂である、法樂を求むるに意なくして、自づから法樂を得、滿足を期する心なくして、自づから滿足するのである。是は利己主義とか利他主義とか云ふ學理一偏に拘泥して居る者などの感得すべき境界ではあるまいと思ふ。

古 德 の 高 風

徹底、道の爲めに身心を放下せむことを深く志して看よ。此の志氣の前には自己も無ければ他己も無い。大慧禪師宗杲は、天寧に在りて分座に擧げられし時、香を焚いて、

寧ろ此の身を以て衆生に代りて地獄の苦を受くるとも、遂に佛法を以て人情に當てず。

と誓期せられた。又、芙蓉楷祖は紫の法衣及び定照禪師の號を勅賜ありし時、香を焚き恩を謝し罷て、左の如く上表して遂に之を辭せられた。

伏して聖慈を蒙むる、特に差して善を彰はす。問祇候譚禎をして、臣に定照禪師の號及び紫衣牒一道を賜ふ。臣、叡恩を感戴し已て、既時に香を焚き陞座して、仰で聖壽を祝し訖る。伏して念ふ、臣、行業遷疎、道力綿薄、常に誓願を發して名利を受けず、堅く此の意を持して積で歳年あり。庶幾くは、此の如くにして道を後來に傳へ、人をして意を佛法に專らにせしむ。今、異恩を蒙むると雖も、若し遂に恭冐せば、則ち臣自ら素願に違す、何を以てか人に教へむ。(乃至)伏して望む。聖慈、臣が徹悃を察せよ。敢て飾詞するにあらず、特賜愈々允なり。臣、歯を沒ふるまで、道を行ひ、上、天恩に報ぜむ。

是れ皆な道の爲めに道を修せられた古徳の高風である。是の如きの自覺は、法界を以て自己と爲して、以て覺道を莊嚴するのである。是の如きの自調は、自己の草木國土を拈却して、解脫海中に投ずるのである。雲門は、僧の塵々三昧に答へて『鉢裡の飯、桶裡の水』と答へられた。此の三昧は議論や學解のみでは得られぬ。道の爲めに身心を脫落する底の人のみ佛道に安住することが出來やうと思ふ。

斯かる境界に到り得てこそ、縦ひ到らぬまでも是非到得せむとの志氣ありてこそ、始めて此の身心をして佛道に一如ならしめ、又、此の身心をして不染汚・無罣碍ならしめ得るのである。若し夫れ一身の損益を

測りて其の行業を變じたり、宗門の待遇如何に依りて其の志を左右にしたりするが如きことあらば、果然として道中の人ではない。佛道を利することは乃ち無きにしもあらず、佛道に安んずることは夢にだも能ふべからず。況や施物の多寡に依りて誦經の疎細を分ち、利害の輕重に依りて慈善の切り賣りを爲るやうな量見の者が、佛法の有りがた味を知らう筈が無い。

唯だ、從晝至夜、自ら自己の行業が果して佛道に辜負せざるや否やを點檢し、只管に道を行ふことを樂しみ、道を守ることを喜び、如何にせば、我が手をして佛道を把捉せしむべきや、我が足をして佛道を履踐せしむべきや、我が眼をして佛道を觀破せしむべきや、我が耳をして佛道を聽取せしむべきやと、省察顧念することを怠つてはならぬ。是れぞ眞の道心者である。此の道心ありてこそ、始めて佛道にも叶ひ、又衆生利益の行願をも發得すべきである。

身心放下

往昔、天龍夢窓國師、參内の時、輿に乘じて妙心寺の門頭を過ぎた。妙心關山國師、高く裳を褰げ箒を把て、大衆と與に庭を掃ふ。夢窓嘆じて曰く『後世、我が兒孫と爲るべきもの悉く關山の兒孫とならむ』とて、輿中より默禮して過ぎられしといふ。知るべし、道に親切なる行持は、冥々の間に於て、能く偉大なる功德を生ずることを。承陽高祖は更に左の如く親訓を垂れ給はれた。

學道の人、身心を放下して一向に佛法に入るべし。古人云く百尺竿頭如何進一歩と。然あれば百尺の竿頭にのぼりて足をはなたば死ぬべしと思うて、つよく取つく心のあるなり。其れを一歩を進めよと云ふは、よもあしからじと、思ひ切て身命を放下するやうに、度生の業よりはじめて一身の活計に到るまで思ひすつべきなり。其れを捨てざらむほどは、いかに頭燃を拂うて學道するやうなりとも、道を得ることはかなふべからざるなり。たゞ思ひ切つて身心ともに放下すべきなり。（正法眼藏隨聞記第三）

と。實に有難き慈誨ではないか。今日、我が宗の狀態を觀るに、學問としての宗乘研究すらまだ〳〵完全とは稱することが出來ぬ。更に奮つて幾層の發達を期せねばならぬ。而して眞箇學佛道の資格を有する人に至つては、寥々として曉天の星の如くである。況や宗乘を扶起すべき明眼の宗匠は猶更のことであらう。宗風の振はざる亦た宜なるかな。予輩、佛祖の兒孫として其の鴻恩に浴する者、思うて是に至れば、慚汗の背に透ふるを覺ゆる。玆に於てか、聊か所感を述べて、宗乘を研鑽する我が兄弟諸賢に訴へ、相倶に朝參暮請し、此の身心をして、佛道の爲めに脫落一番し去らんことを望んで止まぬものである。

綿密の宗風

威儀卽佛法

指月慧印禪師は、享保の始めより寶暦に渉りて、承陽大師直指の佛法を擧揚し、常に自ら宗風の復古を期し、一生、名藍に住せず、顯位を求めず、終始一貫、祖道の演暢を維れ事とす。實に稀世の古佛と謂ふべきである。其の法嗣本光瞎道和尙も亦た一代の巨匠である。此の師資相見の因緣は、流石に越格の妙趣を有し、以て吾人修養の龜鑑と爲すに足る。

本光和尙は幼年の頃、武州石神井の安盛寺にて得度せられたと云ふことなるが、其の人と爲り廓落不羈、加ふるに博學强記、殆ど天下に敵無きの概がある。壯年にして各地の禪林を歷訪したが、一人として和尙を心服せしむる程の宗師家が無かつたと見える。爰に於いて和尙自ら謂らく、『天下の宗匠頭腦相似たり、未だ我が師と賴むべき者あらず』と。故に到る處、傲岸にして下らず、時に惡辣の機鋒を弄して屢々各處の叢林を瞞過せられたりき。

其頃、指月禪師は、武州小曾根の西光院に住し、稍や名聲あり。和尚、一日、禪師の玄關を叩く、西光院は元より肉山豐裕の寺に非ざるを以て、殿堂の規模は頗る微々たるものにてありし。和尚は草鞋をも脫せず、驀直に庫院に入りしに、寺內、寂として一沙彌だも在らざるが如し。和尚、早くも輕慢の心を生じ、百聞は一見に如かずとは此の事ならむ。遠くより其の聲望を聞きつるに、來り見るに及んで寥々たること是の如し。併し其の中には誰人か來るならむと、緣側に腰掛けて控へ居りしに、本堂の方に當りて微かに誦經の聲を聞く。はて何人の讀經なるやと思ひつゝ、外面より靜かに堂前に至り、大戸の隙間より堂內を窺ひたるに、唯だ見る一箇の老僧、香を燒き拜を設けて梵網經を讀誦す、容姿安祥、風彩凡ならず。而して、其の式を行ひ法を修するの嚴肅にして綿密なる、恰も數百員の大衆を率ゐ大寶殿に於て大佛事を打するにも似て、威儀整々、凜乎として犯すべからざるものあり。和尚、一瞥、何んとなく畏敬の念內に發し、一種微妙の感に打たれ、殆ど寒毛卓立するやうな感をなした。依て思ふに、其の日は恰も月の朔日に當り、禪規上、布薩を行ふべき日でありしにぞ、彌々感激に堪へざるを覺えられた。そこで、潛に庫院に歸り、急ぎて手巾を撤し、嚴かに儀裝を整へ、堂緣に端坐して禪師の歸方丈を待つ。

良久うして禪師は式を了して出で來り、和尚を熟視して直ちに丈室に延見す。室內灑洒、滿目恬淡たり、禪師自ら茶を點じ、胡餅兩三片を薦め、因みに佛子の用心を示誨すること、諄々切々、刻を移して倦まず、句々痛腸より出で、言々肺腑を穿つ。和尚、徧身汗流れ、感喜身に徹し、淚を濺いで入門を懇請し、遂に

師資の縁を結ばれたりと云ふ。

本光禪師の漢譯正法眼藏

數年の後、和尙は高祖大師の『正法眼藏』を漢文に譯せむとするの志あり、是れ當時漢文盛んに行はれ從て假名交りの文は、自然世人の意樂に投ぜざりしを以ての故ならむと思はる。一日、其の志を禪師に告げしに、禪師以ての外に叱斥せられ、我が高祖の聖訓親誨は、盡く大慈悲海の玉波錦浪たり。片言隻句、萬善萬德たり。一字も其の神聖を犯すべからず。一劃も其の尊嚴に觸るべからず。況や九十五篇、篇々和漢折中文を以てせられたるは、聖旨深々、凡慮の測るべきに非ず。殊に高祖獨得の風格は、一誦一讀の中、自ら至聖德化の浸潤無邊なるを覺ゆ。然るに其の文を漢にして、其の格を變じ、濫りに新奇を弄して、時好に投ぜむとするが如きは、大聖の眞慈に辜負すること少なからざるなりとて、散々に叱りつけられた。然れども、和尙は猶ほ其の志を廢するに忍びず、禪師の滅後六七年を經て、遂に之を漢文體となし、毎章に註脚を下して參究の意見を述べらる。『却退一字參』是れなり。されど和尙は決して本師の慈誡を忘却せられたるに非ず。單に高祖道を研鑽する者の得便宜に供したるに過ぎず。東都牛込保善寺の甫天俊昶は和尙の法嗣であるが、和尙臨終の囑を奉じ、滅後四十年を經たる文化九年の秋、報恩の爲に單獨にて之を上梓し、始て世に流通せられたのである。

嗚呼、指月禪師の如きは、能く洞上綿密の行持を行取したるものと謂ふべきである。茅堂に獨居して一小童をすら侍らしめざる程に淡泊なる境涯に在りながら、三時の行法、朔望の規矩、其の他の佛事未だ曾て缺かず。是れ實に法に親しく道に切なる人と申すべし。苟も宗教を信奉する者是非かくありたきもの、かくなければならぬものと思ふ。

予の道友たりし故人石黑覺山師は、曾て越後國刈羽郡北條村普光寺に住し、頗る稽古の道人にてありし。其の正直にして無我なる樣子は、恰も小兒の如くであつた。一生、廉潔なる行持を保任し、平生の起居振舞一に祖道を守らむと欲するの外無きが如し。其の一例を擧れが、唯一人にて寺に在る時でも、朔望等には必ず行鉢を勤め、夏安居の季節に入れば、一人にて楞嚴會を修せられたさうである。殊に感心に堪へざりしは楞嚴會の時、一人にて遶行を打せられたことである。總ての行持が皆こんな鹽梅で、唯だ法に依り法を護らんことを希ひ、法に依らざる時は、金銀珍寶も其の心を喜ばしむること能はず。法に從ふ時は、破衲殘羹も亦た之を厭ふの心なしと云ふ風にてありし。此等こそ潛行密用と稱すべきである。凡そ報酬を外界にのみ求めむとすれば、虛飾に流れ易く、阿諛讒諂の惡德も亦た是より生ず。

顧ふに人事は變化して停ること無し。人間の虛名虛利の如き觀來れば夢幻にも似たり。故に、吾人にし

て單に目的を名利の上にのみ存することあらば、縱ひ如何程の名聲を博し利益を獲ることあるも、道德上の價値果して幾許ぞや。是を以て、吾人は名利以外別に崇高なる志を立て、以て道に趣向せざるべからず。道に變易なし、故に道を樂むの樂みは常恒の樂みなり。道には窮盡なし、故に道に富むの富は永久の富なり。孔子が曾て、

之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂しむものに如かず。

と云はれしは、自づから修養の順序を示されてある。今も亦た是の如く、佛法を知るは修養の初位にして、佛法を好むは中位、佛法を樂しむは最上の位地である。指月禪師の如きは、佛法を樂しむ者なり。覺山和尙亦た稍や之に近し。されば道に乏しきの不幸は財に乏しきよりも大に、道を離るゝの禍は身を捨つるよりも甚し。故に眞に能く道を學ばむ者は、道を以て生命よりも重しとし、珍寶よりも貴しとす。孔子が

富と貴とは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得れば處らず。貧と賤とは是れ人の惡む所なり。其の道を以てせずして之を得れば去らず。君子仁を去て惡んぞ名を成さむ。君子は食を終るの間も仁に違ふこと無し。造次にも必ず是に於てし、顚沛にも必ず是に於てす。

と云はれたるは、實に千古の規箴である。

昔、圜悟禪師は極めて節儉を守り、一の鉢嚢と一の鞋袋即ち襪子とを五十年も受用せられた。破るれば則ち綴り、斷れば則ち補ひ、遂に之を棄つるに忍びず、嘗て衆に告げて、

此の二物相從つて關を出づ、僅かに五十年、詎ぞ、肯て中道にして之を棄てむや。

と云はれたことがある。泉南の悟上座なる者が、褐布綴と云へる物を贈りて、『某之を海外より得たり、冬服すれば則ち温かに、夏服すれば則ち凉し、師、願くば之を用ゐよ』と白しければ、禪師は之に答へて、『老僧、寒きときは柴炭紙衾あり、熱きときは松風水石あり。此を蓄へて爰にか爲ん』とて、終に之を却けられたとある。

此等は必ずしも儉約の爲に儉約せられしに非ず、自ら喜んで道を守り、自ら樂しんで德を修むるの結果が、自然に儉と爲り、約と爲りたるものである。圜悟禪師の如きは臨濟下の尊宿なりと雖も、我が洞上綿密の行持に一如せり。要するに綿密の行持とは、物に依て心を變ずることなく、境に隨つて節を改むることなく、中心に道を守り、通身に道を行はんことを期するの德である。而して此の德こそ實に佛教家の生命であり、禪者の生命である。

厨房禪話

正法眼藏示庫院文

高祖承陽大師、一化二十七年の轉法輪、總て是れを正法眼藏と名く。正法眼藏とは佛法といふに同じ。釋尊、昔日、靈山會上に在りて八萬の大衆を集め、徐に說法の座に陞りたまひし時、更に一語をも發したまはず、大梵天王の奉献せる優曇鉢羅華を拈出して、大衆に示された。衆皆な茫然たり、獨り摩訶迦葉尊者ありて破顏微笑せられた。時に釋尊は『我に正法眼藏涅槃妙心あり摩訶迦葉に附囑す』と仰せられた。是を禪門に於ける以心傳心の起源となす。

正法眼藏とは、正法は釋尊所證の妙道、所說の大法である。此の大法は人天の眼目にして、是に依りて始て宇宙の眞源を究め、萬有諸法生起の原理を明らめ、吾人永遠の目的をも覺了し得べし。是れ此の大法は智德の源、福德の母にして、一切の功德善法は皆な此の寶藏より出づるを以てなり。我が禪門は本より一經一論に依りて宗旨を立するに非ず、八萬の法門を融合して直下に佛心を體得す。固より宗派の異同

を以て論ずべきに非ず。禪宗とか、曹洞・臨濟とかいふも皆な後世に至り止むを得ずして稱せしものたるに過ぎぬ。故に我が宗は佛法宗なり。卽ち正法眼藏宗なり。是を以て、高祖大師の親訓は總て是れ正法眼藏と名くべきものである。宜なるかな、大師の親く御筆を取りて開示せられたる假名交り文章の慈訓九十五巻には、齊しく正法眼藏の文字を冠してある。

こゝに講ぜんとする一篇は、正法眼藏九十五巻の中の一巻で、庫院に示されたる一文なるが故に示庫院文といふ。庫院とは庫裡とも庫下ともいひ、一會の齋粥を調辨する處にして、俗にいふ臺所のことである。而して、此の一文の祖意を能々翫味し得る時は、人道の極致をも盡し、佛法の眞乘にも達することを得べし。實に慈悲徹悃の敎訓なれば、宜しく日々夜々に拜讀して、最上無爲の道德を修習したきものである。

齋僧の法は敬を以て宗となす

寛元四年八月六日、示衆云、齋僧之法、以敬爲宗。はるかに西天竺の法を正傳し、ちかくは震旦國の法を正傳するに、如來滅度の後、或は諸天の天供を佛竝に僧に奉献し、或は國王の王膳を佛並に僧に供養し奉りき。その外、長者居士の家より奉り、毘闍首陀の家より奉るもありき。

寛元四年は高祖大師御年四十六歳の時である。大師は寛元元年の七月、越前の城主波多野義重公の請に依り、宇治の興聖寺を辭して越前に應化せられ、翌三年、今の大本山永平寺御建立であるから、此の御示

しは永平寺の庫院に與へられたものである。「齋僧之法以レ敬爲宗」の八字は禪苑清規の文である。齋の字は、『佛世には中を過ぎて食せざるを齋と名く』と申して、日中一食の法を嚴守し正午を過ぎては食せぬといふ意義である。今はモノイミ即ち清淨食を以て僧に供養するの義と見れば宜い。その法は敬を以て宗と爲すで、中心より恭敬して如法に尊重し、一粒米、一滴水と雖も之を輕んぜざるのを主義とする所である。

西天竺にせよ震旦、即ち支那國にせよ、佛祖の正法に依れば、釋尊御滅度、即ち御涅槃の後と雖も、佛と僧とを尊敬するの結果、或は諸天が天の妙食を以て佛並に僧に獻供し、或は國王が王の珍膳を以て佛並に僧に供養し奉られたものである。其外、長者や居士の家より獻じたり毘闍・首陀の陋き者より供したりすることもある。長者とは富豪家、居士とは家に居て淨行を修する者、毘闍は此に商主と譯して商人のこと、首陀は此に雜種と譯して最も賤き者として居る。印度には刹帝利、婆羅門、毘闍、首陀の四姓を分ち、此の四姓の階級は頗る極端なものである。然るに、佛法は此等を平等に視て待遇したものであるから佛は唯だ其の心の誠實と否とを視て其の種族の尊卑には關せられぬ。故に、如何なる者の供養と雖も至誠を以てすれば、盡く是を清淨食として受けさせられたのである。

供養物を敬禮すべし

是の如くの供養、ともに敬重する所ねんごろなり。よく天上人間の中に、極重の敬禮を用ゐ、至極の尊

言をして敬ひ奉りて、飯饌等の供養の具へを造作するなり、深意あり。

いかなる供養なりとも決して輕忽に取扱うてはならぬ。一粒の米も農民の汗膏の固まり、一滴の水も天地の惠みの賜もの、故に供養物を敬ひ重んずるには、最上の敬禮を用ゐ、之に對する言葉使ひも至極の敬語を用ゐて、御飯なり御羹なりを造るべきである。森羅萬象は法性天然の妙相である。花紅柳綠、何れか實相の妙法に非ざる。佛眼を以て觀る時は諸法皆な佛法なり。『峰の色溪の響もみな〻がら釋迦牟尼佛の聲と姿と』故に一莖草を以て寶王刹を建て一枝の花を以て十方恒沙の諸佛を供養するに堪へたり、一椀の飯も慧命を相續するの資糧、一器の羹も佛子の血肉ならずや。是を疎末にするは自己を輕んずるものである、『深意あり』の一語能々仔細に研究すべし。

今、遠方の深山なりとも寺院の香積局、その禮儀言語親く正傳すべきなり、是れ天上人間の佛法を學得するなり。

遠方の深山とは永平寺を指す。香積局とは、維摩經に衆香世界に香積佛といへる佛ましまし、衆の香飯を以て化菩薩に與へたまふの因緣により庫院のことを香積局といふ。庫院は、在家なれば重もに主婦たる者の管掌する所である。家族の飯食、來賓の饗應も皆な臺所に於て之を辨ず、最も重要なる任務である。而して、其の任務は他人の聞見せざる所に於て之を營むのであるから、油斷をすれば、行儀も亂れ言葉使も疎略になり易い。此の場合に於て、公衆面前に於て尊嚴なる儀禮を行ふが如き、觀念に住して、

言行を正しく整ふるは實に大なる修養といふべきである。獨り其の職務を神聖ならしむるのみならず、其の精神を治め、信念と德行とを增進するに於て、殆ど測るべからざる効果を得べきである。

須く篤敬にして愼重なるべし

謂ゆる、粥をば御粥とまをすべし、朝粥ともまをすべからず、齋をば御齋とまをすべし、齋時ともまをすべし、齋とまをすべからず。

米白めまゐらせよとまをすべし、米舂といふべからず、米洗ひまゐらするをば、淨米しまゐらせよとまをすべし、米淅せとまをすべからず。

御菜の御料の什麼物、擇りまゐらせよとまをすべし、菜擇れとまをすべからず、御汁の物、仕まゐらせよとまをすべし、汁煮よとまをすべからず、御羹、仕まゐらせよとまをすべし、羹せよとまをすべからず、御齋、御粥は成熟させたまひたるとまをすべし。

齋粥盛れ奉らん調度、皆是の如く敬ふべし、不敬は還りて殃過を招く、功德を得ること無きなり。

言語は心の聲、動作は心の姿である。言語の正しからざるは、心の正しからざるに依る。動作の麗はしからざるは心の麗はしからざるに依る。故に一言一語、一動一靜、必ず深き用意と敬愼とを要する。況や飲食物の如きは盡く天地の惠みに依て得、檀越の信施に依て生じ、以て三寶を供養し、以て衆僧の法身を

養ふ。粒米涓滴も皆恩分の凝結ならざるは無し、豈に敬重せざるべけんや。凡そ言語は必ず柔軟かるべし、品格あるべし、敬意を存すべし、苟も麁暴であつたり、下劣であつたり、不敬不遜であつたりしてはならぬ。粥をも御粥と稱すべし、齋をも御齋と稱すべし、米を搗くことを米白め參らせよと申せ、米をとぐことも淨米し參らせよと申せ、その他、御汁・御羹等必ず最重の敬語を用るよとの御示しである。

高祖の仰せられし言葉は、高祖の時代に於ける最も上品なる語格を以て其の例を示されたのである。現今は現代に於ける最も鄭重にして品格高き優美の語を使用する樣に心懸けねばならぬ。御菜の御料のなにもの擇りまゐらせよとは、御料は材料のこと、擇りとは段々に擇り分けて古きを先に用ゐることである。

若し不敬の言語を用ゐるが如きは、飯・羹を輕忽にするより起る。飯・羹を疎略にするは三寶を疎略にするものなれば、其の人の思想にも必ず容易ならざる汚點を生じ、結果は自己の品性を卑くし、益々墮落を來たすに至るものである。故に高祖大師は大清規の中にても『米を喚び菜を喚ぶ等尊崇の語を以て之を喚ぶべし、麁惡の語、雜穢の語、戲論の語を以て、米菜飯羹等を罵詈すべからず」と御戒め下されてある。

最も淨潔を貴ぶ

齋粥を調へまゐらする時、人の息にて米菜及び什麽の物をも吹くべからず。たとひ乾きたる物なりとも綴袖に觸るゝこと勿れ。頭顔に觸たる手を未だ洗はずして、齋粥の器、及び齋粥に手觸るゝこと勿れ。

米を擇りまゐらするより、乃至、飯羹に作りまゐらする經營の間、身の痒き所抓きては必らず其の手を洗ふべし。

此の一節は齋粥等の取扱方に關する心得を示されたものである。總ての物に口の息のかゝらぬやう注意すべし。綴袖は直綴の袖なり。袈裟や衣が齋粥や菜羹に觸るれば、衣をも汚し物をも汚すこととなる。總ての取扱ひは最も淨潔ならんことを要す。頭や顔に觸れたる手や、痒き處を抓きたる手を以て、器物や食料を取扱ふことは甚しき不敬なり。

故に日常一切の言語動作必ず篤敬にして愼重なるべし。是れ則ち正法眼藏を身に行ふのである。

齋粥調のへまゐらする處にては、佛經の文及び祖師の語を諷誦すべし、世間の語、雜穢の語いふべからず、大凡、米菜鹽醬等のいろいろの物ましますと、まをすべし、米あり菜ありとまをすべからず、齋粥のあらんところを過ぎんには、僧行者は問訊し奉るべし。

此の一節は前意を繰返しての徹悃の御示なり。齋粥等を作る場合にも、佛經や祖語を讀み乍らせよとは實に有り難き御諭ではありませんか。よしや聲を出して讀まずとも默誦するが宜い。默誦せざる時は其の心に佛祖の聖訓を諦信し思惟するが宜い。

佛法の心を以て事を執れば世法も佛法となる。世俗の妄情を以て法を行へば佛法も世法となる。ましますと云云とは、米や菜の類を敬ふを佛の如くせよとの御旨意なり。一粒米でも落ちて居たならば勿體なしと

思ひ推し戴いて始末する程に用心すれば、自づと天地の徳に酬ゆることが出來るものである。故に齋粥を置きたる前を通るには御辭儀をして通れとの御訓示である。僧行者とは御給仕の僧をいふ、問訊とは御機嫌を窺ふといふ字義であるが、禪の叢林では合掌して頭を低げることを問訊といふ。

零菜零米等ありとも、齋粥の後、使用すべし。齋粥了らざらんほど犯すべからず。齋粥調へまゐらする調度、懇懃に護惜すべし、佗事に用ふべからず、在家より來られん輩の未だ手を淨めざらんには、手を觸さすべからず。

零菜零米等といふは、菜や米の落ちこぼれたるをいふ。落ちこぼれたのを直ちに拾ひ取るべからず。觸汚の疑がひがあるからである。齋粥了りて後に、拾ひ取り、能々浣洗して之を行者等に食せしめ、若くは明日の齋粥に使用すべしとの祖意である。

次に齋粥を調ふる所の調度、卽ち諸道具は桶にせよ、膳椀にせよ、鍋釜にせよ、之を大切に護惜すること自己の眼睛の如くすべし。而して齋粥に要する器物を他に轉用して汚してはならぬ。

在家より來れらん菜果等未だ淨めずば洒水して、行香し、行火して後に、三寶衆僧に奉るべし。

現在大宋國の諸山諸寺には、若し在家より饅頭、乳餅、蒸餅等來らんは、重ねて蒸しまゐらせて衆僧に奉る。是れ淨むるなり、未だ蒸さざれば奉らざるなり。

是れ多かる中に少し許りなり、この大旨を得て庫院香積これを行ずべし、萬事非儀なること勿れ。

在家の者をして手を洗はずに器物等に觸れしめてはならぬ。在家より供養せる菓果等は、必ず洒水を行じ、香を焚き火を以て淨めて後に之を用ゆべし。洒水は水を以て洗ふことと見るが宜い。行香は香に薫ずること、行火は首楞嚴經に『火を以て食を淨め、生氣を啖ふこと無かれ』とあれば煮直すことと見るが宜い。在家より納めたる饅頭や餅の類は、之を蒸し直し又は品に依りては煮直して後に用ゆるが宜い。

多かる中に云云とは、今まで述べ來りしことは多くの心得べき條件中の一部分を擧げて示したるものとの意である。要するに、食物は三寶を供養し及び大衆の法身を長養するものにして、實に參禪學道の資源である。

而して粒米片菜なりとも、天地の惠みに依て生じ、農民の辛苦に依て成り、檀越の信施に依て得たるものなれば、之を尊重し、恭敬して聊かも等閑にしてはならぬ。從つて米菜等に對しては、言葉使も最重の敬語を用ゐ、其の儀禮も必ず尊客に接するが如くなるべし。

佛祖の命脈を保任すべし

右の條々、佛祖之命脉、衲僧之眼睛也、外道未レ知、天魔不レ堪、唯有ニ佛子一乃能傳レ之、庫院之知事明察莫レ失焉

開闢沙門　道元示

佛法他に非ず、諸法の實相を究盡するの法なり。諸法は本より眞實にして僞妄なく、至善にして邪惡な

く、美妙にして醜穢なし、唯だ凡夫は諸法に對するに當り、或は妄念を起し、或は邪心を抱き、或は不淨の想を生ずるに依りて、萬法盡く汚穢と化し、三界六道の苦輪息む時が無いのである。若し能く其の心を淨らかにし、其の心を正うし、其の心を實にせば、見聞覺知皆な悉く實相の法門ならざるは無い。

一僧ありて雲門大師に『如何なるか是れ塵々三昧』と問うた。塵々とは事々物々といふこと、三昧は禪定のこと、佛法の變名と見ても宜い。佛法は佛教僧侶の佛法に非ずして宇宙の大法である。卽ち遍宇宙の佛法を問うたのである。大師は之に答へて『鉢裏飯、桶裏水』といはれた。卽ち鉢の裏には飯があり桶の中には水がある。其の法其の儘に活きた佛法である。

然るに凡夫は此の佛法を佛法として見ることも出來ず、用ゐることも出來ず、煩惱を起し罪惡を造り自ら三惡道の苦患を招きつゝあるのである。若し佛法を佛法として使用し得る人ならば、一莖の草の上にも宇宙の大法を明め、一粒の米の上にも佛祖の大道を樂むことが出來る。されば雪峯禪師は洞山大師の庫院に在りける時一大事を明め、六祖大師は黃梅山の碓房に於て米を舂き乍ら佛法の修行を成熟せられた。庫院に在りて經營する日常の言動中に佛祖の命脈も保任せられたのである。衲僧の眼睛たる般若の智眼を開發せられたのである。常濟大師は『茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫す』といはれた。是れは大道の妙用であらねばならぬ。

これ庫院の此の御文の祖意を守りて、之を萬事に應用し得るならば、吾人の社會上儀禮も高尙優美とな

り萬事萬端の動作も總て信仰的・道德的になるに相違ない。米や菜を尊重する人ならば他人を輕侮する氣支は無い。此の中から恭儉の德も禮讓の道も現はれて來るであらう。

凡そ何事にも敬の一字を忘れてはならぬ。我が大君に對し奉るが如き、父母祖先に對するが如き、先づ以て中心、恭敬の念を起さねば忠孝の德は現はれぬ。人に對しては人を敬し、事を行ふには事を敬し、苟も輕忽の念を生ずべからず。古人も『身は父母の遺體なり、父母の遺體を行ふ、敢て敬せざらんや』というてゐる。吾々は第一に此の身を敬せねばならぬ。即ち此の身を麁末にする樣では決して眞の修養は出來ぬ。

居處の淨ならざる、君に事へて忠ならざる、職に當りて務を怠る、朋友に信を失ふ、戰に臨んで勇を喪ふの類は皆此の身を麁末にする所より出づ。自尊自重は德を成す所以の本である。齋粥等を辦ずるに當りても總ての物料を敬重し、金錢米穀、敢て麁略ならざれば、必ず至大至尊の功德を產み出すものである。故に高祖大師は『供養の物色を調辦するの術は、物の細を論ぜず、物の粗を論ぜず、深く眞實の心、敬重の心を生ぜよ』と仰せられた。婆羅門城外の一老婆は漿水の一鉢を釋尊に供して成佛の記別を受け、阿育王は半個の菴摩羅の果を寺僧に寄附して無邊の功德を得られた。信心淸淨ならば長者の萬燈も貧女の一燈も其の德惟れ同じ、旣に敬重の心あれば其の言語、其の威儀は自ら敬虔の態度に出づべきは當然である。

我が禪門に於ては時として佛祖をも呵罵する程の大機用を現ずるが、日常の言行に至りては此の御文の如く、非常に綿密にして尊嚴である。威儀即佛法、作法是宗旨、此の行持こそ眞に是れ佛祖の活身心である。能く此の意を體すれば、人道の極則、成佛の基礎も皆此の御親訓の中に籠つて居るものと申すべきである。

六忘箴

自制訓

衲は、曾て六忘箴を製して自己修養の目的とも致し、又、人にも書して與へたことがある。六忘箴とは堪忍を守りて怒を忘る、業務を樂みて疲を忘る、因緣を明めて愚痴を忘る、善行を好みて憂を忘る、慈悲を施して私を忘る、佛法を喜びて世を忘る。

あながちに　心の知慧を　たのむまじ
忘れて悟る　道もありけり

といふのである。

吾々は記憶力の必要なると同時に忘念術も亦大切である。記憶すべきものと忘失すべきものとの選擇を誤らずして、記憶すべきものは確實に記憶し、且つ之を助長し、忘失すべきものは徹底的に之を忘れるやうにするのが、精神上に於ける一大整理法である。記憶すべきものを記憶せざれば無能となり短見となる。

忘失すべきものを忘失せざれば愚痴となり偏執となる。此の兩者の選擇はよく〳〵愼まねばならぬ。然るに事によると記憶すべきものを綺麗に忘れて了ひ、忘失すべきものをイツまでも記憶に留めて置くに依て、精神が、始終、紛糾混濁して無茶苦茶になり易い。そこで此の六忘箴の必要を感ずるのである。

參禪の第一關としては、先づ以て忘念術の練習が必要である。兎角、人間は物事に捕はれ易い性質を有てゐる。學者は學問に捕はれ、金持は黃金に捕はれ、政治家は政治に捕はれ、勞働者は勞働に捕はれ、こゝに種々の缺點や偏執や煩悶などを釀成するやうになる。故に一度は一切放下し忘失して赤裸々となるの工夫が無ければならぬ。

支那宋末の禪匠として有名なる大慧禪師が道友法一と共に亂を避けて汴京に赴かるゝ時、大慧は何やら自分の被つてゐる笠の方に始終氣を配るやうであつた。法一は大に之を怪み、一茶店に休息して、大慧が便所に行つたをり其の笠を檢べると、笠の中に黃金の釵のあるのを發見した。是れは外護の信者が旅資として與へたものであつた。法一は直ちに之を拔き取つて前面の河中に投じた。大慧は歸り來りて笠の中に釵の無きを見て、覺えず色が動いた。時に法一は大喝して、「爾は生死を透脫すべき大修行を期しながら、一金釵の爲めに捕はるゝとは何事ぞ、我れ既に之を河中に投じて汝が爲めに工夫の邪魔を拂ひ去れり」といひしに、大慧も流石に道人である、遂に淚を流し『法兄は我が眞實の友なり』というて謝したとある。此等も亦、忘念術の一訓話である。

堪忍を守りて忿怒を忘る

吾人は、先づ堪忍を守り忿怒憎惡の念を忘るゝが宜い。人間は知識が進むほど興奮性が亢ぶりて腹を立て易いものである。根も葉も無い事にまで瞋恚の焰を燃やしてゐるやうでは、決して大事を爲し遂げることは出來ぬのみならず、廣き世界を狹くし明るい世の中を暗くして、自ら人知れぬ苦惱を製造するもので、百損ありて一益なきものである。のみならず家庭の和合を破り社會の平和を害することも決して少なくない。

良寬が、一夕、芋畑の中を徘徊した時、畑荒しと誤られて青年に鐵拳を加へられたが、毆ぐつてから、これが良寬であることが分つて驚き謝せしに對し、良寬は『打つ人も打たるゝ人も諸共に如露亦如電應作如是觀』と詠じて、更に忿怒の樣子が無かつたそうである。

業務を樂みて疲を忘る

如何なる人にも皆な相當の業務がある。與へられたる業務、引き受けたる業務は、樂んで愉快に之を勵むが宜い。精神勞働にせよ筋肉勞働にせよ、誠心誠意を以て之に當れば、何れも神聖ならざるは無い。勞働とは勤勞の意で、我が佛敎でいふ精進である。如何なる人でも必ず其の分限に相當したる業務を有して

ゐる、精力を盡して其の業務に勉強する處に人間生活の價値が顯はれて來る。孟子も『飽食煖衣、逸居して敎へ無きは禽獸に近し』というたが、全く何んにもせずにブラ〳〵遊んでゐる者は、野獸と何の擇ぶ所が無い。

業務の價値は其の人の心操に依て現はれる。高官とか重役とかいふ位地に在る人でも、其の志操が劣惡で心術が醜穢であつたならば、その業務に何等の權威も無いばかりか、寧ろ其の職務を冒瀆することゝなる。之に反して縱ひ泥に塗れ塵に埋もれる樣な業務でも、其の人の心操が高潔であれば、其の行ふ所が總て道德的光輝を放つものである。そうして御互に其の職分を理解し其の業務を樂しみて熱心に勉強すれば、自ら疲勞を忘れて了ふものである。

明治天皇の御製に『まつりごと出でゝ聞くまはかくばかり暑き日としも思はざりしを』といふ貴とい御歌がある。天皇が、三伏の暑き日にも、天下の政務を熱心に聞こしめされて暑いといふことをも御忘れあそばされ、御入御の後、御服を御召換の時、御汗が御衣を濕して居るのを御覽ぜられて、始めて、今日は此のやうに暑き日でありしかと御氣附あそばされたのである。吾々も此の貴とい大御心に倣ひ奉りて、各各其の業務を樂しみ勵むならば必ずや疲れを忘るゝであらう。疲れを忘れて業務を樂しむ、實に力強い生活ではないか。

因緣を明めて愚痴を忘る

人間には愚癡といふ病がある。愚癡とは道理に迷ふことで、是れには二通りの道行がある、一つは、或る事柄に耽溺して深く迷ひ込むので、男女が情慾の奴隷となつて戀愛に囚はれるとか、其の他、或る一方に偏して、深く熱狂こむとかいふの類、誤れる偏狹なる主義に熱中する者も亦此の御仲間で、一度偏執惑溺すると、鹿を逐ふ者は山を見ず、前後左右を顧みる識見を失ひて、殆ど馬鹿同樣になるものである。今一つは、過ぎ去つたことに悔恨の情を起して、どうしても諦めのつかぬといふ一種の愚癡である。

故に、吾々は、常に因緣因果の法則を明めて、其の原因、即ち動機の善惡を判斷し、其の結果の如何を思惟して、倫常に反した戀愛の情に縛られたり、天理人道に背くやうな邪道に溺れたりする愚癡に遠ざかり、又、既往に於て如何に悲しきこと腹立しきことがあつても、皆是れ因緣なりと明らめて思ひ切をよくし、將來に於て幸福の門を開くべき正しき方法を講じ、徒らにクヨ〳〵することを斷念して、第二の運命を開拓すべく心機一轉せねばならぬ。是れ愚癡を忘るゝの妙術である。

善行を好みて憂を忘る

人間百般の行爲を道德上から批判すれば善と惡との二つに大別することが出來る。善は能く人間生活を

淨化し美化して向上せしむ、惡は人間生活を陋劣ならしめ醜惡ならしめて遂には墮落せしむ、善は最上の寶にして惡は最も恐るべき賊である。善なる寶は到る處に充滿してゐる。父母に對する孝養も子孫に對する教養も、忍耐も勤勉も禮讓も皆善行ならざるは無い。

『秋の暮うれしや今日も腹立てず』腹立しきばあひにヂッと忍へても、忍耐の德を體驗し得たと思へば、そこに一種の樂みを感ずる。父母の喜びを以て己れが喜びとなし、他の滿足を以て己れの滿足となす。是の如き心情を以て尋常に善き事を爲し得たならば、人知れぬ愉快を感じて、自から憂を忘るゝものである。人間の欲望中、善行を好むの欲ほど美しきものは無い。佛敎では是を善法欲と稱してゐる。此の善法欲の滿足こそ憂を拂ふ玉箒である。

慈悲を施して私を忘る

內に慈悲の心を蓄へて外に布施の行ひをなす、是れ佛心相應の勝行にして、利己的欲望や私情私曲があつてはできぬ。涅槃經には『諸々の衆生に於て大慈心を生じ平等にして二なきこと一子を視るが如し』とも『佛は衆生の煩惱の患を見て心苦しみたまふこと母の病子を念ふが如し』ともある。是れが佛の御心である。吾々も亦佛心具足の身であるから、其の本性に於て慈悲の德を有してゐる。孟子も『惻隱の心は仁の端なり』というたとほり、どんな人にも物をあはれみいたむ情はあるもので此の惻隱の情が芽を出し

花を咲かせて、母性愛ともなり、人類愛ともなり、動物愛ともなる。但、人間には私利私欲の念がある爲めに、それが強くなると此の本然の愛情までも硬化して了ふ。

そこで吾々は佛の御心に倣ひ奉り、古聖人の仁德を偲び、慈悲博愛の德を發揚して、常に慈悲心を運らし、分に應じ宜しきに隨つて他の爲めに盡さば、是れ則ち布施の正行である。此の正行を以て樂みとなさば、自然に私欲私情を忘るゝことが出來る。私欲私情を放下せば公道を守り公情を發し、其の心は佛心に相應し其の行また佛行に如同するであらう。

佛法を喜びて世を忘る

此の世は無常にして變遷定まり無く、種々の苦惱逼迫して吾等の身心を襲うて居る。人間生活なるものは、一面から眺むれば、苦惱逼迫に對する鬪爭の生活である。故に、何事も自己本位で、利己的欲望に傾き易い。換言すれば、我見・我慢・我癡・我愛の生活を繰り返して居る樣なものである。故に、「古教照心」というて、古への佛や祖師の御教を鏡として己が心を照して見たならば、恥ぢざる者は果して幾許であらう。此の利己的欲望がある爲に、偶ま善事を營み德行を勵む人にしても、仔細に點檢して見たならば、錦に泥團を包むが如く、表面は立派でも腹の中は醜い者が多い。是を僞善者と稱するであらうが、僞善的種子を存せざる者は果して多くあるであらうか。

吾々は、先づ以て世を忘るゝの工夫が必要である。世を忘るといふは人の常にいふ厭世の意味では無く、世に在りながら世に染まらざる心境をいふのである。世に染まらざる境涯に達するには吾々が利己的欲望の對象としての世間、即ち名譽とか利益とか權勢とか道樂とかいふものから超越することである。もつと分り易くいへば、物欲の支配を受けずして理想の境致に止住することである。佛法は萬代不易の眞理を基礎とするから、過去・現在・未來といふ境界を超越して居る。佛法は大智慧・大解脫・大慈悲の佛陀に歸依するに依て、小見・小智・輕心・慢心は自然に鎔解して了ひ、眞如實相の妙理を究め、法界平等の大慈悲心を生じ、生々世々に亙りて盡くること無き菩提の因緣を獲得するに依りて、世に在りて世を忘るゝことが出來る。

世に在りて世に染まらざる人にこそ世を救ふべき道はありけれ

世を忘るゝ人にして始て世の眞相を究め、境遇の束縛をも離脫し、四苦八苦の煩らひをも超越して、所謂、物外の天地に逍遙することを得るのである。

潛行密用

禪門の巨匠趙州禪師に一僧あり問うて曰く、『一物不將來の時如何』——私は一物も將來しませぬ、迷も有たなければ悟りも有つて居らぬ、煩惱も無いが菩提といふものにも固執せぬ、是の如き者の生活ぶりは

いかがなるやとの進問である。すると趙州は『放下著』と答へた。――捨てゝ了へ、汝は一物不將來、即ち無一物といふものを握つて居る、それをも捨てゝしまへ、『自己を放下し自己を忘れよ』との提撕である。僧曰く『一物不將來箇の甚をか放下せん』――私は、有といふ物も無といふ物も、色も空も、一切打忘れて居ります。徹底無爲にして放下すべき何物もござらぬ。すると、趙州は『擔取し去れ』――擔いでゆけ、徹底、自己を放下し去りなば、始めて眞箇の自己を見出すことが出來やうぞ、眞箇の自己は即ち佛心であり佛光明である。此の佛心を運用して始て至眞・至善・至美の活動が得られやうぞといふ教訓である。

　莊子太宗師の篇に依ると、顔回が或時孔子に對つて『私は修養上一段の成績を得ました、そは仁義を忘れたのであります』といつた。すると孔子は『可なり猶ほ未だし』もう一歩進んで修養せよといはれた。他日、顔回はまた孔子に見へて『私は修養上更に一段の成績を得ました、そは禮樂を忘れました』と申された。仁義禮樂は何れも聖賢の道にして大切なものであるが、利己的欲望を抱ける凡夫心を以て之に當るは、彫琢の意加はりて無爲自然の德ではなくなる。故に、仁義禮樂に對する執着をも打忘れたる境致がよい。孔子はやはり『可なり猶ほ未だし』と言はれた。顔回は、他日、三たび孔子に見へて『私は修養上更に一段の進境を得ました、私は坐忘しました』と申した。すると、孔子は非常に驚かれて『坐忘とは何ぞ』と尋ねられた。時に顔回は『枝體を墮り、聰明を黜け、形を離れ、知を去て大通に同うする、此を坐忘と謂ふ』と答へた。枝體は身體、聰明は智識、大通は大道のこと、身體の形をも精神の智能をも離れ

去りて大道に一致するといふは、禪門に所謂、身心脱落の意味に類似して、要するに無爲無我の境涯をいふのである。孔子は悉く感心して『同じきときは則ち好みすること無し、化するときは則ち常なし、爾、果して其れ丘(孔子の名)に賢れり、請ふ爾が後に從はん』と言うた。

此の意は大道に同じければ、是非好惡の妄念も消滅して、一方に執着して好むところも無く、千變萬化に觸れて何等の束縛をも受けぬに依て、物事に執滯して常を守ることも無い譯である。あゝ汝は既に此の坐忘の妙境に達し得たとすれば、予より一段と賢りて居るから、予は今より、却て汝の敎へを受けやうぞといはれたのである。

此の坐忘の説も、或は莊子の寓言であるかも知れぬが、巧みに絶學無爲の神境を示したものである。もつと通俗的にいへば、上に居て驕らず、下に在りて屈せず、富んでも猶貧しきが如く、功あるも功を誇らず、利に逢うて利を貪ぼらず、潜行密用、愚の如く魯の如き修養こそ大切である。吾々は、自己の狹い小さい知識を賴りとして、種々に計畫し樣々に批判してのみゐては、いつまでも小我の爲めに囚はれてしまふ。あながちに己が心の小智慧を賴んではならぬ。凡夫の小智を捨てゝ佛の大知見に歸し、蝸牛角上の爭より脱して佛の大慈悲に投じ、怒りを忘れ、疲れを忘れ、愚癡を忘れ、憂ひを忘れ、私を忘れ、世を忘れ、忘れ盡して、始て誠の道を悟ることができる。是れが六忘箴の要旨で、是を忘念術ともいふのであるが、此の忘念術的修養に精進して怠らなければ、遂には脱落の妙境にも達することができるものである。

修養の極致と無我

智目と行足

有名なる復古道人卍山禪師の語に

古來三等の人あり、一人は、善を善として行ふ能はず惡を惡として去る能はず、一人は、勉めて善を行ひ勉めて惡を去る、一人は、善を行うて善を忘れ惡を去りて惡を忘る、是の第一人は、智ありて勇なし悶々として憂ふ、次の一人は、智あり勇あり察々として苦しむ、復、次の一人は、智を用ひ勇を用ひ兼て仁を用ひ穆々とし安んず

とある。是れは、禪師が實山居士といへる信者に示されたる一節であるが、是れぞ修養の上から觀たる人格の三階級である。

古人は智目行足と稱して、智識を目に喩へ實行を足に喩へて居る。人格の大成は、智・情・意の三者が圓滿に發達し、完全に調和するに依て得らる。如何に智識が發達しても情意の訓錬を缺く時は、智に偏し

て行に敏ならず、現代の通弊は全く此處に在る。教育の進歩につれて、一般の常識も發達し、智識も向上して居るから、智慧の眼目は稍や明敏であるが、惜いかな、實行が之に伴はぬ。

昔、孔夫子が、門人子貢を伴うて魯國を旅行せられし時、一の城墟を見た。その城墟たるや、規模も小ならず、地の利をも得て居るが、見る影も無く衰頽して居つた。子貢は『之れ何人の居城なりしや』と問ひしに、孔夫子は『郭氏の墟なり』と答へられた。子貢は更に郭氏の人となりを問ひしに、孔夫子は『其の善を善とし其の惡を惡とす』というた。子貢は驚いて、『そは明智の人なり、何故に斯く淺ましき廢頽を來たせしや』と尋ねしに、孔夫子は『其の善を善とするも行ふ能はず、其の惡を惡とするも去る能はず』と示された。此の御話は齊の桓公の譚ともいうてある。

現在の我國は文化の發展著しきに拘はらず、社會の混濁は益々其の甚しさを加へ、犯罪行爲の多きこと日々の新聞を見ても寒心に堪へぬ。警視廳の統計に依れば、大正十五年中の犯罪件數は九萬六千五百九十一件で、前年度に比すれば四千八百件の增加、右の中、檢擧せられたのは七萬九千餘件にて、約二萬件は暗から暗に葬られて居る。是れにて犯罪手段が如何に巧妙になりしかを知るべし。而して、犯罪件數中、最も多數なるは知能犯の一萬百六十二件なりとぞ。是れにても智識の濫用甚しきを知るべし。

古人も『單定は癡定なり、單慧は狂慧なり』といふた。『定』とは精神の正しく治まつて居ること、けれども、單に心が治まつて居るだけでは、時代を觀るの明もなく世局を察するの識も無いから、頑迷固陋に

なり易い、之を擬定といふ。されど、心が治まらず、單に知能のみが發達したのでは、狂亂の行爲を敢てするに依て、狂慧と稱す。故に、定慧相應で、換言すれば、知育と德育とが併進せねばならぬ。

凡そ智と愚とを比較して、四通りの人を見出すことが出來る。卽ち智にして愚なる者、愚にして智なる者、愚にして愚なる者、智にして智なる者である。是を俗語にて言ひ顯はせば、利口の馬鹿と、馬鹿の利口と、馬鹿の馬鹿と、利口の利口とである。敎育をも受け、智能もありながら、不正不義の事のみを謀る者は利口の馬鹿で、彼の知能犯罪者の如きは此の部に屬する。敎育をも受けず、從つて智識も無けれども、忠孝の志厚く、正義同情の念強く、正直にして勤勉なる者は馬鹿の利口で、利口の馬鹿に優れること幾百千倍なるやを知らぬ。無知蒙昧でありながら、邪曲の行爲をのみ敢てするとか、迷信や私慾の犧牲になつて、あたら生命を失ひ、他人にまで迷惑を懸るの類は馬鹿の馬鹿である。

東京郊外に住む今年六十九歲になる老婆は、大酒家で、毎日三合の酒を呑みても猶不足を訴へ、手當り次第に道具を屑屋に賣つて酒代を作るので、息子に叱られ、それでは生き甲斐が無いとて、去る五月三日の朝、鈴ケ森海岸より投身自殺したそうである。橫濱根岸の某といふ男は、勉强の餘り精神に異狀を呈し、或人より、病氣を愈すには子供を天神樣に人身御供に捧ぐるが好いと言はれ、去る四月八日、二歲になる二女を負うて岡村天滿宮に詣で、其の子を置去りにして歸る處を神職に咎められ、警察の厄介になつたそうである。その他、丙午に生れし婦人の煩悶などは、社會的迷信の罪であるが、帝都の中にすら悲慘

なる事實を見ることが少なくない。斯る連中は馬鹿の馬鹿であるが、此等は社會教育の缺陷より生ずるものであるから、國民一般に對しては、精々健全なる常識教育を施さねばなりませぬ。

最後に利口の利口、是れぞ教育の理想、敎化の目的である。此の理想に到達するには、人道を尊重するの觀念、即ち道德的信念を有せしむることが大切である。此の信念を涵養するには、三世因果の理法を確認することが最も至要である。『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎』は七佛の通戒する所である。

二宮尊德翁が、青年の頃、金次郎と稱して郷里柏山に在りし時、一夜、村内富豪の家にて江戸下りの義太夫を宿めて語らせ、村内の者に隨意來聽を促した。交通不便の時代にてありしかば、一同は珍らしがり、滿場立錐の地も無き程集まりて、二宮氏も其の中に交つて居つた。其の時の語り物は太閤記十段目であつた。太夫は汗を絞りて演じ居りしが、光秀が誤つて竹槍にて母を突き、母が必死の苦しみに耐えて、『不義の富貴は浮べる雲、主君を伐つて功名顔、よしや將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも劣りしとは知らざるか、親に反かず君に仕へ、仁義忠孝の道立たば、もつそう飯のきり米も百萬石に勝るぞや』といふ一段の處に至ると、金次郎は突然、大音にて『ソコだ』と怒鳴た。その聲に驚いて、聽者は總立ちになり、大騷ぎを演じたが、後に太夫が金次郎に逢うて其の譯を聞きしに、あの太閤記で、光秀の母が重傷を負ひながらも、武士道を重んじ、我子を思ひ、最後の意見と敎訓とをなす處に、血もあり、淚もあつて、大和民族の精神が窺はれる。故に、あの一段こそ十段目の肝腎要である。貴丈は聲も善し、節廻しも宜しいが、

まだ、あの一段に於て、力の入り方が足らぬ樣に感ぜられて、甚だ遺憾であつたから、思はず『ソコだ』と申したのであると答へた。二宮翁は此の信念を以て其の一生を貫いた。苟も、人として世に立つ以上は一身の榮華や幸福を目的とせず、但、其の道を維れ務むる底の自信が無ければならぬ。

昔、印度の僧耆域が、支那に來りて佛敎を擴め、將に印度に歸らんとすると、その門人が最後の敎を請うこと切である。耆域示すに半偈を以てし、乃ち曰く『口を守り意を攝めて身犯すこと莫れ、是の如きの行者は世を度することを得ん』身口意を愼みて、惡に遠ざかり善に進めば、迷妄の世を出て、彼岸の淨土に到るべしとの敎である。門人は『有り難き御敎訓なるも餘りに平凡である、何卒高尙の敎義こそ聞まほし』と申せしに、耆域は歎息して『中國の人は智を好んで行を輕んず、佛敎の實益は日々の躬行に在り』、門人又曰く『されど是の如きの事は六歲の兒童も猶ほ之を知る』と、耆域曰く、『六歲の兒童も之を知るべし、されど八十の老翁も之を實行すること容易ならず』といはれた。されば、大慈寰中禪師も『一丈を說得せんよりは一尺を行取するに如かず、一尺を說得せんよりは一寸を行取するに如かず』といはれたではないか。

尤も、古人の語にも『智は圓かならんを要し行ひは方ならんを要す』ともありて、智識は成るべく廣く養ひ、宇內の形勢をも觀、百科の學理にも通ずることは必要であるが、德行は常に自己の脚跟下を照顧して、一言一行を苟くもせず、惡と知りなば斷乎として之を斥け、善と知りなば誠を致して之を行ひ、益々

其の心意を淨潔にせねばならぬ。佛道も人道も決して二致あるに非ず、智目と行足と兩々相全きを修養の標的とせねばならぬ。

勇猛精進

智行合一を體得せんには、是非とも勇猛精進力に依らねばならぬ。所謂『勉めて惡を去り、務めて善を行なふ』ので、卽ち修養的大努力を要するのである。

元來、善い事をなすは安心で手易く、惡い事をするは極めて困難であるべき筈であるが、古人も『善を行ふは嶮を攀るが如く、惡を作すは坂を下るが如し』などというてあるは、人間には私欲と放縱性とが存して居るが爲めである。世に私欲ほど恐ろしいものは無い。私欲は人の心を狂暴にし、顚倒ならしめ、盲目なししむ。諺に『盗人の晝寢』とあるが如く、惡い事をする者は、人の働く時分にごろ〳〵して、人の休息する時分、暗を犯し、危險を犯して夜稼などをする。道樂者なども矢張、苦しい思をしてお金を工面し、夜になつて人目を憚かりつゝ遊び回る。中々容易ならぬ骨折であるが、私欲と放逸性は、其の苦勞を以て却て樂しみとして居る。何んといふ馬鹿々々しい事であらう。

若し盗人が盗業を働き、放蕩息子が遊里通ひをする程の努力を、善ひ方に向けたならば、どんなに賴もしい事であらう。古語にも『煩惱の犬は追へども去らず、菩提の鹿は招けども來らず』とあるが、善を好

むの志厚く、徳を樂しむの念深ければ、日々夜々、勤勉を以て樂みとし、精進を以て悅びとするに至るものである。

世に天然の釋迦なく自然の彌勒なし、聖賢も哲人も皆な修養勤勉に依て世に出づ。德川時代に於ける禪門の偉傑と稱せられし白隱禪師の如きも矢張、勇猛精進より現出したる碩德であつた。師は駿州原宿に生れ十五歲にして出家せし時、自ら誓て『若し肉身にして火の燒くこと能はず水も漂はすこと能はざる底の力を獲ずんば縱ひ死すとも休せず』と期し、後、美濃檜木の瑞雲寺に參ぜし時、偶ま虫干に逢ひ、內外の典籍架上に堆きを見るや、師、禮拜して佛祖に對し『願くば我に正路を示したまへ』とて、目を閉ぢて默禱し、手に任せて書を採り、之を開きしに『禪關策進』の中、引錐自刺の一節に逢着した。卽ち昔、慈明和尙汾陽に在りし時、大愚・瑯琊等六七人と伴を結んで參究せり。河東は苦寒で、衆皆是を憚りしが、慈明獨り宵を徹して端坐し、自ら責めて『古人刻苦し光明盛大を得たり、我れ又何人ぞ生きて時に益なく死して人に知られず、理に於て何の益かあらん』と、卽ち錐を引て自ら其の股を刺し、以て睡魔を掃うて辨道せし因緣あり、師は之を見て、坐右の銘と爲して勇猛精進せり。是れ師が二十歲の時であつた。此の勤勉力が遂に白隱の如き俊傑を打成したのである。

宋の劉忠定は司馬溫公に向つて、心を盡し己れに行ひ、終身守るべき敎訓を乞ひしに、公は『其れ誠乎』卽ち『誠』の一字を以て答へられた。劉氏は『之を行ふに何をか先とせん』と問ひしに、公は『妄語

せざるより始めよ』と答へた。劉氏は始め、甚だ之を易しとせしが、退いて自己の言動を検討するに、日日の行ふ所、矛盾する者甚だ多し。是れではならぬと自ら勵まし、自ら策ち、力行七年にして成り、漸く言行一致、表裏想應し、事に遇うて坦然、常に餘裕あることを得たとある。

　善事にせよ、德行にせよ、無限であるから、修養の方法としては、先づ以て一事貫行に努むるが宜い。漢の張良は堅忍不拔をモツトーとして修養した。德川時代の永井尙政は『油斷大敵』の四字を龜鑑として身を修めた。縱ひ一事なりとも、之を完全に修得するには多くの德素を涵養せねばならぬ。例せば『誠』の一字にせよ、之を貫行するには、第一に道を守るの志が堅固でなければならぬ。又、事に臨んで常に私慾私情に打克つ力が無ければならぬ。他に對して同情の念も深く無ければならず、質實剛健の志氣も存せねばならぬものである。

　谷干城將軍の夫人くま子刀自は有名なる賢夫人であつた。或時、私に對して『自分は明治十年、熊本籠城の際、男勝りの働きをなしたなどと稱せらるゝは、如何にもお恥しいことで、實は夫干城の足手纒いであつたらうと思ひます。自分は修養も何も無い愚者でありますが、たつた一つだけ、生涯を盡して守りました。それは、子供は言ふに及ばず、書生に對しても、女中に對しても、自分が寢て居つて起さぬといふことです。何人に對しても、毎朝起す時は、必ず自分が先に起きてそれから靜かに起します。これが自分の六十年來を一貫したる務めでありました』といはれたことがある。誠に味のある語と思はれた。

自ら勉めて、而して後、人をして勉めしむ、自ら正しうして、而して後、人をして正うせしむ、是れ實に天下の至理である。現今の爲政者も、教育家も、宗教家も、及び世の父兄・師長たらん者、皆此の心を以て心とせば、國家の風教も必ずや更新の實を擧ぐることを得るであらう。

人は何事に依らず、之を貫行するには、必ずや堅忍不拔の決心が無ければならぬ。佛教では發心・決定心・相續心といふことを申す。志を起したのが發心、堅く之れが斷行を期するのが決定心、如何なる場合に臨んでも其の志の變ぜぬのが相續心である。故に、佛教では、佛にも菩薩にも必ず誓願といふことがある。

誓願には通願と別願とがある。通願とは、一切の佛菩薩に共通する誓願である。是を普通に四弘の誓願というて居る。卽ち、四ケ條の誓願で、第一は衆生無邊誓願度、一切衆生は無邊なるも生々世々を盡して之を濟度せんとの願望。第二は煩惱無盡誓願斷、煩惱は境に依つて起り人に對して生じ、重々無盡であるが、其の源は知見の誤謬と貪慾・瞋恚・愚癡とに依て生ず、未來際を期しても之を斷滅せんとの願望。第三は法門無量誓願學、法門には佛の悟得したまひし覺道あり。又、人類として知識せざるべからざる世間學もありて無量であるが、永久を期して必ず之を學得せんとの願望。第四には佛道無上誓願成、佛の道は最勝無上であるから、誓て之を成就せんとの願望である。此の中、第四が最高最終の理想であつて、前の三者は其の理想を實現するの功德行である。此の功德行は萬行萬修の基準であつて、此の三大德の宗

成したのが佛道成就である。

されば禪門に於ては、御飯を喫する際にも此の修養的觀念を以て『爲斷一切惡、爲修一切善、爲度一切衆、回向於佛道』と念誦するのである。されば、苟も人の人たる德を修めんには、寢ても、寤ても、惡に遠ざかり善を修し、更に進んで、社會人類に奉仕せんことを期し、萬事萬端、此の心操を出發點として勇猛精進せねばならぬ。

無我の妙行

併し、人間の弱點として、何事にも自己本位になり易いものであるから、天晴立派なる善行を營みても、其の心行を調査すれば、畢竟、自己中心、自己の幸福・榮譽を期するといふ醜陋なる思想が根底となつてゐる。

達磨大師が梁の武帝に謁見せられし折、武帝は佛心天子とも稱せられし程の有名なる佛教家であつたから、最初の相見に、帝は『朕、卽位以來、寺を建て僧を度し、盛んに佛教の普及を謀る、功德多少ぞ』と問はれし時、大師は『總て功德なし』と喝破した。皇帝には皇帝の行願あるべし。若し護法弘教を以て、自己一分の勝果を期するが如きは、是れ功利主義の行持にして、大乘佛道の勝功德とは稱し難しといふ慈悲徹悃の訓戒であつた。永嘉大師は、是を『住相の布施』と稱し、證道歌にも『住相の布施は生天の福、猶

ほ箭を仰いて虛空を射るが如し、勢力盡きぬれば矢却て落つ、來生の不如意を招き得たり』と示されてある。故に、眞の行持は無我の妙行で無ければならぬ。

惡を斷じ非を離れて、徹底、惡なきに至れば、惡を止めたといふ考も起らぬ筈である。善を修め德を行うて、所謂『至善に止まる』に至れば、道德が習慣性となつて、心の欲する所に從つて矩を踰えず、起居動靜、悉く至善の德相となる。例せば、朝起きの如き、青年の時代は中々困難で、中には『死んだ氣になつて起る』などといふ人もある位です。それが習慣になると、朝起るのが甚だ愉快で、朝寢して却て困難を感ずるやうになるものです。

前の宮內大臣たりし波多野敬直氏の母堂靜子刀自は、衆に勝れし信仰家で、明治四十年前後、私が東京の芝に居りし頃、時々、奴壽司などを作り、自身で特々四谷の右京町から、電車に乘て持ち來られ、『疎末な品ではあるが、私の志だけを受けて下され』などといはれて、感謝したこともありしが、刀自は或時、私に向て、『自分は、敬直や嫁の爲子が孝行をして吳れるので、勿體ないと思うて、日暮しをして居りますが、是れでも朝寢の勤めといふがあつて、寒中夜永の折などは中々骨が折れます。自分の家は、寒中の如きは、朝五時に女中や書生が起き、六時に嫁が起きることとして居る。然るに、自分は老人ゆゑ、遲くも三時頃には目を覺して、どうしても睡れませぬ。併し、自分の寢室は嫁の室と餘り遠くないから、がた〳〵すれば嫁の方に聞える。尤も、時間迄は嫁を起す樣なことは無いが、老人が起きたなと思ふと、

眠りながらも何やら安らかならぬものであることは、自分が若い時分に經驗して居る。故に、嫁に安心して休んで貰ふには、六時の時間迄は、自分は熟睡して居ることにせねばならぬ、それで、目を覺ましても、障子の開閉から佛前への看經にも、嫁に氣取られぬやうにするには、中々の遠慮が入用である。是れが自分の朝寢の勤めであります』といはれたことであつた。是れ、靜子刀自は始めは勉めて朝起をしたであらうが、後には朝寢の方が骨が折れて、朝起して朝起を忘れたのである。

惡を去り善を行ふにも、勤勉力行の功を要する中は、惡い事は致してはならぬ。善い事は勉めねばならぬといふ努力を要するが、後には、惡い事は爲やうと思うても出來ぬ、善い事は爲まいと思ふも爲ずには居られぬといふやうになる。是れが無我の妙行である。釋尊が三祇百大劫の難行苦行といへば、非常なる御苦勞と思はれるが、釋尊御自身では寧ろそれが御樂しみであつたらうと思ふ。承陽大師は佛法修行者の心術を示されて、『名利の爲めに修してはならぬ、靈驗や果報を得んが爲めに修してはならぬ、唯佛法の爲めに佛法を修すべきぞ』と仰せられた。吾々が國家及人類の爲めに奉仕するにも、自己の名利や希望を先に立てゝはならぬ。唯々國家の爲めに國家に奉仕し、社會の爲めに社會に貢獻するのが無我の行持である。

昔、卍山禪師の弟子にて、甲州に圓瑞といふ善知識があつた。神氣溫粹にして、面に瞋色なく、口に言語寡く、脇席を沾さず、時を過ぎて食はず、財色の二欲は天然に存せざるが如し。初めに加賀大乘寺に在

りし時、偶、鄕里より十餘兩の金を贈り來つた。圓瑞、乃ち之を以て沈香百餘函を求めて、百餘人の大衆に喜捨した程であつた。卍山禪師は却て之を呵責して、『持齋不臥、是れ汝が道機を障ゆ、精進禪定、是れ汝が慧命を損す。如何ぞ一切を放過して任運の時に隨ひ、箇の洒々落々無爲無事の人と作り去らざるや』と戒められた。圓瑞は拜謝し淚を掩うて去りしが、精進彌加へ苦行亦前に倍したとある。卍山禪師は、圓瑞の法執と法我見とを戒られたものと見える。此の大無我境に達することは實に容易でないが、それには超越の知見と、不動の定力と、廣大の悲願とが無ければならぬ。是れ謂ゆる『智を用ひ、勇を用ひ、兼ねて仁を用ひ穆々として安んず』るもの、其の行ふ所任運にして道に契ひ、穆々として心安く、俯仰天地に愧ぢず、一擧手一投足の上にも佛心を體現し佛德を莊嚴するものである。

以上三等の人格中、第一の人は、多く物質文明に偏して功利思想に惑溺するもの、第二の人は、道德的生活を營まんとして修養に志すもの、第三の人は、宗敎的生活に住して常に信仰の喜びを抱くものである。此の宗敎的生活の要素たる超越の知見・不動の定力、廣大の悲願の三大條件は追つて述ぶることと致します。

禪的生活の五大標準

禪的生活とは何ぞや

禪的生活とは、禪的安心の上より發したる高潔なる生活である。複雜なる人生、混濁せる思想、醜惡なる社會、此等の腐敗せる大氣の底に動めく現代人に取りては、宜く禪的生活を以て修養の標的とせんことを希望するのである。

禪的生活の標本を古人に求むれば、先づ承陽大師の心操、無相大師の高行、一休和尚の洒脫、白隱禪師の活機等は何れも好典型と謂ふべきである。併し此等の高僧碩德は其の身を出世間の境地に置かれたるを以て、直ちに移して一般人の上に擬することは、聊か不調和であると謂はねばならぬ。けれども其の光風霽月の如き生活の、由て來る所の根本を尋覓して、それを一般人の精神の奧底に移植したならば、所謂『適くとして可ならざるはなし』で何人の上にも又如何なる時にも、如何なる處にも、應用無礙にし去ることが出來ようと思ふ。

勿論、承陽大師や無相大師等の行持は幾百千年間に稀れに見る所の大信大行であるから、普通凡人の企及すべき事ではあるまいが、世に『天然の釋迦なく自然の彌勒なし』一志不退ならば、吾人も亦第二の佛祖となることを得るのである。縱ひ佛祖たること能はずとも、佛祖一分の功德を修得することが出來るに相違ない。然らば禪的生活とは如何なる狀態なものであるか。予は且らく第二義門頭に下り、左の五點を擧げて之を分疏して見ようと思ふ。

一、熱烈の信念　二、不退の行願　三、超越の知見
四、解脫の妙趣　五、縱橫の靈機

禪的生活には必ず以上の五點を包含してゐることを翫味せねばならぬ。縱ひ一休和尙の如き大用現前規則を存せざる底の生涯と雖も、仔細に點檢し來らば、必ずや此の五點がその內面に具備してゐることを發見するであらう。さもなくして、唯だ飄逸・洒落・頓智・奇拔のみならば、一種の奇行家たるに過ぎぬ者で決して、許すに天下の善知識を以てすべきものでない。世人、動もすれば古人の一時的作略の跡を見て、以て其の全豹を窺知せんとす。盲人の象を模するよりも猶ほ淺ましといふべし。若し猫兒を斬るを以て南泉の禪機と爲し、棒頭を弄するを以て黃檗の家風となさば、黃檗・南泉を去ること十萬億土であらう。依て今、此の五點に就て聊か閑注脚を試みようと思ふ。

『隨を得ること、法を傳ふること、必定して至誠により信心によるなり』とは承陽高祖の慈訓である。信念なき者は佛法の器に非ず。信念は修道の導師にして精進の鞭なり。起信論には信を說いて、解信と仰信との別あることを明かにしてある。內觀自省、自己方寸の內に向て深く實相の理を見る、卽ち卽心卽佛なりと諦信するは解信の根本である。外、佛陀の實在を信じ、佛陀の威德莊嚴を諦觀し、之に向つて歸依渴仰の念を生ずるは仰信である。併し此の二種の信念は決して相離るゝものでは無い。

宇宙萬法は一實相である。此の實相は靈活の妙體にして大智力あり、大慈力あり、大斷力あり、一切の功德を圓具して寸毫も缺くる所が無い。此の實相を習得し證得し使得するを佛といふ。されば吾人の方寸も亦これ佛である、佛德を具有して圓滿無礙である。故に龍牙禪師は『昔生未レ了今須レ了、此生度二取累生身一、古佛未レ悟同二今者一、悟了今人卽古人』といはれる。

佛祖は先覺者であり、吾人は後進者である。佛祖を尊信し奉るは、やがて吾人本具の佛性を尊信する所以である。中江藤樹は年甫めて十一の時、一日、大學を讀み、『自二天子一以至二於庶人一壹是皆以レ修レ身爲レ本』に至り大に歎悟して、『幸に此の經の今に存するあり、聖人豈に學んで至るべからざらんや』といふたとある。藤樹は身自ら聖域に躋らんとして、聖人の書を學び聖人の德を尊信したのである。藤樹の如きは、最

も聖人に親しき者と謂ふべきである。

元來信仰なるものは、空間をも時間をも超越したものであるから、信仰の眼には「遍法界の佛身」と「常住不滅の佛體」とがアリ〳〵と映じて、自己と佛祖との間に微塵の隔歴も無い様になる。是を感應道交難思議といふのである。此の信仰心が發すれば、全佛身が常恒不斷に吾人の全自己に照臨して、我を護り我を導き、我を慰め、我を誡めて下さるといふことを感得する。吾人は此の信念に依りて、廉耻心を發し、疑惑の情を泯じ、從晝至夜、歡喜の念に充さるゝこと、恰も赤兒が慈母の懷に眠れるが如くである。此の信念より安心も現はれ、勇氣も發する。承陽大師は、

> 一向に佛法に身心を投ぜんことを、深くたくはふるこゝろとせるは、佛法必ず人をあはれむことあるなり、おろかなる人天なほまことを感ずるおもひあり、諸佛の正法いかでかまことに感應するあはれみなからん、土石沙礫にも誠感の至神はあるなり。

と仰せられた。要するに佛心を信ずること最も深く、又、自己心を信ずること最も厚く、此の二心が融合して以て一心の基礎となり、萬行の根底となり、而して此の一大信念力に依りて萬難を排し、千障を淩ぎ、萬里一條鐵に進取し去るを要するなり。

不退の行願

前いふが如き信念が確立すれば、必ずや不退の大行願を發するものである。若し大行願が發せざることあらば、そは信念の不確實を證するものである。菩薩の特長は、空間的には遍法界の衆生を以て所化の對機となし、時間的には未來際を盡して無限に活動を期するに在る。故に其の慈悲は普遍平等にして怨親普く利し、其の行持は永遠無窮にして生滅あること無し。此の大慈悲あつて始て佛陀の大德を顯現すべく、此の大行持あつて始て菩薩の大用を發揮すべきものである。普遍の慈悲、無窮の行持、是れ實に宇宙の大德妙用である。若し夫れ槿花一朝の露にも齊しき現在一世のみを以て活動の時代となし、又は難行苦行を不可能となして、徒らに易解易解の法門に依憑せんとするが如きは、自ら劃ることの甚しいものにして決して禪的生活を爲さんとする者の志で無い。

楠公は七生報國の誓ひを立てゝ身を國家の犠牲に供せられた。吉田松陰先生は、『よしや身は武藏の野邊に朽るとも留め置かまし大和魂』の一首を賦して其の覺悟を告白せられた。乃木將軍はその全生涯を明治天皇に捧げ奉るの志操を堅持して、未來までも扈從し奉らんが爲めに殉死せられた。此等は皆な不退の行願である。此の行願こそ我が日本魂を淬勵するの一大原動力である。禪者は常に此の願力を培養して如何なる險難にも屈せずして、奮進するの勇氣が無ければならぬ。

然るに『吾等凡夫には到底戒行は持てぬ。自力の修行は出來ぬに依て、唯だ〳〵信の一字を以て佛力に任せまつる』などといふは、信仰門からいへば道理なきに非れども、若しそれのみにて滿足したならば、

胴體計りで手足も耳目も無き不具者の如きものである。働きの無い信仰となる。故に常濟大師は、

佛道を願ふ者は恒時を願ふべし。百劫千劫に限るべからず。三世の諸佛、長劫に修行して猶ほ未だ休せず。虚空縱ひ盡くること有るも、佛行は退轉なし。三祇百大劫を說くは、佛行の一時二時を說くなり。而るを佛道一生に極めんと欲す、小見の甚しき笑ふべし笑ふべし、痴なり痴なり。佛道若し汝が念ふ如く易かるべくんば諸佛何ぞ難しと說かん。然りと雖も、難に依て退轉すること勿れ。難に依て退かば幾時か易からん。始めて入る者は殆んど難かるべし。只だ身命を捨てゝ道に入るべし云云。

と仰せられた。洵に御親切なる寶箴である。

元來、神聖なる快樂は行願力の產物である。カーライルが『勞力なければ安樂もなく、休息もなし』といひしは確かに一種の格言である。故に行願堅固の人は常に愉快に充ち、幸福に充つ。不退の行願は不退の快樂なることを知るがよい。此の行願を普通人の日常生活の上に應用したらば、農夫の鋤を執る、商人の利を圖る、皆な行願力を發揮する一大遊戲場となるであらう。何となれば、一切の行爲もその中心には、自づから無限の慈悲と高尚なる道念とが存在するからである。

昔、德島の城主蜂須賀侯、天柱禪師に參じて悟道を得た。たま〳〵禪師が病に臥したと聞き、侯は使を驅て懇に之を問はしめた。師は几に凭つて使者を接し、弟子玄端に命じて、代て書簡を認めしめられた。その書簡の中に於て『齊家治國も亦菩薩の行道なり。篤く仁政を舖き、上下相信じて乖戾あること勿

れ。是れ老衲末後の赤心なり』と示されたとある。

要するに行願とは『上求菩提、下化衆生』の二大標準に向て之れが實行を期し、之れが願望を專らにするのであるから、世の仁義も道德も、皆な此の行願の一片兩片である。換言すれば自覺と覺他との二門に向つて進趣するのである。今の人の多くは、青年・壯年の時代には、勉強も研究もするけれども、稍や成功の位地に上れば、自然に勉强を怠たり、研究を等閑にするの傾きがある。是れ不退の行願力が薄弱であるから、半途にして退歩し去るのである。

超越の知見

禪的生活に缺くべからざるは超越の知見である。超越の知見とは、あらゆる凡情を超脱して驀直に宇宙の眞源に接觸することである。釋尊は六年端坐して何物をか證得したまへるぞといふに、要するに自己を究明せられたのである。自己の超凡越聖なることを覺悟し、自己の蓋天蓋地なることを徹證せられたのである。自己を證するは萬法を證するなり。萬法を證するは宇宙の眞源を證するなり、此の證一たび現はるれば、此の身卽ち法身、此の心卽ち佛心、天地日月も佛法ならざるは無く、牆壁瓦礫も佛德を顯現せざるは無い。

昔、駒込吉祥寺内栴檀寮主大賁和尙、一日、珍牛禪師を牛込の僑居に訪ひ、袈裟を搭け威儀を正し、正

法眼藏の提唱を拜請せられた。時に禪師は默然端坐、良久うて曰く、『山僧が一動一靜、何れか正法眼藏に非ざる』と。其の態度、音聲、恰も全身より光明を放つて人の肺腑を射る。大貫和尚は平身低頭、覺えず流汗背に徹し、是より從晝至夜、禪師を敬慕して措かなんだといふ。想ふに禪師はその全身を以て一大說法を打せられたのである。既に是れ全身說法である。此の間何ぞ大乘・小乘、權敎・實敎等の名くべきものが有らうや。釋尊は四十九年橫說竪說し、最後に我れ四十九年一字不說と斷定せられ、唯だ一枝の花を拈じて、正法の端的を擧似せられた。此の間何の三乘・五乘、五敎・八敎の葛藤があらうぞ。然るに後代に至り徒らに名相を執し、文字に着し、遂に一佛敎の中に於て互に反目し毀訾することを致す、恰も青山が綠水を罵り、白雲が明月を嘲る如きものである。返照一番、直ちに自己の根源を徹證し、宇宙の實相を看破し、凡聖迷悟の窠窟を超脫する底の大知見が無ければならぬ。

唐の李翺は韓文公の高弟にして別に一旗幟を樹てたる學者である。憲宗帝の時、國子博士と爲つた。曾て朗州の刺史たりし時、藥山禪師の高風を慕ひ、屢々之を請じたが來ない。そこで躬ら之を訪ふことにした。時に禪師、方丈に爲て經を讀んでをり更に顧みもしなかつた。李翺その禮遇せざるを憤りて『面を見るは名を聞くに如かず』(聞て千金見て一文ぢや)と、袖を拂つて去らうとした。禪師、始て口を開き、『太守何ぞ耳を貴んで目を賤むを得ん』と言はれた。卽ち太守は聞くことを知りて見ることを知りたまはぬことの笑止さよとの挨拶であつた。そこで李翺は立戾て威儀を整へ、『如何なるか是れ道』と問うた。禪

師は手を以て上下を指して云く『會すや』李翺曰く『不會』禪師云く『雲在青天水在瓶』大道は是の如く明歴々露堂々なるぞとの答であつた。流石に李翺は忻然其の旨を悟り、禮を設けて左の一偈を呈した。

鍊得身形似鶴形。千株松下兩函經。我來問道無餘說。雲在青天水在瓶。

此等は何れも超越の知見にして、所謂天地の大經卷を讀破す』るものである。禪的生活の士には是非とも此の知見を有せねばならぬ。

解脫の妙趣

『但だ憎愛なければ洞然として明白』であるが、とかく、凡夫の常態として得失是非の爲めに飜弄せられ、名聞利欲の爲めに束縛せらるゝことを免かれ難い。縱ひ超越の知見を有する底の人にても、薰習力の致す所、動もすれば此等の俗情に繫がれて、知らず〳〵の間に公平の觀察を缺き、活達の禪機を失ない、再び煩惱の古巢に戻るものがある。故に智に於て超越の知見を有すると共に、情に於て解脫の德を修行せねばならぬ。

解脫というても世外の道人となりすまして、人事の成敗治亂に關せぬことをいふので無い。不退の行願は、常に慈念衆生の志氣を策振し、濟生利民に全力を傾注すべきは言ふ迄も無いが、其の內に、自づから解脫の境界を得て、而して日常生活の上に、甚大の趣味を感得することが必要である、即ち『坐禪せば

四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』といふ上に、更に一歩を進めて、最も溫かな妙趣を味ふことが大切である。

越後の良寬和尙などは最も解脫の妙域に達した道人と思はれる。和尙は國上といふ處に五合菴といふ草菴を構へてゐた。米粟五合を得れば足り、外に覓むる所なきを以て、菴號に其の意を寓せられたものであらう。その枯淡の家風、瀟洒の生涯は實に脫俗の上乘なるものである。菴中、儋石の儲なきも晏如としてをり、石床に孤坐するも自から無限の風月を味うてゐる。『住なれてこゝも廬山の夜の雨』『焚く程は風がもてくる落葉哉』此等の詠を見てもその境涯の如何に高崇であつたかゞ偲ばれる。しかのみならず和尙は常に兒童と與に戯れて、之を無比の妙樂と爲し、その手毬翹に『つきて見よひふみよいむなやこゝのと十とをさめてまたはじまるを』の詠がある。また『夜のしらみねになく秋の蟲ならば我がふところは武藏野の原』の歌によりても、其の生活の無頓着な内に、どこか達人の氣慨の存するを見ることができる。また訪問の人に對して、『月よみの光りをまちてかへりませ山路は栗のいがの多きに』と詠ぜし歌を見れば、情緖の溢るゝばかり溫かきことが窺はれるではないか。

凡そ禪門に於ける解脫生涯は、凡情の舊窠を超脫して天眞の風流を樂むのであるから、喫茶喫飯の上にも、無限の妙趣を感じ、溪聲山色の間にも、無窮の韻致を味ひ、從晝至夜、洒然として安樂國に逍遙することができるのである。

超越の大智を具へ、解脱の大情を貯ふ、此の二者相和して、玆に縱橫無碍の靈機を撥轉するのである。能く遍法界の妙法を證會し、全宇宙の經卷を讀破することを得ば、山川草木盡く佛法ならざるは無く、日月風雨一として佛心ならざるはない。故に順境に處するも逆境に臨むも、隨時隨處に妙法を拈提し佛心を活現して毫も壅塞が無い。

般若多羅尊者が東印度國王の請に應じて往つた時、默然として兀坐するのみ、更に讀經せらるゝ樣子がないので王は『何ぞ經卷を讀誦せざる』と怪み問はれた。時に尊者は、『貧道、出息衆緣に涉らず、入息陰界に居せず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷』と答へられた。(貧道とは出家の自稱、予といふことである)。予は是の如く出息にも入息にも佛法を呑吐してゐる。大乘の妙典を身讀してゐる。故に予が出息には、無限の慈光、發して群生の闇を破り、入息には、無邊の智光、出て煩惱の闇を照すものがある。縱橫の靈機が活現してゐる。

抑も、眞理は靈妙の體なり、故に能く無住の本より一切の法を立し、變幻出沒模索すべからず。雲騰りて雨を致し、露結んで霜と爲る皆是れ眞理の活動である。若し此の眞理を把捉し得たる眼より見るならば、吾人は此の赤肉團も亦是れ眞理の功德聚である。般若多羅尊者が、出息入息に如是經を轉じてゐる、

縱横の靈機を活現してゐる、と申されたも道理である。縱横の靈機といふては、必ずしも熱喝痛棒を弄することでは無い、頭々上物々上に眞理を拈提し、無偏無黨、自づから其の宜しきに適するの活作略をいふのである。或時は一莖草を以て丈六の金身と爲し、或時は丈六の金身を以て一莖草と爲す。徳山の所謂『無㆓心於事㆒無㆓事於心㆒虚而靈空而妙』である。

世尊が或日衆と與に歩行し、忽ち地を指し『此の處宜く梵刹を建つべし』と言はれた。傍に侍してゐた帝釋が、そこで一莖草を把て地上に挿んで『梵刹を建つること既に了れり』というた。佛法はこゝである。梵刹といへば大工や技師の手を借りるものとのみ思うて居てはならぬ。『鉢裡の飯、桶裏の水』にも佛法の大精神が實現する。

黄檗は曾て鹽官の會に在りて第一座となり、一日、懇ろに三寶を禮拜した。時に宣宗皇帝は迹を韜して僧となり、その寺の書記に任ぜられてゐた。黄檗の禮佛するのを見て、不思議に思ひ、維摩經に、佛に着いて求めず、法に着いて求めず、僧に着いて求めずといへり。第一座恁麼に禮拜して箇の什麼をか做す』と問うた。黄檗それに對し『佛に着いて求めず、法に着いて求めず、僧に着て求めず、但だ禮拜すること是の如し』と答へたが。此の一語の如きはよく〳〵味ふべきものである。此の中には熱烈燃ゆるが如き信念と冷靜止水の如き定力とが、圓滿に調和されて居ることを看取せねばならぬ。所謂『能禮所禮性空寂、感應道交難思議』の端的である。が帝はまだこれが分らぬ、猶ほも怪しんで、『既に求むる所なくんば禮拜は何

の爲ぞ」と問うた。果然として皮相に着して骨髓を忘れてゐる。世の禪を見る、往々にして此の種の見を免れない。黄檗爲めに一掌を與ふ。帝は驚いて『麁行の沙門』此の亂暴和尚と言はれた。黄檗曰く、『這裡是れ何の所在ぞ、麁と說き、細と說く』といひ更に一掌を與へた。黄檗の手段は實に徹悃の慈悲である。

要するに禪の行履は往々端睨すべからざるものあり、非常に放膽であるかと思へば、非常に小心であり掃蕩的機用があるかと思へば建立的手段がある。順行・逆行、天も測ること無し、而して其の間、一大信念の汪溢して蓋天蓋地なるものがあるのである。

結論

禪的生活とは、禪的修養の結果が日常生活の上に實現することであるから、幾多の修德が綜合凝聚して一種獨特の靈機が顯彰せられるのである。故に單に其の一面のみを見て、是れが禪的だなどと早計せば大なる誤謬に陷いるものである。一休禪師の洒脫や白隱禪師の機鋒などを見て、其の由て來る所を知らず、僅かに其の斷片を捉へて是を標本に擬せんとするは甚だ危險である。洞上綿密の宗風が宜しいからとて律僧的のものと考へて居ては、洞門の家風に辜負することを免れぬ。又、臨濟の兒孫だからとて濫りに棒喝を以て能事とせば、是れ亦臨濟の正脈を稟受したものとは申されぬ。眞に能く禪的生活を爲さんとせば、少なくとも以上五項の標準に基きて、着實なる修養を積まねばならぬ。而して其の基礎は信念と打坐とに在

るは言ふ迄も無い。

禪にして信念なき時は、世の所謂靜坐などゝ五十歩百歩のものともなる。禪にして打坐に依らざれば、空見識たることを免れぬ。信念を發得せんものは、法を重んじ身を輕んずるの熱誠が無くてはならぬ。打坐を行ずるものは先づ以て凡情を打破し去るの勇氣を必要とする。白隱禪師の所謂『不斷坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、管絃歌舞の席に入りても、安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで退かず』といふ氣慨が無ければならぬ。此の兩頭を習學して從晝至夜怠ることなくば、自然にその身心が禪道に符合し、日常の起居動靜も亦禪的生活となるのである。

開花落葉の風流

大宇宙の當相

生死は猶ほ開花落葉の如し。春風一たび到れば百花霞に笑ひ、秋風一たび發すれば、萬葉枝を辭す。然れども天地は未だ曾て一絲毫をも増減せぬ。宇宙もと生死なし。大道豈に變易あらんや。而るに生死の相を現ずるものは、是れ全く宇宙の靈機、大道の活動である。

抑も宇宙の體性たる、超然として迷悟の相を泯じ、迥然として彼岸の境を立せず。是れを眞如と稱し、又は實相と稱す。然れども其の體自ら靈活の性を有し、常住不斷に活動して息むことがない。其の活動には井然たる秩序があり、嚴然たる法則がある。是を名けて大道といふのである。而して活動には必ず變化あり、變化には必ず出沒がある。是れ本より假相にして實相にはあらず。故に百花霞に開くも天地は曾て増ず、落葉地に沒するとも大道は曾て滅ぜず、不増不滅・不垢不淨・不生不滅、是れその實相である。假りに増減生滅あるが如く見ゆるは是れ假相である。

宇宙の活動には、秩序あり法則ありて、古往今來、微塵も變易することがない。是れを緣起とも因果の理法ともいふのである。此の因果的變化の狀態を、無常とも生死とも名けたのである。故に刹那そのものも無常なるを以て刹那そのものの生死あり。念々そのものも無常なるを以て念々そのものの生死あり。日月の昇沈、草木の榮落、四時の交謝、人間一期の生死等は、無常相の最も顯著なるものにして、生死の相の最も粗大なるものである。然れば無常なりとて悲しむべきものに非ず、生死なりとて厭ふべきものに非らず、吾人は須く此の理に參じて生死の根源を悟了せざるべからず。

人間生死の問題

然るに、人間の生死は當面の事實に於て、四時の交代や草木の榮枯と同一視すべからざるものがある。それは人間には精神なるものがあつて、苦樂憂喜を感ずるからである。人間世界として特殊の意義を有し、別段の趣味を具ふるは、皆な此の精神の力である。此の精神より觀る時は、人生なるものは頗る缺點の多き世界なることを感ぜずには居られぬ。何故ならば、人生の大事は生と死とであるのに、生は何の處より來り、死後何れの處にか去るやといふに、此の問題は千古の懸案にして未だ實驗的に解決して居ぬからである。つまり解決の出來ぬものと解決されて居るやうな有様である。出發點も知れねば、行く先も知らずに平氣で居る。思へば人間も呑氣なものではないか。

或る人は人間の身心は祖先の遺傳である。身心の上に現はれたる行爲、即ち業力は子孫に遺傳し及び社會に流通して、遂に滅却せぬというて居る。一應の理窟は立つて居るやうなものゝ、此の說では唯物論と其の歸趣を同うして居ることを免れぬ。人間の精神は果して其の樣な者であらうか。

又、或人は、人間の個性は未來に存續して、身を易へ形を易へて必ず再來するものであると。單に是れだけの說では一種の常見外道ではあるまいか。此等の問題になると、結局は不可知の難關にして、唯々懷疑を增のみである。而して人間一生の始終を觀ずれば、生れる時は父母親族皆な喜び集うて其の誕生を祝ひ、その死する時は皆集りて悲しむ。人間の生涯は笑に始りて淚に終るものと云はねばならぬ。思へば怪しきものではないか。生前死後の狀態は、畢竟、實驗の及ぶ所に非ずとすれば、吾人は如何に安心し去つたらば宜いであらう。

因果歷然

抑も宇宙の靈機は、無限にして絕對であるが、其の靈機は無始無終に活動して暫くも息まず、且つ其の靈機は、吾人及び一切衆生にあつては精神活動となる。物質と雖も亦靈機の外のものに非ざれ共、人間等の樣な精神の作用がないから、苦樂昇沈の問題は發生せぬ。獨り人間等には精神作用がありて箇々別々の性能を發揮し、其の性能に順ずる種々の行爲を現じ、其の行爲の善惡是非に依りて、爾後の果報を造出すの

である。個人の性能と宇宙の靈機とは、本來無二無別なりと雖も個人行爲より生ずる一種の業勢力は、各各個人の性能に應ずる來果を招ぐ。故に各人は現在の善惡に依つて、未來の苦樂を感じ、現在の迷悟に依つて、未來の淨穢を分ちて、微塵も昧ますことは出來ぬものである。彼の大集經に『十來』といふことあり。

富貴は慈悲より來る。福德は善根より來る。無病は信心より來る。愛敬は忍辱より來る。智慧は精進より來る。高位は禮拜より來る。短命は殺生より來る。病身は不淨より來る。貧窮は慳貪より來る。患盲は破戒より來る。

とあるが如きは、唯だ一部の例を示して因果の狀相を說かれたものではあるが、過去の因は現在の果を生み、現在の因は未來の果を生み、輾轉相續して苦樂昇沈する有樣は全く是の如きものである。又かくの如きものであらねばならぬものと予は信ずるものである。

天地は無限なり、世界は無數なり、生物は無盡なり、されど人間の精神界より見れば、苦樂・迷悟の外に出でぬ。吾人は過去の原因に依つて既に現在の果報を受けてゐる。現在の原因に依つて未來の果報、決して一樣なるべからずと雖も、要するに苦樂の二つに歸するのである。その狀態を惡道善道・迷界悟界と說かれたのが、三界六道輪廻生死の相である。此の理を諦信せざれば、皇祖皇宗に對する祭祀も、父母祖先に對する追福も、一切衆生に對する覺道莊嚴の佛事も、皆無意義なことゝなる。

されぱとて此等の事に意義あらしめんが爲に、故らに輪廻轉生を說いて、宗教的要求を滿さしめんとす

るものではない。佛教は、古今不變の眞理と、原則との上に、組織せられたもので、決して人情を以て左右し得べきものではない。

無我の語義を錯ることなかれ

佛教は無我の教である。が、無我といへる意味を誤解して心性を否定し、因果應報を撥無せんとするが如きは、許すべからざる妄見である。吾人の心性は不生不滅、常住寂滅にして、宇宙の靈機に歸一して大小の量を絶し、迷悟の境を絶して居る。が、唯だ業力に依つて種々の報相を現じ、生々世々變々化々して窮盡あることがないのである。但しその變々化々の儘が、ソツクリ常住寂滅なることを識得せねばならぬ。

されば吾人は因果應報の理法に對しては微塵も昧ます所なく、一言一動、一行一擧も將來の運命に必ず關するものなることを知りて、常に其の行爲を愼むと同時に、此の五尺分段の色身が、直に是れ宇宙絶大の靈體なることを悟得して、宜しく法性眞如の妙境に向つて、大信念を開發し修養せねばならぬ。此の大信念ありてこそ凡夫迷執の小我見に囚はるゝこと無く、進んで法界圓融の正知見を發し、天地と其の德を同うする底の大修養を致すことが出來る。佛教の修證といふも、畢竟、此の外に出づべきで無い。

昔、雲巖禪師、病重うして將に滅を示さんとす。道吾禪師、病を訪ふの因み、問うて曰く、『此殼漏を離

れて何れの處にか相見す』と、是れ未來の問題を提出して問はれたのである。時に雲巖は之に答へて、『不生不滅の處に相見す』といはれた。すると道吾は更に『何ぞ不生不滅に非ざる處にも、相見を求めずと道はざる』――こゝでは、もう會はないぞと何故いはれないか――といはれたとのことである。兩大老漢の眼中には、生死などゝいふ牆壁は無い。從つて不生不滅といふものをも存する要は無いのである。是れが法界圓融の正知見である。

　達人には達觀がある。生死は宇宙の靈動である。萬象變化の妙用である。諸佛は生死輪に駕して八相成道し、菩薩は生死海に遊んで利生濟度す。悲しい哉、吾人は生死の爲めに種々の疑網に繋がれて煩悶苦痛す。是れ宇宙の罪に非らず無常の過にも非らず。唯だ能く妄想を除却し、業纏を解脱せば、開花落葉皆是れ一段の風流である。輪廻は變じて神通となり、轉生も變じて應現となり、隨所に宇宙の大我を實現し當下に本有の性德を發揮して、自在無礙圓通の最大法樂を獲得することであらう。

　予の信念夫れ是の如し、予は此の信念に依つて大安心を得、大誓願を發し、大修養を努めんとして居るものである。

道の體相用

道の本體

凡そ佛弟子と稱せらるゝものには、四衆と申して、比丘（男僧）・比丘尼（女僧）・優婆塞（居士）・優婆夷（信女）の別あるも、その本務としては、等しく『上求菩提下化衆生』の八字に歸するのである。上、菩提を求め、下、衆生を化す、卽ち自利と利他である。

菩提とは梵語で、譯してこれを道といふ。道には體と相と用とがある。道の體は古今に通じて變らず、十方に周くして礙り無きもの、所謂、宇宙の大眞理である。目にも見られず手にも執られぬが、それが具體的に實現されたのが佛樣である。

佛樣の境界は不可思議の光明功德を備へたまひ、その壽命は無量無邊にして生死の境を飛び越えて居らせらるる。此の廣大なる佛樣の御心を分析すれば、智慧と威嚴と慈悲との凝結したものである。

菩提道も亦是の如くにして、甚妙不可思議といふものゝ、其の內には吾々の智慧の根源、勇氣の源泉、

慈悲の基本となるべき大德・大用を含有せられて居るのである。而して此の道は法界に周遍して居るのであるから、吾々も亦此の道の中に生れ、道の中に活動して居るので、一日でも、一時でも、一刻でも、道を離るゝことは無い。所謂『道は須臾も離るべからず』である。此の道が靈動して天となり、地となり、日月となり、風雨となりて、森羅萬象を現出してゐる。吾々人間生活も亦、道の現はれであるが故に、君臣あり、父子あり、兄弟あり、夫婦あり、朋友ありて、千態萬狀なるも、其間に自ら一貫せる大道の靈が存して居る。

天地乾坤・日月星辰・山川草木・人畜鳥獸、此等は盡く道の相と謂ふべきもので、此の相より無量無邊の妙用がまた現はれて來る。政治といふも、經濟といふも、武備といふも、文敎といふも、其の他、所有人事は盡く道の運用であるから、縱ひ如何程人事複雜で、事情が入り交つて居らうとも、其の究極する所のものは遂に歸一する筈のものである。此の道の本體を明むるのが悟りで、道の相に達するのが道德である。能く道の本體を悟り了れば、生死の二途にも迷はず、萬法差別の相にも惑はず、此の身此の儘、無量壽佛なることを知り、此の娑婆界のまゝがソツクリ寂光淨土であることを了じ、そこに永久不動の大安心が決定せられ、從つて、憎いとか、愛いとか、欲しいとか、惜しいとか云ふ妄念も起らぬ樣になる。又、道の相に達すれば自然に君臣・父子・夫婦・兄弟等の道を明めて、此の道を昧ますことが無いから平生の起居振舞の上に麗はしき道德が現はれて來る。

それから進んで道の妙用を會得すれば、自づとそれが大慈悲心の發露となつて現はれるものである。これが下化衆生である。

然れば自利も利他も唯一つの菩提道の上の事である。故に佛弟子たる者は、先づ道の本體を明めて迷の塵を拂ひ、道の德相に合して道德を修め、道の妙用に隨順して慈悲の行ひを營まんと期せねばならぬ。

古人の勝蹟

彼の菅原道眞公の如きは五十五歳にして右大臣に任ぜられ、大君の御覺え益目出度く、國民の信望も殆んど一身に繫がるといふ程であつた。翌年九月九日、宮中に於て『秋思』の題にて一律を賦せられたが、その後聯に『君富二春秋一臣漸老、恩無二涯岸一報猶遲』の句がある。醍醐帝御感斜めならずして御衣を賜はる程であつた。然るに藤原の時平が、公の德望を憚かりて之を讒せし爲め、延喜元年八月廿五日、公、五十七歳にして、太宰權帥に任じ太宰府に左遷せられた。是れ藤原氏が自家の權力を維持せんが爲めに帝の御年若くあらせたまふを奇貨として、罪なき賢人を陷れたものと思ふ。公は二十三人の御子があられしが、長男右少辨高視を始め、皆な散々伍々に配流の身となり、奥方等は都に留まり、公は少女と小男位を從者として都を辭せられ、遙けき筑紫の空に向はれしは、誠に憐れなる極みであつた。途中、奥方に贈られし歌に「君がすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへりみしはや」とある。詩には「離レ家三四月

落涙百千行、萬事皆如レ夢、時々仰ニ彼蒼一」といふがある。公の心の中、果して如何がありしやらん。

太宰權帥と稱するも、其の實は謫居であるから、太宰府を距る半里許りなる淨妙寺、即ち俗に榎木寺といふに住し、謹愼を表して殆ど門外に出でず、只管、無實の罪の晴るゝを待て居られた。歌に『海ならずたゞよふ水の底までも清き心は月ぞ照さむ』、翌年九月九日には「去年今夜侍ニ清涼一秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣猶在レ此、捧持毎日拜ニ餘光一」との詩がある。月を掩ふの暗雲は終に霽れやらず、配所に在ること二ヶ年餘にして、五十九歳の二月廿五日に薨ぜられた。併し公は斯程の厄難に遇はれたるも、其の偉大なる信念は自づと道の本體に通じて居られたから、煩悶の中にも堅固不動の一大安心があられた樣に思ふ。

配所に赴く途中、明石を過ぐる時、驛長に與へられた詩に、『驛長勿レ驚時變改、一榮一落是春秋』といふがある。開花落葉は天地運行の相なれど、其の本體は不生不滅である。此の本體を明らめなば、榮枯盛衰も皆な一時の夢である。此の本體の道に一如になられたのが佛陀であるから、一たび佛陀に歸依し奉る時は、自づと差別界の束縛を解脱して不動の信念に住することが出來る。故に公が謫居中の詩にも『病追ニ衰老一到、愁逐ニ謫居一來、此賊逃無路、觀音念一回』、觀世音の音聲を聞き、之を返照して圓通無礙の眞諦を悟られたのである。

一休禪師の俗弟子にて有名なる蜷川新左衞門は、嘗て鳥邊野を過ぎしに、一女あり荼毘に向うて坐禪して居た、氏は之を怪み、『汝は何者なるや、女性の身として斯る處に坐す、恐ろしくは思はざるや』と尋ね

しに、女は自若として、『夏蟬のもぬけ果たる身にしあれば何が殘りて物おぢをせん』といふ歌を詠じた。氏は大に感じ是より參禪の志を起したといふ。

太田道灌が上杉定正の爲めに浴室に於て殺されし時、『きのふまでまゝ妄想を入れ置きし、へ、まむし袋今破れけり』と詠じ、笑つて死んだといふ說がある。尤も此の歌は後人の作ともいふけれども、何れにせよ道灌は不生不滅の大道の本體を悟つて一大安心を得て居た樣に思ふ。

吉田松陰先生が刑に臨んで『よしや身は武藏の野邊に朽るとも留め置かまし大和魂』との辭世を遺せしも、楠公が『七度人間に生れて以て國恩に報ぜん』と誓はれたのも、皆な道の本體を信得した上から發したる誓願である。其の他、浮世の事物に貪着せず、名利の外に超然として、天眞の妙趣を樂しむ者の如きも皆な彷彿の間に道の本體を認めたからである。

道の德相

道の相は、天となり、地となり、山となり、河となり、無數に現はれて居るが、天には天德あり、地には地德あり、山には山の德あり、水には水の德あり、各々其の德性を發揮して、而して互に相扶け相補ふて居る。人間界の上からいへば、君主は臣民を慈み、臣民は君主に奉順し、父母は子を愛し、子は父母に孝し、所謂、法法位に住して世間相常住である。是れ皆な大道の德相である。故に父母には父母の道あ

りて其の子を生長し、子には子の道ありて其の父母を安んず、差別のまゝが平等であるのは皆な道の本體が一如であるからである。吾々の身體の上でも、眼は眼、耳は耳、手は手、足は足、各々其の德を具へて個々獨立であるが、手は足を扶け、足は手を翼け、眼は耳を護り、耳は眼を護り、矢張、差別のまゝが平等である。此の德相を德相の通りに明らめて、其の德を發揮したのが法である。

佛法も世法も決して相違したものでは無い。火の乾き水の濕ふ如く、父母は自然に子を愛し、子は自然に父母を慕ふ。慈愛も孝行も、畢竟、自然の法則である。此の人道の向上したのが佛法である。『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎』といふは七佛通誡の偈であるが、實は宇宙本來の德相である。此の德相を昧ます時は、身も亡び、家も敗れ、國も紊れ、社會の秩序も崩れて了ふ。古人が、『茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す』といはれたのも、皆德相を昧まさゞる底の敎訓である。

德相の修得

西有穆山禪師に一雛僧が『如何なるか是れ佛法』と問うた時、禪師は『板の間を能く拭け』と答へられたといふも決して別事では無い。唯だ道の相には少しも僞りが無い。一滴の露にも一粒の米にも其の實相を現はし、天地の精神が遺憾なく發露されて居る。然るに凡夫は自己を本位として、種々の執着を起し妄見を生ずるに依て、至誠の德が現はれ惡いのである。

武州北葛飾郡大輪村迦葉院開山、默山元轟和尚は元祿時代の人であるが、曾て其の本師下總國山王村東昌寺隱之禪師の輪下に在りて、典座（庫院の役首にして辨食を掌る）に任ぜられし頃、誰れいふとなく和尚は毎朝、內所で別菜を調へて食べるといふ評判が立つた。或朝、禪師は之を點檢せんとて、風邪の心地なりとて坐堂を閑却し、潜かに典座の寮を窺かれしに、爐に小鍋を掛け、和尚は其の傍に端座せり。禪師は驀直に寮內に入りて『此の鍋中の物は何人の食ぞ』と問はれた。和尚『是れは小師の食料であります』禪師、『禪林に於ては別菜を許さず食物は賓主共に平等なるべきものぞ、然るに自分限りの食物を製するとは不埒なり』というて、試みに蓋を執り少し計り小皿に盛りて口中に入れしに、其の不味なること言ふ計り無く、殆ど呑下すること能はず、『是れ果して何物ぞ』と問はれし時、和尚は感激の涙を流し、『不肖にして三寶供養の食物を調ふべき大任を命ぜらる、若し道心を忽せにせば何を以て神聖なる職務を盡すべき、故に小師は御任命のその日より、臺所の流しの落口に袋を張り、一日流れ出る物を袋に受け、毎夜、閑枕の後、之を開きて鍋に入れ、これに少量の殘飯と生鹽とを加へ、毎朝、焚き落しの火もて之を煮て、自分一日の食料となす、始めの中は中々喉にも通らぬ程不味を感ぜしが、今日では甘露の如くなる美味を感ずるのみならず、此の食物を喫し始めてより風邪にも侵されず、身體の健康、從前に倍するを覺えました』と答へたので、禪師も涙を流して其の道念を激賞せられたといふことぢや。此等をこそ正信の人とも至誠の士ともいふのである。心中深く大道を信じ、佛陀の靈光を信ずる人で無ければ、此の行持は顯はれぬも

のである。

尾州半田町の富豪小栗三郎君は、迂衲の舊知であるが、御佛壇や御先祖に對する奉侍の嚴肅なる、實に感歎に堪ざるものあり。線香一本献ずるにも、御蠟燭の心を切るにも必ず親ら之を爲し、又、必ず前後に御拜をされる。途中、佛堂や神社の前を通過する時は、如何なる小祠でも必ず脫帽して禮を行はれる。此の一事を以ても萬事を知るべきである。

濱松の乘松辰四郎君は、常に法華經・正法眼藏等を拜讀し、自ら之を淨寫して、外出の際にも之を抱持して讀誦に努められて居る。

豐橋の齋藤彌八氏は、先代より觀音經を御守り形にして普く之を施し、既に幾十萬部に及びしならん、今の母堂などは、珍らしき篤信家で、兄弟姉妹擧つて信仰を凝らし、且つ其の宅では浴室にも臺所にも、信仰と修養とに關する教訓を貼り出してあつて、家内中が修養三昧に入て居る。

名古屋でも、北國でも、到る處に感ずべき正信の士が乏しからぬを見て意を强うするに足るが、社會全體の上から見れば、輕佻浮薄の風が滔々として漲り渡つて居る。吾人は大に警戒せねばならぬ。米國より歸朝せし某僧が、船中の樣子を物語つて『三等客の方は寧ろ同情心が厚うて氣持の好いことがあるが、二等客は大概利益の一點張り『一等客の多くは奢侈に耽り、安逸に安んじて居つて、中々信念の開發は六かしい』といふたが、味ふべき評言と思はれる。

吾々は元來、大道の德相を具有して居るのであるから、道を信ずること深くして、能く至誠の德を養はば、如何なる業務に當るも、頭々物々の上に大道の妙德が現はれるに依て、寢るも起るも皆な忠孝の德を成じ、和順の道を修むることになる。

勞働は神聖なりといふが、徒らに名利の巷に走り、我見の間に居りなば、何の神聖かあらん。若し正信至誠の士なりせば、何事を爲し何處に在るとも、一として神聖ならざるは無い。

道の妙用

正信至誠の德が、萬事萬端に應じて活動を起すことは、天地の活動が變幻窮りなきが如くであるべきである。天地の活動は決して格則を死守するものでは無い。或時は春風霞を送り、或時は朔風雪を捲き、或時は怒雷空に轟き、或時は霽月天に輝く、其の妙用は端倪すべからざるものあるも、其の間自から萬世不易の天則の存するものありて、而して、如何なる活動も結局、天地生々の德用、即ち宇宙の大慈悲妙用ならざるは無い。吾人も亦是の如く、忠孝の二道は君父に對する德相であるが、之を實行するに當りては千態萬狀の機用を要するぢや。劍を執つて忠節を盡すもあり、政界に立て奉公の誠を竭すもあり、農工・商估・敎育・經濟・種々樣々である。又、時代に依り場處に依り相手に依りて其の作用は異同なき能はざるも、何れも至誠の情、慈悲の德より發現し來るものであるから、歸する所は一貫の大道を出でぬ。故に吾人は、

時勢を鑑み、位地を顧み、職分に應じ、境遇に照して自在に應現せねばならぬ。今、在俗の身を以て此の妙用を體得したる君子中の一人を紹介して見やうと思ふ。

土橋貞惠翁の偏狂と慈心

その人は、今を距ること約六十年前に歿したる九州肥前諫早なる醫士土橋貞惠翁である。翁は諫早在東長田村なる土橋儀兵衛の三男で、安永五年八月に生れた。儀兵衛は士格を得て姓を名乘り、年十二俵の扶持を受け、鄕士の如き生活をして居た。三人の男子があつて、長男は眞作、次男は元次、三男は多助、此の多助こそ翁の幼名である。翁は極めて不運の人で、三歳の時父を失ひ、五歳の時母を喪なうて、唯だ一人七十歳に餘れる祖母があつた。祖母は或日、三兒に向て『お前達は何になりたいか』と尋ねた。長男と次男は默つて居たが、翁は僅か五歳でありながら『私は醫者になりたい』と答へたといふ。此の頃より學問を好み、毎日、三里もある多良嶽といふ處の某法印の處に通うて書物を習うた。或夜、盜賊の爲めに餘財を盜み去られ、益々貧困に陷る上に、翁が十一歳の時、祖母は七十八歳で死んで了うた。これより親戚などの厄介になり居り、十五歳の時、諫早下屋敷の某家に下男として傭はれ、此處に二ケ年を經た。寛政四年、十七歳にして長崎の有名なる蘭醫吉松道碩の門に投じ、晝は水汲薪割りから炊飯の事を努め、深夜、獨り燈下に書見して勉强した。次兄元次は十八歳にして死せり。翁は友情に厚く、日夜、香花を供

へて追善に怠り無かりき。道碩も翁の志を嘉みして特別に教授に努めたので、學業日に進み、文化四年三十二歳の時業を卒へ、道碩より永春といへる名を授けられ、十六年目にして鄕に還り、居を諫早附近森山村の杉谷に定め、家を造りて醫を開業した。

翁の勤倹と慈善とは非常なもので、家には炊婦一人位にて、製劑は皆な自ら之を爲し、貧家に往診する時は、右手に藥函を提げ左手に施米袋を抱へて見舞ふことは數々あつた。雨降りの日などは蓑笠を被して出懸るので、乞食と間違へらるゝことも度々であつた。日日の食膳には、伊勢蝦の殼を載せ鹽を傍に盛り、蝦殼を見ては鹽のみを嘗め、大概はそれで三度の食を濟ました。或時は鯛や蒲鉾抔の形を木で造りて膳の上に陳べ、御馳走〳〵というて嬉しそうに食す。人々が怪んで其の意を問へば、翁は笑つて『咽喉を通れば蝦や鯛も鹽と同じことになる。今、此の御馳走を食べると思へば宜い、人間は活きる爲めに食するもの餓へざれば足れり』と答へた。

森山村杉谷の村田惠喜造の長女の雪を妻として迎へた。祝言の三日目に、翁は伊勢蝦の殼と鹽とを皿に盛り、妻に向つて之を食べよと命じた。お雪はハイと答へて見て居たが、少しも躊躇するの色なく、忽ち殼に鹽をつけてガリ〳〵と食べて『おありがたう』と禮を述べた。翁は手を打つて『それでこそ我が妻なり』というて大に喜んだそうである。後、自ら剃髪し鏡に向つて嬉々として笑ひ、それより妻に向つて「女の髪は冗費多くして時間を費すこと少なからず、故に汝も髪を剃り落すべし、是れ世の爲め人の爲

めなり、余の儉約を旨とするは唯だ世の人々を賑はすの意より出づ』というて落髪を命じた。妻は默つて聞き居りしが、やがて剃刀を取り惜氣もなく綠の黑髪を根元よりプツリと斬り落した。翁はハラ〳〵と涙を流し『嗚呼汝は實に我が妻なるぞ』というて激賞したそうです。

翁は餘りに偏狂の如くであるが、極端なる節儉をして極端迄慈悲行を營まんとの誓願より發したる行動であつた。是より縞の着物や紋付物などは盡く賣拂ひ、黑木綿の着物に造り替へ、且つ妻にも諭して『一粒の米一粒の粟をも粗末にするな、喰はれぬ物は、庭の石の上に置て雀や小鳥に與へよ、天の物を疎略にすれば必ず天罰ある者ぞ』と諭されけるとぞ。

大菩薩行

翁は報恩の志最も厚く、妻に命じて『余の今日あるは道碩先生の賜である。今後は一日に三度必ず蔭膳を据よ』と言はれた。妻は終身之を實行して怠らなんだ。藥劑買入の爲めに、長崎に往復する時は必ず道碩を訪ふて安否を問ひ、道碩の病に臥するや、翁は毎日八里の道を往復して見舞ひ、且つ米鹽の料を貢ぐ等その親切至れり盡せりであつた。道碩の死せし時などは、哀悼度を超へ、追善の如きは叮嚀懇篤を極めたりとぞ。また長兄眞作の爲めには森山村田尻に家作して田畑を添へたり。翁は自らは乞食同樣、質素を守れど、祖先の墳墓の如きは思ひ切つて莊嚴を極めたもので、今猶ほ杉谷の里に現存して居る。

コロリ（今の虎疫）病が大流行せし時、翁の診療、神の如しといふ評判であつた。翁は當時、建札を建てゝ仁術を施した。其の文に曰く『一、此度疫病の爲め難澁に及ぶ人には廣く施療施米致候間遠慮なく申出でらるべく候事。文政二卯年六月土橋永春』、翁は常に慈善布施を務めとせしが、資産は大に增殖し、文政二年迄に買入れたる田地は約三十町歩なりしといふ。

翁には、七人の兒があつたが、多くは夭死してツルとキヨの二兒のみ存せり。其の兒が美服や美食を欲しがれば、翁は施米袋を提げさせて、親ら貧家に連れ行きて施米を與へ、且つ其の貧苦の狀態を見せしめて、歸家の後、懇に之を諭した。

又、翁は忠誠の人にして常に忠義を重んじ、天保中、藩の財政困乏を感ぜし時、直ちに三百金を献納した。領主は其の志を賞し、侍醫として召抱へんとせしが、固辭して受けなんだ。嘉永三年三月には、藩の經營に係る諫早學館に、御家中取立の資として田地十町六反五畝歩を献納した。それが現に諫早に學校の學田として傳はり、年々、小作四十石六斗の收入あり。校內に『貞惠土橋翁行儀碑』あり、每年春秋二回、校內に於て多助祭を擧行す。此等は全國中にも稀れなことである。

翁は獨立の氣象に富めり、天保年間、自宅、火を失して丸燒となる。藩主平素の勳功に愛で、用材全部を賜ふとの沙汰があつた。翁、固く之を辭退し、少かに棟木一本だけを拜領して藩主の御好意を謝せしといふ。

翁の生涯は全く慈善を以て充され、道路の改修。橋梁の修覆等擧げて數へ難し。今猶ほ處々に多助橋の名あり、森山村は常に旱魃の難に苦しみ灌漑の水利に乏し、文久三年、自費を投じて二箇處の溜池約一千坪を築造す。又、毎年、田植前と盆と師走との三度、貧者に施米をなすことを例とした。嘉永三年には貧窮の救助米料として森山村に田地六反三畝（作得三石）を寄附せり。右は現に同村の村有財産となつて居る。又、害蟲驅除の酒飯料として田地三反歩を寄附した。

翁は子供には運惡く、殘れる二女の內ツルは廿五歳にして死したり。是に於て、深く無常を觀じて佛門に歸し、圓頂黑衣の人となり、自ら知足庵と號した。祖先や兄弟及び子女並に無緣供養の爲めにとて、嘉永四年の春、菩提所諫早町天祐寺に加地子米五十三俵の地面を寄附す。今は百俵餘の收入あり。淨土宗慶巖寺に三町一反歩（作得七石二斗）黃檗宗性空寺に一段歩（一石二斗）を寄附した。翁の父母の墓は長田村東長田に在るを以て、墓地掃除料として二反歩程を寄附した。村民は此の收入にて毎年、祭祀を行うて居る。嘉永年間、領主は翁夫妻に各一人扶持を賜ひて士格に列せられたが、翁は固辭して受けなんだといふ說もある。晩年、道碩先生の碑を建て大施食會を行うて報恩の誠を表した。萬延元年八十歳の時、領主より貞惠の號を賜うた。

斯くて翁は元治二年まで活動を續け、同年五月九日、九十歳にして歿せられた。翁の如きは能く道の用を得たものと謂ふべし。故に其の行ひは全く一の菩薩行である。多少極端に走りて常規を逸する點もあら

うが、能く〳〵その精神を玩味すれば、全生涯を通じての活動と慈善の信念とは自づから佛弟子たるに恥ぢぬ。吾々も亦能く此等の點に注意して、上求菩提下化衆生の願行を全うせんことを期せねばなりませぬ。

心の出家

難値の勝縁

佛教にては四衆といひて、佛教の信行者を四類に分つことがある。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四である。

比丘とは梵語、譯して乞士といふ。生家を出でゝ生計を營まず、日中一食、樹下一宿、三衣一鉢といふ極めて簡單な樣式の生活をなす佛教修行者をいふのである。食事は日中に一度するだけで朝も晩も食はず宿所は樹の下・石の上、それも二晩とは續けて宿らない。衣服は三衣といつて三通の袈裟を所持するのみ、つまり衣食は全く他人による人々である。乞うて食うてゆく人々である。故に乞士といふ。

比丘尼とは、女の乞士である。

優婆塞は譯して近事男、若しくは淸信士といふ、佛陀に親近奉事する淸淨篤信の士といふ意味である。

優婆夷とは近事女、又は淸信女と譯す。

これを要するに、比丘・比丘尼は、專一の佛道修行者である。坊さんと尼さん即ち出家のことで、優婆塞・優婆夷は信男・信女、即ち在家の佛教信者をいふのである。

右四衆は素より平等法界中の同一佛子なるも、中に就て、出家たることを得るは一層貴き難値の勝縁といはねばならぬ。併し『西行に姿形は似たれども心は雪と墨染の袖』似而非の出家では、一向その甲斐も無いことである。此の點に於て、拙衲なども自ら顧みて甚だ慚愧に堪へざるを覺えます。

出家の尊貴なるは、其の發心と修行とに在る。釋尊の如きは特別の御身としても、近く各宗の祖師方の發心に徴するも、其の發心の動機は實に高遠である。承陽大師の如きは、八歳の時、其の母君が御薨去に臨み、親しく『御身は何卒出家して兩親の冥福を資け、併せて衆生の濟度を頼むぞよ』と遺言せられしを心に深く刻み込みたまひ、在家の身にてあらば、藤原家に貰はれて、行く行くは關白にも、太政大臣にもなりたまふべきを、まだ十三歳の御時に、斷然、家を逃れて出家したまうたのである。常濟大師の如きも、たつた一人子にて、父母の鍾愛如何計り深かりしならん、然るに、自ら進んで出家を願ひ、遂に父母をして泣々之を許容するの止む無きに至らしめられたのが、七八歳の頃であらせられた。

凡そ人間普通の欲望は、主として名・利の二つである。多くの人は名譽と利益との間に奔走して一生を送過するものである。尤も、人間の希望は千差萬別であるが、其の歸する所は名を重んじ利を求むるに在る樣に思ふ。此の二つを超越する大志あるものは何れも忠臣孝子・賢人聖者であるが、其の忠臣孝子とい

ふも亦た多くは名利の域を脱することは甚だ稀れです。

然るに、承陽大師の如きは、此れ等人生の欲望を超越し、唯々、大道を學習して父母の靈に酬ゐ、大法を弘通して萬生を濟度せんとの大願を發せられたのであるから、其の志操の高尙なる、其の願力の堅固なる、其の慈恩の深厚なる、到底、名利の巷に彷徨する凡庸人などの、夢にも窺ひ得べき處では無い。而して、其の慈悲も願力も、現在一世といふ樣な限りあることでは無く、未來際を盡して窮まりは無い。其の目的も、人間世界といふ一世界に局限せぬ。十方世界を通じて禽獸蟲魚に至るまで、餘さず漏さず救はんとの大志である。學習の目的も、一技一藝を究むるといふ樣な小さいことでは無い。宇宙の眞源を盡し、生死の本末を明らめ、萬法生起の始終を究むるといふ處にあるのであります。

天桂禪師は、七歲の時、達磨大師の像を觀て大師の人と爲りを聞き、『我は當さに達磨となるべし』との志を立てられたとある。龍牙禪師は『昔生未了今須了。此生度二取累生身一。古佛未レ悟同二今者一。悟了今人卽古人』といはれた。佛も元は凡夫なり、吾等も終には佛なり。『此身、今生に向つて度せずんば、更に何れの生に向つて此身を度せん』との大自覺が動機となりて出家せられしといふは、實に大心の大士と申すべきである。此の發心が刹那々々に增長して、如何なる障礙にも屈せず、如何なる困難にも打勝つて、益々進まるゝといふは、實に昏衢の明燈、濁海の船子と謂はねばならぬ。故に、斯る出家は人天の導師、衆生の福田であるから、佛・法と並べ稱して、佛・法・僧の三寶といひ、實に信仰界の歸

依處となるのであります。

故に、僧たる者の修行が、よし未熟なりとも、將來、佛に代つて教化を揚ぐべきものとして、之を尊重するのである。されば、苟も出家たる者は常に佛祖の發心を繼續して常恒不斷に大道を學修し、分に應じ佛に代つて、靈界の指導者とならねばなりませぬ。今日、世人が動もすれば僧徒を侮蔑するのは、世人の不信と誤解とにも依るならんが、第一は僧徒が自ら其の己れを侮蔑するからである。自ら己れを侮蔑するのは發心の不堅固に基因するのである。拙衲等は我が僧徒諸師と與に、大に慚愧して奮勵する所あらねばならぬ。

心の出家とは何ぞ

此の出家の功德を隨喜して、在家の姿にて得度、即ち出家の儀を行ふ方がある。即ち、得度の師を請じ剃髮の式を勤め、佛の戒法を相續して佛袈裟及び鉢盂等を授かるのである。此の儀を了りし人の中には、頭髮を剃りて圓頂となり、常に袈裟を搭けて法名を名乘る人もあり、又少しく縫方を異にせる略式法服を纏ふ者もあり、又は剃髮の式を行ふと雖も、實際は剃髮せず、但だ、佛前に對するか、或は佛式の場所にのみ絡子（略式の袈裟）を掛くるもある。是れは純粹の出家にはならざるも、出家と同樣の心操を抱き、在家に止住して一面俗務にも關係しながら、出家と同じき生活に入りたしとの志願に出でたものである。

此等の人々も、其の發心さへ堅固ならば、精神的に僧寶の域内に入つたものと謂はれます。是れを心の出家と稱すべきものである。

尤も、剃髪の式を修めて居るから身心共に出家であるが、その中にも、精神的出家の人には一層權威が備はつて居るものと申すべきである。得度の式文に『身心をして道と一如ならしむることは、出家に越へたるは無し、所以者如何、髪を斷ずるは愛根を斷ずるなり、愛根纔に斷ずれば本身卽ち露はる。衣を換ふるは塵勞を出づるなり、塵勞若し出でぬれば卽ち是れ自在なり』とある。剃髪染衣の本旨は全くこゝにある。此の本旨を忘れては所謂『心は雪と墨染の袖』となる。古は頭髪を飾つたものである。その飾るべき頭髪を剃るのは愛着の念を斷つたのである。凡夫は、兎角、色を愛し、聲を愛し、香を愛し、味ひを愛し、觸を愛す。之れが爲めに貪慾を生じ、瞋恚を起し、愚痴を發す、煩惱次第に增長して本心全く亂る。是に依て三界の生死永く斷へず、煩惱苦海の波長に荒立つのです。故に、剃髪の偈には『三界の中に流轉して恩愛斷ずること能はず、恩を棄てて無爲に入る、眞實に恩を報ずる者なり』とある。恩を棄つるとは、貪愛の妄念を離るゝこと、無爲とは佛道のことである。言ひ換れば、妄想邪念を棄てゝ天地の公道に歸入することです。眞の忠、眞の孝も皆な私慾私情を棄てゝ公道に打任せるのであるから、入無爲とも謂ふべきである。入無爲ならざれば人道をも體現することが出來ぬ。鴨の長明は『そりたきは心の中の亂れ髪つむりの髪は兎にも角にも』と詠ぜられた。

昔、法然上人の弟子、照光房辨長は肉弟の死を悲むの餘り上人の門に投じた。修行三年、上人、遂に撰擇本願念佛を授けられた。辨長は上人の許しを得て郷に還らんとし、多くの記簿を笈に入れて出掛けました。上人、門頭まで送られ、獨語して『あたら法師の髻りを切らで行くことの惜さよ』卽ち、好い法師ぢやが剃髪もせずに歸國するとは惜きことよと言はれた。辨長、不思議に思ひ其の御言葉の意味を御尋ねせしに、上人、之に示して『凡そ髻には三つあり、勝地・名聞・利養是れである。皆な修行の妨げとなる。汝は、今、聽講の筆記を携へて、學問を郷閭に誇揚せんとするは是れ甚しき髻に非ずや』と仰せられた。辨長は、聞いて大に慚愧感悟して、直ちに笈を釋き記簿類を燒却して去つたとある。是に依て觀ても、古聖先德が如何に精神的出家に重きを置かれたかゞ解るではありませんか。

頭髪は縱ひ剃り落さずとも、其の心純潔なること泥中の蓮華の如くならば、其の心中の亂れ髪は綺麗に剃り落して、圓陀々地、縫隙なき境界となることが出來る。故に、常濟大師は『心出家といふは髪を剃らず衣を染めず、縱ひ在家に住み塵勞に在りと雖も、蓮の泥に染まず、玉の塵を受けざるが如し』と仰せられた。況や得度の式を受けて出家の儀相に擬するの人は、實に最尊最貴の境涯に進み入つたものであります。心に迷あれば、僧房に在ると雖も凡俗たり、心に迷なければ、縱ひ在家に住すると雖も僧寶の功德あり、得度の緣を結べる人々は此の意を忘れてはなりません。

無相の服

次に、衣を染めて姿を變へたることは、塵勞を出でたる解脱の相である。元來、袈裟とは、梵語の音譯で、意譯をすれば、不正色、又は壞色である。即ち世人の珍重する如き華美なる色を壞つた、淡泊瀟洒たる服裝に名づけたものです。釋尊は、初めは、世人の塚間や掃溜に放棄せし衣服類を拾ひ集めて、其の穢れたる部分を切り棄て、穢れなき部分をよく洗淨して、之を繼ぎ合せて袈裟を製し、以て體を覆ふの具とせられたもので、糞掃衣とは即ち是れである。世人が顧みだもせざる所の物を以て其の身に纏ひ、それを清淨服とせられたるものです。

然れば何故にその樣な事をせられたかといふに、其の御旨意は袈裟の別名に詮表されて居る。即ち、袈裟のことを、解脱服とも、忍辱衣とも、和合服とも、福田衣とも稱す。解脱服とは世俗の凡情を解脱するからである。解脱というても世を捨てたことと思うてはならぬ。外物の爲めに束縛せられざるをいふのである。解脱は自由の基です。古聖賢は皆な應分の解脱を獲得して居られる。顏回は貧賤の束縛を受けず、伯夷・叔齊は食祿の束縛を離る。楠公は生命の束縛を解脱し、乃木將軍は功名の束縛を解脱す。故に忠孝節義の大道に於て自由に濶歩し得られたのである。此の解脱力ある時は、怨害に遇ふとも妄りに怒らず、逆境に處するとも妄りに恨みず、種々に、衆生に對して平等に大慈悲心を運用するから忍辱衣とも名づくる

のである。
又、袈裟は眞の和合服で、和合の狀相を示して居る、長き切れ、短き切れ、太い切れ、細い切れ、縱切れ、横切れ、色々樣々であるが、これを綴合せて一枚の風呂敷のやうな物として身に纏ふのである。此の世の中も亦是くの如く、一家庭の中でさへも十人十色である。氣の長き人、氣の短かき人、餅好きもあれば酒好きもある。況んや分業の行はるゝ社會にありては、學者もあり、政治家もあり、僧侶あり、醫士あり、農・工・商・賈、千態萬狀である。其の樣々なる儘が自然に和合一致して、所謂億兆心を一にし、上下相反せず、恰も一身同體の如く働くので家も治り國も榮ゆるのである。是れ和合の德で、一家も一國も全く一枚の袈裟の如き狀態にならねばならぬ。明治天皇の御製に『もろともに扶け合ひつゝ國民のむつびあふ世ぞ樂しかりける』と詠ぜさせ給ひしは卽ち和合の德を御賞讃あらせられたのである。斯る美德を發揮すれば、幸福も、福祿も、之より產出するを以て、福田衣とも稱したのであります。
さすれば袈裟を搭けながら、誤つて物欲に轉ぜられたり、忍辱の守りを破つたり、我見の爭ひを起したり、災禍を惹き起す樣なことをしては、袈裟の功德は消滅して了ひます。
昔、僧ありて趙州禪師に問ふ『一物不將來の時如何』何物をも持參せぬ本來空寂の境に私は居ります、禪師は何と接し給ふぞとの進問です。すると趙州は答へて『放下着』といはれた。いや大きなものを提げて來られたが、趙州の處にはそんな物は要らぬから放下て了ふが宜いといはれた。此の一語は直に般若の

利劍を揮はれたものです。僧には、それが分らぬのか、分つて殊更に問ふのか、ともかくこの僧は更に『一物不將來、箇の什麼をか放下せん』何物を放下すべきや、といつた。すると、趙州は『擔取去』擔いで行けと答へられた。味のある御言葉である。眞實無一物になり切つたならば、始て其の無一物が自分の物となつて自由自在が出來ようぞとの御敎訓。空卽是色の妙旨、死中に活を得る底の消息である。禪門向上の一路に進まんと要せば、空をも解脱し、色をも解脱し、迷界に住せず、悟界を守らず、身心を脱落し來つて始て脱落の身心を圓通無碍にし去るであらう。

解脱が勢至菩薩なれば自由は觀世音菩薩である。この二菩薩の境地を體得するとき、眞箇の阿彌陀佛を見得することが出來る。又、解脱が文殊大士なれば自由は普賢大士である。此の二大士の境地を行取して始て眞箇の釋迦牟尼佛が見得される。

現在の世相を見るに、智愚、貧富、共に其の境遇や地位に束縛せられて、紛々たる世態、果然として凡夫地を脱せられぬ。此の葛藤を截斷し去りてこそ大哉解脱服を纏ひ得て安樂なることを得たといふべきである。

袈裟の功德

次に、袈裟を忍辱衣といふが、忍辱は萬德修養の第一歩である。人は心中の賊の爲めに苦しめらるゝこ

とが多い。中に就て、貪慾・瞋恚・愚痴の三毒が殆ど代表的賊魁である。貪慾の爲めに腹を立てたり、人を憎んだり妬んだり、愚痴の爲めに人を恨んだり猜んだりして、己れの精神を勞らし他の感情を害し、且つ衆生緣を斷つに至る。華嚴經には『一念心の瞋恚の火に因て無量億劫の功德法財を燒失ふ』とある。論語にも『一朝の怒、其の身を忘れ以て其の親に及ぶ』とある。葛城の慈雲律師は『世間の惡事其の數多しと雖も本原は貪慾・瞋恚の二である。其の中、自己の志を破り德義を賊ふは貪慾を第一とす、世を亂し事を害するは瞋恚を第一とす』といはれた。此の恐るべき瞋恚を制して柔和・愛敬の德を守るのが忍辱である。

僧侶が袈裟を搭て居れば、よし腹の立つことがあつても、一たび袈裟を振り回つて見て、あゝ吾は佛袈裟を纒ふ身であると觀ずれば、自然に怨憎忿怒の念は遠かるものである。縱や袈裟を身に纒はずとも、吾は佛子なりと觀想すれば、非常に堪忍の力が增進するものです。堪忍は無事長久の基、堪忍は生涯の守り本尊、『秋の暮られしや今日も腹たゝず』、慈雲律師は『經中に、まむしの口に毒あり蜂の尾に毒ある類皆瞋恚の姿となり、人間の容貌醜陋なるは人見て惡賤す、瞋恚の餘業とあり　地獄界の猛火あるも此の瞋恚增上せる姿と云ふことじや』といはれた。此等の理趣を能々翫味して身に忍辱衣を離さぬ樣に致したいと思ふ。

次に袈裟を和合服といふが、和合といふことは、快樂の基、勢力の源である。家內和合すれば家人皆な喜色を帶び家業自ら整ふ。社會和合すれば世に紛爭なく事業自ら擧る。國家和合すれば政道洽く行は

れ國運自から展ぶ。聖德太子の十七憲法の第一條に『和を以て貴とす忤ふ無きを宗とす』とある。國家の興隆も文明の進步も其の源は和合に在る。尤も、生存競爭は時代の大勢であるから、唯だ無暗に事無かれ主義を取て居てはならぬ。併し、如何に黨派的競爭が激烈であつても、各々の胸中に動かすべからざる至誠ありて能く和合の德を體得すれば、競爭は寧ろ進步の階梯である。然るに、輓近我が國に於ける競爭の狀態は如何であらう、果して至誠の道を存して居るであらうか、果して和合を尊重するの志が確實であらうか、吾々は何となく危い樣な感じがしてならぬ。此の爭ひは是非とも君子的ならざるべからず。然らざれば國家の大本までも支離滅裂を來する恐れがある。況や爭ふべからざる事にまで、我見の角を振立て、醜き競爭を敢てするが如きは實に警戒せねばならぬ。佛袈裟は和合服であるとすれば、國民一般に其の精神に無相の佛袈裟を搭けて貰ひたいものであります。

次に福田の開拓は目下の急務である。幸福を產出する良田とは何であらう。道德も知識も皆な福田であるが、その根本は信念であらねばならぬ。信念とは其の心を淨らかにして一點の虛飾なく、而して自ら堅く守つて動かさるもの、是れ卽ち信念です。我が佛教にては、佛に歸依するを以て永久的信念の基本とする。佛に歸依して、其の化導を戴き、其の救濟を冀がひ、是に依て滿足と安心とを得る故に名けて信仰といふ。人間の力には限りあるを以て、各々の希望を滿さんには餘りに微弱である。吾々の心は物事に迷ひ易い。吾々の知能は明日の運命だも豫知することは出來ぬ。吾々の生命は朝顏の露の如し、吾々の周圍は

濁惡不善の事のみが多い。凡夫は『臭い者身知らず』の諺の如く、此の缺點の中に在りて缺點とも氣づかずに居る、肺病患者の病魔に侵されつゝあるを自覺せざるが如き有樣である。中心、自ら顧みて自己の小德小智、憍心慢心なることを慚愧する時、自然に佛陀の靈光の宇宙に遍滿することを感ずるものである。然るに、現代の知識階級に位する人々を見るに、此の信仰趣味を感ぜざる方が多い樣に思はれる。是れは理窟や才能が信仰心の發動を妨げて居るのである。學問や才智も或る意味に於て氣の毒な感じが致します。信仰は心の力である、信仰は道德の源泉である。永遠の生命も精神的財寶も皆是より生ず、信仰ありてこそ、人間の價値も認められ、百年の生涯に花もあり實もあるのであるから、福田中の福田です。佛袈裟は信仰の記章である。吾々は早く心田を開拓して無相の福田を纏ふ樣にせねばなりませぬ。

出家の行持

賢愚因緣經には出家の功德を說て、『例使、人あり七寶の塔を起てゝ高さ三十三天に至るも、其の功德は未だ出家の功德に及ばず』何故なれば、寶塔は破壞する時あり、出家の因緣は永劫に涉りて滅せぬからだと仰せられた。併し、身體上の出家の事は今は說明を煩はしく致さぬ。前に述べたる如き心の出家は、國民の道德を向上せしむる上から見ても實に有益なることと思ふ、故に、天下の人々が一般に心的出家の功德を成就せられんことを希望して止まぬ次第である。

元來、佛教は人道の外に孤立するものでは無い。人道の上に更に進一歩することを勸むるものである。人道は二階座敷の如く、佛法は三階座敷の如し。人道は忠孝仁義の道である。二階座敷には三階は無いが、三階座敷は必ず二階を通過せねば昇られぬ。佛法は佛陀と同化して、永遠の生命と無限の安心とを獲得するの道である。人道の中には佛法の堂奥は無いが、佛法は人道を經ざれば昇られぬものである。然るに、世には、佛教は厭世教にして人生の進化原則に逆行する者であるとか、又は道德と多少の距離ある者であるとか思うて居る者がある。是は非常なる誤解である。去り乍ら、人道と佛法とは一致であるから忠孝仁義の道を守り、殖産興業の功を施す、それがそつくり佛法であるといふ樣に思ふならば、二階座敷を指して三階と思ふと一般で、佛教には人類の道德以外、更に一層樓のあることを忘却したものであります。併し、其の究極する所は、同一眞理の發動であるから、道そのもの丶上から觀れば、人道も佛道も圓融不二であります。斯の如くなるを以て、佛教に於ては人道の歸趣を示して智德の發達を促し、更に佛法の眞諦を說て、生死を透脫し佛果菩提の彼岸に證入せしむるのである。

拙衲、曾て得度の人に『世にあつて世に染まらざる心こそ世を救ふべき道にぞありける』といふ腰折を與へたことがある。故に、苟も因緣あつて得度を受けたる人は、一層志を高尙にして、吾れは佛陀の愛子たり、今後生々世々を盡して佛陀の行願に則りて菩薩の大行を營まんとの誓を立て、進んでは人生の束縛を解脫して正覺の園に逍遙し、退いては人生を擁護して國家を扶翼し社會を啓導し、以て一切衆生の

幸福を增進せんことを期せねばなりませぬ。

身は在家に止住すと雖も、其の心行は逈然として、鷲の峰、少林の人にぞありけるで、煩惱の穢に染まざれば、歩々蓮臺に非ざるは無く、大道の妙趣を享受せば、日々淨土の樂みに非ざるは無し。常濟大師は、「人々悉く道器なり、日々是れ好日なり」と仰せられた。身心清淨ならば此の身は是れ佛道の器なり、德を養ひ善を樂まば、日々是れ好日ならざるは無い。全身是れ解脱の堂に入りて忍辱の粧ひを凝し、和合の室に住して福田の主となる、何の喜びか之に如かん。

明治十年頃、佛教外護の居士神原精二氏は東京に於て演說會に臨み、『日本國民をして盡く僧侶たらしめんとす』といふ演題を掲げて公衆を驚かしたことがあつた。併し其の旨意は『僧とは梵語、具さには僧伽、譯して和合衆といふの意に基きて、僧侶とは和合衆なり、國民が精神的に和合し、道德的に結合せざれば國家の發展は望み難い、國家の文明をして益々向上せしめ目前の理想的淨土を顯現するは、實に是れ佛教の本誓である』といふのが要旨であつた。故に、拙衲は此の意味に於て日本國民をして盡く出家たらしめんとするものである。

禪門の信仰

信仰は禪生活の基礎

信仰は宗教の生命である。本尊も、禮拜も、學問も、儀式も、宗教を組織する上に缺くべからざる要素であるが、此等の形式も、信仰がありてこそ始めて宗教たることを得るのである。諺に「佛造つて魂入れず」といふ詞があるが、その魂は正しく信仰である。

故に華嚴經には『信は道の元、功德の母たり、一切諸の善法を長養す』とあり、心地觀經には『人の手なければ寶の山に至ると雖も、終に所得なきが如く、信の手なき者は三寶に逢ふと雖も所得なし』とある。我が禪門に於ても、信仰なき者は終に之に入ることができぬ。承陽大師も『佛法を信ぜざるの衆生は更に佛法の器となるべからず』と仰せられ、太祖大師は『正信若し起らば、誰か道に入らざるを憂へん』と示された。然れば信仰は實に禪生活の基礎である。

元來、信はマコトともマコト、スとも訓ずる文字である。マコトとは、自動的で、僞らず欺かざる正直

の意である。即ち心と語と相違せず、言と行とが一致するの美德である。マコト、スとは他動的で、他に對して疑はざる信賴、又は信用の意である。如何なる嘉言善行でも僞りがあつては德とはならぬ。言行一致、行解相應は德の本であるから、儒教には仁義禮智の外に信を加へて五常と稱して居る。已れと人との關係にしても、此の信があればこそ、互に信賴して堅く約束を守り、心中疑ひなく依托も委任もするのである。

昔、子貢が、孔子に、政を爲すの道を問うたところ、孔子は『食を足し、兵を足し、民之を信ず』と答へた。即ち、第一には産業を勸めて民をして衣食に富ましめ、次には兵力を充實して、内、國威を養ひ、外、國防を嚴にし、次には上下心を一にし、上は敎化を施し禮義を明にし、民は君を尊び上に親しみて離れ反くこと無からしめよといふのである。子貢は重ねて、此の三者の備はることは固より希望する所なるも、若し一時に之を全うすること能はずして、此の三者の中の一を去るとせば、何れを先きにすべきやと問うた。すると、孔子は『兵を去らん』軍備を撤廢せよといふた。子貢はまた、已むを得ずして食と信との中の一を去るとせば、何れをか先きにすべきと問うた。孔子は『食を去らん、古へより皆死あり、民信なくんば立たず』と極言せられた。即ち、生活問題よりも道德問題を尊重せよ、寧ろ生活に窮して死するとも、人を驅て亂倫無道の禽獸たらしむべからずとの敎訓である。

敎育勅語には『朋友相信じ』と示され、軍人勅諭には『軍人は信義を重んずべし』と諭されて、信とは

己が言を踐み行ふことぞと仰せられてゐる。また戊申詔書には『惟れ信、惟れ義』と示し給うた。信の主體はまことであるから、公平にして私なく、眞實にして欺かざることが大切である。此の信の德が現はれ、自ら道を體して必ず之れが實行を期するを自信といひ、自ら道を守りて動かざるを信念といひ、また、安んじて他に依賴し、毫も疑ひ危む無きを信用といふ。

此の信德が宗教的に發動して、佛を信じて之に歸命し、法を信じて之に歸嚮し、己れを虛しうし私を忘れて、佛の慈悲に歸依し佛の救濟に縋り賴み、之に由て、滿足し、安心し、感激し、感謝するのが信仰である。故に、信仰の土臺は、必ず僞りなく欺かざる正直清明の德でなければならぬ。心に虛僞があつたり、妄想邪念があつたりしては、如何に信仰の念を捧ぐるも、到底、永續するものではない。從つて、信仰の利益を獲ることも不可能である。

禪門に於ては、信仰の基本として第一に自信力を勸める、是れが最も大切である。故に、學道用心集には『佛道を修行する者は、先づ須らく佛道を信ずべし、佛道を信ずる者は、須らく、自己本より道中に在りて、迷惑せず、顚倒せず、增減なく、誤謬なしといふことを信ずべし』とある。即ち、吾人の本性は佛と相異なることとなし。佛の萬德も、道の功德も、皆な本來具有する所である。玉も磨かざれば光り無し。月の光りも雲の爲めに蔽はれて居る。煩惱の雲を拂へば心月自ら明かに、修養の力を加ふれば心玉自ら光りを發す。『佛も本は凡夫なり我等も終には佛なり』と確信せねばならぬ。

此の確信が生ずれば、從前の心操や、行持が、如何にも淺ましく、耻かしく、如何にしても道を求め教へを請はずにはゐられぬ樣になる。即ち信仰心を發得せずにはゐられぬものである。病者の醫を求むるが如く、渴して水を呼ぶが如く、我れを忘れて佛の光明界に身を投じ、佛の慈悲の懷に抱かるゝに至る。之と同時に、自己心地の修行に志し、其の結果、禪門の大解脫三昧に安住することとなるのである。

信仰は道に入るの端緒にして又其の終局なり

信仰は、本當に自分が自分の價値を自覺するより生ずる自然の要求である。前にも述べた通り、自己の精神及び日常の行爲を、宗教的、道德的に反省して公平に批判して見るが宜い。

禪門には『古教照心』といふ語がある。即ち、古の佛や聖人の教を鏡として自己の心を照し、其の善惡・邪正を判斷して見ることである。吾々は、果して古佛に對して耻かしからぬ心であらうか、果して古聖人に對して疚き心は無いであらうか、曾子は日に吾が身を三省して『人の爲に謀つて忠ならざるか、朋友と交つて信ならざるか、傳へられて習はざるか』というてゐる。吾々も、日夜に自己を省みて、不義・不信の言行はあらざりしか、我儘なる振舞は無かりしか、奢と欲と吝とは無かりしか、人を譏り又は過言せしことは無かりしか、油斷又は偏屈は無かりしか、堪忍を破り無遠慮の事、僻み嫉み又は諂の心は無かりしか、無慈悲なる振舞は無かりしか、完全に自己の職分を盡したるか、從前の志に反することはあらざり

しかと、よく〳〵反省して自己批判を施して見たならば、何人でも、恥かしきこと疚しきことの少からざるを感ずるであらう。

元來、吾々には煩惱障と業障と報障との三の障りがある。煩惱障とは、迷へる心、無理な心、我儘な心である。業障とは、其の煩惱心に動かされて生起する不合理の行爲である。報障とは、既往の行爲や、過去世以來の惡業に依りて稟けつゝある現在の果報である。人間同士であれば、それが當り前であるから別段恥とも思はぬが、佛菩薩や聖賢に對比して見たならば、非常に恥かしく感ずる事が多い。況てや、吾々の智識なるものは、如何に學術・才能に長じたりとも、其の實は、明日の事すら確實に豫知することは出來ぬ。『明日は御達者でありますか』と聞かれたならば、誰でも『達者である』と答へるであらうが、若し『必と達者でありますか』と尋ねられたならば、必ず之れが確答には躊躇するであらう。『人の命の無常なることは山の水よりも過たり。今日は存すと雖も明けんまで復た保ち難し』といへる釋尊の金言は決して吾人を欺いてはをらぬ、思へば、吾々は恥かしく且つ力弱き者である。

凡そ人類は、高遠なる理想と勇往邁進の勇氣とを具へてをらねばならぬが、之と同時に、自己の力の甚だ微弱なることをも反省して、日々夜々に其の力を養ひ、其の力を強めて行くことに努めねばならぬ。小兒の時には兩親の力に依りて育てられ、稍や長ずるに及んでは師長の力に憑りて智能を啓發せらるゝが如く、大智慧眼を開き、大解脫地に住し、大慈悲力を具へたまふ佛陀の大光明に歸依して、煩惱の穢れを淨

め、人生の實相を明らめ、未來永劫の大安心を決定するのが信仰である。此の信仰門に入る時は、自から從前の小我見や邪念・邪想を一掃して、全身心を佛の大光明裡に投入するに依て、言葉にも述べられぬほどの喜悅と滿足と安心と快樂とを感ずるものである。

一たび信仰心が現はるれば、自づから道を求むる志が起り、法を聞くを喜ぶの念が生じて來るから、日々に心が淨められ、煩惱の習慣が薄らぎ、佛の御敎が身に沁みわたるやうになりて、佛の敎法に於ける領解が出來るやうになる。涅槃經には『信ありて解なければ無明を增長し、解ありて信なければ邪見を增長す、信と解と圓通して方に行の本となる』とある。信心ありても盲目では迷信に陷り易い、智解ありとも信心なき者は却て智識を濫用するの恐れがある。併し、健全なる信仰心ある者は、必ずや自己に相應する智解を開發する者である。

信仰には、仰信と解信との二樣がある。仰信は、唯有り難いと信ずるものであり、解信は、佛の功德・佛の御法を了解して信仰するのである。仰信は、佛の人格を對象とする情本位の信仰であり、解信は、佛の敎法を對象とする理智に立脚したる信仰である。が、實は、眞の信仰は此の二つの融合されたものでなければならぬ。佛の大人格と佛の敎法とは決して相離るゝものではない。佛の大人格に歸依するの結果、自己の微弱なる精神に偉大なる感化を蒙り、佛の敎法を領解するの結果、將來進むべき方向に一大光明を放つのであるから此の信仰力はやがて、自己の精神生活上に一大轉機を現はすことゝなる。是を信解圓通

と謂ふのである。

此の信仰力が、次第に訓練せられ習熟せらるれば、自己の精神及び行爲の上に、佛の功德が現はれ、佛の作用が行はれる。即ち、吾々の精神が佛心に相應し、吾々の行動が佛の行ひと一致するのである。修證義には、這般の消息を『我等が行持に依りて、諸佛の行持現成し諸佛の大道通達するなり、然あれば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり』と示されてゐる。是を佛心融合と稱するのである。して見れば、信仰心は佛の道に入るの發端であると同時に、實に佛教終局の目的である。此の意味に於て、信仰は道德の基本、禪定の本源、智慧の根底である。

信仰は絶對の力なり

信仰は、內、至誠の美を現はし、外、神聖にして萬德圓滿なる大人格、慈悲の光明體に歸仰するのであるから、實に誠と誠との結合である。誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり、世に誠の力ほど偉大なるものは無い。誠は本心の姿であり佛性の光りである。

人は常に欲望の爲めに本心を昧まされ、耳目の爲めに佛性を蔽はれ易い。故に、其の心を靜め、其情を制し、欲を忘れ、世を忘れ、己れを忘れ、私を忘れて、光明遍照十方世界、無限大の功德體、無限大の慈悲體なる佛の實在を認識し、有り難く、嬉しく、なつかしく之に歸依し奉る時は、從來、小さい我執に捕

はれて、泡沫の如き名利、夢幻の如き欲望の奴隷となり、又は蝸牛角上に爭を起し、愛着の繩に縛られたり、根も葉も無い樣な聊かな事に、腹を立てたり、恨みを抱いたりせしことが、我身ながら淺ましくも又恥かしく感ぜられるものである。この時、自づと滿足心も感激の情も現はれて一大安心を得ると同時に精神上にも新しい天地が開け、人生の有ゆる束縛より解脫して、佛の道を樂み、人の人たる大道を實踐躬行するやうになるものである。

釋尊が、六年間の難行苦行も、四十九年の說法教化も、皆信仰力の現はれである。キリストが、惡魔を征服し、艱難に打克ち、遂に十字架上に血を流して、永久の感化を幾千萬人に與へたるも亦た信仰の力である。印度・支那及び我國に於ける、各宗祖師の偉大なる教化も、皆信仰の力でないものは無い。信仰には全身心を支配するの力があるから、苦の中に在りても苦を忘れ、艱難の間に處しても大滿足を得るものである。承陽大師や、常濟大師が、城邑・聚落を離れ、浮世の名利を斥けて深山幽谷に冷坐し、佛種子を長養することを樂まれしも信仰の力である。

和泉式部は、其の子小式部に後れて『諸共に苔の下には朽ずして埋れぬ名を見るぞ悲しき』と詠ぜしほど悲嘆の淵に沈んだが、信仰の力に依て漸く安心を得『假りに來て親に仇なる世を知れと教へて還る子は知識なり』と詠じて、益々佛の道にいそしんだ。

中將姫は、十五六歲のをり、繼母に陷られ、山中に誘はれて將に殺されようとした時、因緣と諦め佛

慈を仰ぎ、却て繼母の現當二世を祈り、最後の看經に及んだので、姫を殺さんとせし者も、飜然、悔悟して其の難を救つたと云ふが如きも信仰の力である。

菅公が、謫居の身にて在りながら、忠誠の志し彌固く、歸還の望も絶えて斷腸の思ひありながらも、猶ほ『病追二衰老一到、憂逐二謫居一來、此賊逃無レ路、觀音念一回』と詠じて自ら天命に安んぜられしも信仰の力である。

芝居好の人などが、夏の暑い時でも見物に往き、狹ぐるしい混雜の場所に入りて芥だらけの中に苦しい暑い思ひをなし、汗は流れる、涙は出る、それで、時間の經過のも忘れて、今一幕もあれば宜いなどというて居る。家に居るよりも一層暑く、一層窮屈、一層不自由であるが、演劇に興味を有する爲め、苦中に苦を忘れ、暑中に暑を忘れて居るのである。信仰も亦是の如く佛を信じ、法を悅び、道を樂しむ處から、人生に處して人生の束縛を離れ、苦難に處して苦難を忘るゝのである。故に、末後臨終の時に至りても、前途に一大光明を認めて正念往生が遂げられる。人生の最大事たる生死岸頭に立て猶ほ安心立命し得るとすれば、日常生活の上に出沒する順逆の境遇に對しても自づから從容自若たることが出來る。是れ皆信仰の偉力と申すべきである。

佛教にては信仰の對象を佛と法と僧との三寶と定められてある。佛は覺者である、即ち大智慧と大慈悲とを成就したまへる大覺者である。吾々の理想的大人格にして、而も吾々をお濟ひくださる〻救世者にてあらせたまふ。法は佛の御教、即ち佛の御精神の表現である。此の法に依りて、吾々は大覺の境致に進むことが出來る。僧は其の教法を輾轉相續したまへる師表である。吾々は、此の師表に就て佛の教法を聞き教法に依りて佛の御精神を體得することが出來るのであるから、此の三寶は鼎の三足の如きものである。故に、僧に歸依するに依りて法に歸依することを得、法に歸依するに依りて佛に歸依することを得るので三寶は元來一體である。

教法は八萬四千の法門とも稱して廣大無邊であるが、約て云へば戒・定・慧の三學となる。戒は道徳、定は禪定、慧は智慧で、此の三學も、歸する所は一乘法にして、一佛教を三方面より解釋したるものである。其の中の戒學、即ち道徳は、吾々の本性に具有する孝順心・慈悲心が其の源である。此の孝順心・慈悲心が止惡と作善と利物との三徳となる。

止惡とは、一切の惡を斷じ非を止めて、心を淨め行ひを正うするの徳であつて、五戒・十戒等の戒法は皆な是より生じてる。また、作善は、進で一切の善を修め、人道を履み、佛事を營み、身口意の三業に於て善根功徳を實行することであるから、忠孝信義の道も、恭儉勤勉の徳も、皆な此の中に在るのである。さうして、利物は、人類は申すに及ばず、有ゆる生物に對して慈悲博愛の徳を施すのである。止惡は勇の

大なるもの、作善は智の正しきもの、利物は仁の至きものである。此の三德を修むるを菩薩と稱し、此の三德を圓かにするを佛と名け奉るのである。故に三德の一分を存すれば則ち一分の佛、三德の少分を存すれば則ち少分の佛で、皆な之を菩薩と名くることが出來る。此の三德を尊重すればこそ佛に對する信仰も發るのである。内に止惡・作善の念も無く、外に利物の志も無き者は、堅實なる信仰心の起るはずが無い。

唐の白樂天が杭州の牧たりし時、山に入て道林禪師を訪うた。道林は門頭の老松の上に坐して居つた。白氏は之を見て、『禪師の住處甚だ危險ならずや』といふと、師は『太守の危險は尤も甚し』と答へた。白氏『某は杭山の鎭であれば危險は無い』と澄してゐる。よつて師は更に『薪火相交はり識性停らず險に非ずして何ぞや』といはれた。面白い警告である。山ほど積んだ薪でも一點の火をつければ刹那に灰燼となる。人間の運命ほど憑み難いものは無い、此の世は實に火に近づける薪の如きものであるに、凡夫はとかく目前の境に惑はされて貪瞋癡慢の奴となり、『吾れとわが心をり／＼省りみよ知らず／＼も迷ふことあり』と明治天皇の御製にある通り、内觀反省すれば淺ましきことのみである。實に噴火山頭に立つにも似て、不安、此の上も無いのである。白氏は更に語を轉じて『如何なるか是れ佛法の大意』と問うた。師は直ちに『諸惡莫作、衆善奉行』と答へた。諸の惡は作す莫れ、衆の善は奉行せよ、――道德の原則は極めて簡單である。白氏が『是の如きは三歳の兒童も猶ほ之を知る』と言ふや、師は『八十の老翁も之を

行ふこと難し」と答へた。白氏は是より膝を屈して教へを乞うたとある。

知ることは易く、行ふことは太だ難し、知て故らに犯すは妄想煩惱に捕はれて居るからである。知りて必ず之を行ふは信仰の力である。教育勅語の中に、父母に孝に、兄弟に友にと御示しになられた御教訓は誰人も之を知ることは出來るが、天下、齊しく之を知りて、之を完全に行ふ者は稀れである。

獨り之を知るのみならず、進んで、精神のドン底から有り難く感ずる樣になれば、もはや知の分際ではなくして、信の分際である。我が佛教に於ても、眞に能く信ずる者でなければ之を行ふことが出來ぬ。故に、指月禪師は信を以て『戒の源なり』というてゐる。然れば、信仰と道德とは源と流れとの關係に在りて、畢竟、同體不二なるものである。

信仰卽禪

信仰の極致は、前に述べたる如く心佛融合である。此の境致は全く禪である。我が禪門に於ては坐禪を以て佛道修行の正門としてゐる。

坐禪は上根・上機の人に限り修行し得べき法門と思うてはならぬ。『上智と下愚とを論ぜず、利人と鈍者とを擇ぶ勿れ』とは祖師の親訓である。端坐して心を靜め、妄念を絕ち邪想を掃ひ、身も心も寂靜になり切つた時、始めて玲瓏潔白なる大信念も發得せられる。

信仰は感情が本であるから、動もすれば、妄想や欲望が混入して不純なものになり易い。如何に萬德圓滿なる佛を拜しても、大乘眞實の敎法を解しても、其情操に不純なる處がありては、迷信・妄信に陷り易いのである。迷信は不合理の行爲を生み、妄信は暗愚の人を造る。自分一人は如何にも安心立命する處があるやうでも、其の結果は、決して眞正なる意味に於ける宗敎生活の本とはならぬ。

故に、予は、一般の佛敎者に向つて此の坐禪を勸めたいと思ふ。坐禪を以て禪門の特行と思ふのは大なる誤解である。天台の宗祖傳敎大師も、眞言の宗祖弘法大師も、皆な坐禪をしてをられる。淨土宗祖法然上人の如きも、其の居室を禪室と稱して居る。坐禪は佛子の儀容とも見られる。

坐禪に依て信心を養ひ、信心に依て禪定力を錬り、信禪一如となりて、心佛融合の境地に達するのである。法華經には『深く禪定に入つて十方の佛を見たてまつる』と說き、金剛經には『信心淸淨なれば即ち實相を生ず』と說いてある。此の兩經の文は、相表裡して一つの物を二樣に說かれたものと見ることが出來る。

支那禪門の三祖僧璨大師が初めて二祖に見えし時、『弟子の身、風恙に纏はる、和尙罪を懺せよ』、即ち、私は多年業病に惱まされてゐる。願くは我が爲めに、懺悔法に依り罪障を消滅せしめられよというた。するど二祖曰く『罪を持ち來れ、汝が爲めに懺せん』、罪障ありといふが、試に其の罪なるものを持ち來れ、罪、果して自生ありや、是れが罪なりといふ實體ありや、人心の善惡は恰も時て明暗あるが如く、明

の時には暗の跡なく、暗の時には明の跡なし、惡心に依りて惡業を起し、惡業に依りて惡果を招く、然れども、其の惡心の出て來る處を究むれば、元來、無自性である。故に師は良久うして、『罪を覓むるに不可得』と答へた。其の時、二祖は『我れ汝が爲めに罪を懺し竟れり』と言はれた。師は更に『和尚を見て已に是れ僧なりと知る、未審、何をか佛と名け法と稱する』と問はれた。すると二祖は『是心是れ佛、是心是れ法、法佛無二、僧寶亦然り』と示された。是れは正しく心佛融合の法門である。

信仰の極致には禪宗だの眞宗だのといふ別は無い。禪宗とても、初めから即心是佛というて客觀的の佛を除外するものでは無い。否な、佛の慈悲莊嚴を瞻仰恭敬して赤子の慈母に向ふが如くなるのである。その信仰が益々進むに從つて、漸次に、吾人の身心が、佛の御心と佛の御敎に同化して、信解圓通の域に達し、結局、吾人の佛性と本具の智德とが燦然として光輝を放つに至る。是れが是心是佛の妙境である。

或人が、一休和尚に目出度事を書いて戴きたいと願ふと、和尚は、好し／＼といひつゝ『佛家に止住すれば戒を以て本とす、三寶の海に入ればまことを以て本とす、身死して巖根に在らば骨も亦淨し』と書いて與へたといふ。人生永遠の安心、道德の源泉も、慈悲の根柢も、堅實なる信仰に在るのであるから、お互に此信仰心を發得し、且つ、之を涵養して、禪生活の眞髓に徹底致したきものである。

老螺蛤の禪

山に登らば須く頂を極むべし

老螺蛤とは、宗門中興の大善知識とも謂つべき天桂禪師のことである。師が豪邁不羈の行持は、吾人修養上の好典型として、欽慕すべきものが少くない。

師、諱は傳尊天桂と號す。老螺蛤、又は老米蟲とも號して居る。慶安元年五月五日、紀伊の和歌山に生れ、父は大原氏と云ひ、三男一女あり。師は其の仲子であつた。八歳の時、窓譽寺の傳弓和尚に投じて薙染し十八歳の時、初行脚の途に上り、尾州萬松寺の祖海・遠州可睡齋の衝天、山城興聖寺の龍蟠、其の他、洞濟兩派の宗匠に遍參し、顯密二門の碩學を歷訪し、研鑽の綿密なる、知見の俊逸なる、古今稀に見る所であつた。廿三歳の時、京都の泉涌寺に至り、偶ま戒光院周律師の法華經を講ずるを聽き、『六十小劫猶如食頃』の文に至りて大疑團を起し、親しく之を律師に質す、律師、諸經論を引證して頗る辯解に努む。師笑つて更に肯んぜず。專ら敎外の玄旨を探り、言外の宗意を訪ね、行住坐臥、暫くも參究を怠ることがなか

つたといふ。今日の學佛道者も斯の如き志氣を有したきものである。

山に登らば須く頂を極むべし。海に入らば須く底に徹すべし。唯だ其の學の博きをのみ貴んで、其の智の淺きを顧みざるが如きは、決して學道に親切なるものとは許されぬ。博く學ぶは甚だ好し、然れども斷片的學解を弄して、自ら安んずるが如きことあらば、自己の脚跟下は果然として未穩在であらう。吾人の參學は學校にのみ限れるにあらず、學校以外に更に幾多の學校あることを知らねばならぬ。日月星辰も是れ我が良師友である。山川草木も是れ我が教科書である。山色も清淨身である。溪聲も廣長舌である。苟も佛弟子として布教傳道に任ぜむ者は、一生を通じて觸事觸處に於て研究の態度を忘却してはならぬ。僧堂でなければ、坐禪が出來ぬやうに思ひ、學校でなければ學問は成らぬやうに思ふ處から、動もすれば禪も眞禪ならず、學も實學に遠ざかるのである。

自行は化他の源泉にして、自覺は覺他の基本たることを顧念せねばならぬ。學校の業を卒へたならば、更に一層の志氣を皷して學理の深奥を探求すべきである。僧堂の單を離れたならば、更に一段の道念を勵まして、禪道の蘊底を參究すべきである。然らずんば、學校を出づるの日は即ち學業退歩の日と爲り、僧堂を辭するの時は、即ち道心消沈の時と爲るであらう。

草華山水にひかれて佛道に入る

師は廿六歳の時、駿州島田に行き、靜居五峰和尙の輪下に投じた。一日、他行の次、山川の明媚なるを見て、豁然として省悟せられたとある。見よ、此の法を求むるに親切なる、山川草木を以て教科書と爲し、天地法界を擧げて良師友と爲し了ることを。高祖大師が、

佛家には教の殊劣を對論することなく、法の淺深をえらばず、たゞし修行の眞僞をしるべし。草華山水にひかれて、佛道に流入することありき。土石砂礫をにぎりて、佛印を禀持することあり。

と御示し下されたは全くこゝに在るのである。此の消息は、机の上の議論では通じられぬ。着實なる修養を積みたる人にして始めて得べきである。

師は廿七歳の時、遠州十輪寺に於て首座職に任ぜられ、制中に維摩經を提唱して、幾多の龍象を接得せられた。靈山會上に於ける迦葉尊者が、佛の半座を得たまひし勝躅を面のあたり拜するやうでありしならむ。今日各地に於て行はるゝ結制の第一座は、果して如何なる力量をか有するや。結制安居は宗門唯一の大典である。然るに、動もすれば告朔の餼羊たるの觀なき能はざるは、豈に慚愧すべきことではないか。現今の制度習慣が之をして然らしむるとは云へ、餘りに情けなき有樣ではないか。苟も職に第一座に當る者は、せめて一席の法話、一座の講演なりとも、自ら之を擔當せむとの心懸けがなければならぬ。若し其の技倆なきに於ては、せめては特殊の願心を起して、制中の加行として、淨く麗はしき行持を勸むる位の志を發して貰ひたい。卽ち、一般大衆よりは一時間なり二時間なり早起して坐禪を打するとか、又は禪

誦の餘暇には一部一巻の看經を別修するとか、それもならねば制中は決して腹を立てまい、いやな顔をせまじと誓ふとか、又は東司の掃除を引受けるとか、何か衆に勝れた行持を勤めてほしいのである。予は本師老衰の故を以て十五歳にして立職せしかば、如何にしても慚愧に堪へぬので、制中は誓つていやな顔を人に見せまじと心に期し、且つ東司の掃洒だけは人手にかけまじと思ひ、開定後に人知れず掃除を致し、又、藥石の前後には、毎日、門內の墓地を一匝し、淨米少許を捧げ、甘露門を讀誦したことを覺えて居る。

長老、甚だ饒舌

師は立職の後、當時有名なる泉州蔭凉寺の鐵心和尚に參見した。和尚、熟視して『汝を待つこと久し、來ること何ぞ遲きや』と一挨した。師は答へて『和尚某を見ること什麼に依てか遲き』と云うた。和尚曰く『長老太だ饒舌』好く饒舌るなといはれた。すると師曰く『只だ遮掩し得ざるが爲なり』饒舌るのでは無い、饒舌らせられるのである。無爲にして然り、任運にして是の如し。元より說と默とに滯るにあらずと說破されたので、鐵心和尚は微笑してこれを肯うた。師乃ち禮拜し、淹留すること數日なりしといふ。寔に闊聒々地の佛法ではないか。

三十歳の時再び靜居寺に回りて、五峰和尚の室に投じて、傳法の事を畢へ、四十三歳の夏、江州彦根の大雲寺住職缺くの故を以て、懇ろに師を請待するものがあつた。が師は之を辭して、『比來、吾が宗、弊風

久しく扇ぎ、斗米飼を易へ、呂牛姓を冒す、既に家法の本を喪ふ。吾常に之を嘆ず。何の出世か之あらむ」と云はれた。使者は『大雲の一衆、師の來化を望むこと大旱の雲霓を望むが如し』とて、再三請じて去らないので、漸く點頭せられたとある。師が宗門の弊習を慨して飽まで佛祖の正令を嚴守し、勵行し給ひ、宗門改善の大主張者にてありしことは、此の一事にても知るべきである。

一切事上、須く實頭なるべし

それより接衆利生幾十年、毫も倦怠の色なく、老に及んで氣力益々加はり、常に衆に示して曰く、

汝等諸人、一切事上、須く實頭なるべし。凡そ世間に實なる者は、佛法に實ならずと云ふことなし。佛法に實ならざる者は、世間上、亦た實あること無し。

と。見よ、實頭の二字是れ實に師の皮肉骨髓にして、一代の教化も亦た此の二字を出でず。空理空論は師の最も排斥する所にてありし。

七十四歳の時、檀越の懇請に應じて退藏峰陽松菴を攝州に開創し、錫を靠することと前後十五年、享保二十年、八十八歳の十二月十日安禪坐脫に至るまで、暫時も説法を休せず、筆硯を離さず、勇猛の志氣、熱烈なる道念、一世を警醒するの概があつた。『報恩篇』は七十一歳の作、『六祖壇經海水一滴』は七十五歳の著、『正法眼藏辨註』は七十九歳にして起草し、八十二歳の春完成す。如何に師が通身の心血を高祖道に注ぎ

給ひしかを知るべきである。末後、衆徒に告げて曰く

異日、年忌の時、牌前の莊嚴一切爲すべからず。老僧を供養せむと欲せば、欽んで辨註を拜閲せよ、是れ第一の孝順なり。

言々人の肺腑を穿つものがある。辨註を拜閲せよとは、但だ文字を以て眼を遮れとにはあらず。高祖の正法眼藏を參究し、徹證し、拈弄し、應用するの靈機を轉ぜよとの慈誨である。故に、四攝法の卷の辨註には左の如き痛切なる訓誡がある。

大凡そ出家人、佛祖に代て一言半句の法を施し得ずんば、在家人に異なること無し。只鬢髮を剃除し、袈裟を着せるのみを佛弟子とは稱し難し。(乃至) 近世、洞門に一類の瞎禿子あり。町屋の裏を借り、何の書を講ずと表に札を貼し、價を定めて經論を講解す。這般の漢、僧に非ず、俗に非ず、破法の大罪人なり。或は又、世俗に奔走し、金銀を梯として大刹の主となるものあり。悲い哉、祖道の陵夷此の如くなるに至る。(中略) 天下僧侶、財欲熾盛にして、或は奉加勸化、或は開帳と稱し、佛像を見せ物にし、錢財を貪求して己が口腹を養ふ。(乃至) 昔日は在家より三寶を恭敬して佛弟子に歸依せしに、如今は出家の方より在家に皈依し諂ふ、悲い哉。

眞實、三寶興隆の爲に勸化奉加するは、自他の功德を增進する因緣となるべきも、若し、一點、私欲の存するあらむには、寧ろ永劫墮獄の種子となるであらう。苟も佛祖の兒孫たる者は、深く如上の訓誡を服

膺すべきである。

知り易くして明め難し

師の微恙を示さるゝや、俗弟子たりし阿州の太守蜂須賀侯、使を馳せて問候す。師の簡牘中、左の數語がある。

齊家治國も亦た菩提の行道なり。故に敦く仁政を舗き、上下相信じて乖戻あること莫れ。是れ老僧末後の赤心なり。

老婆心切、慈悲徹悃に非んば、爭でか能く是の如くなることを得よう。示寂の前後、衆徒病床を圍み、聲を放つて號泣せしに、師眼を開き、潸然涙を垂れて、乃ち告げて曰く、

老僧、一生宗乘を荷負し、專ら人の爲にするも、信ずる者甚だ尠し。他日、正法擧揚の人を想像すれば、覺えず涙下る。夫れ諸法は緣より生じて畢竟性空なり、只だ箇の一段知り易くして明め難し。恐くは、汝諸人の錯つて是を會することを。若し實に此の義を明らめば、則ち是れ如來遺法の弟子、正に佛祖の恩を報ずる者なり。向來、此の義を擔荷し、輾轉して必ず人の爲にせよ。若し未だ此の地に到らざる者の、老僧を慕ひ來ることあらば、則ち報じて道へ、末に臨み涕泣して此の語を爲すと。必ず忘ること勿れ。吁、太だ勞困せり。道はじ、道はじ。囑々。

見よ、師の法を守ること綿密にして、爲人の甚だ親切なることを。吾人は、此の最後の敎訓を拜讀するごとに通身慚汗の淋漓たるを覺ゆるのである。

惟ふに、佛法は知り易くして明らめ難し。學問の力を以て敎理を解釋し、辯才の技を以て敎相を說明することは無きにしもあらず。然れども、是れは知の位にして明の人とは言ふことが出來ぬ。明らむるとは佛法を以て自己とし、自己を以て佛法とすることである。西哲も、

　學識の價値は讀書の分量にあらずして、運用の慣熟に在り。

と云うてある。運用なき佛法は眞の佛法ではない。高尚深遠の敎理は往々にして哲學者の口に上ることがある。されど哲學者は哲學者にして佛法ではない。佛法を說明する一種の器械となるに過ぎぬ。眞に能く佛法を明らめんと思はゞ、誠實に道を以て念と爲さねばならぬ。師の所謂須らく實頭なるべしである。程子すら猶ほ、『學は闇室を欺かざるより始む』と云うたでは無いか。中庸に

　博く之を學び、審に之を問ひ、愼んで之を思ひ、明かに之を辨まへ、篤く之を行ふ

とあるが如きは佛敎に聞思修の三慧を說くと一般で、實學の始終を盡した指南である。今の世には幸に敎育の力に依りて、法佛を知る人だけは日一日に出來ようと思ふが、佛法を明らむる人は却て少くなりはすまいかと案じられる。師が末後涙を灑がれたは是れが爲である。慈雲律師亦た吾人に示して曰く、

大丈夫、出家して道に入る、須らく佛智見を具し、佛戒を持し、佛衣を服し、佛行を行ひ、佛位に躋るべし。切に末世人師の行ふ所に倣ふ勿れ。須らく純粹の醍醐を飲むべし、雜水腐乳を歃る莫れ。是れ決して出家のみの心得にあらず。眞に修養に志す者は、皆な此の氣概がなければならぬ。嗚呼、老螺蛤一代の操行の如きは、醇乎として玉の如く、八面玲瓏、些子の瑕瑾を存しない。其の道を求むるに親しく、志を行ふに勇なる、倶に道俗一般の良教訓として、深く景慕し模倣しなければならぬ。

積極的解脱

先づ因果を信ぜよ

佛教は解脱教である。解脱といふは、解はホドケル、トケルと訓じて、鎖や繩で身體を縛られた者がホドケて自由になつた意、脱はモヌケルと訓じ籠中の鳥が籠を出でゝ自在の働きを爲すに至つた意である。

吾々凡夫の境界は常に二大苦惱を有て居る。一は自己心中の煩惱である。是れにも知的煩惱と情的煩惱とがある。知的煩惱とは眞理に昧きより生ずる迷ひ、情的煩惱とは色・聲・香・味・觸・法の六境に對して起る所の貪欲・瞋恚・愚痴等の妄情です。吾々は、此の二種の煩惱が殆ど無始以來の習慣性となつて在々處々に發動し、之れあるが爲めに正智も德性も昧まされて居るのであります。人間界に於ける所有罪惡、紛擾苦悶は多く之れより現はれて來るのである。

二には過去以來の業障である。吾々は先天的に罪の障りを有て居る。自然に生ずる一切の苦痛、偶然かと思はるゝ樣に發生し來る樣々の災厄、此等の多くは過去罪業の結果です。人智の力を以ては容易に其の

原因を知ることが出來ぬに依て、假りに天命とか運命とかと稱して、一種の解決を下して居るのである。佛教に於ては、釋尊が大知見を以て三世を洞鑒したまひて原因結果の理法を究め、詳細明確に其の本末を御示し下されてあるから、愚かなる吾々に迄も何等の疑惑も無く、明瞭に之を識得することが出來る。以上二種の累縛は、吾々の精神を亂し智德の進路を妨げ、動もすれば、冥きより冥きに入るが如き、境遇に陷るのであります。

佛教は、吾々をして此等の束縛より解脱せしむるの法門であるが、さればとて世の中に絕緣することではない。小乘佛教に於て、煩惱を斷じて、灰身滅智というて枯木の如くになり、永く生死を離れて寂滅無爲の果を得ることを目的とし居る。要するに遁世的解脱主義であります。大乘佛教は全く之に反對で、煩惱と業障との束縛を解脱して自由の境に入り、智德を增進して衆生を救濟するの大活動を起すを目的として居る。所謂、積極的解脱である。

禪の修行からいうても、初めには、妄想窟を打破つて大無心の地に證入せねばならぬ。併し『無心猶ほ隔つ一重の關』というて、無心といふ處に住著しては所謂、百尺竿頭の死漢であるから、その地を一跳して百尺竿頭一歩を進め、十方世界に全身を現ずる底の機用を發轉せねばならぬ。萬緣を謝して兀々として坐り込み、八風吹けども動ぜざる處が解脱地である。その解脱地に安住して精錬熟達しますれば、次には、『行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然』といふ處に至るべきである。即ち平常心是れ道となるので、そ

の道的活動は如何なる成蹟を顯はすかといふに畢竟じて一團の慈悲光明である。

併し、差別界に投じて慈悲の活動を現はすといふことは實に一大事の行持である。差別界に入るには差別智を具へねばならぬ、差別智を開くの本は、因果の道理を諦信することが第一である。善因善果、惡因惡果は宇宙天眞の妙則であります。此の妙則を體得して惡因に遠ざかりて善因を植ゑ、惡果を解脱して善果を求むるを、吾々永遠の願行とせねばならぬ。能く因果の昧ますべからざることを信ずれば、惡を惡むの念彌々切に、善を好むの志益々深きを以て、行住坐臥に道德的鍊磨を經て、遂には惡い事はどうしてもせられなくなり、善い事は爲さずには居られぬ様になる。心の欲する所に從つて矩を踰えずといふも、鍊磨の結果として收得したる德であります。此の德を修めつゝ人道の本義を守り佛陀の指導に從ふ時は、作す事、爲る事に解脱の勇が現はれ、慈悲の光りが輝いて來るものであります。

諦めといふことの意義

佛教では、能く諦めといふことを申します。何事があつても、是れも何かの因縁であるから仕方が無い、あれも約束事であらうから是非に及ばぬなどといふ。そこで、佛教は無茶苦茶に唯だ諦めよ〳〵といふから困るというて批難する方があります。併し、諦めといふ事は決して淺墓な事でも無ければ、徒らに退嬰を是れ事とするのでも無い。抑も諦めといふには三通りの條件を具ふることが必要です。

一は因果の法則に照して當面の出來事を解決し、而して其の顚末由來を覺悟すること。
二には此の覺悟に依りて詰らぬ不平や愚痴を一掃すること。
三には之と同時に將來の運命を開拓すべき確固たる誓願を立つること。

此の三條件を具へされば眞に諦めのついた人とは申されませぬ。前にも申せし如く、差別界に於ける一切の物柄・事柄は皆な因果の法則に支配せられざるは無いのである。苦しみも、樂しみも、幸も不幸も、盡く因果の姿です。その因果の狀態を通俗的に私は『七雙來』と名け、善惡兩樣を七通りに分けて門下に示したことがある。卽ち

『長壽は護生より來る。短命は殺生より來る。福德は公益より來る。孤獨は私利より來る。富貴は慈善より來る。貧窮は慳貪より來る。健康は信念より來る。病身は不潔より來る。聰明は精進より來る。暗愚は懈怠より來る。愛敬は忍辱より來る。醜陋は憎嫉より來る。高位は謙遜より來る。卑賤は驕奢より來る』

といふのである。尤も、何事も一因より生ずるものではない、衆緣和合して生ずるは自然の法則であるが、今は道德眼より見て最も原因の主たるものを例に擧げたまでゝある、此の理を推し擴めて見たならば、人事上に於ける因果關係の總てを知ることが出來やうと思ふ。吾人が旣往に於ける吉凶禍福も皆此の理を推して、何事も先づ自己に顧みて決斷を下す、是を諦めといふのである。

併し、何も彼も因緣なりと諦めて、そのまゝ立往生の狀態になつてはならぬ。佛教に於ける諦め主義は、既往の事柄に就て判然たる解決をなすと同時に、將來に向つては益々進取の銳氣を鼓し、更に向上の門戶を開かねばなりませぬ。此の事は順境にある人も、逆境にある者も同一であります。

先づ順境に於ける諦め方をいへば、假りに富貴の家に生れ榮華の暮しを爲す者ならば、是れは過去世に於ける善業の致す所であるが、君主、父母等の御恩があればこそ、其の善因の種も芽を出して斯かる幸福なる境界を得たのであると觀じ、一面には己れの果報を喜び、一面には君主、父母等の大恩を深く感ぜねばならぬ。其の結果として二通りの志望を發すべきである。其の一は、夙世の善根の種の盡きぬ樣に將來益々善根を繼續して、より以上の進步を圖らんとすること、其の二は、既に受けたる若くは受けつゝある君主、父母等の大恩に報い奉らんと期するものである。是れが眞の諦め方であります。

次に逆境に在る人に就ていへば、假りに貧窮の家に生れ種々の困難に苦しめられて居る者ならば、是れは夙世以來の惡業の因緣に依て斯かる境遇に在るのであると觀念して、妄りに他を恨みず愚痴をこぼさず、一面には益々善因を積み善種を植ゑて、運命を新たに開拓せんと努め、之と同時に、一面には此の逆境を試金石として益々信念を磨し行持を勵むべきである。

明治天皇の御製に『思ふこと思ふがまゝにならざるがかへりて人の身のためにこそ』と御諭し下されし如く、艱難汝を玉にすで、逆境が却て大人格を產み出すことが多いものである。孟子も『天の將に大任を

是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓やし其の身を空乏にし、行ひ其の爲す所に拂亂す。心を動かし性を忍び其の能せざる所を增益する所以なり』といへり。西哲も、「若し困難來りて汝を苦しむる時は、何時も必ず思ふべし、之を耐忍せば則ち反て幸福なり、是れ決して不幸にあらず』といつた。吾々も亦是の如き諦らめを得たならば、逆境の御陰にて信仰心も起り、所有美德をも積み成すことが出來ます。是れ實に大乘的解脫を得るの一階梯であります。

大死一番大活現成

年窮歲盡し了れば、新年の新日月が迎へられる。陰極まつて陽生ず、窮すれば通ずといふのが、天地の法則である。佛道の修行も亦是の如く、大死一番して始て大活現成を見ることが出來る。大死一番とは解脫地の消息である。

兎角、凡夫は、色に迷はされ、聲に惑はされ、順境に瞞ぜられ、逆境に轉ぜらる。それが爲めに此の一生を以て聲や色の奴隷と爲り了るのである。故に、吾々は名譽とか利慾とかいふ欲望を截ち斬り、貪瞋痴慢の妄想を打破つて、歩みを無心無我の地に進めねばならぬ。無心無我というても枯木や頑石の樣になることでは無い、世に在りながら世に迷はず、聲色の間に處して聲色の爲めに惑はされざる境界をいふのである。

此の境界に至るには是非とも信心に依らねばならぬ。信心とは佛樣若くは佛樣の御教に歸依し、己れの全身を托するのである。信念堅固なる人は、必ず一切の境に對して其の動かざること山の如きものである。孔子も『士、道に志して惡衣惡食を耻る者は未だ與に議するに足らず』というて居るが、眞に信ずること深ければ、衣食住等には重きを置かぬ。又『富と貴とは是れ人の欲する所、其の道を以てせずして之を得れば居らず』ともいうて、道の爲めには富貴をも忘れて了ふ。尋常に此の信念を持續せば自づと聲色の爲めに役せられぬ樣になります。

寒巖禪師は順德天皇の御皇弟にて、法を高祖承陽大師に嗣ぎ、(是れには異說もある)、後に肥後の大慈寺を開創して大に宗風を擧揚せられたる時に、大智禪師が入門せられた。大智禪師は南朝の功臣たる菊池武重公の師である。大智は、七歲の時、父に隨つて寒巖禪師に謁せられた。寒巖禪師は一見して之を器とし、手から菓子臺の饅頭を與へ、『汝は名は甚麼ぞ』と問はれた。大智は『萬十と申します』と答へた。禪師直ちに『萬十、饅頭を食ふ時如何』と問はれると、僅かに七歲の幼兒なるに少しも臆するの風なく、『大蛇の小蛇を呑むが如し』と答へた。是れが御緣となつて遂に出家することとなつた。大慈寺は三方川を以て包まれ、河水は川尻の港に流る。故に朝から晚まで絕え間なく商船が通うて居る。或時、禪師は前方の舟を指して『這裡に在りて行く舟を停め得るや』と言はれた。此處に在り乍ら彼の船を停めることが出來るかといふのは、卽ち轉變窮り無き此の世に在りて、能く不動の精神を保ち得るやといふ意味である。大智はツ

ツと起て前面の障子を鎖めて、知らぬ顔をして坐つた。舟が尊師の御邪魔になりますなら是の如く停めますといふの挨拶です。聖人は心を治めて境を治めず、小人は境を治めて心を治めず、故に自ら眼・耳・鼻・舌・身・意の六根門を鎖めて、外、色・聲・香・味・觸・法の六境に轉ぜられぬ樣にせねばならぬ。禪師は猶ほ點檢の手を展ばして『尙ほ手脚を勞することあり』起つたり坐つたり手を動かしたりせねば、舟が止められぬ樣ではならぬぞとの再吟味である。大智は何も言はず默して瞑目して了うた。老師は舟が御氣にかゝるか知らぬが私の手元には舟も筏も一向に見えませぬといふ答である。是れ則ち處世的安心の樣子を現はした狀態である。心頭滅却というても枯木の樣になることでは無い。塵中に在りても曾て塵の爲めに汚されぬものであります。一心生ぜざれば萬法に咎なし、心頭を滅却すれば火も自づから凉しといふのは此の時の境界をいふのである。是れを大死一番と申します。

此の大死底の位地に達すれば玆に始て大活が現成する。大活といふは日用の立居振舞が自づから道に合ひ理に順がひ、且つ人を救ひ人を護る底の德を現はすの活動となることであります。道といひ理というても決して之を遠きに求むべきではない。佛を信じ、法を信じ、德を重んじ、道を尊ぶの心が厚ければ、如何なる人でも物に動ぜざる底の大安心が得られると同時に、道德的活動を現はすことが出來るものである。古人は『至人に己なし、己ならざる處なし』といはれた。『己なし』とは無我といふこと、『己ならざる處なし』とは、自己の進退動靜が盡く佛性・佛德の働きと一つになつた新天地をいうたのである。臘月

三十一日といふ一年の行き止りになると、自然と正月元日といふ新日月を迎へて、『元日や去年の鬼が禮に來る』といふ風に、めでたく且つ樂しき天地を開く樣になるものであります。

大自在

兎角、人間は低級なる慾望を恣にすることを以て、さも大自在を得た樣に考ふる者である。或は色を貪ぼり、財を貪り、食を貪り、虚名を貪り、或は安逸を望み、放縱を望み、贅澤を望み、我儘を望む、此等の慾望は、自分が滿足すれば他人に不滿足を與ふることゝなる。故に自分に一尺の利があれば他人に一丈の害を與ふ、自身に一時の樂しみがあれば他人には一日の苦しみを與へる樣な結果となる。而して自分も亦終には一粒萬倍の苦痛を感ずる樣になるものです。梅は寒苦を經て清香を發す、雪霜の艱苦を經ればこそ梅は麗はしき花を咲せて春の魁を爲すに至るのである。『踏まれても根強く忍べ福壽草やがて花さく春は來らん』どうしても一度は大死一番底の修養を經ねばならぬ。

春以來、勤勉努力してこそ大晦日も樂に送られる。平素の心懸けが好く、經濟の餘裕でもあれば大晦日にも決して鬼を見る氣遣ひは無い。借錢ある人には鬼とも見え樣が、勤儉なる人の前にはその鬼がニコ〳〵して頭を下げるではありませんか。大晦日に借錢があつて困つて居る者が時計の響を聞くと、シヤツキン〳〵と聞える。借錢などもなく安心に除夜を送る者であると、チヨキン〳〵と聞ゆるさうである。同一の

時計でも聞く人に依て其の響きを異にする。是れ時計の方から故意に隔てを付けるのでは無く、皆な是れ唯心所造で、自分から樣々に聞くのである。

されば吾人は青年期の頃より己れに打克つの修養を積むが宜い。言ひ換ふれば、不自由の稽古をするが宜いのである。熊澤蕃山の歌にも『憂き事の尙ほ此の上につもれかし限ある身の力ためさん』とある。乃木大將の如きは常に自ら此の硬的鍛練を積み、且つ人にも之を奬勵せられた。大將が曾て學習院長たりし時、初等科學生に對して十三箇條の敎訓を與へられた。其の敎訓を見ると、如何にも大將の面目が躍つて居る樣に思はれる。その敎訓は

(一)口を結べ口を開いて居る樣な人間は心にも締りが無い。(二)目の付處に注意せよ、始終きよと〳〵して居るのは心の定らない證據である。(三)敬禮の時は先方を能く注視せよ。(四)自分の家の紋處、家がら先祖の事は能く聞いて忘れない樣にして置け、先祖の祭は大切であるぞ。(五)男子は男子らしくなくてはいかぬ、辨當の風呂敷でも赤いのや美しい模樣のあるのを喜ぶ樣ではだめだ。(六)決して贅澤をするな、贅澤ほど人を馬鹿にするものは無い、車にもなるべく乘るな、家で車を寄越しても乘らないで歸る位にせよ。(七)寒中水で顏を洗ふ者は幾人あるか、湯で洗うてはいかぬ。(八)寒い時は暑いと思ひ、暑い時は寒いと思へ。(九)破れた着物を其の儘着るのは耻だが、其の物を繼ぎたして繕つて着るのは決して耻で無い。否、耻どころでは無い。(十)耻を知れ、道に外れた事をして耻を知らない者は禽獸に劣る

(十一)健康の時は無理の出來るやう身體を鍛練せよ、けれども一旦病氣になつたら醫者のいふ事を能く聞け。(十二)洋服や靴は大きく作れ、格好抔は構ふな。(十三)學習院の生徒は、成るべく陸海軍人になれとは陛下の御沙汰であるから、生れ付身體の弱い者もあり、又色々の事情で軍人になれない者もあらう。是も仕方がないが、何になるにも御國の爲めに役に立つ人にならなければならない、國の爲めに役に立たない者、或は國の害になる樣な人間は死んで仕舞つた方がよいのである』

といふのであつた。如何にもきび〱した教訓である。此の教訓の精神は一般國民も亦能く之に倣ふが宜しからうと思ふ。

此の克己的一大修養に努めさへすれば、仰で天に耻ぢず俯して人に耻ぢず、言は自づから忠信、行ひ自づから篤敬となるを以て、信用も德望も其の身に備はりて、廣き天地の間を足に任せて往來するも、曾て吾を束縛するもの無きに至る。是を大自在の人といふのである。西哲スコットも『克己を教へよ、之を行ふを愉快とせよ、然らば汝は曾て漠然たる空想者の腦裏より發せる運命よりも、一層高尚なる運命を世界の爲めに造る事を得ん』というた。佛祖の難行苦行も聖賢の修養も皆な屈伸の理に同じく、大に屈して而して大に伸びられたものであります。

不染汚なれ、無罣礙なれ

薩州鹿兒島の福昌寺に住せる無三和尙は、西鄕南洲を接得せし傑僧であるが、鹿兒島在の久志良村の農家に生れ薩州第一の甲刹に住しければ、僧徒の中には之を嫉む者もあつて、時の藩公に色々の事を申し上げ、遂に藩公を說いて、晋山上堂の折に藩公をして和尙と問答せしめ、そして、和尙を羞しめ樣と致したことがある。晋山といふは住職が入山をする式である。式後、香を拈じて、天皇陛下の萬歲を祈り、並に佛祖及び神明等を供養し、最後に傳法の師に香を捧げて以て嗣承を明らかにし、右了て、彌々問答といふ一段になると、御臨場の藩公はツカ〳〵と法堂の中央に進まれ、堂內に響き渡る樣な大聲を發して『如何なるか是れ久志良村の土百姓』と蔑まれた。が、和尙は笑を含み、徐ろに進前し、靜かに、『泥中の蓮華』と答へられた。悠揚逼らざるこの態度、眼中人なきの禪機、滿場の道俗は覺えず感歎の聲を漏したといふ。和尙の答話は決して自身の來歷に就て辯護したのでもなく自讃したのでもない。卽ち佛敎の根本義と修養の一大事とを說破せられたのである。

人々具有の本心佛性は、本來、圓滿淸淨にして毫末も染汚せぬ。所謂、火に入ても燒けず、水に入つても溺れず、其の體常寂にして生死なく增減なし、此の佛心を證得するを佛知見といふ。一大藏經は佛知見の說明である。故に釋尊は妙法を說き妙法を以て蓮華に譬へられてゐる。此の妙法を體得すれば生死海中に在りて長く生死を離れ、煩惱界裏に處して常に煩惱なし、是を不染汚といふのである。

支那の三祖大師は『一心生ぜざれば萬法に咎なし』とも、『眼若し睡らざれば諸夢自ら空ず』とも仰せら

れて吾々が此の人生を觀て苦と見るのも、樂と見るのも、皆な唯心の所作である。『傀儡師胸にかけたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと』鬼も佛も心一つの影法師です。『手を打てば鳥は飛びたち魚はより下女は茶を酌む猿澤の池』佛教に於ける信念は實に此の唯心觀を土臺とせねばなりませぬ。

地獄の猛火は瞋恚の胸より燃出し、餓鬼の苦しみは貪欲の腹より現はれ、畜生の殘害は愚痴の手より生れ、修羅の爭鬪は我見の角の働きである。されば、吾々御互が此等の妄想執着を打離れて正知正見に住すれば、猛火も變じて清凉の池となり、飢渇も變じて百味の飲食となり、殘害は智慧の利劍に依て斬り拂はれ、爭鬪は慈悲の光明に依て照らされ、到る處、仁者に敵なし、六根は功德を製するの器械となり、六塵は善根を聚むるの寶庫となる。是れを不染汚の境界と云ふのである。此の境界に達すれば何れの時、如何なる場合、如何なる所作も悉く人道に契ひ、佛法に遵ひ、心の欲する所に從つて矩を踰えざるに至るべし。坐禪・看經のみを以て佛法と思ふべからず、禮佛・唱名のみを以て、信仰と爲すべからず、商業家は宜しく商業上に於て道德の光りを放つべし。農業家は農業上に於て信念の德を現はすべし。政治家は政治上に至誠を盡すべし。事業家は事業の上に慈悲を施すべし。承陽大師は『佛法といふは萬象森羅なり』と仰せられ、常濟大師は『茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫す』と仰せられた。

兎角、人といふは一方に偏し易い性質を持て居るから、縦しや善き事でも、それのみに執着すれば、時としては一種の病となることがある。佛教界に於ける宗我見の如きは最も甚だしき例を示して居る。念佛も

題目も皆な釋尊の金口より說出されたる正法である。時代に順應し佛意を體現するといふ上から、之を撰擇して信仰の統一を期するは必要であるが、怨敵の如く相互に排斥して罵詈までも加へるといふは實に淺ましき極みである。併し排斥する當人は一向に其の非なることを知らぬ。是れ偏見の病の致す所である。吾々は此等の偏見をも解脫せねばならぬ『法執する猶ほ無し、況や世執をや』といふ處に到ることを得ば、其の時こそ行住坐臥皆盡く佛法の活作用となる。是を無罣礙と申すのであります。『ほとけとは誰が結びけん白糸の賤が小田卷くりかへし見よ』といふは、佛家の洪範、修養の根本である。故に大乘佛教を信ずる吾々御互は、常に此の積極的解脫道を得んことを目的となし、以て不染汚、無罣礙の境界に到達せんことを期せねばなりませぬ。

精神生活の信條

人生何が尊いといつても、禪生活くらゐ尊いものはありません。人は何でも安樂を欲します。禪は、この安樂の中の安樂を與へるもので、實に、『安樂の法門』であります。禪生活は天眞獨露で、何人でも生れながらの赤裸々赤條々で、身に寸糸を懸けざる底の自由人となれば、それでいゝ、それが禪生活であるのであります。つまり生地の人間生活が禪生活である。されば、固より世と懸け離れたる生活ではありませぬ。佛教主義で精錬したる最も幸福なる精神生活のことだと思へばよい。

人も謂ふ通り禪とは佛心であります。故に、禪生活は佛心生活といつてもいゝ。苟も佛心に隨順したる生活ならば、悉く皆禪生活と稱することが出來るのであります。此の意味に於いて、佛教中如何なる宗派でも、眞に佛心に相應したる大信仰と大行持の上に生活する者は、悉く禪生活を營んでゐる人と名づくることが出來るのであります。禪は、佛教の一部に非ずして、佛教の綜合的精神の活現でありますから、能く

人のいふが如き單に洒落なる生活、無欲なる生活、無頓着なる生活、風流なる生活、人間離れのした生活であるとのみいふことは出來ません。以下述べまする此の箴言により、それより推して、その全豹を御承知願ひたいと存じます。

人生最終の目的を菩提道の實現に置くべし

吾人の此の世に處する、必ずや高遠なる目的が無ければならぬ。人格の完成を期するのも、國家社會に奉仕するのも、世界人類の幸福に貢獻するのも、皆立派なる目的であります。されど、眞の幸福なる精神生活に入らんと欲せば、更に一歩を進めて、釋尊の開示せられたる菩提道の實現を以つて最終の目的と致さなければなりませぬ。

菩提道とは釋尊の證り給へる眞理であります。大道であります。此の大道は、天地の公道であつて、我等の本心に具有する大道德であります。これを佛心といひ、また大慈悲心とも申します。畢竟、悲智圓滿の體で、慈悲の潤ひも、智慧の光りもこの體から出るのであります。此の菩提心が人倫に現れて、仁義となり、忠孝となり、報恩とも博愛ともなるのであります。故に、孔子は『朝に道を聞いて夕に死すとも可なり』といつて、この道を重んぜられ、教育勅語には『此の道は我が皇祖皇宗の遺訓にして』と仰せられてあります。道の本體は絕對不可思議であるが、其の德相は、古今を一貫したる人道正義となつて、吾人

の目前に展開されて居ります。吾々は、自己の全身心を捧げて此の道に歸投し、此の道の實現を以つて絕對の目的とすべきであります。此の道を證するを悟りといひ、此の道を實行するを菩薩行といひます。

人は一樣に功名富貴に憧憬れて居る。榮華幸福を熱望してゐる。されど、菩提道に歸着點を置かさる以上は、功名も、富貴も、槿花一朝の露の如く、一息截斷の時至つて、振回つて見たならば、茫として夢の如きものとなり果てます。而もこれに思ひ至らず、徒らに功名にあせり、富貴に淫し、多くの道德的過失をなす樣になる。誠に淺ましき極みではありませんか。人の人たる眞價は道にある。貧富・苦樂・貴賤等の上に、人の眞價があると思つてはならぬ。貧富・苦樂は幻像である、幻像より超越したる菩提道に、安心立命の土臺を置くことを我等は念となさなくてはなりませぬ。

不滅の大生命を認得して信仰の基礎を確立すべし

人間僅か五十年、人生七十古來稀なり。是れは昔人の寢語では無い。我等の面前に開展されてゐる事實である。其の五十年か七十年の間も、幼少の時代、眠る遊ぶ食べるといふ時間、此等を控除し去つたならば、人間として有意義なる活動を爲す時間は果して幾許であらう。能々三省して、自分自身、眞の生命といふものゝ長さ、貴さ等を評定して見ねばなるまいと思ふ。而して、我等の死後は如何になり行くことならん。我等は、何時、未來の人となるやら知れぬ。醉生夢死、人生の大部分を五欲六塵の奴隸となつて、

憐れなる生活を營みつゝあることを恐れなくてはならぬ。

宗教は我等に敎へて生命の無限であることをいふ。我等は宗教を信ずることによつて、久遠の古より盡未來際に涉りて、滅盡すること無き大生命を有して居る。此の大生命を認得すれば、死生の如き、一小變化の狀態に過ぎぬ。吾々は、久遠の暗黑より去つて、永遠の光明へと進むことが出來るのであります。從つて、我等の願行も無限であることが出來るのであります。活動も無限となります。無量壽の佛陀に歸して、無量壽の法身を存續し、無盡藏の功德を積聚して、無盡藏の慈光を放つのであります。我等は、大信仰の基礎を不滅の大生命の上に確立せねばなりませぬ。

されぱとて、現在の此の身を輕視したり、此の生死を忽諸にしてはならぬ。此の身は、未來永遠の大生命に光輝あらしむべき原動力であります。現在の生死は、未來永遠の變化活動を有意義ならしむべき基本であるのであります。

常に一心を不動の三昧境に安住せしむべし

世の進歩につれて、活動は激しくなつて參ります。精神を勞する事が勢ひ過度になります。目の回るほどに忙しいといひますが、實際に忙しい度が過ぎて目がまはる、氣がむしやくしやして來ます。だが、どんなに忙しくても、どんなに活動しても、心が微塵も狂ふことなく、いつも儼然として冷靜であるといふ

には、それだけの用意を必要とします。根本的の靜的訓練が必要であるのであります。人は知識が進めば進むほど、神經が過敏になつて、一寸した刺戟にも感じ易い。爲めに過勞症に罹り、神經衰弱症に陥いつてしまふ。これを防ぐには、藥よりも、轉地よりも、靜養よりも、何よりも心をシツカリと落付けるが宜い、所謂心を不動三昧境に安住せしむるが宜い、心がしつかりと落ち付いて其の動かざること山の如くであれば、如何なる境遇にも堪へ得られる。

心膽を落ちつける最善の方法は坐禪である。端坐一番、心を氣海丹田に安住して、大磐石の如き膽力を鍛錬するが宜い。之と同時に、現象界の有ゆる屈托を超越したる、大解脱の境地に證入すべき大公案に參ずるが宜い。永平寺開山道元禪師は『身心脱落』の公案に於いて徹證せられ、總持寺二世峨山禪師は『是非不到の處』に、向つて工夫を凝らし、遂に大安心を得られた。卽ち寂然不動の地に安住致されたのである。自己の本心是れ何物ぞ、宇宙の根源是れ什麼ぞと仔細に研究し去らば、豁然として大悟し、世間一切の苦惱と逼迫とより解脱し、常に心を物外の天地に逍遙せしめて、終日終夜、複雜なる人生に處して、絶間なく活動し去らうとも、決して境遇の爲めに飜弄される樣なことがない、如何なる難局にぶつかることがあらうと、精神が錯亂する樣なことではならぬ。從つて、諸法を達觀して高所に着眼するに依て、小事、些事に小我を振り廻して、無益な鬪爭を事とするといふ樣なことは出來なくなる。彼の夢窓國師が、泥醉せる浪人に打擲されし時、その弟子達が非常に激怒したけれども、國師は自若として、『打つ人も打たるゝ人

も諸共に、たゞ一時の夢の戯れ』と詠じて、泰然とし居られたといふ様に、けたはづれの人間になつて、人をその德風に靡かせてしまふことも出來るのであります。

世間道これ大乘の菩薩行なりと諦觀すべし

佛教は解脫を說き、大自在を得よと敎ふる。然し、遁世的に世の中の事を一切打捨てゝ、我が儘自由に放任的なれといふのでは無い。複雜窮りなき人生に處して、能く道に隨て、人のため、世のために、光明を與へよ、幸福を增進せよ、慈悲の奉仕をせよといふのであります。大乘的菩薩行、即ち大乘佛敎徒のなすべき行持はこの外にないのであります。

然し、決して漫然これをなすのではない。禪的理想に立脚して、宇宙の眞理、天地の大道を把握して活動を起すのである。それ故に、是の如き菩薩行は其の儘が禪である。大乘佛敎徒たらん者は、此の全身心が佛心の表現でなければならぬ。故に、優婆塞戒經には、釋尊が善生に示して『禪定とは即ち戒なり、慈悲喜捨なり』と仰せられてあります。禪の活動は惡を制し、善を修し、慈悲の大行をなすのであります。禪は僧堂にのみあるもの、佛敎は伽藍內にのみあるものと思うてはならぬ。大燈國師は『坐禪せば四條五條の橋の上ゆきゝの人を深山木に見て』と詠ぜられたが、天桂禪師は『深山木に』を『そのまゝに』と改めて垂示したことがある。深山木に見るといふやうな無味乾燥なものではならぬ、世間を如實にありのま

ゝに見て、世間道を修めて行くのか、菩薩の行持であるか佛教徒の本務であるといふのであります。

併し、深山木に見て、心念不動なるに至りてこそ、始めて四條五條の眞只中で大乘の佛法を横拈倒用し去る事が出來るので、深山木にも、見得ないものが『そのまゝ』に見たならば、所謂破れ大乘になつて、却つて人を誤まり、自分も亦墮落し去る事を免れぬから、その邊は注意を要する事であります。

文珠が劍を持するは智を以つて世の疑網を斷ずるの相、普賢が花を捧ぐるは德行を以つて人生を淨化するの相、觀音が楊枝、淨水を持するは、柔軟・慈悲の德を以つて、恩惠の潤ひを授くるの相、地藏が寶珠を持し錫杖を攜うるは、社會面に活動して幸福を頒つの相であります。大乘の菩薩行は世間を離れて居りませぬ。我等も亦、智を磨き、德を修め、慈悲の光明を放ちて以て人生を眞化し、善化し、美化し、最善の幸福を社會・人生に寄與することを永久の大行持となさねばならぬのであります。

如何なる小事にも最善の誠を盡すべし

道には大小の別は無い。一滴の水も四大海水の本質を有して居る。一芥の塵にも全地球の地質を含有してゐる。されば、我等は、朝夕の爲ること作す事、如何なる些細な事にも、最善の誠を盡すことを忘れてはなりませぬ。

或る女流教育家が『一杯の水、一片の紙切れにも、注意を拂ひて疎略にせぬ程の婦人は、後に必ず幸福

なる身となるものぞ』と敎へ子を諭された事がある。我等は、一粒の米に對しても、一椀の茶に對しても、常に其の眞情と眞面目とを現はす樣に致さなければならぬ。如何なるものをも輕視せず、如何なる業務をも蔑視せず、常に眞情と眞面目とを以て之に處すると云ふ所には、一種いふべからざる偉大なる道德と感化力とが發生するものであります。事務上にも、交際上にも、談話の上にも、總て此の心懸けを存したい。

例せば、商業を營む場合の如き、紙一枚を求むる客に對しても最善の誠を表し、一錢一厘の取扱ひをなす上にも十分の心情を注ぐといふことになれば、その商店は必ず繁昌するものである。人に事へる者にしても亦是の如く、給仕する上にも、品物を取扱ふ上にも挨拶一つする上にも、能く其の眞情を盡すに於ては必ずや信用加はり、成績擧がり、それが將來の運命を開拓すべき動機ともなるのであります。萬事萬端此の精神を以て最善の誠を致さなければならぬ。

報恩慈悲を以つて萬行の基礎とすべし

我等は君主・父母・社會等の恩惠に生きて居るのであります。此等の大恩は始終享けづめであります。恩に報ゆるは自然の德行である。故に常に間斷なく報恩の觀念を懷抱せねばならぬ。之と同時に、我等はまた、平等、慈悲の德を發揮することを唯一の本務とすべきである。

慈悲は人類の本性に有する最上の寶でありますが、寶も訓練の力に依らざれば、完全に發現することが出來ぬ。佛の御慈悲は、大無我の源頭より流出する平等の甘露の泉である。一切衆生は、これによつて潤うてゐる、一切の衆生を、分け隔てなく、皆な是れ吾が子なりと、佛は常に念じさせ給うてゐる。佛の御精神を精神とすれば、天地宇宙の間に一人の敵も無い。一箇の怨も無い。我等は佛の大慈悲光明の中に投入して、佛の大慈悲光明を獲得すべきである。戒經には、『若し說いて、慈悲を離れて善法を得るといふ者あらば、是の處あること無し。慈悲は能く不善を斷ず、能く衆生をして苦を離れ樂を受け、能く俗界を壞せしむ』とあります。慈悲は一切善法の根本であります。

大忍力を養ふべし

凡そ何事をするにも忍耐の力が無ければならぬ。前に述べたる不動の精神が、眞に能く不動の精神たるの實績をあげたのが忍力であります。吾人の精神が、徹底不動の地に安住して、如何なる境遇に逢着するとも毫も動搖することなきに至つたのが大忍力であります。

忍力の養成は、王陽明が『事上磨練と』云ひし如く、種々なる緣に觸れて、實地に訓練さるべきものであります。戒經には忍力養成についての五種の覺悟を示してあります。一には『惡來れども報いず』怨を以て怨に報ゆることはなすまじとの覺悟。二には『無常相を觀ず』世の中のことは無常なもので、變化常なき

もの、昨日の惡人も今日は善人となり、朝の敵も夕には味方となる。絶對の怨も惡人もあるものではないとの覺悟。三には『慈悲を修す』心に反する樣な相手に出逢うてこそ、却つて我が慈悲力を發揚すべき好機會ぞと大きく觀念することが必要である。さうして益々慈悲の德を練ることが忍力の養成となるのであります。四には『心放逸ならず』絶えず精神をひきしめること。五には『瞋恚を斷除す』腹を立つたり憎嫉、怨恨の情を起したりしないこと。

また、經に『若し人と軟言にして身口の業を淨め、和顏悦色、意に先つて問訊し、能く一切苦樂の因緣を觀ず、當に知るべし、是の人能く忍辱を修す』とあります。即ち言葉をやさしくして、身の行ひを正しうし、物いひを親切にし、常に機嫌の好い快活なる顏色をなし、成るべく他の感情を害せず、合理的に言行を愼しむことが肝要であります。

常に精神を健全ならしむべし

經には『若し喜相・愁相・瞋相・堅相あらば知り已つて能く除け』とあります。喜相とは物欲の滿足、所謂享樂主義の表徵、愁相は悲觀憂鬱、瞋相とは不平怨恨、堅相とは頑迷固陋、此等は皆な精神の病であるから、此の病を除きて、精神を健全にせねばならぬといふのであります。

精神の病狀を大別すれば、散亂と昏沈との二種となります。散亂とは精神が、始終、動搖して落ちつか

ぬこと。昏沈とは、精神が沈んで暗くなること。此の二大病症よりして色々な迷信や迷想に囚はれるものです。故に、精神は常に光風霽月の如く、淨く爽やかに、正しく直ぐなる狀態に置かねばならぬ。『さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきはこゝろなりけり』との明治聖帝の御製こそ、吾人修養の明鑑であります。

大歡喜心に住して人生の向上に勇猛精進すべし

菩薩の修行に、十地と稱して十通りの階級があり、其の第一が歡喜地である。故に、先以て大歡喜心を養ふことが大切である。吾々は、神にも佛にも變らぬ本心を有し、萬善・萬德、何事をも爲し得べき貴重なる人身を享け、殊に、文化の御代に生れて、文明の空氣を呼吸し、且つ佛陀の福音に値遇して居る。こんな喜ばしいことは無いのであります。故に、此の喜ばしき果報を等閑にせず、益〻之を價値づけねばなりませぬ。

生れ甲斐のある生活を營まんとせば、前にも述べし如く、大乘菩薩の願行に倣ひて、萬事・萬行、其の勤める所は自分一個のためにせず、悉く是れを人生の向上に回向すべきであります。自己一身の福利を慾求する者は小人である。苟も佛心を體得せんと欲する者は、只管に人生の向上、自他平等の利益に向つて勇猛精進すべきであります。勞働に從事して居る人でも、家庭の一隅に働いてゐる人でも、分に隨ひて

社會の爲め、國家の爲め、君父の爲め、子弟の爲めといふ公明正大なる觀念を以つて、忠實にその本務を遂行すれば、皆な人生の向上に資するのであります。此の觀念が益々擴大すれば、そこに大乘菩薩の大誓願も發生する。

人は皆夫々の運命を有して居ります。卽ち、其の宿緣の然らしむる所、人力の如何ともする能はざるものがあります。されど、如何なる環境の間に在りても、自己を信ずることが强固であれば、心中動かすべからざる滿足を得るものであります。此の滿足は、決して自ら劃るもので無く、將來に向つて運命開拓の大活動を爲すべき動力の土臺となるものである。大歡喜心は全く自己に對するの一大信念の發露である。此の信力なき人は、如何なる幸運の位地に在りとも、依然として不平・不滿の苦痛を脫することは出來ませぬ。

違逆の境に對して益々修養の功を收むべし

人生不如意の事多し、何人か萬事思ひの儘になるべき。殊に不運・不幸の人の如きは、殆ど全生涯を通じて、苦しき、悲しき、恐ろしき場合にのみ遭遇するものであります。併し、斯かる人とても、決して妄りに悲觀してはならぬ。これぞ精神を鍛鍊し、修養する、絶好の機會であると思つて務め勵むがよい。艱難は汝を玉にす、艱難は吾々をして樂境に導く。若し艱難を嫌うて、逸樂のみを追ふならば、其の人は修

養の資格なき人である。

大乘の菩薩は、故らに淨土を取らず、成佛を求めず、自ら六道の巷に往來して、艱難苦勞、以つて衆生濟度の大任に當り給うてゐる。不如意の境にありてこそ大忍力が養はれる。千態萬狀の世に處してこそ大定力が鍛へられる。惡魔の境界に對すればこそ、持戒淸淨の德が積まれる。奮鬪も、努力も、皆な艱難なる道を突破する鐵馬である。一家の内でも、舅姑あり、父母あり、兄弟あり、從僕あり、その間に立つて圓滿に天職を全うすることは容易でないが、此處に自己をして最も價値あらしむる一大修養があると思ひ如何なる艱難にも耐へ、益々自己の德性を發揮するならば、佛敎に謂ふ所の未來永久の善根功德も皆な之より生ずるものであります。

要は正中妙挾にあるのである。正中とは一方に偏せざること、妙挾とは現實と理想とが相應することであります。元來、佛敎は世の中と離れたものではない、禪は時代の趨勢に逆行せよといふものでは無い。否、飽くまでも、徹底的に、世を知り、世に交はり、時代を識り、時運を解して、寧ろ一般文化より一歩も二歩も、數步も進み出づることに努めてゐるものである。今日の如き、世道人心の動もすれば頽廢し去らんとする時にありては、禪の知見と活動とは、一身・一家の綱紀を肅正し、國家・社會の風紀を改善する上の、最も完全なる標準となるべきものであるから、禪道に志す人々の如きは、率先して、人文進化の

向上に、大いに力を致さねばならぬものであります。

佛教にては眞・俗二諦の法門を説きます。眞諦とは佛教の信仰及び形而上的妙理を詮表するの法義で、俗諦とは人生々活の上に應用すべき世間道であります。この二つは、共にこれを重んずべきもので、俗諦のみに偏すれば遂には俗界に墮落し、眞諦のみを執すれば人生に沒交渉となり易い、此の兩者を融和するのが即ち正中妙挾であります。正中妙挾の實を得て、我等が人間生活を向上さするために以上、箴言十箇條の略説を試みた次第である。これを參考として、幾層の深遠なる禪生活の意義を實現せられたいものであります。

禪的修養とその功動

‖功勳五位講話‖

退歩の工夫と進歩の靈機

總て人を敎へ導くには、必ず二樣の『敎へ方』といふものがある。その二樣とは、一は消極的・保守的で、他は積極的・進取的である。是れを禪門に於ては、專門的の語を用ひて、一を掃蕩門といひ、他を建立門とも云ふ。また一を眞空門といひ、他を實相門といふこともある。而してこれらの二門、卽ち消極的と積極的との、この二方法は前後の步の如く、互に主となり從となつて、自然相資け合ふものですから、その一方だけに偏寄つてはならぬのである。

禪門ではこの二方法のことを、退步の工夫、進步の靈機とも稱して、普勸坐禪儀には、

『回光返照の退步を學すべし』

405

と云ひ、また、參同契には

『歩を進むれば近遠に非ず』

と云うてある。併し、禪門に所謂退歩・進歩は其の意味が圓融してゐるから、退歩は消極的で、進歩は積極的であると劃然たる定義は下すことはできぬ。併し吾々が實際に修養に功を收めんとするには、此の二方面あることを知つて、これを兼修せねばならぬ。

退歩の工夫とは、自己の獨立を云ふのである。自己を覺悟し、自己を保任して、自己の自己たる眞價を現はすことである。

進歩の靈機とは、百尺竿頭に一歩を進めて、爲人度生の活機を轉ずることである。眞實の意味に於ての國利民福を計ることである。

我が佛敎の上で云へば、苦・空・無常・無我を敎示して人生の惑執を離れしめ、眞空無相の般若・甚深の妙理を演說して、絕對平等の眞源に歸入せしむるのが、退歩の法門である。

又、六度萬行の妙行を說き、終に法華を說いて諸法實相の摩訶衍を開示せられたのが進歩の靈機とも見ることが出來る。

同一佛敎中に於て、其の化導の形式に非常なる相違あるが如くに見ゆるのは、佛敎のこの二樣の方面の何れか一方を偏重するからである。

進歩は退歩の基礎であり、進歩は退歩の轉化なることを了せば『本來無東西』と云ふも、『西方有淨土』と云ふも、倶に是れ醍醐の妙法にして、毫末も乖戻する所はないのである。

佛教中に於て、禪門は殊に單刀直入の提撕であるから、その初めに驀直に退歩の工夫を爲さしむるものである。

單刀直入の提撕

足をくみ手をくむ者の主は誰ぞたゞひたすらに尋ね入るべし

迷ふもの、悟らんと欲するもの、喜ぶもの、悲しむもの、這箇は是れ何物ぞ、此の身は四大和合の法に非ずや。

引よせて結べば柴の庵なり解れば元の野原なりけり。

四大分離し三寸息絶ゆる時、果して何物かある。思へばこの身心なるものも空華の如く幻影の如きものである。果して然らば槿花一朝の露にも似たらん身を以て、名利の巷に走り、吾我の見を逞うするは、實に是れ蝸牛角上に夢を貪ぼるよりも果敢ない。況や無常憑み難く、晨にして夕を保せさる身に於てをやである。

是くの如き提示に遇ひ、是くの如くに觀じ來れば、何物か生死し何物か去來す、影は形に依つて現はれ、

夢は人に依つて存す、吾人の根本體は畢竟じて是れ何物ぞと究盡することを得べし。是れ卽ち退歩の工夫である。此の工夫を做す時、始めて諸法皆空にして、身心本より脱落なることを徹證することが出來る。此の時に至り超然として吾我・名利の繋縛を解脱すると同時に、眞空無相の中、自ら靈妙寂照の本性あることを知る。是れ進歩的靈機を撥轉するの基礎である。

退歩の工夫は能く大解脱を成じ、進歩の靈機は能く大慈悲を發す。解脱は佛心の德にして、慈悲は佛身の相である。佛心一現すれば生死を透脱し、佛身一現すれば萬德を莊嚴す、然らば吾人は如何にして、此の佛身心を現成し得べきや、禪門の修養は全く此にあるものと知らねばならぬ。

吾が修養の標的

禪門の修養をなすに當り、その標準を古聖先德の垂範に求むれば、無量無數の御指南はあるが、衲は洞上の兒孫として、先づ以て則を洞山大師の功勳五位に取りたいと思ふ。

洞山大師は實に禪門超世の大善知識である。釋尊より三十九葉、達磨より十一世、曹溪より六代たる祖位を繼承し、綿密の家風、穩健の知見、崇高の道念、純潔の行持は當時禪門の俊傑續出せる中に於ても、實に是れ萬綠叢中紅一點の觀があつたのである。曹溪大師によつて、達磨の禪風益々其の光輝を發揚し、洞山大師に依つて曹溪の正脉は護持せられたのである。曹溪洞山の尊號を合稱して我が宗を曹洞宗と名

くるに至つた所以もこゝにある。此の洞山大師は參禪の人の知見と行持とを純一ならしめんが爲に、五位を設けてその標的を示された。

此の五位なるものは、平等法中に於て、假りに差別を設け、無階級の中に於て、暫らく階級を存し、以て參學の手標となし、進趣の規準とせられたものである。その五位に二種あつて一は正偏五位と名け、一は功勳五位と名く。正偏五位は横に大道の本體妙用を示されたるもので、功勳五位は竪に修養の準則を明かされたものである。故に指月禪師は『彼（正偏）は則ち法の德用自在を明す、此（功勳）は則ち功の初後と修の生熟とを明す』といはれたり。

功とは修養のことである。一日修養すれば一日の功あり、一年修養すれば一年の功あり、而してその修養には、自ら本末の順序がなければならぬ。先後する所を知らなければ、功の全きを期することが出來ぬ且つ夫れ修養なるものは、決して一朝一夕に圓熟する譯には行かぬ。法門無量誓願學で、實は生々世々を盡して修養すべきものである。人間には五戒十善の道あれども、天上界より見ればまだ生であつて熟しては居らぬ。天上界には四禪八定の法があるけれども、聲聞界より見ればまだ生である。乃至、菩薩には六度萬行の德あれども、佛界より見れば矢張、未熟たるを免れぬ。さすれば吾人の修養は實に無邊際である。然れども、修養の永遠なるを聞いて、成功の遼遠たるを憂ふるやうではいけない。如何なれば修養は覺道の莊嚴にして、快樂の源泉であるからである。

向上的活動とその愉悦

一日修養すれば一日の快樂を享受し、一年修養すれば一年の快樂を獲得するものである。修養のない者は快樂がない。修養のないものは幸福がない。丁度、慈母が其の子を養育するが如き、其の艱難は果してどんなであらう、けれども其の艱難は寧ろ無上の樂みである。若しその艱難を憐み、母の手より其の子を離さしめやうとするならば、それこそ亂心する程の大苦痛を感ずるであらう。修養は畢竟向上的活動である。向上的快樂である。故に修養無限なれば、快樂も亦無限であらねばならぬ。顏回が陋巷の間にあつて、無上の樂みを得たといふも、畢竟修養を樂んだのである。山崎闇齋が保科公に對して『幸に卑賤に生れ侯伯の家に生れざるを樂む。』というたのも、矢張、修養より發した樂みである。

全體、極樂淨土といふ佛界にありて、果して何物を樂しむやといふに、佛事を樂しむのである。佛事といふのは菩提の正道を履踐し修養することである。つまり御淨土と申すは、衆生から云へば理想的完全なる修養世界である。若し極樂の樂を淺ましき凡情をもつて解釋して、唯面白く遊べる處、寐て居れる處、働かずとも食べられ、織らずとも着られ、坐ながらにして佛を見、法を聞き、遊んで居ても借金も出來ず、攝生に注意せずとも病氣に罹らぬ樣な處だと思うたならば、大なる量見違いである。萬一、右の如き世界を空想し、その所に往生せん抔といふ横着な妄想を起さば、恐らくは地獄に入ること箭の如くであらう。

極樂の淨土といふは至善の世界、佛德莊嚴の世界、智德を修養するの世界である。

すべては己が心より

思ふに現在は過去の影像にして未來は現在の影像である。未來の影像を極樂ならしめやうとせば、現在の形を正しうせねばならぬ。卽ち現在に於て我が心を極樂ならしめ、我が身・我が家・我が國土をも極樂ならしめねばならぬ。佛子の本分も、人道の歸趣も、實に此に在るので、是れすなはち今日、修養の至要なる所以である。萬法唯心は佛敎の原則である。唯だ此の一心能く我が身心・國土をして地獄たらしめ、また極樂たらしむる。

釋迦阿彌陀、つくりかへれば、下駄足駄、かはればかはるものにぞありける。

法然上人は聖德を有する高僧である。その言行殆ど圭角の見るべきが無いと云つてよい。往生の用心百四十五條の内に左の問答がある。

一、歌よむは罪にて候か。

答、あながちに得候はじ、但し罪ともなり、功德ともなる。

一、酒のむは罪にて候か。

答、まことに罪なれば呑むべくもなけれども、この世のならひ。

流石に有り難き御言葉では無いか。凡ての事が、己れの心一つにて、罪ともなり功徳ともなる。心を治むるの道は、單に學問知識の力のみではない。知情意の三者とも健全に修養するに非ざれば、心調ふることは不可能である。中に就て情を養ふことが特に必要である。知識を正しき方面に應用し、意志を不正なる方面に運用せしめないやうにするのには、至誠にして純潔なる眞情を養はねばならぬ。

世の中の人を大別すれば左の四種と爲るやうに思ふ。

一、智にして愚なる者。
　智識ありと雖も、心操端正ならざるもの。

二、愚にして智なるもの、
　智識なきも、正直律義にして、能く其の業を勵むもの。

三、愚にして愚なるもの、
　智識もなく、技藝もなく、而も心志邪曲にして、品行醜劣なるもの。

四、智にして智なるもの、
　智識學藝ありて、思想純良、品行方正、且つ業務に忠實なるもの。

吾人の理想的人物は『智にして智なる者』に在ることは言ふまでもないが、世の進歩に連れて、一般の知識も發達し、その結果、動もすれば智にして愚なるものが增加する傾きがある。これはよろしくない。

況や我が佛敎の見地よりすれば、世に智にして智なりと稱せらるゝ者も、多くは凡夫地を脱することが出來ず、知らず〳〵三界六道の迷衢に彷彿して居るものである。

修養の過程

洞山大師は深く之を憐み玉ひ、功勳五位を設けて、最高最勝なる修養の標準と過程を開示あらせられた。洵に難値の聖訓である。

其の五位とは、向・奉・功・共功・功々の五位であるが、その題目が專門的であるから、暫く是を通俗的に譯すれば、左の如くになる。

一、向位、（發心門）
二、奉位、（修行門）
三、功位、（解脱門）
四、共功位、（應化門）
五、功々位、（忘機門）

右は修養過程に段階をつけて、それ〴〵の目標を示されたものなるも、此の五つの間に於て、劃然たる階級あるものとして、これを執し、前後の別を固守するがごときことをしてはならぬ。

一位に五位を含み、五位を合せて一位に歸するの妙旨あることを知らねばならぬ。全體、修證は元より一如である。大道を實行するを修といひ、大道を體得するを證と云ふ。證は修に因て現はれ、修は證に由て全たし、一日修すれば一日の證あり、一たび證すれば證上更に一段の修行力を發するものである。故に修と證とは互換圓融して、恰も前後の歩の如きものである。然れども吾人は先づ修門を入りて以て證堂に躋らねばならぬ。修を廢しに證を得んと欲するものは、眼を掩うて色を辨ぜんとするが如く、遂に得べからず。請ふ、初心晩學の爲め、試みに功勳五位を標準として以て、禪門修養の指南となさんかな。

向位（發心門）

修養の第一は向位である。即ち發心門である。向は歸向又は趣向の謂である。完全圓滿なる目的を確立し、自己の身心を以て、其の目的の進路に傾注するのが向である。

抑々吾人の目的には大別すれば二種ある。一は義務的で、他は根本的である。義務的なるものは其の人に依つて其の形體を異にして居る。政治家には政治家の目的あり、實業家には實業家の目的あり、教育家としての目的、工業家としての目的、其の他商人農夫、皆夫々の目的がある。夫たる者、妻たる者、親たる者、子たる者、亦皆夫々の義務があるから、其の目的も從つて其の形容を同うせぬ。併し、此の各人各別なる義務的目的の外に、萬人共通の目的が無ければならぬ。それが即ち根本的目的である。然らばどん

なものが根本目的であるかと云ふに他なし、道徳的生活即ち是れなりである。

古人が、

『天地に萬古あり、此の身再び得ず。人生只だ百年、此の日最も過ぎ易し。幸に其の間に生るゝ者は、有生の樂みを知らざるべからず、又、虛生の憂を懷かざるべからず』

といひしも、人としての根本目的あることを示したものである。但し、此の根本目的と義務的の目的とは、全然相異なつたものであるのではない。道は一である。乃ち中庸の中に、

『天の命之を性と謂ふ、性に率ふ之を道と謂ふ、道を修むる之を敎と謂ふ』

とある。

道は唯一不二である。孔夫子は道の用を究め、老子は道の體を論じ、釋尊は道の體用一如にして妙應無礙なることを悟得せられたものと思ふ。ソークラテースも基督もカントも其の究むる所は亦唯だ道である。其の知見に淺深高低の差あるを以て、その說く所多くの異同ありと雖も、畢竟じて道を離れたものはない。佛敎に於てはその道の根元を究盡して、稱して佛性といひ、眞如といひ、實相といふ。禪門に於ては本來の面目とも、本地の風光とも名くるのである。併し、道の本體、元と一如なるを以て、人道を究め盡してその極致に達すれば、そこに宇宙の大靈をも見得することが出來るのである。故に洞山大師は此の向位を頌して、

聖主由來法帝堯。　御人以禮曲龍腰。
有時鬧市頭邊過。　到處文明賀聖朝。

と云はれてある。これは大道を君主に比して頌ぜられたものである。宇宙萬象を統一せる一大聖主がある。此の聖帝は古の堯帝の如くして眞に無爲の大德を備へ、智德兩ながら圓かならざるは無い。帝堯と云ふは聖德の君たることを示したのであるが、今いふ聖主は、實際は堯帝よりも、もつと氣高い所謂萬德圓滿の大君主で、全宇宙を支配し統率して居られる聖主である。この聖主は治者といふ顏付もしてゐられぬので、隨つて被治者といふものもギスばらない。殆ど治者・被治者の別なきものゝ如くである。是くの如き偉大なる君德を具へた大君主とは誰か、卽ち大道のことである。大道の德は全宇宙に遍滿してゐる。火は熱し、風は動搖、水は濕ひ地は堅固、山は高く、海は深く、柳は綠、花は紅、皆これ大君主の恩光、卽ち大道の顯現である。此の大君主は億兆の人民を統御する規律があり紀綱があつて、如何なる處にも此の君の慈顏を拜せざるはない。

『人を御するに禮を以てして龍腰を曲ぐ』

龍腰を曲ぐとは、聖德の普及を示したのである。所謂

『法身に象なく、象ならざるところ無き』の意である。

次の二句は大道を認識して之に趣向するの意を述べられたものであつて、有る時、鬧市頭邊の人馬絡繹た

る處を過ぐるに、聖朝の仁澤に依つて文明の美果を收めたる成績が、人の上にも牛馬の上にも、商賈の上にも、往來の上にも、歷々と認められるので、始てその仁德の洪大なるを感じて、覺えず、聖壽の萬歲を祝稱したと云ふ意味である。

鬧市頭邊とは洞山大師の意でいへば、現象界のことである。宇宙現象の世界を仔細に觀察するに、天は長へに覆ひ、地は長へに載せ、日月は長へに輝き雨露は長へに濕ほし、古往今來、紀律井然として一糸も紊れる所がない。是に於てか、吾人は宇宙に一大精神の充滿して、靈動無礙なることを認得せずには居られぬのである。吾人も亦宇宙界の一數として宇宙的大精神に孕まれ、その恩惠に浴し、その德に化育せられてゐる。要するに吾人も亦大道の分體である。

此の大道を證する是を佛といふ。吾人も亦佛性あり、豈に佛とならざるの理あらんや。佛の證したまへる大道は眞に是れ萬德の樞府である。是を人間界に發揮すれば卽ち人道となる。忠孝仁義も恭儉博愛も、皆是れ大道の放光である。されば吾人は、どこまでも此の大道を趣向し、大道を體得して、身自ら萬德の樞府たらんことを期さなければならぬ。此の求道的精神を發するは實に是れ修養の源泉・進修の基本である。

然るに、多くの人は志を此處に確立することを知らずして、唯だ徒らに虛利を貪ぼり、役々として空しく一生を送過す。是を以て幸ひに受け難き人間の身を受けながらも、何等價値ある生命を獲得せず、殆

ど夢の如くに生涯を畢る者が多い。故に、禪門に於ては先づ以て道を求めんとするの大志を發せしむ。是が眞の發菩提心である。必ずしも名譽を輕んぜよとは云はぬ。又、必ずしも利益を度外にせよとはいはぬ。唯だ如何なるものよりも道が大切であると信ずるのである。

然るに、世の多くは、道を求むが爲めには、一切を犧牲にすると云ふ程の確志を有することが稀である。道を求めざるには非ざれども、動もすれば道を以て、名利の次に置きたがつてならぬ。學者といはれ、大政治家といはれる人でも、往々にして、却て名利の爲めに道を犧牲にすることがある。故に金剛の如き堅固不動の發心を得ることが困難である。

昔、唐の翰林學士崔群が、徑山の法欽禪師に相見し、『弟子出家せんと欲す得てんや否や』と問うた。禪師は『出家は乃ち大丈夫の事、將相の能く爲す所に非ず』と喝破せられたといふことがある。

各人は、道の中に居りながら、道と遠ざかつてしまふのである。

然らば如何にすれば道と親しくなられるか、道と一つになられるか、といふに就いて、承陽大師は

『佛法を習ふといふは自己を習ふなり』

と仰せ下された。吾人は此の御敎訓に基づきて、從晝至夜、ひたすらに自己の究明をなすことを主眼とすべきである。

然らば、自己とは何物であらうか。惜しい、欲しい憎い、可愛いと、朝から晩まで起り通しに起つて居

る感情や妄想は決して本當の自己でない、それは自己といふ海の上に出沒する幻化の如き波浪である。眞の自己と云ふは、各自が心の主人公である。禪語に即心是佛といふ時の即心をいふのである。諸佛と同性同體・同道同德のものである。

佛には智德・斷德・恩德の三德がある。智德あるを以て能く宇宙の本源を知り、萬有差別の因由を了じたまへり。斷德あるを以て能く一切の惡を斷破し、一切の善を斷行したまへり。恩德あるを以て能く一切の衆生を哀愍して、攝取不捨であらせられる。此の三德は智仁勇の三德ともいふべく、圓滿なる知情意の三力とも云ふべし。而して是の如き德と力とを統一したるものが即ち道である。道の本體は無形なれども、靈動して能く諸法を建立す。眼見耳聞の作用、山色溪聲の妙韻、何れか大道の流露にあらざる。此の大道を本來圓かに體得してゐるのが、眞の自己である。眞の自己を隱沒せざる限り、吾人の此の身は即ち佛身此の土は即ち佛土である。

承陽大師言く、

「無上菩提は、自の爲めに非ず、他の爲めに非ず、名の爲めに非ず、利の爲めに非ず、然り而して、一向に專ら無上菩提を求めて精進不退なる、是を發菩提心と名く、既に此の心現前することを得ば、菩提の爲めに菩提を求めず、此れは是れ眞實の菩提心なり。」

實に慈悲徹悃の親訓である。菩提の爲めに菩提を求めずとは、自己と大道と一致せる境界である。渾身

是れ大道なれば、能求の心と所求の道との對待は消殞して蹤がない、是れ大道を大成したる人の消息である。

中江藤樹は十一歳の時、大學を見て、『天子より以て庶人に至るまで、一に是れ皆身を修むるを以て本となす』といふに至り、大に感悟して、『幸に此の經の今に存するあり、聖人豈に學んで至らざるべけんや』と云うて、それより聖人の道を學するの志を發したとある。

吾々も亦誓つて佛祖たらんことを期せねばならぬ、從ひ如何なる愚夫愚婦たりとも、此の志を發することが出來ぬと云ふ譯はない。常濟大師は、

『夫れ坐禪は直に人をして心地を開明し本分に安住せしむ』

と御示し下された。坐禪をすれば、立ろに大道が現前する。自己の究明を徹底することが出來るとの慈訓である。

大道の體得、自己の究明、これが人間の根本目的である。此の根本的目的が達せられて始て義務的の目的も完全に達せられるのである。而して此の根本目的たる自己の究明は、上根上機の者でなければ出來ぬものと思うてはならぬ。修養の如何に依つては、如何なる下根下劣の人たりとも、その目的が達せられる。それを特に敎ふるのが次に述べんとする修行門、即ち奉の位である。

發心して、既に大道に趣向しても、趣向したゞけではいけない。實踐躬行する所がなければ、發心せぬ者と相異なることがない。是れこの奉位、即ち修行門の最大至要なる所以である。

奉とは奉重の義である。即ち忠臣義士が、君主の命を奉戴し尊重し、熱誠を捧げ自命を賭して、之を奉行するの意である。佛經に於て開示せられた三祇百劫の修行といふも、五十二位の階級といふも、つまる所は此の奉位を示されたものである。尤も、發心が果して能く堅固なれば自ら修行せずには居られぬ樣になるものである。發心のみあつて修行のないのは、其の發心の堅固でないことを證明するものである。

併し、修行するに就ては、其の修行の方法を心得ねばならぬ。五祖黄梅大師の二神足の一人である神秀大師は、心要の偈を作つて、

身是菩提樹。　心如明鏡臺。
時々勤拂拭。　莫使惹塵埃。

と云はれた。之に對して碓房盧行者は、

菩提本無樹。　明鏡亦非臺。
本來無一物。　何處惹塵埃。

と云はれた。而して盧行者は終に黄梅の正嫡となり、六祖の聖位を践まれたのである。
併し、此の二大師の見知、一見相反せるが如くなるも、決して然るにはあらず、神秀大師は相待的修養の實觀を頌し、六祖大師は絶對的大知見をそのまゝに述べられたのである。神秀大師は學地の實驗を述べ、六祖大師は絶學の實證を示されたのである。
然らば、吾人は先づ神秀大師の教訓を奉戴して修行をなし、更に進んで六祖大師の指導に待たねばなるまいと思ふ。尤も『初發心時便成正覺』といへる頓悟頓證の方面から論ずれば、時々拂拭の手段を取らんとするのは早く是れ第二頭に落在するものであらうが、小智小見の吾人としては實際上、一旦は拂拭の方法に依らねばならぬ。
優婆塞戒經には、『不動の菩薩、五の因縁あり』といふことが說かれてある。不動の菩薩といふは、最初の發心を相續して、順逆の境に觸れても、其の志念を動搖せざるを云ふ。卽ち志を護持する心の堅固なることである。其の五の因縁とは、
一には『樂んで善法を修む』所謂善を行ふことを樂しむのである。吾々は善を行うても動もすれば、苦んで行ふから駄目である。明治天皇が『ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ敎へがたきは人の道なり』と吾等の上をお慨き下されし如く、善を行ふことは何やら窮屈な樣に思はれ、肩の凝る樣な感じがし易いものである。それが爲めに善行は怠り易く倦み易くて困る。之を國民風敎の上から云うても、國民全體が各々

善を樂しむやうにならねば、理想的精神文明は實現されぬ。

二には『善惡を分別す』善と惡とを甄別することは智識の力である。如何に善心が旺盛でも、智識がなければ、依然として迷妄の渦中を脫することは出來ぬ。而も猶ほ世間的智識のみではそれが十分にいかぬから、

三には『正法に親近す』るのである。正法とは佛祖單傳の大道である。從晝至夜、正法に承事して須臾も閑却すること無きは、正しく奉の位を實修するに當る。雪山童子は四句の偈文を聞かんがために、身を跳らして夜叉の口中に投ぜられた。二祖大師は正法を求めんが爲に、夜半に雪中に立ち、遂に臂を斷ちて達磨の面前に托出せられた。吾々も大道を欣求するに當りては、正に是の如き心操がなければならぬ。

四には『衆生を憐愍す』慈悲は佛德の根本である。縱令正法を欣求すとも、自調獨善のみに止まらば、何の所詮も無い。故に吾人は初發心の時より、常に衆生を憐愍して拔苦與樂の大行を營まんと、心懸けねばならぬ。

五には『常に宿命を識る』是は因果を信じ、運命を明らむることである。因果の理を信ずること堅固ならざれば、良心を昧まし易く、運命を明らむること審かならざれば、迷境に墮ち易い。

以上五種の因緣によりて、始て初發心を護持して退轉せず、修行を大成するのである。殊に我が禪門に於

ける修行は、最も猛烈でなければならぬ。洞山大師は此の位を頌して、

淨洗濃莊爲㆓阿誰㆒。　子規聲裏勸㆓人歸㆒。
百華落盡啼無ㇾ盡。　更向㆓亂峰深處㆒啼。

と仰せられた。是は忠臣が君主に奉仕するに比したものである。淨洗濃莊とは、婦女が其の身を莊飾するが如く、其の心操を高潔にし、其の行狀を清淨にし、濃艶莊嚴、態姿端正なるを云ふ。古人が、『孝子の深愛あるものは、必ず和氣あり、和氣ある者は、必ず愉色あり、愉色ある者は、必ず婉容あり』と云うた通り、眞に能く忠實なる者は、其の態度も敬虔にして其の威儀も嚴肅なるものである。從晝至夜、一心不亂に勤求精進する時は、自然に其の志が進退應對の上にも表現するものである。其の精進力は阿誰の爲めぞと云ふに、唯だ君主に奉ずるといふの外はない。

君主とこゝでいふのは、一國一城の主をいふに非ずして天地の主宰者である。天地の主宰者と云ふは大道のことである。然るに、吾人は無始以來、五欲六塵の境を追ふて、三界六道の巷に輪廻し、殆ど大道といへる大君主のあることすら忘却して居る。

彼の子規といふ鳥は、不如歸々々々と啼て歸鄕を勸めると云ふ。吾々の發心は、恰もその子規の聲の如くにして、本地家鄕に歸り、大道の君主に値遇せんことを、連りに勸めてゐるのであるが、其の發心を曇らす塵がつきまとうてゐる。發心堅固に相續することを策勵せねば、發心の叫びが遂に聞えなくなつてし

まふ。
華も散り香も失せたる後までも子規は『歸るに如かず、歸るに如かず』と啼いて啼き息まぬ。啼くべき場所が無くなると、更に山峰が簇立せる亂山の奥にまで行つて啼て居る。吾等は世間名利の巷、紅塵の街區を離れて、超然たり得るに至りても猶ほ其の地に腰を据ゑず、益々大道を勤求して、發心の叫びを徒らにしない工夫を力むべきである。古人が、
『山に登らば須く頂を究むべし、海に入らば須く底に徹すべし』
といつたその語に學ぶべきである。どこ迄も參じ去り參じ來りて、自己と大道と一致して離れぬやう力めねばならぬ。常濟大師は脇尊者の行跡を賛ぜられた後に、
然れば、必ず精神疲れを忘れ、發心群を抜け、修行倫を絶して、子細に參到し、委悉に究辨して、夜を以て日に續ぎ、志を立て、力を起し、佛祖出世の本懷、自己保任の旨趣、悉く明辨して、一生の間に於て、理として通ぜずといふことなく、事として盡さずといふことなくして、即ち是れ佛祖なるべし。
と御示し下されてある。要するに修行門即ち奉の位の主眼とする所は、自己の最大目的を修道の一點に集め、從晝至夜、此の目的を達することに努力して息まざるにあり、此の大努力さへあれば、吾人の勇氣は實に偉大なるもので、如何なる困難にも打克つことが出來る。
尼子の勇士山中鹿之助は、平素、北辰妙見を尊信して、常に『我に七難を降し玉へ』と祈りしといふ。

是は強ちに災厄を望むには非ずして、自己の大努力を實驗せんと、期したものであると思ふ。多少の學問を試み多少の才能を有せばとて、直ぐ小成に安んずる樣では迚も禪門の修行は出來ぬ。ボックストンは、

『大人と小人との別は、特に剛毅と剛毅ならざるとの別のみ、人、一度志を定めて、其の後或は死すべし、或は成就すべし、決して中廢すべからず』

というたが、吾人は是非これ程の覺悟がなければならぬ。

又、道を求むることに親しき者は、自然に塵表に超然たる風格を有す。彼の汾陽の眼禪師の如き、幼にして出家し、名宿七十餘員に參じ、觀覽を喜ばず、人事に拘はらず、文章筆硯を事とせず、人皆其の不韻なるを譏りしも、禪師は毫も意に介せず、却て歎息して、

『先德の行脚、豈に山水の翫に緣らんや』

と云はれたといふ。禪師の如きは全く道を求め、道を修し、道を現はす爲に、一切の雜緣を放下せられたのである。吾人も亦是の如き熱烈なる求道的精神とその實行とを期せねば、眞正なる修行力を現ずることは出來まいと思ふ。

彼の孟子が、

『生も亦我が欲する所、欲する所、生より甚だしき者あり、故に苟も得るを爲さず。死も亦我が惡む所、惡む所死より甚だしき者あり、故に患も避けざる所あり。』

と云はれし如く、道の爲には生死をも顧みぬといふ程の決心がなければ、大道に合沓することは覺束たい。承陽大師が、

『直指端的の道に精進し、絕學無爲の人を尊貴す』

と仰せられしも、正しく奉位の的意である。斯く精進の力を鼓し尊貴の極に達すれば、遂には六祖大師の所謂、『何れの處にか塵埃を惹かん』といふの聖境にまで達せられるのである。

禪林に於ては此の修行力を奬勵する爲に、常に無常觀を勸めて居る。卍山禪師は、青年の頃その師より、

少年易㆑老學難㆑成。　一寸光陰不㆑可㆑輕。
未㆑覺池塘春草夢。　階前梧葉已秋聲。

の一詩を授けられ、之に依て八十年の生涯、一日をも等閑にせられなんだ。中峯禪師は、

人身難㆑受今已受。　佛法難㆑逢今已逢。
此身向㆓今生㆒不㆑度。　更向㆓何生㆒度㆓此身㆒。

と示された。又、禪林にては、近代まで每夜、打眠の際には板を鳴して、

白㆓大衆㆒、　生死事大無常迅速、各宜㆓醒覺㆒、謹莫㆓放逸㆒

と唱へたものである。石頭大師は參同契に於て、禪門向上の玄談を打して最後の一結に、

謹白㆓參玄人㆒。　光陰莫㆓虛度㆒。

と仰せられた。今や滔々たる天下唯た名利の二途にのみ走り、教育も藝術も、盡く名利を釣るの餌として用ゐられるといふ有樣である。生存競爭の激甚なる現代にありては免るべからざる數ではあらうが、禪道までが、動もすれば名利の資料とせらるゝ傾向すら無きに非ず、佛祖の照覽に對しなば、慚惶の極みとや申すべき。

名利必ずしも厭ふべきにあらず、神聖なる名譽と正義の利益とは人生必須の要具である。社會の進步も國力の充實も、皆是を離るゝことは出來ぬ。然れども利益は手段にして、名譽は報酬である、といふことを忘れてはならぬ。若し利益と名譽とを、單一の目的としたならば、本末を顚倒するの結果、所有弊害が此の間より湧出して來るの恐れがある。故に勝海舟翁は座右の銘として、

自處超然。處㆑人靄然。無㆑事澄然。
有㆑事嶄然。　得意淡然。　失意泰然。

の六然を守られたとある。此の意を能々翫味して見るが宜い。故に翁が幕末の偉人として、明治天皇より子爵を賜りし時、人皆其の榮譽を祝してワイ／＼騷いだが、翁は　先帝の御恩寵には感泣を禁じ得ず、嗚咽しながらも、人爵そのものに固執する考へは無いに依つて、世人の騷ぎ散らすのを苦々しく思ひ、

今までは人なみの身と思ひしに五尺にたらぬ四尺（子爵）なりとは

と詠じたといふ。されば、後日、伯爵となつても、依然として超然・淡然たるものがあつた。翁の生涯は實に禪機の活動であつた。唯單に淡泊をのみ貴ぶに非ず、翁の淡泊なりしは名利の外に超然たる一大理想の表はれたるに過ぎなかつた。卽ち翁の如きは大道に向つて實踐躬行して止まない人であつたのである。

功位（解脫門）

修行力にして退轉せざれば必ずその功果を現ずべきは勿論である。一行あれば一功を奏し、萬行あれば萬德を成ず。禪的修行の結果は、當處に解脫門を打開して、心地穩密、萬境の間に處して、安住不動、須彌山の如くなるべし。これを安心決定と稱するのである。

宗教の第一目的は、正しく宗心決定に在る。安心と云ふは、何事にも頓着せずといふにあらず、世間を超越し去れりといふにあらず、況や、單に度胸がよいとか、落付があるとかいふにあらず、之れ等ももとより、安心の一部ではあらうが、眞固の安心はかゝる消極的・保守的のものではない。眞の安心とは禪門に所謂悟境に達したることを云ふ。悟境に達する時、初めて諸法の中に於て、無礙自在・大安心・大解脫を得るのである。

然らば悟りの境とは何ぞやといふに澤水和尚は、

『悟といふは一心を明らむることなり。明らむるとは自心の明らかになりたることなり』

と示されてゐる。卽ち自己を明らむるのが悟である。たとへば月は天邊にかゝれども、暗雲之を掩へば月光現はれず、人々の眞の自己も、本來常恒に存すれども、妄想の暗雲に掩はれて現はれず、故に先づ、妄想の暗雲を除却せんことを要す。妄雲を拂ふの法は坐禪を以て第一とす。兀々として坐定す。大勇氣を鼓して、一切の妄想を打破せねばならぬ。

　坐禪の要術について承陽大師は、

『善惡を思はず、是非を管すること莫れ』

と仰せられてある。常濟大師は、

『一切の是非を放下せよ』

と仰せられた。兩大師の指示の如くなるに於ては、世執は云ふに及ばず、法執をも放下して、貪着する所がない。凡情は申すに及ばず、佛見をも超脫してこれを求め樣ともしない。さればとて、寒灰枯木の如くなるにあらず、內に金剛の如く堅固なる信念を抱き、外に鐵石の如く强健なる修行を行じ、以てよく一切の妄想分別、思慮計度を征服するのである。卽ち自己を以て自己を降伏するのである。邪思邪見に纒はれたる自己を征服して純淨無垢なる自己を顯現せしめるのである。

　達磨大師は二祖に示して、

『外、諸緣を息め、內、心喘ぐことなく、心墻壁の如くにして、以て道に入るべし』

と仰せられたのも、この的意を提示せられたのである。
たゞぼんやりとして何事も思はぬと云ふのでは閑坐となつて了ふ。此處が尤も緊要なところで、實地に經驗せる人にあらざれば、恐らくは識得が難いであらう。藥山禪師が坐禪をしてゐられた時、僧問ふ、『和尙箇の甚麽をか思量す』藥山曰く『不思量底を思量す』僧云く『不思量底如何に思量せん』藥山曰く『非思量』と、この非思量こそ坐禪三昧の妙諦を說破せられたものである。思量すべからざるものは一心の本源である。大道の眞體である。その本源・眞體を工夫し研鑽するのが學佛道の目的である。此の工夫、この研鑽、これは徒らに知能を勞してに學人に思索せよと云ふに非ず。

工夫に二種あり。一は、一切の思量分別を放下して、全く無我の狀態になるのである。二は、ある一則の公案を拈提して、その公案に向つて、猛烈に如何々々と工夫をこらすのである。

前者は始めより無工夫である。後者は工夫より始めて無工夫の地に向上するのである。併しこの兩者は其の修行の方法だに誤らざれば、終には全く一に歸すべし。六祖大師の云く、

『何をか坐禪と名く。外、一切善惡の境涯に於て、心念起らざるを名けて坐となす、內、自性を見て動かざるを名けて禪となす。

何をか禪定と名づく、外、相を離るゝを禪となし、內、亂れざるを定となす。

若し諸境を見て、心亂れざるもの、これ眞定なり。』

の功既に成れるものといふべきである。洞山大師は是を頌して曰く、

是の如く萬境の間に處して心念不動なるは、これ自己の本性を明らめて大自在を得たるもの、發心修行

と、寔に簡潔にして最も要領を得たる御示しである。

枯木花開劫外春。　倒騎ニ玉象ー逐ニ麒麟ー。

而今高臥千峰外。　月白風高好日辰。

と、第一句は無工夫の工夫を叙す。枯木は不思量底の的意、花の劫外の春に開くは、工夫の端的である。劫は梵語、具には劫波といふ。漢語では時分と譯す。今日でいふ時間の意である。劫外の春といへば、時間を超越した春であるから、四季の變遷にかゝはる春のことでない。常住不變の春である。枯れ果てゝ水氣も暖氣もない老木に、時間を超越した春風が吹いて、艶々した花が開いたといふ。これ果して甚麼のことを云うたものであらうか。これはこれ本地の風光である。佛境涯の莊嚴光明は、吾人の思量卜度を越えて、妙不可思議なることをいつたのである。然しこの境涯は吾人より遠く離れてあるのでない。吾人の妄慮を絶し、無工夫の工夫に住するときは、立ろに此の境涯に入るのである。

倒に玉象に持つて麒麟を逐ふといふ第二句は、つまり無工夫の工夫を爲すことをいつたのである。玉象とは清淨の行持をいふ、無工夫の工夫が行爲に現はれたのを玉象といつたのである。麒麟とは大聖人の意である。佛祖のことである。清淨の行持によつて、佛祖の勝跡を踏む、即ち大修行をなすことを此の第二

句で述べたものである。吾人は、佛祖に劣らず、本證を有してゐる。佛德を具してゐる。けれども修せざるには現はれず、證せざるには得ることなし。よつて、玉象に騎つて麒麟を逐ふのである。大修行の力を鼓して、佛祖の家風に隨順しゆくのである。

第三句、第四句は、本地の風光を重ねて頌したものである。『高く千峰の外に臥す』とは、人生を超脫して洒々落々たるをいふ。卽ち『月白く風高し好日辰』で、いふにいはれぬ妙境である。俗界に在りて俗界に墮せず、人生に處して人生に縛せられず、秋月露を帶びて白く、淸風雲を拂つて高く、空に一點の塵埃を着けず、些子の痕跡も遺さぬ。日々是好日、時々是好時、處々皆佛國土、步々盡く鳥道玄である。

東坡居士此の消息を會得して、

溪聲便是廣長舌。　山色豈非淸淨身。

夜來八萬四千偈。　他日如何擧似人。

と。自己の妄想を打破し去ることを得ば、洞然として徧法界の佛法を證會するを以て、一身を擧げて解脫の鄕に遊び、一心を盡して安心の內に入る。故に萬境の爲に動着せられざるのみならず、紅塵堆裡に在りと雖も、能く無漏の妙味を感得して、樂しみ窮りあるべからず。此の時こそは『麻三斤』も佛なれば、『庭前の柏樹子』も禪ならざるはない。

誰やらの話に、岡山縣に居る高僧の處に一僧あり來參し、『如何なるか是佛法の大意』と問うた。高僧は

何とも云はず、直ちに問話の僧を引いて後園に至り、鍬子を拈じて土を掘り、卽ち曰く、『是れ卽ち佛法なり』と、僧大いに感じ還りて、その本師にこのことを語りしに、本師は一喝して、

『馬鹿奴、最初應接の際、顏を相對する處、當體佛法なり。何ぞ後園に至りて後、初めて佛法ならん。彼が如きは小技巧を弄して、佛法に擬するものぞ』

と云はれたさうである。まことに、この本師たる和尙の評せし如く、徒らに小刀細工を弄して、禪を禪臭きものとするは、却つて禪道佛法の價値を失却するのである。

眞の解脫は、自己の心地上に金剛不壞の信念を獲得して、一切の境涯に動搖せられざる底の漢でなければ得られない。眞の安心は、昏沈と散亂との二病を遠離して、精神の訓錬、能く中道に適するものにして初めて得べきである。明の洪自誠が、

無事時心易㆓昏冥㆒。宜㆔寂々而照以㆓惺々㆒。
有事時心易㆓奔逸㆒。宜㆔惺々而主以㆓寂々㆒。

と。吾人の心といふものは調御甚だ困難にして、事なければ、昏沈に陷り、活動の力を失ひ、事あれば、散亂に流れて寂默の德を失ふ。昏沈にも陷らず、散亂にも流れず、能くその中庸を得たるを、健全なる精神といふ。安心は正しくこの健全なる精神より得られるのである。是の如き境界に至れば、自然に本心の光輝が現はれて、見聞覺知の作用も悉く宇宙天眞の妙道に契ひ、これと同時に無限の妙趣が其の中より

涌出するものである。彼の無門和尚が、

春有百花秋有月。 夏有涼風冬有雪。
若無閑事挂心頭。 便是人間好時節。

と頌せられたるも、この妙趣を示したのである。

世の禪者と稱せらるゝ人にして、聊かなる欲境に對して妄りに貪愛を起し、些子の違境に觸るれば妄りに忿怒を起し、而も其の意の如くならざれば、昏々として愚痴に墮いり、漫りに名利を罵倒して居りながら、自身は依然として名利の爲に囚はれ、恰も誇大妄想狂の如きものがある。まことに憐むべき人と云はねばならぬ。故に吾人は先づ自己の心地を訓錬して、鐵團の如くならしめ、而して、百花叢裡に行きて一葉身を濕ほさゞる底の人とならねばならぬ。卍山禪師の語に、

行也鐵一團。坐也鐵一團。盡十方打成鐵一團。

とある。此の志氣よりして任運に妙用を發し、其の妙用が自ら天地の公道に契ひ、聖賢の敎ふる處に合沓するを、悟道の人とも解脫底の漢ともいふ。枯木花開く劫外の春といふは、畢竟、この境界を模樣したものである。

共功位（利生門）

超然として人生を解脱し、脚下に荆棘なく、心頭に葛藤なく、世界に處すること猶ほ虚空の如く、蓮華の水に着せざるが如くにし去るは、所謂功位の消息にして解脱門の功勳である。されど若しこの解脱の眞境に貪着して、百尺竿頭に一歩を進むること能はざれば、所謂一色光中の死漢である。佛の本願は普く衆生を救濟するにあり、菩薩の行持は群生を教化するの外にはあらじ。上、菩提を求め、下、衆生を化するは、實に是れ佛子の行願である。是に於てか吾人は解脱門より更に共功の位に進まねばならぬ。

共功とは功を共にするの意である。宗教的安心・信仰的妙樂・進取的功德を回らして、一切の衆生と共に之を樂むことである。換言すれば、弘く一切の群類に對して、與樂拔苦の活動を爲すことを共功といふのである。三世の諸佛が、萬德を圓滿せられた其の曉は、如何なる御生活をなさるゝのであらうぞといへば、衆生濟度の四字につきる。諸佛は自己一分の解脱を樂みて獨り淨那樂土に在しますといふことは、決してない。若し獨りにて在すことありとすれば、それは佛とは申されぬ。佛とは自覺々他、覺行圓滿の御方を申すのである。今日の吾々とても同一であらう。學問を修めて學者になる、實業に努めて財產家になる。學者になりなば、何の爲めに其の學問を應用するや。財產家になりなば、何の爲めに其の財力を應用するや。結局は、祖先の爲め家族の爲め社會の爲めといふの外はあるまい。若し然らずして單に自己の爲めのみとせば、畢竟、死學問となり、守錢奴となるに過ぎぬ。

元來、自己と他人とは離るべからざるもので、自己は自己のみを以て存在することは出來ぬ。各自は互

に他の力に依りてその獨立を保つのである。乃至、人生の樂しみも喜びも利益も榮譽も、總て自他圓融の上から發生するものである。されば自を救はんと欲せば、必ずや他を救はざるべからず、自ら樂まんと欲せば、必ずや他を樂しましめざるべからず、若し他を取り除いて、單に自己一分丈にて樂まんとせば、恰も頭を斬て活を覓むるが如く遂に得べからず。故に自他の關係は決して相離るべからざるものである。

若し自己解脱を以て能事畢れりとする者あらば、それは未だ眞の自己解脱を得ては居らぬものといはねばならぬ。何故ならば、眞に能く解脱せし人ならば、任運にして慈悲の德を發し、利生の行を現はすべき筈のものである。梵網經には佛性の慈悲心とも仰せられて、大慈大悲心は、吾人の本性に有する本德である。水に濕性あるが如く、火に煖性あるが如く、吾人の本性には必ず慈悲なる性能を有して居る。元來、吾人の生息を托する所の天地には、無限の慈悲が備はつてゐる。天もの言はず四時行はれ百物成る。森羅萬象の生々發育するは天地の愛に包まれて居るが爲めである。吾人は、天地といへる、廣大なる慈悲の胎內に生を托し、生れながらに、その天地の大慈德の一分の光明を分擔して居るのである。親が其の子を愛する、夫婦互に相愛する、皆な此の慈悲心の發露である。故に、眞に能く大解脱を得ば、利他的功用は自づと發露すべきものである。乃ち百尺竿頭に上りつめれば、自づと十方世界に全身を現ずる底の大用が現はれずには居らぬ譯のものである。彼の小乘根性の者が自調解脱に住して、化他の妙用を現はすことの出來ぬといふは、その解脱が一種の法執に繫縛されて居るために外ならぬ。

併しながら、人生の弱點として目一たび色境に觸れ、耳一たび聲境に接すると、無始劫來の慣習力に依りて、自然に憎愛の念を生起し易うて困る。縱ひ大解脱底の人でも、十分に圓熟しきつた人でなければ、佛陀大聖の如き圓滿廣大の慈悲作用は現はれぬ。そこでやはり共功の一大修養を要するのである。

尤も、慈悲は道德の淵源・佛陀の生命であるから、初發心の當時より之を習ふべきは論を待たぬ。こゝに至つて殊更に慈悲を說くは、一應、進趣の階級を次第して說くまでのことで、實は求道の第一歩に於て既に利他といふ觀念を有せねばならぬのである。然し既に解脱の位に入り、その位より出でゝ行ずる利他的行持は、全く佛性そのものゝ發露、自己の本心の發露せる大用なるを以て、利他行が最も公平にして、普遍であり、無限にして且つ無間斷であり、齊整して且つ秩序あるものである。初發心時の利他行とは自ら異るものがある。而してその利濟の功德は、衆生をして永遠の幸福を獲得せしむる底のものにして、それは健全なる智德の培養となり、無窮の安心の成就となる。若し此の利他の大用にして右に反するが如きものであるならば、それはまだ眞解脱底の人の利他ではないといはなければならぬ。

公平でない慈悲は愛着に墮し、普遍でなければ衆生無邊誓願度の大心に脊く。無限ならざれば願行成じ難し、無間斷ならざれば遂に志操の破綻を來すのである。又、衆生を利益しても、それが衆生をしてたゞ一時の滿足を得しむるのみでは役に立たぬ。また智識に反し道德に悖るが如き利益は決して眞の利益ではない。眞の利益は智德を莊嚴し、進んで之を開發し、盡未來際の大安心を成就せしむるものでなければな

らぬ。故に法華經に曰く、

我は是れ世尊なり、能く及ぶ者なし。衆生を安穩ならしめんが爲に世に現はれ、大衆の爲に甘露の淨法を說く、其法一味にして解脫涅槃なり。一の妙音を以て斯の義を演暢す、常に大衆の爲に而も因緣を作す。我れ一切を觀ること、普くみな平等にして彼此愛憎の心あることなし。我に貪着なく、また限礙なし。

さうなければならぬ。而して是れは獨り佛世尊のみならず、眞解脫の人には、自づと是くの如き慈悲の大用がある。是れ本性具有の妙德である。故に承陽大師曰く、

諸佛の慈悲、衆生を哀愍する、自身の爲にせず、他人の爲にせず、唯だ佛法の常なり。見ずや、小蟲畜類の其の子を養育するに、艱難經營苦辛して畢竟長養するも、父母に於て終に益なきをや。然れども子を念ふの慈悲あり、小物すら猶ほ然り、自ら諸佛の衆生を念ふに似たり。

此の祖訓を能く味うて見るが宜い。

殊に我禪門に於いて衆生を慈悲哀愍する妙用は、所謂禪機の發動であるから、順逆縱橫、與奪自在である。或は一莖草を以て丈六の金身となし、或は一微塵裏に入りて大經卷を轉じ、或は青山綠水を擧して法を說き、或は柳綠花紅を拈じて道を傳ふ。承陽大師の歌に、

峯の色溪のひゞきも皆ながら釋迦牟尼佛の聲とすがたと

此の經の心を得れば世の中のうりかふ聲も法を說くかな

と御詠されてある。洞山大師は此の禪機を頌じて、

衆生諸佛不㆓相侵㆒。　山自高兮水自深。
萬別千差明㆓何事㆒。　鷓鴣啼處百華新。

と示された。利他門は平等の悟界より差別の事相界に向下しての營みであるから、その眼界には衆生もあり諸佛もあり、迷者あり悟者あり、趙州の茶もあり、雲門の餅もあり、山あり水あり、柳あり花あり、その差の諸法が鬱然として存在してゐるが、その諸法一々が其の分を守りて他を侵さず、法々位に住して各々其の本分を守つてゐる。而もその一々が本地の風光・天眞の妙境である。盡十方世界が悉く之れ解脫の道場である。

萬別千差の法何事をか明す、仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ。歌人はこれを以て詠歌の材料とし、畫家はこれを以て製畫の資料となす。『善惡は法なり法は善惡に非ず、善惡は時なり時は善惡に非ず』萬法そのものと時節そのものは、元來、善惡を超越せるものである。然らば萬別千差の諸法は、畢竟那邊より發現し來るや。

鷓鴣鳥啼くところ、桃紅李白、各々妍を競ひ芳を闘はして、百華茲に新たなり。鳥の歌ふも花の笑ふも俱に春陽一氣の活動である。天地萬象の發現は正しくこれ眞如佛性の妙用である。佛事門中一法を捨てず

天地間一物として他物はない。皆悉く佛性眞如の妙相である。實に面白の本地の風光ではないか。指月禪師は、此の偈に註して曰く。

朗州の山、澧州の水、實に吾が所を得たり、柴多く米足り正に好し民を養ふに、實に夫れ功の純粹なる者なり。

と。是に於てか吾人は天地と其の道を同うし、萬象と其の用を同うす。故に一切の諸法一として佛法ならざるはない。倶胝の指、趙州の拳、世尊の拈華、青原の竪拂、皆な是れ解脱の光明である。一切の衆生一箇として他人はない、他を度するは自を度するなり、他を救ふは自己を救ふなり、故に涅槃經には、

如來、苦を受くるとも苦を覺えず、衆生の苦を受くるを見れば、己が苦の如くす。衆生の爲に地獄に居ると雖も、苦想及び悔心を生ぜず、一切衆生の畢苦を受くるは、悉く是れ如來一人の苦なり。

とある。是くの如き廣大なる慈悲觀は皆な如來の平等性智より發し來るものである。慈悲の光明、十方世界を遍く照して一切衆生を包容し、如來の一言一行、一動一靜に春風の如き溫き親情を現はし、且つ群類の爲めに規範となり儀表とも爲る。佛子たる吾等また正に斯くの如くあらねばならぬ。

然るに動もすれば、教者の中妄りに棒喝の機を弄し、佛祖を罵倒し、世人を嘲罵し、以て禪的見知の活作用を得たるが如く思うて居る人がある。古聖先賢にも此等の手段を弄せられた方もある。臨濟・德山の如き、巖頭・雲門の如きは、卽ち拂拳棒喝、佛來れば佛を打し、祖來れば祖を打し、以て向上越格の家風を顯

彰して、當代の禪界に獨歩して、佛教全體に向つて、新しき生命を附與せられたものである。然しながら處も時代も異り、人機も同じからざる現代に於て、臨濟・德山の德力の萬一にも達せざる禪者が、唯だ徒らに古德の機用を模擬するが如きは、虎を描いて猫と作すの愚に等し。些子の禪悟を有するの徒にして、往々、誇大妄想狂に類する振舞あるを見るは、教學の痛嘆事である。禪を以て非論理的なり非常識的なりなど冷評する者の輩出する所以も亦この所になしといふべからず。

是に於てか、禪者は努めて綿密なる行持を學得せなければならぬ。卽ち其の動くや閑雅端正、自ら禮節に中り、其の言ふや謹嚴愛敬、自ら威德を存し、而して時有つては活手段を拈じて、佛祖の頂顙を驀過し人天の鼻孔を捏扭するの大機用をも發轉すべきである。故に利生の行持なるものは、頗る細心なる修養を要するものである。實に生々世々の修學によらずんば、これを全うすることができぬ。

功々位（忘機門）

自ら解脱の境に進み、兼て利生の願行を起し、從劫至劫、行住坐臥、不退轉に之を修し去るのは、正しく佛家の本領である。併し、吾人は更に進んで功々の位に昇り、所謂忘機門の修養を忘れてはならぬ。功功の名義につき指月禪師は、

『此位は、謂く功の極も亦泯じ、功と不功とを見ず、始めて無功に至る。無功は大功なり、故に功々と曰

ふ。是れ即ち偏正無分、君臣合體、是に至つて言思の道斷えて、有語無語に墮せず』と釋せられた。要するに功々とは、功の上の功、即ち悟りの上の悟り、解脱の上の解脱、安心の上の安心といふ程の意味であるが、仔細に翫味して來れば意味深長である。人の心といふものは古歌にも、

　こゝろこそこゝろまよはすこゝろなれ、こゝろにこころこゝろゆるすな。

とあつて、迷ふも悟るも皆此の一心の所轉である。こゝろは『ころ〳〵』の意ともいうてある。こゝろとは凝り固まる、即ち執着の義、人心には必ず執着性がある。惡事惡見に對する執着は措て論ぜず、その善き方面から見ても、若し一種の執着に陷いる時は、中正を失するのみならず、決して修養の妙處に到ることは出來ぬ。

　梁の武帝が達磨大師に初相見の折、

『朕は即位以來、殿堂を建て、僧徒を度すること、擧げて數へ難し、未審し功德多少ぞ』と問はれたが、大師は、『總て功德無し』と斷言せられた。是れ武帝が有所得の心を以て善業を營まれたからである。

　金剛經には、

『法すら尚ほ應に捨つべし。何かに況んや非法をや』

と示し且つ深く『住相の布施』を誡められてある。住相の布施といふは有爲功德を目的として布施を行ずること、つまり布施をなす心に不純な所あるをいふ。條件附きの布施をいふのである。永嘉大師は證道歌

に於て、

住相布施生天福。　猶如仰箭射虚空。
勢力盡兮箭還墜。　招得來生不如意。
爭似無爲實相門。　一超直入如來地。

と示された。

又、世に所謂道徳家といふを見るに、道徳家を以て自任する様な人には、動もすれば知識を蔑如したり、物質を輕視したりする傾向があり勝のものである。吾人は肉體と精神との聚合體である。此の世界も物と靈との二つが相合してこそ、種々の作用もあり、種々の意義も現はれて來るのであるに依て、一方を偏重し一方を偏輕すべきものではないが、精神道徳に重きを置く者は、其の結果として形骸を度外にする様なことゝなる。此等は住相の道徳とも謂ふべきものであらう。

又、宗教家と稱する者の如きも、動もすれば、宗教萬能主義を固執して、經濟や政治を蔑視する傾きがある。人は頭腦のみにて生くるものに非ず、心臟や肺臟のみにて活動し得るものに非ず、政治は腸胃の如く、經濟は手脚の如し。頭腦を固め、血液の循環を調節し、而してそれが腸胃を健全にし、手脚を完全に働かしめてこそ、一人前の仕事も爲し得るものである。決して一方を取り一方を捨てる譯には行かぬ。學者といはれる人にしても、若し學問の一事にのみ、唯我獨尊をきめ込んで居るが如きことあらば、世

の無學者を見ること奴隷の如くにし去りて、益々高貢我慢に陥いりたがる。三浦梅園が、

「學問は飯と心得べし。腹にあくが爲なり、人に見せんずる爲にはあらず。學問は置き所によりて、善惡わかる。臍の下よし、鼻の先き惡し」

というてゐる。

伯夷・叔齊は至孝の潔士である。武王が其の君を討つの擧を惡みて、不忠不孝の人の領土に住して其の粟を食に忍びずとて、首陽の山中に匿れ、蕨を掘つて飢を凌ぎてありしが、是れ亦、周の地の産物なりと知り、遂に食を絶ちて其の志を遂げたといふが如きは、千載の下、懦夫をして起たしむるに足る高行なれども、以て欣慕すべくして、以て直に繩墨とは爲すべからず。

西行法師は稀世の清僧である。脱然として名利の巷を離れ、片笠双鞋、吟懷を風月に遣り、詩情を山水に寄せ、海内を遍歴して仙趣を長養す。而して一吟一詠皆な信念の所發ならざるはない。然れども以て景仰すべくして、以て直に模倣すべからざるものである。

凡そ順に處して逆を捨てず、逆に處して順を失はず、大解脱の間に於て大慈光を放ち、大慈悲の中に在りて解脱道を占むるは、佛祖門中家常の茶飯なるべし。而して、修養の圓熟するや、渾身是れ解脱、遍身是れ慈悲にして、心をも費やさず力をも用ゐずして、任運に佛法の靈機を活動する樣にならねばならぬ。

此の妙處を高祖大師は、

　水鳥のゆくもかへるもあとたえてされども道はわすれざりけり

と詠ぜられた。

佛の御舍利といへば貴きものであるが、それでも我慢我見を以て執着性を現はす時は、反つて一種の病癖となる。高祖大師の御教訓にも出て居るが、支那の或る禪師の下に一僧ありて、常に佛舍利を奉持して、供養恭敬これ事とし、衆と與に禪規を行持せず、動靜自ら他に同せず、唯だ佛舍利三昧になつてゐた、禪師は之を憐れみて、彼の僧を召し「汝奉持する佛舍利は、汝の爲に却て證道の障りとなりぬべし」と諭されたが、彼は大に憤り奮然起つて山を去らんとした、禪師又曰く、「汝試みに其の舍利を見よ、恐らくは眞の舍利にはあるまじきぞ」と、彼の僧怒り乍ら舍利函を開きたるに、舍利變じて毒蛇となつて居たといふ。我執、内に忘ずる能はざれば、佛舍利も亦毒蛇と化する道理あるべし。

　持つ人のこゝろによりて寶とも仇ともなるは黄金なりけり

黄金は國家の要具なれども、持つ人の心次第にて、身を滅ぼし家を敗り、人を苦しめ世を毒する所の仇ともなる。

況や我が禪門の修養に至りては、事・理ともに執着性を遠離せねば眞の成功、眞の證悟は獲得せられぬ。故に石頭大師は、

『執ㇾ事元是迷。契ㇾ理亦非ㇾ悟』と仰せられた。

洞山大師は此の位を頌して曰く、

頭角纔生坐已不堪。擬心求佛好羞慚。
迢迢空劫無人識。肯向南詢五十三。

頭角とは執着の見である。味噌の味噌くさきは上味噌にあらず、禪の禪くさきは上禪といふべからず。禪者動もすれば超佛超祖的の見解と誇りて一種の禪我を生じ、佛祖を輕視し賢聖を蔑如し、己も獨り孤峰頂上に住着して、口を開けば天下の人を罵倒し、身を動かせば棒喝の機を弄し、宛然たる誇大妄想狂の眷屬と化し去る者實に少なからず、例ひ然らざるも、穩々地に一物の存するありて、綿密の行持、無我の妙用に於て、幾多の缺點あることを免れざるが如し、從上の公案が鼻の先にぶら下りて、公平の眼を蔽ひ、隻手の聲が耳の邊りに鳴り響きて、圓通の手脚を妨ぐ。偶ま慈悲度生の門を開くと雖も、其の照鑑圓かならず、其の化導洽ねからず、上乘の機を接するに適すと思へば、雲居の羅漢の如くになり、下根の衆を容るゝを得たりと思へば、遂には禪界を墮落して葛藤に縛せらるゝことを致す。是皆な執見の頭角である。故に頭角纔に生ずれば既に眞實底の禪者として見るに堪へぬ。是れ畢竟、自行化他ともに未圓熟の致す所である。

未だ圓熟せざれば、內に微細の妄想ありて之を脫すること能はず、その妄想心を以て佛法を修し、佛心を求む、是れを擬心求佛といふ、此等は佛祖門中にては、好羞慚、即ち好い羞慚かきである。

更に進一歩して解脱の根底を盡し、慈悲の極則を究め去る時は、眞に能く無我中の大無我に到達することを得べし。是を『迢々たる空劫、人の識る無し』と頌せられた。迢々とは遼遠の貌、眼見耳聞の及ばざる所をいふ。解脱の根底とは如何、慈悲の極則とは如何、是れ妙中の至妙にして説明の及ぶ所ではない。畢竟、頭角を拗折し、擬心を放下し去りて、始めてその妙處に築着することを得べし。空劫とは天地も日月も滅盡し去りて、その痕跡をも存ぜざる時代を指す。即ち世執と法執とを併せ忘じ、俗諦と眞諦とを雙び泯じたる端的をいふ。

常濟大師が、

「子細に精到して、動靜の中に看取し、身心の外に慣熟し、嬰兒を養ふが如く、一眼を守るが如し」

と示されし如く、無盡無間斷に修養し去るに非らざれば、此の短的を得ることは出來ぬ。一知を得、半解を得、一公案に參じ、一轉語を究めたりとて、決して滿足してはならぬ。日々に修行し、時々に修養し、念々に刻々に修養せよ。修中に必ず證あり、行中に必ず解あり。修養の中に知見あり、大悟あり、慈悲あり、神通あり、安心あり、妙樂あることを知らねばならぬ。

而して能くこの空劫に證入し去らば、永嘉大師の、

絶學無爲閑道人。　不レ除二妄想一不レ求レ眞。

と云ふ境地に達するが故に、佛祖と我と一如にして、佛心を自心に融會し、衆生と我と不二にして、衆生

心を自己に攝取す。是れを『人の識る無し』と云ふのである。即ち『自己を忘るゝ』底の消息なり。此の時こそ常濟大師の所謂、

正覺は正に是れ六塵なり、見聞聲色、言語事業、悉く是れ佛覺の正體である。佛法は當處を離れず、大道は脚下に圓通す。

昔日、善財童子は、南の方五十三人の善知識を詢ねて、入法界の道を求めたと云ふが、六塵是れ佛覺の正體なりと體達せば肯て南に向つて師を尋ね廻るにも及ぶまじきとの說似である。

併し、六塵を以て正覺に合せしめんとするに非ず、六塵は六塵なり。六塵の正覺なることを知りて、正覺の六塵なることを知らざるは猶ほ是れ半提なり。要するに、正覺と六塵とを放下し去る時、始めて六塵の六塵たることを會取することを得ん。

凡そ妄情の纒縛を解脫して悟道を得ることは中々容易ならず、されど更に一歩を進めて悟道を忘ずることと一層の難事である。難事とはいひ乍ら、久々に修養して不休不息ならば、必ず悟迹をも忘じ去つて、眞個圓妙寂照の域に達するを得ること疑を容るべきに非ず。是を忘機の妙境といふ。

忘機の修養は、何事の上にも至要である。家庭の上にも一家團欒として無上なる家庭趣味を感ずるは矢張、忘機の時である。家庭は身體の裸體になりし處に、宗教は精神の裸體になりし處に、其の妙味がある。家庭にありて、親子・兄弟・夫婦が相集りて、樂しく喜び快よく喜び戯るゝ時は、身體の裸體なり。法律家

は權理義務の理窟を忘れ、軍人は劍を脫し、敎育家は鞭を片付け、商人は算盤を手放し、農夫も鍬鎌を捨て、眞に本來無一物となりて相交はる。此の時は、軍人といふ頭角もなければ、商業といふ荷物も無い、老若の隔てもなく、男女の別も忘れる。そこで八十の老翁と三歲の幼兒とが抱かれ合ひ、天下の學者と一文不知の尼入道とが一處になつて樂しむことが出來るではないか。

又宗敎は信仰本位であるから、信仰の堂奧に入りし時は、我見もなく、妄想もなく、理窟もなく、大小乘の別もなければ、世間出世間の隔てもない。全く以て精神上の丸裸なり。そこで最尊無上の佛陀と汚濁惡世の凡夫とが感應道交して、二面なきに至るのである。是れ皆忘機の妙境である。

然るに、若し軍人が家庭に在りて劍を撫し銃を弄し、法律家が權利を爭ひ義務を論じては、決して家庭の趣味を得ることは出來ぬ。宗敎信者の如きも、學問や經驗を擔ぎ出したり、文字葛藤を振り廻したりして居ては、決して信仰の妙味を解せられぬものである。

併し、家庭なればとて、法律家が法理を忘れたり、軍人が其の本分を忘れたりしては、決して眞の家庭趣味を持續することは出來ぬ。軍人は立派な軍人でありながら軍人の機を忘れ、法律家は立派な法律家でありながら法律家の機を忘る、是れが則ち忘機の妙境である。禪者も亦是の如く、禪者らしき頭角を離れて而して眞の禪道を具備する樣にならなければならぬ。中庸に、

或安而行レ之。　或利而行レ之。　或勉強而行レ之。

とあるが、安じて之を行ふと云ふが忘機である。

卍山禪師が三等の人を擧げて、

一人は善を善として行ふ能はず惡を惡として止む能はず。一人は勉めて善を行ひ勉めて惡を去る。一人は善を行うて善を忘れ惡を去りて惡を忘る。

といはれたが、第一の人は知識ありて實行之に伴はざる者、第二の人は刻苦勉强して纔かに其の道に進む者、第三の人は忘機の境に至れるものである。

孔夫子が、『七十にして心の欲する所に從つて矩を踰へず』と云はれしも、また、中庸に、『誠者。不勉而中。不思而得。從容中道。聖人也』とあるが如きは皆是れ、道德が向上して忘機の妙に觸れたものである。

常濟大師は曾て三根坐禪說を示したまひしが、是れ一乘法中、假に三級を設け以て、學人を誘引したまひしものである。其の中に下根の坐禪は、

『且らく結緣を貴びて、善惡業道を離れ、直に卽心を以て諸物の性源を顯はす、(乃至)縱ひ心に種々の妄想顚倒を起すと雖も、其の咎を作さず』

とある。發心堅固なれば、縱ひ向上の鐵關を透破するに至らずと雖も、猶ほ證道の地盤を鞏定するを得る

ものである。是れ五位の第一たる向位と第二の奉位の初期に當るものと思ふ。次に中根の坐禪は、

『萬事を放捨し、諸緣を休息し、十二時中暫くの怠隙なし。出息入息に就て斷々として工夫す。或は一則の公案を提撕し、雙眼を鼻端に注ぐ、(乃至)當頭十方の世界に明かに、全身、萬象の中に獨露す』

とある。熱烈なる志氣身中に充滿して、魔障の近づくべき無し。而して一指頭にも法界の性相を攝し、一息の中にも諸佛の身心を現成す。是れ奉位の後期より第三の功位に進みたるものにして、利他の妙用も自らこれより發現し來るべし。次に上根の坐禪には、

『諸佛出世の事を覺するにあらず、佛祖不傳の妙を悟るにあらず、飢來れば飯を喫し困じ來たれば打眠す(乃至)任運騰々只塵に正坐す』

とある。覺するにあらずとは覺の上乘なるもの、悟るにあらずとは悟道し徹底せるものである。是れ功々の位に當る。卽ち忘機の妙境である。

吾人は宜く此の妙機に向て驀進せんことを期すべし。修養は無限なり。無限なるが故に法樂も亦無限なり修養は法性の活動なり、修養の存する所に自己の生命あり。吾人は宜く修養を欣ぶべし、修養を樂むべし、修養ある生命を護惜すべし。日月天に輝き、風雲地に動き、花に開落あり、草木に榮枯ある、是れ皆宇宙の修養三昧にあらざるはない。

新井石禪全集
禪學講話篇第二　索　引

【あ】

【い】

【か】

【き】

【さ】

【し】

【す】

【せ】

【そ】

【た】

【ち】

9

【つ】

【て】

【と】

【な】

【に】

【ね】

【の】

【は】

【ひ】

【ふ】

【ま】

【み】

【む】

【ろ】

【わ】

昭和四年十二月一日印刷
昭和四年十二月七日發行



新井石禪全集第二卷

著作權者　祥雲晩成

編纂者　山田靈林

發行者　飯野政晴
東京府北豐島郡中新井一九三四番地

印刷者　加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地

印刷所　加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本　山田製本所）


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03026 7199